

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか【魔を滅す
る転生窟】

月乃杜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、寝ていたユートが起こされると其処に居たのは柁木家の住人などではなく、見知らぬロリ巨乳な少女であった。

少女はヘステイアと名乗った、それはギリシア神話に於ける竈の女神であり、三大処女神の一柱だ。

説明を受けて、この地が迷宮都市オラリオであると知り、迎えが来るまで糧を得る術として冒険者となる事を決意。

ユートの識らない原作より早く、ヘステイア・ファミリアが誕生した瞬間だ。

奇しくも、嘗ては仮初めの抛り所にヘステイアと同じ処女神の一柱アテナの許を選んだユート、ダンジョンに出会いは求めていなかったが、閃姫に選んだのは正にダンジョンで出逢った少女だった。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか【魔を滅する転生窟】—— 始まります。

目次

プロローグ

第0話：ある時のダンジョンの一日は間違っているだろうか

1

第1章：ファミリア

第1話：竈の処女神との出会いは間違っているだろうか | 5

第2話：ヒロインを差し置いて男に出番があるのは間違っているだ

ろうか

14

第3話：狐っ娘と春ひさぐのは間違っているだろうか | 25

第4話：小人族少女との賭けは間違っているだろうか | 36

第5話：柁木家の面々が慌てるのは間違っているだろうか | 47

第6話：初めてのダンジョン探索は間違っているだろうか | 58

第7話：ダンジョンでロキ・ファミリアと出逢うのは間違っている

だろうか

69

第8話：芋虫との戯れは間違っているだろうか | 80

第9話：対価で背中を晒すのは間違っているだろうか | 92

第10話：スキルの確認をするのは間違っているだろうか | 102

第11話：白兎とのファーストコンタクトは間違っているだろうか

113

第12話：黄昏の館に帰るのは間違っているだろうか | 124

第13話：少女達の先行きは間違っているだろうか | 134

第14話：魔石の換金は間違っているだろうか | 146

第15話：ティオネの商談は間違っているだろうか | 157

第16話：ロキ・ファミリアの宴会は間違っているだろうか

第17話：ベル・クラネルが宴会に混ざるのは間違っているだろうか
180

第18話：白兔の魔改造は間違っているだろうか
191

第19話：エルフなウエイトレスとの逢瀬の約束は間違っているだろうか
203

第20話：戦女神との再会は間違っているだろうか
215

第21話：神の宴でのお話は間違っているだろうか
227

第22話：新たな眷属は間違っているだろうか
239

第2章：怪物祭

第23話：リリルカ・アーデとの再会は間違っているだろうか
252

第24話：ソーマ・ファミリアとの交渉は間違っているだろうか
265

第25話：閃姫達のユート探索は間違っているだろうか
277

第26話：リリルカ・アーデの改宗は間違っているだろうか
289

第27話：詐欺行為を見咎めるのは間違っているだろうか
302

第28話：ミアハ・ファミリアの取り込みは間違っているだろうか
315

第29話：装備品の新調は間違っているだろうか
326

第30話：リユー・リオンとのデートは間違っているだろうか
337

プロローグ

第0話：ある時のダンジョンの一日は間違っているだろうか

「はああっ！」

裂帛の気合いと共に振り下ろされる白刃。

『ギイイヤアアッ！』

醜いモンスターが悲鳴を上げながら灰に還る。

「相変わらず、サポーター泣かせですねユート様は」

ジト目で睨むのは栗色の髪の毛の小人族バルウムの少女で、背中にバックと呼ばれる自身よりも大きな袋を背負っていた。

サポーターと呼ばれている職業で、彼女の様な存在が居れば冒険者達は戦闘に専念する事が出来る。

とはいえ、サポーターは基本的に冒険者に寄生する者として蔑まれていた。

少女も同じくで、ユートと出逢って仲を深めるまでは『冒険者なんて嫌いです』と言い続けるくらいに嫌っており、それが故に陥れたり金品を盗んだりと悪さもしていたらしい。

そも、ユートに近付いたのも初心者カモを食い物にしてやろうと思ったからに他ならず、だけどそれが失敗して割と酷い目に遭ってしまう。自業自得だけど。

「おら、リリスケ！ 此方はまたドロップアイテムが出たぜ？ 必要ねーユートに構ってねーで、そろそろ此方のアイテムの回収を頼むわ！」

「判りましたヴェルフ様」

リリスケと呼ばれた少女は背中のバックパックを背負い直し、ヴェルフという赤毛の青年の方へ走る。

「いや、本当に面白い世界だよな」

「割かし吹っ切れたよね、キリトも。デスゲームなんて目じゃない本

物の生命のやり取り、VRMMOとかと違って痛みも傷も流れ出る血も悲鳴も全てが本物^{リアル}だったのに」

「今でも恐いさ。だけど、優斗が用意してくれた武器——エリユシデータとダークリパルサーが有るしさ、俺好みの防具が守ってくれている。何よりも……」

キリトと呼ばれた黒髪に黒い防具な黒ずくめな青年が周囲を見遣ると、赤毛のバンダナに野武士な装身具に身を包んだ男、黒い髪の毛をボブカットにした巨乳を揺らす少女に、亜麻色なロングヘアにモデル体型の美少女、見た目に小さなツインテールに髪の毛を結わい付けた緋色な装身具の少女、茶に近い黒髪に翠を基調とした服装に胸当てを着けた弓使いの少女、桃色の髪の毛は染めているのだが赤い服にエプロンドレスな装身具に鎚を手にしている少女、そんな少女を護る青年、黒髪に左に泣き黒子のある槍使いの少女、挙げていけば切りがない面子が薄暗いダンジョン内で大暴れをしているのが見えた。

「こうしてSAOサヴァイバーの皆が居る！」

ユートがSAO——ソードアート・オンラインというVRMMO——RPGへと囚われクリアをしてから、もう可成りの時間が経過をしていたが、SAOクリアに貢献をしたサヴァイバーは普通に存在している。

何人かはユートの閃姫——使徒である為、その人物なら理解もまだ出来たが、閃姫はその性質上から女性に限定されるから、キリトや赤毛のバンダナ男なんて適用外である。

更には、キリトの嫁など普通に有り得ない。

まあ、キリトが先に死んでから彼女と再婚したら半使徒にする事も可能ではあるが……

「リーファモード！」

スキル【風精変身（シルフィード）】を用いる事によって、ボブカットで巨乳な剣士が金髪ロングをポニーテールに纏めた姿に変化をして、更に本来なら存在しない器官——羽根を持って宙を舞う。

【神の恩恵（ファルナ）】を受けて新たに手に入れた力の一つであり、アルヴヘイム・オンライン——通称ALOでのもう一つの姿。

「スグ！ 竜が相手だし、気を付けろよ！」

「判ってるよ、お兄ちゃんも心配性だなあ！」

キリトの妹のリーファ、基本アビリティの力は大したものではないが、俊敏と魔力に関しては追隨を許さないくらいに上がる。

飛んできたワイバーンらしき飛竜の翼に矢が次々と刺さり、それによつてぐらついたのを好機とばかりに腰の細身な刀を抜き放ち、風を纏つて突進をして額へと突き入れた。

「見たか！ アイズさんの直伝、リル・ラファーガ」

ガッツポーズを取りながら墜ちる飛竜を見る。

下ではリリスケと呼ばれた少女が飛竜の死体に近付くと、あつさりと手にした短刀で切り開いて中身である魔石を取り出す。

その瞬間、飛竜は灰へと還つて存在を消した。

遺されるのは牙と爪。

「ドロップアイテムの【飛竜の牙】と【飛竜の爪】、確かに手に入りました」

迷宮都市オラリオには、世界で唯一のダンジョンが存在しており、冒険者達はダンジョンに日がな潜つてはモンスターと戦い、それによつて獲られるであろう魔石、そして魔石を喪つて灰となつても尚残るドロップアイテムで糧を得る。

また、ダンジョン内には様々に役立つアイテムが眠るが故に、尽きる事も無く冒険者が挑んでいた。

何故かダンジョンに出会いを求めてやって来た少年も居たが、それは特殊な例であると声を大にして言いたい……いや、マジに。

「さて、モンスターも狩り尽くしたみたいだからさ、そろそろ休憩にするか」

ダンジョンがモンスターを生む、然れどリポップするには時間も掛かる。

ユートはこの世界で得た仲間と、喚び出したSAOの仲間を呼んでお茶の準備を始めるのだった。

ユートが神へステイアと逢つてそれなりに時間が経つたが、それなりに充実した時間を過ごしている。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか【魔を滅する転生窟】—— 始まります。

・

第1章：ファミリア

第1話：竈の処女神との出会いは間違っているだろうか

「はあ、ひもじい生活が続く。今日もジャガ丸君だけかあ」

長い黒髪をツインテールに結わい付けた、ターコイズブルーな瞳で背が小さく幼い顔立ちだけど反比例する様にきよぬーを揺らす、所謂【ロリ巨乳】な少女がちよつと恥ずかしい露出の白いワンピースを着て溜息混じりに愚痴を呟いた。

廃教会の地下を住居とする少女が自らの家に入り、すぐに警戒心も露わにして一点を見つめる。

否、睨んでいると言った方が適切かも知れない。

ベッドとソファアールとテーブルと、大した物を置いている部屋ではないのだから、その中でもベッドだ。

ベッドが何故か盛り上がっている。

つまり、誰かが布団に潜んでいるという事。

少女はコソコソと足音を忍ばせてベッドに近づく。

「何処のどいつだい！」

バサリッ！

灯りを点けて布団を剥ぎ取ると……

「ヒッ！」

少女は息を呑んだ。

青年が寝ているのはまだ許容範囲だが、その青年は素っ裸で眠っている上に、覚醒直前なのか下半身には反り返る青年の分身。

「太くて長くて遅い……パオンパオン」

少女は混乱している。

「ハッ！ ボクは何を言っているんだ!? クゝツ、処おとめ女神に何てモノを見せ付けるんだい！」

勝手に視て憤慨するが、どちらかと云えば悪いのは他人の家に入り

込んだ方、少女の怒りはベクトルこそおかしいが正当なのだ。

「おい、こら起き給え！」

眠りこける青年を少女が揺すると、屹立したモノがフリフリと動く。

なるべく視ないで揺すつてはいるものの、少女とて異性に全く興味の無い百合ではないが故にか、チラホラと視線がモノに向かい、その度にブルブルと首を横に振っていた。

「起きるんだ侵入者君！」

「ん、うん……」

ガバツ！

「ふえっ!？」

突然の事だったからか、反応が出来ずにいた。

腕を行き成り引つ張られたかと思うと、ベッドへと引き摺り込まれてしまった少女は、形としては青年にのし掛かられている状態、誰がどう見ても襲われているロリ巨乳の図。

「あ、あわわ！」

行き成り引つ張り込まれてしまった少女は狼狽しながらも動けず、青年にされるが俣とまではいかない迄も弄られてしまう。

一時間か？ それとも僅か数分なのか？ 時間的な事は判らないものの、少なくとも守るべき某かは守り切ったと思うが……

少女にとっては初めての感覚に戸惑って、今この時ばかりは青年を起こさない様に声を無理矢理にでも押し殺し、漸く刺激が薄れていくとグツタリして肢体を青年の身体の上へと投げ出してしまった。



「君は何者なんだい？」

自分は怒っています！

そう言わんばかりに頬を膨らませ、柳眉をしかつめらしく寄せて腕組みをしながら詰問をしている。

さて、問題は彼女からの質問にどう答えるかだが、現状で青年が

解っている事と云えば、まず何故だか素っ裸で普段は少女が寝る筈のベッドを占拠して眠り込んでいたらしい事と、その所為で不法侵入をしていた青年を叩き起こすべく掛け布団を剥いだ少女は、ユートの裸をパオン込みで視てしまった事、この場が少女の家であるらしい事、どうやら地球ではなさそうな事と変な——青年にとつては嗅ぎ慣れた愛液の——臭いが漂う辺り、何かしら寝ている際に仕出かしただい事であろうか？

解っている事は基本的に殆んど無かった。

少女はあの後、少しでも気だるい肢体に鞭を打ち、何とか青年を叩き起こす事に成功して今に至ったが、未だに先程の感覚の酩酊が残っており、少しばかりだがフラフラしている。

青年は布団で裸を隠し、少女から尋問されていた。

「名前は【緒方優斗】でも【ユート・オガタ・ド・オルニエール】でも【ユート・スプリングフィールド】でも【柎木優斗】でも好きに呼べば良いよ。多分だけど異世界人だ」

「は？」

青年——ユートの科白に間拔けな声を返す。

だがすぐに気を取り直して瞑目すると、腕組みをしながら黙考に入り込む。

ややあつて目を開けて、少女は困った表情になる。

「君の名前、全てが偽名ではないとボクには解るよ。そして異世界人……少なくとも君が、ユート君がそう思っているのは間違いないと理解した。兎に角、ボクは今絶賛混乱中さ」

「そうか。君は人間の嘘を見抜けるのか？」

「解るのさ、ボク達には……神にはね」

「神……ね……」

「ボクの自己紹介がまだだったね、ボクの名前は——ヘスティア。この迷宮都市オラリオに住まう神の石柱という訳さ」

きよぬーを張ってエヘンと咳払いをした。

皮肉な話であり、ユートは嘗てまだ【スプリングフィールド】であつた頃に、神殺しとなっている。

転生をしても得た特質は継承されるが故に、ユートは今でも神殺し——謂わばカンピオーネなのだ。

碌な力を感じないとは云っても神と神殺しの談笑、あの世界の人間が見たなら冗談にしか思えまい。

「ヘステイア、ギリシア神話に於ける竈の女神で、三柱が存在する処女神……その一柱か。地球ではないと思ったのに、神が地球の神々と同じ名前とはね……或いは此処も遠い平行世界の地球だったり？」

まさかね……と心の内側で苦笑いをした。

聞いた限りではヘファイストスやタケミカヅチと、よく知る神の名前が普通に挙がっていたし、嘗て別の世界では「ゴッド・スレイヤー神殺剣」を造る為に殺そうとしたロキの名前まで在った程だ。

因みに、タケミカヅチは未だしもヘファイストスとロキは女神らしい。

ユートの知っている彼の神は男神、特にヘファイストスはヘパイトスとも呼ばれており、選りにも選って処女神である女神アテナに懸想をして襲い掛かって、処女を奪えなかったばかりか肌に分身が擦れ射精するとか、ちよつとばかり情けない結果を残したある意味で英雄だったり。

此方のヘファイストスはヘステイアにとって神友だと言うが、暫く前に天界から降臨した際に寄生をし、呆れ果てられたのだとか。

それでも、この廃教会の一室を用意してくれた辺りを鑑みれば、ヘファイストスの情は深かった。

問題はこの地は地球ではないと考えると、ゲートも存在はしないであろうし、仮に存在しても座標が全く以て解らないでは意味など無かったし、困った事に帰る手段が思い付かない上、現状にて閃姫を喚ぶに為はコストが足りない状態だ。

情報が無ければ閃姫を喚ぶコストも無く、あまつさ剩えこの地で暮らしていく為の先立つモノである資金すら無いという具合、無い無い尽くしだった。

この世界も恐らくユートが識らないだけで、大元の世界に於いてはラノベだかアニメだかゲームとして、何らかのメディアで知られた物

語の筈だが、識らないなら全く意味が無い。

お金の単位もヴァリスと聞き覚えが無かった。

此処がよく知る平行世界の地球であれば、質屋にでも行つて貴金属や宝飾品など資金に替えるという手段を使えたし、その資金でホテルに泊まる事も可能だったが、全く識らない世界でその手は使い難い。

「取り敢えず、着替えても構わないかな?」

「ん? まあ、確かにいつまでもその格好は目に毒でしかないしね。手早く着替えてくれ給え」

「了解了解」

ユートは右人差し指を立てると、真っ直ぐに振り下ろしてステータス・ウインドウを起動させ、アイテムストレージを呼び出して、パンツと服とズボンを選んで出した。

「へ?」

少女は行き成り服などが顫れて吃驚するが、それは取り敢えず放つておいて着替えに没頭する。

数分後、着替え終わったユートは少女と話し合う。

取り敢えず暮らしていく手段は必要なのだろうが、知識に無い作品というより世界観すら解らないのではどうにもならない、けどこのオラリオでは極々普通に人間と神々が千年以上まえから交流を持っており、冒険者や、薬師やら鍛冶師などに自らの神の恩恵——ファルナを与えているのだとか。

それは神様が天界から降りてきた際、封じた神の力——アルカナム——を無しでも使えるモノで、自らの^{イコル}霊血を用いて人間の背中に^{ヒエログリフ}神聖文字を書く。

それによつて人間や亜人は怪物にも対抗が出来る力を獲て、ダンジョンを攻略しながらモンスターの魔石やドロップアイテムを獲る事で糧とするらしい。

成程、よく出来ている。

神々は人間に恩恵を与えて信徒を増やし、地上での雑事をやらせて自分は好きに生きている。

まあ、^{ファミリア}組織の運営もしているみたいではあるが、中には運営自体を

人間に任せて自由気儘、怠惰に暮らす者も居たりするらしいけど。

例えばフレイヤ。

彼女は基本的にヘスティアやヘファイストス達みたいな働き方はしておらず、迷宮の上に建てられているバベルと呼ばれる建造物、其処で優雅に暮らしていると何かとか。

ファミリアもダンジョン探索するタイプも在れば、ヘファイストス・ファミリアみたいな鎧兜や武器を造って売るタイプも在るし、デメテル・ファミリアなど農業に従事するタイプなんかも存在している様だ。

まない……もとい、ロキ・ファミリアは可成り大手のダンジョン探索タイプのファミリアらしく、人数も普通に百人越えをしている様で、既に何度も遠征を行って稼いでいるとか。

「やつぱりやるなら探索型が一番だろうか？」

などと呟くと、何故だかヘスティアのターコイズブルーな瞳がキラキラと輝き始めた。

神の恩恵ファルナというのは、基本的にどの神様に与えられても変わらないらしいから、ヘスティアだろうがロキだろうが良いと云えば良い。

ダンジョンは「ギルド」が管理運営をしているらしいから、モグリでは稼ぐのも面倒臭そうだったし恩恵は必須な訳で……

遂には右人差し指で自身を指し始めたヘスティア、ファミリアのメンバーが零な彼女としては、無所属なユートを取り込みたいといった処なのだろう。

半ば襲われたに等しいというのにいじましいといふべきか、或いはユートの事を女神の懐の深さから赦してくれたのか、いずれにしても先輩が居ない訳だし、柵も少ないのはメリットと云えるかも知れない。

デメリットはヘスティアがアルバイトで糊口を凌いでいる辺り、貧乏感が半端無いファミリア——眷属が居ないからそう呼ぶというのも烏滸がましいのだが——だという事。

これでは武具は元より、迷宮探索に使う道具や糧食すら用意が出来ない。

「別にヘスティアのファミリアでも構わないんだが、先立つモノくらいは準備をしてくれるんだよね？」

ピシッ！

空気が凍り付く。

ソツと目を逸らしてくれるヘスティアを見遣って、思っていた通りだったのだと頭を抱えた。

「確か、イシユタル・ファミリアってのは娼館だって話だよな？」

力の強いファミリアに関してはレクチャーを受け、「アポロン・ファミリア」や「イシユタル・ファミリア」や「ロキ・ファミリア」や「ヘファイストス・ファミリア」などはユートも既に知識を持っている。「よし、だったらヘスティアは其処に売り付けて準備金にしよう！」

「ま、待った待ったあつ！ あのを、ボクはこう見えて処女神だから不特定多数とそういうのはちよつとアレなんだよ！」

「……けど準備金すら無いってのはね」

「うう、ギルドから武器と防具は借りれるから少しずつ稼げば……」

「面倒。僕は一ヶ月くらいダンジョンに籠って一気に稼ぎたいんだ」

「いや、無理！ 初心者は一階層で半日も籠れたなら良いくらいなんだぜ？」

娼館に売られかねないと知り、ヘスティアは身振り手振りで説明と説得をしているが芳しくない。

「だいたい、ギルドからの貸し出してどんなの？ 僕としては、『櫓の棒』と『旅人の服』と『棍棒』に五十ヴァリスとか勘弁して欲しいんだけどな」

「それはどんな虐めだい！ 得意武器と簡単な防具って処だよ」

きつと『銅の剣』と『革の鎧』くらいだろうなと、ユートは予測をしていた。

「僕的には、長期の遠征にも耐え得る質の良い防具が欲しいんだ。上に羽織る為の戦装束や武器は有るんだけどね……」

鎧となると聖衣か二天龍の禁手くらい。

それは流石に派手過ぎ、ちよつと遠慮したかった。

況してや、聖衣は小宇宙が使えないであろう現状、形ばかりは鎧の

単なる重石に過ぎない。

ヘスティアからの話の通りなら、此処はドラクエの世界観みたいなファンタジーワールドな訳だろうし、聖衣や禁手はすぐわない。

「仕方無い、こうなったら最後の手段だな。ヘスティアには借金を負って貰う」

「いや、普通に少しずつの攻略で稼ごうよ……ね？」

勿論、ヘスティアの言葉は却下された。



「帰れ！　そして二度と私の前に顔を出すな！」

赤毛で右目に眼帯をした女性はヘスティアを、いつそ汚らわしいモノでも視る様な冷たい視線で射抜き、すぐに顔を背けるとシッシと手を振った。

神友とは思えない対応の冷たさだが、ヘスティアは彼女の優しさに甘えまくって天界から降りた直後は、正しく寄生をしていたのだから当然の結果だろう。

それでも最後の恩情としてあの住処を世話してくれただけ有り難く、今現在のヘスティアは彼女の優しさすら食い物にしたみたいなのだった。

「聞いておくれヘファイストス！　ボクの事なら幾ら詰なつても構わない。けど借金だけは認めて欲しいんだ！　ボクの初めてのファミリアに、それなりの装備を与えたいから！」

「ファミリア？　そういえば見た事の無い顔がある。坊やの名前は？」

「柂木優斗。まだ契約はしてないけど、一応は彼女のファミリアに入る心算だ。装備品に関しては相談に乗って貰えると助かるな」

「ほう？　ウチの装備品は可成り高額な物ばかりだ。勿論、質も保証はしよう。だけど駆け出しの冒険者の卵に手が出せる物は置いていないんだがね」

実はそこそこに稼げれば手に入る武具も有るけど、それは下級鍛冶

師が造った作品であり、性能も値段に相応それなりでしかない。

「問題は無い。ヘステイアが借金の申し込みをした訳だけど、実際に担保を用意しているのは僕だしね」

「――何？」

ユートの堂々とした宣言を受けて、ヘファイストスは驚愕するしかなかった。

.

第2話：ヒロインを差し置いて男に出番があるのは間違っているだろうか

ユートは予めアイテム・ストレージから出しておいた金属の塊——漆黒に煌めくインゴットを袋から取り出してヘファイストスへと見せてやる。

「こ、これは!？」

「ヘファイストス、貴女にすら理解も出来る筈だよ。その金属がいつたいどんな代物なのか……を」

ヘファイストスは目を見開き、手にしたインゴットを色々な角度から見たり、或いは指で弾いて音を鳴らしてみたりと、様々な方向から検証をしていた。

ヘステイアにはいまいち解らない様だが、ユートが準備をしていた漆黒の金属のインゴットは、ヘファイストスみたいな鍛冶職人なら正に……

「欲しいわね」

そう思わせる物だった。

「強度、粘性、重量の軽さを鑑みれば……アダマントタイトに一步を譲るけれど、金属自体に含まれた魔力がそれを覆すわ。見た事もない金属だけどね……」

「名前は黒鍛鋼^{ブラックメタル}。とある金属を基にして僕が創った物だよ」

「君が？」

「それは兎も角、ソイツなら担保には充分な筈だね。仮令、僕が逃げたり死んだりしても担保は残るから、決して貴女に損は無い」

「然し、これだけの物だ。君がこれ売れば武具など幾らでも買えるだろう?」

「まあね。だけど僕としてはソイツで商売をする心算も無いんだ。飽く迄も僕は冒険者として糧を獲たい。それに問題はヘステイア」

「ヘステイアが問題とは? 何かしらやらかしたか」

「つて、ヘファイストス？　ボクを何だと!？」

ヘファイストスの絶叫にヘステイアが文句を言ってくるものの、完全に黙殺をして会話を続ける。

「ヘステイアは貴女の所でニートってか、ぶっちゃけヒモ生活をしていたな？」

「その通りよ」

ヘステイアは不満そうではあったが、事実であるのは認めているから何も言う事が出来ない。

「というか、ヘステイアがそもそもユートに自分の恥を教えていた。で、だ。そんなヘステイアが今度はファミリア対象にヒモを始めました、と。外聞が悪いにも程がある。だから、借金は名目上だけでもヘステイアがするって事で、僕はそれで装備やら道具を揃えてダンジョンに潜るという訳だよ」

「成程、それならファミリアにタカる駄神なんて話にはならないわね」
「だ、駄神……って……」

流石はタカられ続けて、友情を食い物にされてきたヘファイストスだけあり、言う事がいちいちキツイ。

「貴方も災難な所を選んだものね？」

「いや、まあ……正直に言ってしまうえば何処でも良かったんだ。それこそロキのファミリアや貴女のファミリアでも……ね。

【神^{ファミリア}の恩恵】って誰から受けても同じなんだろう？」

「へえ、自信アリ？」

「少なくとも、【神^{ファミリア}の恩恵】自体は在っても無くても一緒。無くても困らないからね」

「……それは流石にどうなのかしら？」

「何ならまだ【神の恩恵】は得てないけど、ものは試しに貴女のファミリアの誰かと試合しても構わない」

「そうは言っても、ウチは鍛冶の為にレベルを上げてる口だから、高くて精々がレベル3なのよね。一応はレベル4も居るし、団長はレベル5なんだけどね」

レベルが上がったならば【発展アビリティ】が発生するが、これは

割かし便利なモノが多かった。

鍛冶のアビリティを得る為には、どうしたって必ずレベルは一つだけでも上げなければならない。

そして力試しの為だけに彼らを呼び付けるというのも憚られ、ヘファイストスもどうしたものかと首を傾げてしまう。

「レベル3……確かそれはドラクエで云えばレベルというより」

ドラクエ6や7での職業熟練度、レベルの様な上がり方はしないのだろうし、何よりもヘステイアが曰く現在の最高レベルは【おうじゃ猛者】の7だとか。

少々、苦手なフレイヤのファミリアに所属する猪人という巨漢の亜人。

最高値がレベル7なら、レベル3というのは謂わば中堅層となるのだろう。

とはいえ、ヘステイアも実際には最近になってからの降臨だったし、それから暫くはヘファイストス・ファミリアのアジトで墮落な生活をしていたし、常識の範囲でしか知識が無い。

まあ、積極的な情報収集なぞしてもファミリアが居なければ使えなかったし、そもそも怠惰に暮らしていた頃も、バイトで食い扶持を獲ていた頃も情報なんて集めようがなかった。

「そういえば彼が今日は居たわね……」

ヘファイストスがちよつと手を回し、とある人物を呼びに行かせる。

ややあつて、現れたのは首に青い布を巻いた赤毛の青年だった。

「ヘファイストス様、呼んでいると聞きましたか？」

「ヴェルフ。最近の調子はどう？」

「いつも通りですよ。いつも通りにレベル1で発展アビリティの鍛冶も得られない下級鍛冶師な訳ですが、それで用事とは？」

「彼とちよつと戦ってみてくれないかしら」

「誰です？」

ユートを見遣り、見覚えが無い顔に訝しむ青年——ヴェルフ。

「彼の名前はユート。神友に出来た初めてのファミリアの候補でね、

まだ恩恵を得てないらしいけど可成りの自信家みたいなのよ」

「それで腕を見たいと？」

「私が防具を打つに相応しい腕か見たいのよ」

「っ!? ヘファイストス様自らが!？」

いつの間にか彼女自身がユートの防具を造る話へとワープ進化をしたらしく、ヴェルフは疎かヘステイアも驚愕に目を見開く。

恐らく【Hφαιστος】のロゴ付きの防具。

「ヘファイストスが打ってくれるのかい？」

「良い物を見て興が乗ったのよ。但し、それなりに実力を示して貰うわよ」

眼帯を着けていない左目がキラんと輝いた。

「了解した」

ユートが知るヘパイトスも鍛冶の神、ならば神の力アルカナムを使えないとはいえ相当な物となる。

場を移動して暴れるのに相応しい広場に出てきて、ユートとヴェルフは神二柱が見守る中で対峙した。

「折角だから賞品を付けましょう」

「賞品？」

「そうよ、ユート。貴方には私の打つ防具を半額に、ヴェルフはそうね……レベル2になれる様に周囲へと計らいましょう」

ヴェルフは急にやる気……というか殺る気が満々になって、背後には何故だろうか？ ヘファイストスのオーラが浮かんでいた。

「さつきまでダルそうだったのに、急に覇気が出てきたな。確かヴェルフ……だったか？」

「ふん、あんたにや解らん苦勞ってやつがあんのさ」

大刀を片手に肩で受け据えながら言う。

「そうか……取り敢えず、自己紹介する。柎木優斗」

「ヴェルフ・クロッゾだ」

ヴェルフは大刀を持つが一方のユートは無手。

「おい、まさか俺を舐めてんじゃねーだろうなあ？」

「そんな心算も無いけど、君にはそう見えるのか？」

「あ？」

「なら、未熟だね」

「てめえ……」

ピキキッ！ 額に青筋を浮かべながら半ばキレる。

そりや、武器は持たないわ【神の恩恵^{ファルナ}】も無い癖に未熟呼ばわりをしてくるわ、余程の聖人君子でもなければ程度の差はあれど普通に怒るだろう。

「とある白龍皇は言った、相手の強さが理解^わかるのもまた強さだと。ヴェルフとか云ったか？ あんたが僕の力を見誤った時点で己れの脆弱さを露呈した様なものだよ」

「チイッ！ 言ってくれるじゃないかよ！ ヘファイストス様、合図を！」

したり顔で講釈を垂れるユートに、ヴェルフ・クロッゾはいい加減で暴れ出したくなるくらい怒り心頭にキていた。

ヘファイストスはやれやれと頭を振り……

「始め！」

ヴェルフ・クロッゾの望み通り合図を出した。

その瞬間、大刀を両手に持ったヴェルフが駆け出してユートに上段から斬り下ろさんと振り上げ、無防備——に見える——な頭からがち割らんと振り下ろす。

普通なら終わる一撃だったろうが、ユートは瞑目をするであろう事か右手にて手刀を作り、それで大刀の迎撃を行う。

「莫迦が！」

「莫迦はそっちだ」

手刀と大刀が接触をした途端、ユートはまるで導くかの如く右腕を下ろして、大刀はそれに沿う様な動きで流され、果てには地面を強く叩いてしまった。

「うがつ！」

斬れもしない地面を叩いた瞬間、振動がヴェルフを襲って堪らず大刀を手放すしかなくなる。

「終わりだ、ヴェルフ・クロッゾ！」

「ぐっ!？」

自慢の大刀を受けた手刀が首筋に当てられており、僅かな〇・一ミリの動きが首の薄皮を裂いて出血を強いられる。

「っ！」

「僕の手刀は聖剣も斯くやな切れ味を誇る。少しでも動けば素っ首が落ちるぞ。それとも逝くかね、ポトリ……と」

冷や汗がダラダラ流れ、背筋に氷水でも入れられたかの如く寒気、ヴェルフには理解が出来てしまった、ユートの言葉に偽りは無いのだと。

「ま、参った……」

「勝者、ユート！」

小宇宙を使えないから、基本的に魔力を媒介に技を発動しているが、ユートは本来に近い威力も出せる。

流石に今の村正抜刃で、紫龍がやったみたいなクリュサオルのゴールデンランスを破断は無理だろうが、だけど恐らくこの世界にてアダマントイトと呼ばれている超硬度金属の武器であれば、その気になつたなら両断も出来るだろう。

因みに、ギガースが纏う金剛衣アダマースに使われる神金剛アダマントイトと、この世界のアダマントイトは呼び名が同じなだけの別物である。

例えるならば、野球選手の王 貞治とどつかの中小企業な会社員の王 貞治さんくらいの違いだろうか？

それは兎も角、ヴェルフは四つん這いになって絶望を湛えた表示となり、怒りか哀しみか悔しさか涙さえ流していた。

「は、はは……俺は、俺って奴は……【神の恩恵フアルナ】さえまだ与えられてない冒険者以前にさえ勝てねーのかよ？」

ヴェルフ・クロッゾ——彼は冒険者ではなく鍛冶師スミスだ。

だけどヘファイストスから【神の恩恵フアルナ】を受け、レベル1だとはいえそれなりにはステイタスを上げている身。

当然ながら【神の恩恵】を受けない一般人に負ける道理など有りはしないし、況してやステイタスを発生させていない一般人など、彼らからすれば赤子や雑魚と云えるくらいだ。

「待て！ ヴェルフはこう見えて一応は十階層にまで到達している。だとしたら君は、『神の恩恵』無しで十階層クラスの者を倒せる力を持つ事になるわね？ 貴方、何者なの？」

勿論、神の力——ユートの的に云えば神力を封じてない神々ならば、その一柱だけでも指パツチン一つで鼻唄混じりに国を焦土にさえ変える訳で、それを思えば大した事はない。

とはいえ、本来は神々は疎かダンジョンの一階層のモンスターにさえ翻弄される人間や亜人が、中層にさえ届こうかという者を打ち倒す……余りにも無茶な話だろう。

ハッキリ言えばヘファイストスは警戒していた。

「僕が何者か……か。僕の名前は柎木優斗。岡山県の片田舎で柎木家次男として誕生した。即ち、この地に何の所縁も無い……異邦人だ」
「異邦人？」

「そう、異世界から転移をしてきた異邦人。因みに、僕的能力は彼方側でも可成りのものだからね。そも、『神の恩恵』が無ければモンスターも碌に斃せない程度と一緒にされても……ねえ？」

「ぐっ！」

ヴェルフが呻く。

現状では地球と異なり、ユートは小宇宙は使えない訳で、つまり既知外レベルの能力は持たない。

全くの素の状態。

この世界での冒険者的に換算して、レベル5の上位くらいが精々だろう。

だけどユートはこの事態を善い機会と捉えた。

まだスプリングフィールドだった頃、VRMMOに閉じ込められた事があったのだが、その際にも小宇宙は当然ながら使えずゲームのバッテリーが持つ能力と、何とかなんとか引つ張ってきたシステム外スキルで、攻略組の上位陣として君臨してきたのだ。

それに、異世界で小宇宙が使えない事態というのもそろそろ慣れてきたから、折角の機会でもある。

【神の恩恵】を取り込んで、素の能力を大幅に強化をしようと目論ん

でいた。

冒険者として糧を獲て、更には小宇宙を使わず素の身体能力の強化、一石二鳥とはこの事であろう。

或いは砂沙美が迎えに来た後も続けて良いかもと、寧ろ何人が来るかは判らないが仲間達もファミリア入りさせ、暫くはこの世界で楽しむのもアリだろうか？

差し当たり……

「ヘファイストス、約束は守って貰うよ？」

「判ったわ。それじゃあ、担保用のと防具を作成用のブラックメタルを。それとどんな防具をお望み？」

「チェストガード、レッグガード、アーム、ベルト、それに円形盾^{バックラー}があれば便利かな？」

「結構、軽装ね」

「逸さがウリの動きだから重武装は合わないんだよ」

「成程……」

尤も、ユートが普段から使っている双子座の聖衣は重武装以外の何物でもなかったりするが……

「ま、待ってくれ！」

「うん？ 何だ？」

ヘファイストスと広場を出ようとする、ヴェルフが落ち込んだ表情を一変、真面目な顔で叫んだ。

「あんたは防具を欲して来たのか？」

「ああ、武器は準備が出来ているからね」

「なら、一つで良いから俺に造らせてくれ！」

「ハア？ ヴェルフの腕はヘファイストス並なのか？ それなら任せるが……」

「うぐぐつ！」

神の力は封じているが、天界では【神匠】と呼ばれたヘファイストスである、それが潜在力は兎も角として現状、彼女に抗する程の腕前では有り得ない。

況して、未だにレベル1だという事実つまり……発展アビリティ

が生じていない証左なのだから。

発展アビリティ——基本アビリティの力、耐久、器用、俊敏、魔力の五項目の事を指しており、これらは経験値^{エクセリア}を得ていくと上昇、評価I→Sの十段階で表され、レベルが上がると新たに発生するかも知れない特殊技能だ。

神秘や耐異常や鍛冶と、様々なアビリティが存在しており、ヴェルフは当然ながら発展アビリティなど持つてはいないのである。

上級鍛冶師^{ハイスミス}には、【鍛冶】の発展アビリティが必須。

これもヘファイストスの許でニートをしていたが故にヘステイアが知った情報であり、ユートが此処に来る前に聞いていたのだ。

上級鍛冶師ではないが、ヘファイストスはヴェルフの腕が高いと知っている。

勿論、ヘファイストス・ファミリアの上位に位置する上級鍛冶師には全く及ばないし、況んやヘファイストスに届く筈もない。

「やめない、ヴェルフ！」

「くつ、ヘファイストス様……俺は……俺は！」

悔しい、敗けたのが悔しいし鍛冶師としても信頼されないのが悔しい。

まるで「クロッゾ」としてしか価値が無いと言われたみたいで、余りにも悔しかったヴェルフにユートは向き直る。

「なら、円形盾を造ってみて貰おうか。どうせ最初は上層からなんだ、神様仕込みの防具でなくとも充分。見込みがあれば今後頼むかも知れないし、気合いを入れて造ってくれ？」

「つつ！ 解った！」

バツと顔を上げて大きく目を見開いたヴェルフは、すぐに頷くと広場から駆け出して行ってしまう。

「ふう、良かったの？」

「構わないさ。上層なんてモンスターも——スライム相当だからな」

「そう、なら良いわ。防具はそうね……ヴェルフも含めて一週間後に取りに来て頂戴」

「了解した」

「あ、防具との差額を渡さないかね」

一度部屋に戻った三人、ヘファイストスは黒鍛鋼のインゴットを担保として、一つに五十万ヴァリスの値を付け、十個を受け取ると五百万ヴァリスの半額——二百五十万ヴァリスを借金として渡す。

ユートは更に防具作成用の黒鍛鋼を渡し、ヘステイアと共に廃教会の地下となる本拠地へと戻った。

そしてその夜……

「それじゃあ、始めるよ」

上半身を裸となつて俯せに寝転ぶユートの腰に座ったヘステイアは、針で指に傷を付けてユート風に云うと^{イーゴール}霊血を流しており、それで背中に何やら書き始める。

【神の恩恵】とは、神の血で人間に^{ヒエログリフ}神聖文字を刻んでステイタスを発生させる作業で、それを^{コイネー}共通文字に直したものを見せる訳だ。

但し、好き勝手に刻めるといふ訳では決してなく、神様が行うのは^{エクセリア}経験値によつて埋められていた^{のうりよく}化石を発掘するのだ。

「えっ？ これは……」

柁木優斗

種族：カンピオーネ

LV. 1

力：120

耐久：115

器用：132

俊敏：160

魔力：175

《魔法》

【精霊干涉】——精霊との交信で魔術を発生させる。詠唱は魔術により区々で、水火風地、雷氷光闇影樹となっている。

【黒魔術】——異世界に住まう魔の眷属の存在力へと干渉して力と成す。

【神威魔術】——この世界の神々との交流によつて、存在力へと干渉を

する事が可能。それを魔術に変換をする事が出来る。

《スキル》

ラブ・ライブ

【情交飛躍】——発現者が男の場合だと女性との情交を一回で基本アビリティに十前後上昇。同時に絶頂を迎えれば効果は倍増。絆が深まればボーナスがプラス。

イエヒー・オール

【権能発詔】——権能を扱う事が出来る。

エクシード・チャージ

【聖剣附与】——施術者の識る聖剣の機能を武器へと附与。武器でさえあるなら種類は問わない。附与時間は六十分。恒常附与の為に宝石を媒介とする。

基本アビリティが高く、既に魔法スロットが最大とスキルスロットまでも埋まっていたと云う。

第3話：狐っ娘と春ひさぐのは間違っているだろうか

「どうした？」

随分と驚愕している主神の姿を不審に思い、ユートは顔を後ろに向けヘステイアを見遣って訊ねる。

「う、うん。ちよつと予想外な展開だからさ……」

ヘステイアは共通^{コイネ}文字でステイタスを書き写し、すぐにもその紙をユートへと渡す。

「ふむ……解らん！」

ポイツ！

「つて、何してるんだい！ 折角、書いたのに!？」

「異世界人の僕がこの世界の文字をすぐ読めるか！」

「あー！」

今気付いたのか、左手で口を覆いながら声を出す。

まあ、その割には言葉が通じている不思議……

「仕方がないな。文字に関しては後から教えるとして……口頭で説明するよ」

「そうしてくれ」

本当は【ゼロの使い魔】系の魔法、^{リード・ランケージ}翻訳を用いたら、普通に読めたりする訳ではあるが、文字を覚えなないといつまでも魔法頼りになつてしまう。

それは流石に不便だ。

「えつと、ね。君は初めから魔法とスキルのスロットが埋まっていたんだよ」

「おかしいのか？」

「普通は何の力も発現していないからね。それに魔法もおかしい」

「魔法？」

「普通、魔法の最大数というのがあってね、誰であれ通常は三つのスロットまでしか持てない。中には一生涯魔法に縁の無い子だって居るくらいなんだ」

「それで？」

「君の魔法は【精霊契約】と【黒魔術】と【神威魔術】の三つ。だけどこれだと何が何やら？ 説明はされているんだけど、詠唱も書かれていないし……」

「いや、理解した」

「——へ？」

【精霊契約】はユートが精霊王と契約しているのが表に顕れたモノだろうし、【黒魔術】はスレイヤーズ系の魔族の力を借りた魔法の事、最後の【神威魔術】とは恐らくこの世界に於ける神様との関わりにより、黒魔術みたいな形で魔法を扱えるのだろうと予測。

しかも、【精霊契約】は本来だと四属性しか扱えないだろうが、どうやら光や闇なども力は劣れど扱う事が可能らしい。

これなら、【ネギま！】や【ゼロ魔】や【バスタード】などの魔法は普通に使う事も出来る筈。

まあ、虚無魔法や古代ハイ・エンシェント語魔法は無理だろうが……

「じゃあ、魔法に関しては大丈夫なんだね？」

「問題無いよ」

「判った、信じるさ」

嘘が無いのは解る。

「次にスキル。情交飛躍とか何なんだい？ こっ、こんなエッチな内容のスキルが発現するなんて、君はいったいどんな生活を送ってきたのさ!? それに、権能発詔なんて意味が解らないよ。それから聖剣附与というのも……」

「情交飛躍？」

情交、或いは性交。

まあ、確かに自分らしいと云えばらしいと思う。

ヘステイアからの説明からすると、要はセ○クスをしたらその相手が基本ステイタスを上昇させるというのだろうが、ならば冒険者の女性——神の恩恵を受けた者が相手なら、それを餌というのも人間きが悪いかも知れないけど、ステイタス上昇を餌にしてやれるかもという事だ。

やるだけで十もの数値が上昇、つまりは十回もやれば百はアップする。

貞操とステイタス上昇、秤に掛けてどちらを選ぶかは相手次第だが……

同時に絶頂に達すれば、何と二倍になる上にお互いが憎からず想えば想う程、ボーナス数値が入る。

本当に面白いスキルだ。

「権能発詔は異世界で手に入れた能力だけど、普通に使える筈なのに何でスキルとして発現した？」

ユートには理解が出来なかったが、実は権能は僅かながら神氣が漏れる。

この世界でそれは拙く、スキル化して魔力のみにて

発動する様に、カンピオーネの本能がヘステイアへと働き掛けたのだ。

「聖剣附与は便利そうだ。破壊に特化させたり速度を上げたり出来るし」

他人に能力を使わせるというタイプだが、中々に楽しみなスキルだった。

「……そうかい？ まあ、扱えるなら良しさ」

やはり嘘は無さそうだと判断したが、権能に関しては隠し事を感じた。

邪悪なものでは無さそうだし、全てをつまびらかにしなければならぬ訳でも無いから良しとする。

「それ以外、発展アビリティが無いのは当然として、基本がI評価たけど高い。スキルや魔法に関しては、余人に公開しない方が良いかも知れないかな」

神々が知ればレアスキルだの何だの、騒ぎ出してくるに決まっているから。

「了解した。それと、お金も借金ではあっても手に入ったから、幾らか道具なんかも買っておきたい。街も観て回って構造とかも知りたいから、ちよつと出掛けて来ても構わないか？」

「ああ、ボクもアルバイトに行かないといけないし、余り遅くならない様に夕方までには帰って来なよ?」

「ああ、判ったよ。今晚のご飯はどうする?」

「それは……君のインゴットで得たお金だけど、外で食べてみないかい?」

「外食ね、了解した」

そういうのもアリだと、ユートはすぐに頷く。

そして、ユートはちよつとした観光に出掛け、主神ヘステイアはアルバイトという物悲しい労働へ。



「さてと、昨夜から下半身が難しがってるんだよな。まさかヘステイアが寝てる間に性的に襲ってきた訳でも無いだろうし、どうしたんだろうな?」

実はある意味でその通りだったりするが、ユートも処女神おとめだと豪語するヘステイアがよもや寝てる男に劣情を催しはしないと考え、正解からは遥かに遠退いてしまった。

まあ、ヘステイアが劣情を催したのではなく、寝ていたユートがヘステイアを捕まえてベッドに引き摺り込んだが故の事態。

ユートがイク前にヘステイアがイキ、それで終わってしまったからユートのには不完全燃焼なのだ。

だからこそ、腰に違和感をどうしても感じる。

「確か、ヘステイアは娼館もファミリアが管理運営をしているとか言ってたな。つまり、普通にこの世界にも娼館が在る筈」

これでもハルケギニアの時代、娼館を利用して情報収集なんかもしていた。

早速、ユートは娼館へと向かうべく足を向ける。

未だに昼前なれど仕事が無い——装備品やギルドへの登録云々の為——ユートはヒツキーよりはマシな、謂わば自宅警備員にも等しい身分であり、歓楽街へと赴くのもまた自由。

【夜の町】な歓楽街ではあるが、別に朝や昼などに営業をしていない訳でもないのだから、普通に人々が行き交う道のり。

「へえ？」

その先には様々な娼館が建ち並び、それらを仕切るファミリアがイシユタル・ファミリアだとか。

歓楽街第三区画に並んだ建物、その娼館の壁や扉には同じ徽章が飾られているのだが、それが即ちイシユタルの徽章なのだろう。

然しながら、ユートが驚いたのは徽章なんてチンケな物ではない。

「遊郭……とはね……」

ユートがハルケギニアの時代に遊んだ娼館、それは基本的に洋館によるモノ。

だけど目の前に建つのは遊郭——明治時代や江戸時代といった近代の遊女達が男を誘う日本風な建物。

別にユートは性欲を満たす為だけにこんな場所くんだりまで来た訳ではなく、この土地にまだ馴染み染まり切っていない娼館を見付けて、情報収集などに役立てるべくだった。

実際、ハルケギニア時代に娼館を利用していたのにしても、未だに殆んど客を取っていない若い娼婦へと渡りを付け、情報収集をやらせていた事がある。

当然ながら情報を集める為には、娼婦が男に抱かれて寝物語に聞かされた事をユートに抱かれつつ嬌声を上げながらという形。

ユートも心得たもので、情報を伝えさせるであろう部分と、嬌声を上げさせる部分ではメリハリを付け、確りと仕事を両立させる事で怪しまれない様にした。

情報収集の為だったが、ユートも男な訳で性行為を普通に愉しんでいた部分が多少なりあったし、こんな普段から見慣れない遊郭を見たからには、興味本意で入るのも致し方無しか。

一応、ものは試しにという事もあって……

「まだ店に馴染まない娘、客を余り取ってないのを頼めるかな？」
情報収集に役立つ娼婦……というか遊女というべきかを頼んでみる。

「お客様も好きですね？　こんな真つ昼間から素人を欲しがるなんて」

番台に座る者がニヤニヤしながら言う。

教えられた部屋に行き、扉を———というか襖を開けると、正座をしながら頭を下げた和装を着ている長い金髪の少女が居た。

見た感じでは大人に成り切らぬ、然し幼女からは既に却脱した———高校生くらいの年齢だろうか？

「御待ちしておりました、旦那様……私が旦那様へと御奉仕を仰せ遣った春姫と申します。どうぞよしなに御願いたしまする」

一旦は頭を上げて説明をした春姫と名乗る少女は、再び頭を下げて辿々しくはあつても、娼婦として確りと挨拶を熟した。

成程、教育は行き届いているらしいが未だに未熟な素人娘には違いない。

恐らくだが、御奉仕とやらも教わった事の意味こそ理解をしていますが、単純に教わった奉仕をしているだけなのだろう。

其処からどう動けば効率が良いか、更なる悦楽を与えられるかなどはまだ理解も及ばない。

やっているだけの行為、寧ろ逆に感覚に翻弄されているタイプと見た。

さて、ではユートが行う情報収集はどうやるか？

簡単？　なのが相手へと大金を支払ってのもの。

娼館に染まり切っていない娼婦は、自らを買い戻す金を得る為に頑張る者だつて居るし、小遣い稼ぎ感覚にアルバイト的な感じの場合もあるが、最終的には手切れ金で後腐れが少ないメリットもある。

デメリットは金に羽でも生えたかの如く飛ぶ事と、場合によっては逆に情報を奪われる可能性だ。

今一つは惚れさせる事。

理由の如何など兎も角、娼婦を自分に惚れさせてしまえば、少ない金で情報を得てくれる。

デメリットは後腐れ。

下手を打てばヤンデレやメンヘラ化もあり、面倒臭い事態にもなり易い。

因みに、ユートは知らないが似た様な事はこの娼館などでも普通に行われる。

取り敢えず今は目の前の少女で愉しもう。

「……と思ったのにね」

目をグルグル回して気絶する少女を見下ろしつつ、ユートはついつい溜息を吐いてしまう。

狐の耳に尻尾を持つ彼女は所謂、狐人^{ルナール}という亜人の一種。

名前は源氏名とかでなく本名、サンジヨウノ・春姫は極東から来たのだとか。

きつと日本に近い風習の国なのだろう、江戸時代のレベルでの話だが……

そんな春姫はユートが軽く服を脱いだ途端、真っ赤に顔を染めて絶叫を上げながら引っくり返る。

「どんだけ初心な娼婦？」

チヨイチヨイと指先で頬を触れてみた。

「や、ん……こんな……」

「……？」

チヨイチヨイ。

「アン！ 旦那様……私は……ん、きやう……！」

触れると過剰なくらいの嬌声を上げる春姫。

不審に思ったユートは、春姫の着た着物の裾を捲って確かめると、春姫がまだ処女だと確認した。

しかも御陰はほんのりと湿り気を帯び、春姫が夢現に視ているものが春ひさぐモノだというのは確定。

「まさかとは思ったけど、春姫ってこうやって気絶をしてはえちい夢で御奉仕をやった心算になってる？」

客も気絶した春姫は放っておき、店側に別の娼婦を用立てさせて性欲を満たしていたのだろう。

気絶した娼婦なんてのはダッチワイフよりマシ程度だろうし、今の

春姫を使おうなんて露とも思わなかったに違いない。

だけど触るだけでこんな嬌声を上げる夢を視ているならば、それに愉しい事になりそうだ。

「挿入は気絶から覚めてからで良いとして、今はその肢体の温もりと柔らかさを嬌声と共に堪能させて貰おうかな？」

金は払ったのだ、時間内ならえちい行為に耽つても問題などあるまい。

布団にお姫様抱っこで運ぶと、丁寧に寝かせて着物を軽く剥いてやる。

裾の短い襦袢から零れる胸に舌を這わせてやると、やっぱりそれに合わせるかの如く嬌声を上げた。

少しずつ互いの服を剥ぎ取りつつ、ユートは春姫の恐らくは未だろくすっぽに男が触れてさえない肌の味を堪能し、目を覚ますまで愉しませて貰う。

暫くして、目を覚ました春姫が混乱する中で抵抗させないくらい自然に貫き、痛みから気絶すら出来なくなった春姫に、実は自分こそが初めての相手である事を明かし、最後まで意識を保つ春姫と愉しんだ。

折角初めての相手となったのだし身請けをしたかったのだが、神イシユタルの方針的に「春姫の」身請けは不可能だと言われる。

金を払っての専属契約を交わし、今後は自分以外に触れさせないのがやつとの交渉となった。

数回に亘る行為の甲斐もあり、取り敢えずは下半身の違和感も無くなったし、まだ地球で云えば四時にもならない時間。

歓楽街を出たユートは、少し街道から外れた路地裏に入ると、ステータス・ウィンドウを開いてタップ、鎧以外を装備してみる。

黒い戦闘衣に片手剣。

それは嘗てまだスプリングフィールドだった頃に、SAOと呼ばれるゲームをプレイしたのだが、その時に序盤で仲間の一人が装備をしていた物を、現実にて再現をした物である。

アニールブレードとコート・オブ・ミッドナイト、これにヘファイ

ストスへと注文した軽鎧と、ヴェルフが造る予定の円形盾を装備したら冒険者としての姿が完成をする訳だ。

背中に装備がされているアニールブレードを抜き、軽く振ってみても違和感を感じられない。

武器を持つなら太刀が主となるが、普通に別の武器も使い熟せるのだ。

「ふむ、この僣ソードスキルを使って闘うのも面白いかもね。それに、キリトやアスナやリーファやシリカ……S A O時代の仲間達もいずれ喚んで、ダンジョンでリアルS A Oとかね」

使徒以外に擬似的にでも永遠を与える手段を手にしたユートは、望んだ相手にそれを与えていた。

初めから使徒になれない男や、アスナみないなコブ付きで使徒にならない娘、これらとは普通ならお別れをするが、これなら招喚も可能となる。

とはいっても、喚ぶ為には招喚に必要なコストを貯めなければならぬ。

故にすぐとはいかないのがもどかしかった。

「っ！ 誰だ!？」

振り返っても誰も居なかったが……

「気のせい……じゃない。確かに気配の空白があつた筈だからな」

気配を感じたのではなく、気殺によって生じた気配の空白を感じただ。

つまり、誰かしら気配を消して此方を伺っていた。

「逃げられたなら良いか。追う意味も無いしね」

見ていたのが知り合いとは考えられないし、そもそも昨日来たばかりのユートに縁や所縁は無い。

こそ泥か何かだろう。

「気を取り直して、ギルドで登録だけはしとくか」

本格的な探索は一週間後に装備品を受け取ってからになるが、試しにダンジョンに潜るくらいはやってみても良いだろうし、それならギルドに登録は必須だ。

それに、借金で手にしたお金を一部だが春姫を専属にするのに使っていたし、少しは稼ぎたいと思う。

早速、摩天楼施設^ルへと直行をする。

カウンターに座る耳の長い眼鏡を掛けている女性——エルフだろう——に話し掛け、冒険者登録をしたい旨を伝えた。

「それでは、御名前と所属ファミリアを此方の書類に書いて下さい」

「……書けない。まだ文字を覚えてなくてね」

「判りました、それでは私が代筆を致しますので口頭でお願いします」
嫌な顔一つしないで言う辺り、マニュアルの通りの行動であると判る。

識字率までは窺い知れないが、文字を書けない人間も偶に居るのだろう。

「柎木優斗。所属ファミリアは「ヘスティア・ファミリア」だね」

「マサキ・優斗さんつと、ヘスティア・ファミリアに所属ですね。これでギルドへの登録は終了しました。それと、序であります但私が貴方のアドバイザーを務めさせて頂きます、エイナ・チュールです。これから宜しくお願いしますね？」

アドバイザーについての説明を受けると、どうやら初心者な冒険者に判らない事を教えたり、死なない様なアドバイスをする仕事との事らしい。

駆け出しの冒険者など、何も判らないのに無茶苦茶な行動を取り、結果としてモンスターに殺されて戻らないなんて事はざらだし、駆け出しでなくてもダンジョンでは有り得ないだろう事が平然と起きて、上級の冒険者でさえ場合によってはあっさり生命を落とす。

「例えば、怖いのがモンスターも階層を上がってくるといふ事実です」
「モンスターが？」

「はい。元々、バベルとはモンスターが地上に溢れない様にするべく建てられた謂わば蓋。モンスター達は階段を登る事で、上層へと現れる事もあるのです」

「成程……ね。そうなれば多少の安全マージンを取っていても、パーティ全滅の憂き目にすら遭うか」

「はい、その場合は逃げる事を最優先して下さいね。冒険者は冒険をしてはいけませんから……」

随分と極端なアンチテーゼだが、冒険をしないなら冒険者に価値は無いとさえ思うユートは素直に領けないでいたものの、下手すれば話が長引くと考えて一応は領いておいた。

バベルを出たユートは、もう少し街を見回ってから今日は帰ろうと歩を進めようとする……

「お兄さん、お兄さん」

声を掛けられる。

振り返ると何だか小さな子が、自分の身長よりも大きそうなりユツク式な袋を背負って立っていた。

「冒険者のお兄さん、宜しければサポーターを雇ってみませんか？」

第4話：小人族少女との賭けは間違っているだろうか

「サポーター？」

「はい、サポーターです。ああ……若しかして混乱をなさっておいでですか？ 事態は至って簡単ですよ、貧乏なサポーターが冒険者様のおこぼれに与りたく、自分を売り込んでるだけですので」

とつても「良い笑顔」でニパツと笑う。

フードを被っていたから判り難かったが、声の高さは元よりゆったりめな服の上からでも判るなだらかながらも有る脹らみ、フードから垣間見える顔立ちなどから、この少し小さな人物が少女だと判断が出来た。

身体は小さいまでも脹らみが判る胸、きよぬーではないにしてもそれなりには女の子な体付きである。

クリーム色の服装が某・最終幻想に出てくる白魔道士っぽいが、きつと回復魔法は使えないんだらうなと、意味不明な事をつらつらと考えた。

「それで、如何でしょう？ 冒険者様……サポーターは要りませんか？」

成程、サポーターというのはユートもアドバイザーであるギルド職員のエイナ・チュールから聞いてはいたが、この子の背負っている巨大なりユツクサツク、バツクパツクと呼ぶらしいのだが……これにモンスターから抉り出した魔石や、同じくモンスターが死んだ際に遺すドロップアイテムを詰めて歩くのだろう。

基本的に戦闘に参加はしないで、戦闘が終了をした後に死んだモンスターから魔石を得る。

それ故にか口さがない者は『冒険者に寄生している愚図』みたいに罵るとか、悪い場合だと肉壁にしかねないらしい。

無所属な事もあるが、ちゃんとファミリアに所属をして【神の恩恵】を与えられたサポーターも居るらしく、後者の場合だと戦闘補助なんかも不可能ではなかったりする。

専門職としてサポーターを選ぶというより、得られた【神の恩恵】のステータスが小さ過ぎて戦闘職をやれなかったり、冒険者の時に怪我をしてサポーターに身を窺すしかなかったり、どうあっても卑下されている職業らしい。

単純に自分でバックパックを背負って戦うよりは、専門のサポーターに任せれば戦闘にバックパックという重石が無くなり、やり易くはあるのだろう。

最初は兎も角としても、モンスターを斃していけばいずれ冒険者が背負う程度のバックパックは一杯で、それでも充分に重石の役回りを果たすのだから。

まあ、【神の恩恵】による効果で力も大幅に上がるから背負えなくはないし、サポーターが居ないのなら必須な訳だが……

ユートはニツコリ笑っている小人族パルウムと思われる少女に向き合い

……

「だが断る！」

あつさり断った。

「——へ？」

「僕には必要が無い」

「い、いいいえ！ 冒険をなさるならバックパックを専門的に背負うサポーターは必須です！ それとも、冒険者様が自らバックパックを背負って闘うお心算なのですか？」

「さあね？ それを教える意味は無いだろ。別に君は着いて来ないんだし」

踵を返すユートに慌てたのか、少女はすぐ駆け出し追い越して遮る様に立つ。

「ま、待って下さいって！ 絶対にサポーターの存在は必要になりますから！ ですのて兎に角、一度は雇ってみるべきですよ！」

必死過ぎる説得行為。

「僕には必要が無いと言ったぞ」

「ですから、そう！ 荷物持ちだと思えば！」

「要らん」

飽く迄も必要無いという姿勢を崩さずユートが歩を進めると、尚も必死になりしがみ付いてまで止めようとしてくる。

何故に其処までする程に必死なのか？

実はこの少女がユートをターゲットにしようと考えたは、ユートがヘステイアとヘファイストスの所へと

行った帰りの事だった。

何しろ女神と思しき少女と若い少年が、ヘファイストス・ファミリアのホームから出てきたのだ。

何かしら高い買い物でもしたのかも知れないと観察をしていた少女、見た目に明らかな少年だったからか初心者だと判断をした。

まあ、ダンジョン初心者なのは間違いない。

そのユートが路地裏へと移動し、真新しい片手剣を振り回しているのを見て、少女はそれがヘファイストス・ファミリアで造られた剣だと考える。

ヘファイストス・ファミリアの武具は初心者レベルならまだしも、熟達な鍛冶師が打った場合は物によつては数千万ヴァリスが当たり前なのだから。

絶好のカモがネギを背負っている様にみえたのか、口元をニヤリと吊り上げてしまう程。

気配は消したがバレたらしく逃げたが、ようやくと接触が出来たのに逃がして堪るかと思死になった。

少女は金が欲しいから。

全てを振り切るその為、ただそれだけの為に。

「なら、なら！ 一日だけ様子見という感じで雇ってみて下さい！
それでお役に立てたら今後も雇って頂くという事で！」

辟易するとはこの事か。

実際にユートはサポーターを必要とは思わないから、それは侮辱や蔑みとは異なつて真実からだ。

それならば力の無い彼女をダンジョンに連れ歩くという行為、そんなのは無駄を通り越して危険なだけ。

確かに何度もダンジョンには行つてそうなのだが、ユートは可成り

下に降りる予定だし、着いて来るのは困難を窮める。

ユートはその戦闘スタイルから護りながらというのは無理ではないにしても、難しいのが現状でもあったが故に、せめて戦闘能力が無いと連れていく意味を見出だせない。

「なら、君が勝てばそれも良いとして……敗けたならどうするんだ?」
「え? 敗けたらですか? それは……」

賭けに敗けてお金を払うのは業腹だし、かといってそうやってしま
うと支払えるモノは無い。

勝てば良いという事で連れて行かせるのも難しい、少女は答えに窮
していた。

「ふう、そうだな。それじゃあ一晚を付き合って貰うとするかな?」

「へ、え?」

一晚を付き合う。

幾ら小さく見えてもそれは種族的な特徴であって、決して幼女では
なく普通にユートの世界で云えば女子高生くらいの年齢な少女、当然
ながらその意味する処は彼女にもすぐに解る。

顔を朱に染めて眉根を顰めてしまうのも当たり前、誰とも繋がった
事の無かった少女としては、ユートを睨むのも仕方がない。

一方のユートは遊郭での春姫とのあれやこれやで、取り敢えずは寝
ている間にヘスティアから弄られていた下半身の違和感も無くなっ
たが、それでも生娘だった春姫には可成りの手加減をした為か、つい
つい少女にそんな提案をした。

別に断ってきても構わないが、やれるならラッキー程度のものでし
かない。

少女の腹に一物が有るのは理解していたし、ならばユートが遠慮を
する必要も無いだろう。

後は互いに腹の探り合いとどう出し抜くか?

まあ、其処までの話にはならないだろうけど。

フードの下に覗く顔……其処から鋭い眼光で睨みながらも、少女が
悩んでいるのが判るくらい小さな百面相をしていた。

そして暫くしたら瞑目、更に諦感の籠った栗色の瞳を開いて……

「判りました、その賭けを受けさせて頂きます！」
はつきりとそう答えた。

賭けの内容は至って簡単なもので、少女はユートと共にダンジョンへ潜って、ユートの斃したモンスターから魔石やドロップアイテムを速やかに確保、同時に戦闘の補助も行う事。

それを確りとやれたなら少女の勝ちで、賞金としてその日の稼ぎにプラスして五万ヴァリスの支払いと、更にユートの剣を副賞という事で所望してきた。

少女的には調子に乗り過ぎたかと、場合によっては少しくらいはマケる心算もあったが、ユートは不敵に笑みを浮かべて了承する。

勿論、後でごねたり出来ない様にエイナを通じての契約書を作成、エイナ・チユールは良い顔はしなかったものの、ある程度の事情を聞いて下手に新人冒険者が被害に遭っても……とでも考えたらしく、ほんつとーに仕方無く契約書を作成してくれた。

基本的に冒険者のやる事は自己責任だし、アドバイザーが過度に干渉も出来ないからだ。

賭けをする階層が第一層である事を条件に加えて、エイナから契約書を受け取ったユートは、互いにサインをして契約成立を確認、ダンジョンへと向かう。

また、サインに関してはユートはまだ字を書けないから代筆をエイナに頼む。



ダンジョン、それは天然自然の迷宮に思えるけど、実はそうではない。

何故ならダンジョンに現れるモンスターは、そもそもダンジョンが産み出しているのだから。

このダンジョンを封じる蓋こそ、摩天楼——バベルの造られた目的。

そも、この世界はダンジョンとモンスターによって蹂躪を受け、人

間や亜人が力を合わせて何度も何度も封印を敢行してはきたが、全てに於いて失敗。

精も根も尽き果てつつあった地上人の許、天上より神々が「暇潰し」と宣って降臨をしてきた。

そう、決して変わる事の無い神々は天上での生活に飽々しており、そんな中で地上の生活に興味を持ったのか、或いは地上人達に興味を持ったのかは兎に角としても、神々は地上人を結果的に救う。

尤も、神々の降臨により救われなかった種族も若干在ったのだが

……

ユートの目の前を歩いている小人族……彼らは自分達の騎士団から擬神化した女神を敬っていたが、神々が降臨した中にその女神は存在しなかったのだと云う。

お陰で種族全体が腐っていき、元より種族全体からして力が低い事もあって、小人族の冒険者は比較的になく、少女の様なサポーターになる者も居る。

ユートにはどうでも良い話でしかない。

ダンジョンという薄暗いながら、光源を持っているが故に全く見えない訳ではない場所、その第一層には当然の様に弱いモンスターしか存在しなかった。

とはいえ『ダンジョンでは何が起きるか判らない』とも謂われ、比較的に上の階層でありながら下の階層のモンスターが迷い込む事も偶にはあるし、弱くても徒党を組んで怒濤の如く押し寄せる場合もあるから、決して油断は許されない。

『ゴブリンにコボルトか、この辺りがドラクエ的に云えば、『スライム相当だけどな』って処か？』

現れたのは正に雑魚モンスターの代名詞、小鬼と犬顔だった。

コボルトは銀を腐らせるとされ、腐銀の語源となっている……というのは某・何とか戦記。

実際にドイツで、コバルトの冶金が困難な事からかコボルトが坑夫を困らせるべく魔法を描けたとされ、やはりコボルトが語源。

まあ、ユートの的に蘊蓄なんて関係無い。

目の前に現れて道を阻むならば、ただ敵として斬り裂くのみである。

「リリは下がっている」

「判りました」

冒険者に成り立てで何を偉そうに、なんて思いながらも素直に下がる。

因みに、二人は自己紹介もまだだったと気が付き、契約書のサインで一応は知っていたが、ダンジョンに入る前に改めて名乗った。

少女の名前はリリルカ・アーデ、驚いた事に偽名とかではないらしい。

『何てマジカルな名前』

とか呟いたら……

『誰が白い魔砲少女なんですか!? リリカルではなくリリルカです!』

とか怒鳴られたのは完全なる余談であろう。

閑話休題

斬っ！ 斬っ！

ユートは鋼を鍛えただけの剣——アニールブレードを片手にゴブリンとコボルトを一閃二閃と斬り捨て、死骸を見遣った。

リリがすぐに魔石を取り出すべく動くが……

「——え？」

あつという間に灰に還ってしまった。

「ユ、ユート様？ 若しかして魔石ごと斬ってしまったのですか？」
モンスターは死んでしまっても死骸は残るのだが、例外として魔石を砕いたり抜いたりすれば灰化する。

中にはモンスターの一部が残り、それがドロップアイテムと呼ばれるものの、こうして二匹が灰化したと云う事は、魔石も斬ったと云うに他ならない。

「いや？ 魔石には傷一つ付けていないが……というより、魔石が稼
ぎの一部になるのに斬つてどうする」

「それは……でも、それならどうし——っ！」

「気付いたみたいだね？ そう、魔石やドロップアイテムはちゃんと
手に入れているけど、そのやり方に関しては他の冒険者と大きく異な
る。サポーターが要らないとはこういう意味だ。だから精々、夜の事
を考えておくんだね」

青褪めるリリに何でもない風に言う。

「また出たな」

もつと下ならまだしも、こんな上層階ではそんなに苦勞する程にモ
ンスターも現れないが、それでも次々に再湧出^{リポップ}をしてくるから、冒険
者がモンスターの枯渴を心配する必要は無かった。

斬っ！

現れたゴブリンを斬り、再び灰に還す。

「やっぱり弱いな。魔石も安く叩かれる程度なんだろうし、本格的に
探索するなら下の階層だろうな……」

現れる頻度も問題だ。

枯渴の心配は無いといった処で、再湧出にはそれなりに時間も掛か
る。

「確か、エイナは第七階層からのキラーアントが危険だとか言ってい
たか」

半端に殺さずにいると、特殊なフェロモンを出して仲間を呼ぶとい
う。

ユートからすれば歩き回らなくて済むという程度の認識で、探索を
始めたならすぐにキラーアントを求めようと思っていた。

それから現れたモンスターも基本的に一撃必討で、死んだ瞬間に魔
石を喪ったモンスターは灰化をして、ドロップアイテムも同じく姿を
見せてはいない。

戦闘補助をしようにも、第一層では一度に何匹も現れないし、一撃
だから何も出来ない俣で半日が過ぎ、ダンジョンから出る時間になっ
てしまう。

お金を確実に支払わせる為にギルドを通して契約書を作ったが、完全にリリを縛る鎖となっていた。

ファミリアに知られては拙いし、ギルドを通したからには当然ながらリリも逃げられない。

最早、覚悟を決めるしか他に無かった。

「さて、賭けは僕の勝ち。それで異存は？」

「あ、ありません……」

「なら行こうか？」

「はい」

リリは自分を虐めるから冒険者が嫌いだ。

取り分け、ユートを好きになる事は無いだろうなと思いつつ、重たい足取りで機械的に着いていく。

着いた先にはリリでは泊まり様がない高そうな宿、確かに防音やら何やらを鑑みれば安宿は無い。

部屋も高級そうなベッドにフカフカな布団、オマケに風呂まで部屋に常備されているときた。

身体の汚れは互いに落として、薄暗い部屋に二人きりでベッドに腰掛ける。

リリは両手を取られて、ベッドに押し倒された。

耳を甘噛みされるのが擦ったく、顔を赤く染めながら声を我慢しようとして口を噤んでみたが……

「ひゃん!？」

行き成り舐められて驚いたからか、結局は声を上げてしまった。

その日、リリは強烈なる快楽に酔い痴れる。

リリが所属するファミリアの主神ソーマが作り出す神酒並か、或いはそれ以上の快楽がリリを襲った。

夜中、リリはこっそり起きてユートの荷物に手を付けようとしたが、腰が抜けてしまって動けずにいた上に、ユートに抱き締められて身動きも不可能。

ユートはおかしい。

普通、恩恵を受けたばかりの初心者ならダンジョンで右往左往し、

モンスターの一匹にも苦戦を強いられる筈が、何の苦も無く斬り捨てていったのだ。

まるで第一級冒険者でもあるかの如く、モンスターとの戦闘に慣れていた。

しかも、魔石やドロップアイテムも独自に手に入れているらしく、リリの出番は全く無い。

「ハア、やっぱり冒険者なんて……嫌いです!」

それでも何故か心地好さを感じながら、ユートの腕に包まれて目を閉じる。



「あの、これは?」

「十万ヴァリス」

「いえ、そうではなくて……どうしてこれを?」

「昨夜の代金?」

思わず赤くなった。

「リ、リリは娼婦ではありません!」

「けど、リリだって処女の安売りはしたくないだろ? 恋人だったなら兎も角、賭けに敗けて差し出したとかね、だからリリの処女の代金だよ。寝た行為自体じゃなくて……さ」

「……そんなのって、単なる御為ごかしです」

「かもね。けど、リリのを貰えたのは嬉しかったし、楽しい一夜だったからね」

「判りました、受け取らせて頂きます」

昨夜の行為でも思い出したのか、リリはプイツと顔を逸らしながら十万ヴァリスの入った袋を受け取る。

「じゃ、僕は行くよ」

ポンポンと軽くりリの頭を叩き、ユートは出口へと向かうとその俣出ていく。

リリはユートを呆然と見送りながら考えた。

ヘファイトス・ファミアアの剣——誤解だけど——は手に入らなかったまでも十万ヴァリスはそれなりの稼ぎ、とはいえ処女を散らした代金としてはどうなのかとも思うが、どうせ自分の処女なんてユートに奪われずとも、この先で無体に散らされていた可能性だってあるし、それ以前に生命すら喪いかねないと考えれば妥当かも知れない。「リリは……リリは冒険者なんて嫌いです。取り分け貴方は……大嫌いです……なんですから！」

頭がごちゃごちゃだ。

だからこそ、既に居ないユートが出ていった出口に向けて、リリは潤んだ瞳に真っ赤な顔で力のあらん限りで叫ぶのであった。

・

第5話：榎木家の面々が慌てるのは間違っているだろうか

その日、榎木家は蜂の巣をつついた様な騒ぎが巻き起こっていた。早朝に砂沙美がいつもの如くユートを起こしに行ったのだが、部屋の中は全くのもぬけの殻状態。

珍しく先に起きたのかと捜してみたが見付からないユート、榎木勝仁の住まう神社に電話——今時黒電話——を掛けてみたがやはり居なかったらしい。

榎木勝仁とはユート——榎木優斗——と榎木天地の双子にとって祖父。

榎木アイリとの間に榎木清音を儲けており、清音が婿養子である榎木信幸との間に榎木天女、榎木天地、榎木優斗を生んでいる。

また、榎木勝仁は本来だと榎木・遙照・樹雷という名前であり、樹雷皇族だったが七百年前に樹雷星を襲った魍呼と魍皇鬼を追い、地球で封印した後に永住。

榎木 霞と結婚をして、現在の本家の榎木家と分家の正木家の礎となる。

因みに、霞は遙照の母親たる船穂の妹だった。

船に“船穂”と名付け——マスターキーの名前が船の名前だから本来は天地——たりと、どんだけ母親が大好きなのかという話だ。

普段は老人を装うけど、船穂の力で樹雷の人間としての寿命をキープ、若い姿をしていたりする。

ユートは彼に昔から鍛えられていて、折に触れては剣の稽古をしていた。

然し、榎木勝仁の所にもいないとなると……

「優斗さん、何処に？」

浚われたというのは考え難い、それなら自分が気付いているだろうし、何よりユートが簡単に虜の身とはならないだろう。

嘗ては天地を『天地兄ちゃん』と呼び、ユートの事を『優斗兄ちゃん』と呼んでいた砂沙美ではあるが、流石に中学生相当の年齢になった頃には『——さん』と呼ぶ様になった。

それだけ長い時間を共に過ごしてきた砂沙美であるが故に、天地とユートの事も結構知っている。

「仕方がない……か」

瞑目して右腕を天高く掲げると、砂沙美の背後には十枚の光鷹翼を広げている始祖の樹を内包している——津名魅を喚ぶ。

「つて、何をやっちゃってるの！ 砂沙美ちゃん？」

「あ、天地さん。優斗さんを捜そうかと思つて……」

「いやいや、だからといって船を喚んじや駄目だよ」

「やっぱり駄目かあ」

流石に非常識だと反省、本来は一番の常識人の筈の砂沙美だが時折、とんでもない事を仕出かしていた。

主にユート絡みで。

「まったく、優斗は何処に行つたんだよ。砂沙美ちゃんが暴発する前に見付けないと……」

ユートも原典ではどうか知らない訳だが、砂沙美にしても阿重霞にしても実はこの世界では学校に通い、卒業までしていたりする。

設定的には砂沙美が当時は小学生、阿重霞が高校生——廻呼には笑われた——であるという事で、阿重霞はユートや天地とも一緒に高校を卒業した後、大学生にもなっている。

天地は当初は復学に首を傾げはしたが、やはり一応は卒業くらいした方が良いというユートの説得に応じた形だった。

流石に畑の事もあるし、大学には進学をしてはいないが、今では良い想い出になったと復学したのを慶びを以て語れる程。

この世界で阿重霞が惚れた相手が天地ではない為、天地が進学しないのを残念がつてはいたが、地球人の一員として好きな相手とのキャンパスライフを楽しんでいたし、砂沙美も一緒に学校でこそなかったけど、学生生活を楽しんでいた。

阿重霞は高校卒業後に、砂沙美は高校入学時に各々が正式にユート

と交際を望んで、樹雷が地球を巻き込み騒然となったのは最早、懐かしい話であろう。

特に親バカな樹雷皇である阿主沙が暴れに暴れて、決闘騒ぎまで起こした。

樹雷第一皇女と第二皇女の話だけに、二人の皇妃——船穂と美沙樹も抑えに回れなかったのが痛い。

とはいえ、船穂も個人的に天地とユートとの接触を持って——漫画版——認めてはいた。

閑話休題

天地は取り敢えず、白眉鷺羽の所へと向かう。

「鷺羽ちゃん！」

「おや、天地殿。優斗殿の行方なら私にも判らないんだけどね？」

「ああ、やっぱりか」

「ま、砂沙美ちゃんできえ気付けなかった事だしね」

本来ならば三命の頂神の一柱らしいが、その力の源を喪った鷺羽には高位次元生命体としての能力は使えないし、発明品にはその手の物が数多く存在してはいるものの、全くの無反応では手の打ちようもない。

「兎に角、砂沙美ちゃんに暴発でもされた日にやあ、私も生きた心地がしないからねえ、優斗殿の寝室から先ずは捜してみるさ」

「あの、優斗はこの世界の何処かには居るのかな？」

「……恐らくは居ないね。居たら砂沙美ちゃんが既に見付けているさ」

「優斗本人がこの世界から出て行った可能性は？」

「そりゃ、幾ら何でも脈絡が無さ過ぎさね。昨日までそんな様子が全く無いし、確か昨夜は阿重霞殿を幸せそうに愛でてたしね」

「ああ……まあ、確かに。阿重霞さんに膝枕をされていたり、その状態で髪の毛を手梳きしてイチヤイチヤしていたっけか」

阿主沙に決闘で勝利し、取り敢えずレベルではあるものの、阿重霞

と砂沙美を強制送還を回避した後は、良妻な砂沙美とペアで囲われていた。

意味も無く出て行ってしまう理由が見当たらず、そもそもユートは現状での暮らしを楽しんでいた筈。

確かに自発的に出て行つた可能性は無い。

「まったく、事故ならば仕方がないにしてもだよ、若しもどつかの神だか何だかの仕業なら、面倒な事をしてくれたもんだよ」

研究室を出ながら言う。

天地も主が不在の研究室に居てもしようがないし、鷺羽と一緒に外へと出た。

「天地殿は砂沙美ちゃんを落ち着かせておくれよ」

「ん、判つたよ」

こればかりは阿重霞と共に頑張らねば、下手をすると地球処か太陽系がアボンしそうで怖い。

まあ、流石に其処まではしないだろうけど……

だけど砂沙美の暴発だけは何とか抑えなくてはならないと、天地は一応は許嫁であり砂沙美とも仲の良いノイケに相談をするべく、急ぎ彼女の居そうな場所へと移動をした。

胃が痛くなるのを感じる天地は、早く事態が收拾されるのを願うばかりだ。

せめて居場所が判れば、砂沙美ならば其処へ行ける可能性もあるし。

尚、今回の事態が本当の意味で動いたのは別世界に居たユートの義妹と魔導書の二名が、此方の世界へと戻って来た事で何とか收拾に向かう事となる。



一週間は長いようで短い時間だが、それでも場合によれば長く感じるものだ。

ユートの場合、新たな世界を楽しんでいたからか短く感じてい

た。

先ず、専属契約を交わした春姫の許へは足繁く通っており、流石に慣れたのか気絶はされなくなる。

四日目くらいから。

本人も実は初めての相手であり、優しくされる事も手伝ってそれに懐き、時折に遠い目をするのが気にはなるが、夜は充分に過ごしていた事になる。

尚、ユートは知らないが春姫もステイタスがあり、スキルの効果が顕れていたりするが、それを知るのは少し先の話であった。

問題は初日に朝帰りしてしまった事。

外食の約束をしていたのにすっぱかしたのだから、ヘステイアはプンプンだ。

ちよつとしたプレゼントを渡したり、その日こそは外食で豪華な食事を食べさせたりして、何とか主神様の御機嫌を取った。

昼間はあちこちを巡り、ヘステイアを連れて行つて気に入った「豊穡の女主人」という店で昼食を摂ったりと成程、充実感は確かにあるらしい。

また、幾つかの商業系のファミリアで買い物をしたりと、ダンジョン探索にも必要なアイテムを揃えたりするのにも余念はない。

【青の薬舗】

ミアハ・ファミリアみたいな零細では、良いモノは作っているみたいだけど、どうにも客足が遠かった。

逆に同系のディアンケヒト・ファミリアは、可成りの繁盛つ振りである。

ヘファイストス・ファミリアと同系のゴブニュ・ファミリアは、規模こそ少し小さかったものの繁盛はしている様子。

余所のファミリア巡りも愉しいものである。

リリルカ・アーデと接触は出来なかった、恐らくは接触そのものを避けられているのであろう。

そうして遂に一週間の時が経ち、再びヘファイストス・ファミリアのホームへ向かうユート。

ヘステイアはアルバイトでジャガ丸君を売っているとか、やはり悲哀を感じさせずにはいられないけど、本人はそれなりに楽しんでやっているみたいだ。

ヘファイストスのホームでは、ヘファイストス本人とヴェルフ・クロッゾ——二人が待っていた。

マネキンみたいな物ではなく、木で作られた簡易的な物に掛けられた鎧。

胸と腰と両腕と両脚のみのパーツ、典型的な軽装が黒々と煌めいており、唯一違うのが小さめな円形盾——バックラーだ。

素材が違うから色も違う訳だろうが、性能的に視れば及第点であろうか？

今後に期待といった感じの出来だった。

「よく来たわね。注文通りに造っておいたわ」

「確かに」

「調整をしておきたいから鎧を着てくれる？ それとヴェルフのバックラーの方はどうかしら？」

「バックラーは及第点には達してるし、今回はこいつを使うとするさ。着替える部屋は？」

「そっちの小屋を使つて」

「了解」

ユートが鎧と盾を持って着替えに行つたすぐ後に、ヘファイストスは穏やかな笑みでヴェルフに言う。

「及第点……厳しい評価点になるけど、使つてくれるってさ。良かったわね？ ヴェルフ」

「は、はいー」

駆け出しに等しい事を除いても売れない彼の防具、故に使われる事には大きな意味がある。

「あ、名前は言っちゃ駄目だからね？」

「な、何故ですか!？」

売れない理由は幾つか有るみたいだが、その一つが壊滅的な命名センスであると云う。

暫くして出てきたユートを見て……

「へえ？」

ヘファイストスは感心した表情となる。

初心者、ビギナー、成り立てな冒険者に有りがちな鎧に着られた感がなくて、確りと着熟していたから。

それに鎧に合わせたかの如く黒い戦装束、背中に背負う片手剣も一緒に見れば一端の冒険者そのものだ。

「微調整は不要なくらいにバッチリだったよ。バックラーも上手くマツチしているから問題は無いね」

「そう、良かったわ」

サイズも計っていたし、微調整も簡単にであるなら出来るとはいえ、作り手が調整をした方が良い場合もやはりあるが、流石は天界で【神匠】と謳われていただけあり、造られた鎧にはそんなのが不要だった。

「それで？ ダンジョンにはいつから行くの？」

「明日。暫くは戻らない」

「本気？」

「荒事は慣れてるし、魔物との戦いも同じくだよ」

「そう……」

やはり神友の眷属^{ファミリア}だし、少しばかり気にはなつたのだ。

まあ、逃げ帰ったとはいえ十層まで足を運んでいたヴェルフを、【神の恩恵】無しで降せた程ではある、今なら恩恵も得ているからそれなりには行ける筈。

ヘファイストスはそう考える事にした。

ユートはヘファイストスのホームから出て、まっすぐに春姫に会うべく遊郭まで行く。

流石にダンジョンに向かう関係上、朝帰りは出来ないから泊まりはしないが、暫くは春姫の肌を味わえないから確りと堪能した。

そして翌朝、心配そうにするヘステイアに見送られながら摩天楼^{パベル}施設へと赴く。

バベルとは即ち、モンスターを生み出すダンジョンの蓋であり、つ

まり其処には入口が在るという事。

リリルカ・アーデと賭けをした際、一度だけ訪れてダンジョンに入っているとはいえ、本格的な探索となると初めてである。

鎧はヘファイストス自らが実験的に黒鍛鋼を打ち鍛えて造った無銘、円形盾はヴェルフ・クロッゾが打った……銘は不明。

ヘファイストスから聞かない方が良いと言われた。

戦装束は自前で「コート・オブ・ミッドナイト」、SAOに於いてイルフアング・ザ・コボルド・ロードのLAボーナスだった防具を再現した物。

剣は「アニールブレード」であり、やはりSAOの序盤で手に入る中でも強力な逸品を再現した物だ。

「さて、いざ往かんつと」

螺旋階段を降りていけば着いた先は石造りな迷宮、即ちダンジョンであつた。

「早速か」

現れたのはゴブリン。

といつても、リリルカ・アーデとの賭けの時に散々つぱら斬った相手。

斬っ！

何の問題も無い。

すぐに灰となって崩れていくゴブリンには構わず、ユートは第二層に降りる為の階段を捜して走った。

途中、モンスターが何匹か立ち塞がってはきたが、正しく鎧袖一触の勢いで斬り捨てていく。

相変わらず灰になって、後には魔石もドロップアイテムも残さない。

その秘密はユートが嘗て創った魔法——「ステータス・ウィンドウ」にある。

簡単に言えばVRMMO—RPGなんかに使われているメニュー画面の事で、現状でのステータスなどの確認や、お金やアイテムを仕舞うストレージとしての活用が主となる。

現在は別のステータスを表示させ、この世界で得た【神の恩恵】^{ファルナ}のステータスが前面に出て、ヴァリスを格納していた。

だから、無理に神聖文字^{ヒエログリフ}や共通文字^{コイネー}を覚えずとも、この画面から確認が可能となっている。

モンスターを殺した端から魔石を格納、それによりモンスターは灰化するし、ドロップアイテムが残ればそれも格納していた。

リルルカ・アーデを――延いてはサポーターを必要としない理由としては充分だと云えよう。

フルスペックであれば、アイテムもお金も無制限に仕舞えるし、食糧なんかも仕舞っておけるから簡単に遠征に出られるのだから。

ユートは襲い来るモンスターだけを斬り、さっさと次の階層へ向かうという様なサイクルを繰り返す。

そして第七階層。

此処には冒険者が厄介に感じるキラアアントが居ると聞いて、ちよつと試しに戦ってみようと考えた。

僅かに十歩も歩けばワラワラと現れる大きな蟻……キラアアントの群れ。

取り敢えずは二〜三匹を中途半端に動けなくして、残りは全て殲滅し尽くす。

傷付けられて死に掛けたキラアアントがダンジョン中に流したフェロモンに、他のキラアアントが惹き寄せられるかの如く集まる。

黙って待っていたなら、それこそ百匹や二百匹など簡単に越えていた。

ユートはそんなキラアアントを次々に殺していき、遂には第七階層からキラアアントが一時的に尽きたらしく現れなくなる。

「キラアアントの魔石……三百八十三個か。数ばかり居ても一撃なら余り意味が無かったかな？」

フェロモン散布用だったキラアアント三匹にトドメを刺し、三百八十六個に増えた魔石を確認してから、ユートは第八階層の階段を捜すべく歩き始めた。

途中、ブルー・パピリオなるモンスターに会面して斃したり、色々

とあったりはしたが問題は無い。

暫く歩けば階段を見付けたから第八階層へと降り、次はちよつとした実験へと移る事にする。

「モンスターが大した事のない今だから出来る実験、魔法とスキル関連を試しておこうかな？」

魔法——【精霊契約】はユートが四源の精霊王達と契約している事と無関係ではあるまいが、精霊王との契約した以外の精霊と親和性が高くなったらしい。

「受けよ無慈悲なる白銀の抱擁……」

氷結系魔法。

「アブソリユート！」

放たれた冷気によって、モンスターは凍結された。

バリィン！

すぐに粉々に碎く事で、モンスターは灰化して魔石がアイテムストレージに。

「成程……ね」

契約を交わしていないが故に、氷系の魔法の威力は並でしかなかった筈だが、確かに威力が上がっているらしく、しかも消費をした所謂MPは少ない。

「次はこいつだ！」

再び詠唱をする。

「紅蓮の炎に眠りし暗黒の竜よ、その咆哮を以て我が敵を焼き尽くせ……魔竜烈火咆哮！」
カイザ・フレア

放たれるは殲滅する紅の一閃——本来であればこの系列の魔法は【神魔因子保有艦シャブラ・ニグドウ】が世界と繋がっていないと使えないが、ユートは確かに今さっき使ったのだ。

「これが経験値から発掘した魔法か。大したもんだね」
エクセラア
スキルの【情交飛躍】はダンジョンでというより、一人では試しようがない。

とはいえ、春姫でこっそり試してはいるのだけど、此方はステイタスを隠されていたから見れなかった。

リリが見付かれれば言い包めて、やらせて貰ってからステイタスを見せて貰うという手があるが、接触自体をどうやら向こうから断つてきたみたいで、結局の処は判らず仕舞いである。

【エクシード・チャージ聖剣附与】を試そうと考え、簡単な処で使うのはハイスクールD×D世界のエクスカリバー。

「デストラクション破壊！」

附与したのはエクスカリバー・デストラクション破壊の聖剣。

「はっ！」

ズガアアンツ！

何とモンスターが地面ごと粉碎されてしまう。

「あちゃー」

確かにアレはゼノヴィアが使った際、地面にクレーターを穿つていたからこの結果は寧ろ必然か。

「魔石も粉々になったか。仕方がないな」

多少、勿体無いがやつちまったものは取り返し様がないのだし、第八階層ならそんな失点でもあるまい。

ユートはそう考えて次の第九階層を目指す。

第6話：初めてのダンジョン探索は間違っているだろうか

魔法やスキルの検証も、出来ないもの以外は終わらせたし、上層のモンスターイジメも飽きてきた。

それに魔石の値段だつて上層では二束三文らしい、そろそろ中層と呼ばれるであろう階層へ——十二層より下へと向かおうと新しい階段を降りていくユート。

「アルマジロ？」

ハード・アーマードと呼ばれる鉄鼠的モンスター、見た目にはアルマジロと似ている。

アニールブレードを揮つて斬り付けると……

ガキイツ！

「——何？」

その硬い表皮で受け止めてしまった。

「成程、硬さがウリか？ 確かに振り下ろした程度では斬れないかならー！」

アニールブレードを背中の鞘に仕舞い、手刀を作つて闘氣を籠めた。

「村正拔刃ツツ！」
エクスカリバー

小宇宙を籠めたオリジナル程ではないが、ハード・アーマードくらいならアツサリと両断してしまう。

「ふむ、此方も問題は無さそうだね」

クイクイツと手首を二度スナップして呟いた。

威力に関しては可成りの弱体化は否めないのだが、小宇宙だろうと闘氣であろうと纏えば使える。

これなら他の技にしても使えなくはないだろうし、いざとなれば切札にもなってくれそうだ。

「ドラゴン？」

小型のドラゴンである、インフアント・ドラゴン——は迷宮の孤王モンスターレックスが出ない上層部で最強を誇り、云つてみればこいつが上層の階層主とも考えて良く、小型とはいえ体長は四Mを越す。

然しながらドラゴン……龍喰者の力を持ち合わせるユートは龍という属性に対して、絶対的なアドバンテージを持っていた。

「恐いか？ ドラゴンである以上は異世界の存在だとはいえ、貴様はこの脅威に抗えはしないだろう！」

『ギエエエエッ！』

あつさりと首を落とされてしまい、魔石を抜き取られた瞬間に灰化して鱗の付いた皮膜と、牙や爪をドロップアイテムとして残す。

第一三層まで降りて歩いていると、一角ウサギ的なアルミラージが数匹、手には石斧トマホークを持って襲ってくる。

「ニードルラビットの上位個体か？」

ドラクエで云えば一角ウサギとアルミラージ。

更には炎を吐き出してくるヘルハウンド。

更にはダンジョンワームと呼ばれ、ダンジョン内の地中を往く蚯蚓型。

普通の冒険者なら油断も出来ない息を吐かせぬ程のモンスター、モンスター、モンスターの軍勢。

中層まで降りると上層など及びも付かないとは聞いていたが、成程これは確かに恐ろしいまでに湧出してきてくれる事を鑑みれば、中層ともなれば凄まじいのだろう。

普通のレベル2パーティなら下手をすれば全滅必至な中層の湧出に期待して、ユートは愉しそうな表情をしながら武器を揮う。

ユートは強い性欲を持っているが、それには及ばぬものの戦闘中毒や戦闘狂と呼ばれない程度に、戦闘欲求も持っている。

血に酔えば性欲が弥増す事もあり、出来る限り抑えてはいるのだが……

アルミラージが石斧を揮って飛び掛かれば、ユートは拙い武器の振り回しなど意にも介さず躲して首を刎ねてやり、ヘルハウンドが吐き出した炎は効かないから目隠し代わりに喰らってやると、自分を見

失ってしまったヘルハウンドの脳髓を氷の矢で穿つてやった。フリーズアロー

ダンジョンワームなど、出てくる前にアバン流刀殺法の大地斬で床ごと叩き斬ってやる。

マザードラゴンに喚ばれてハドラーといざ戦わん、そんな状況の勇者アバンと大魔道士マトリフと武神のブロキーナ翁の許へと降り立ったユートは、その戦いに加わって「凍れる時の秘法」を使って凍結をされてしまうアバンとハドラーを見守り、その後の一年間をロカとレイラ夫妻の所で、魔の森の中心に存在しているネイル村で世話になり、ハドラーとの最終決戦には連れていけないと言われ、代わりに武具を進呈した。

魔王戦以後、ネイル村に住み着いたユートはマアムと共にアバンと再開して、アバン流殺法を習う。

これがユートがアバン流刀殺法を使える理由だ。

ファンタジーではよく見る様なモンスターを相手にしつつ、ユートは遂に最初の中継地点の第一八階層がそろそろで一六階層にまで降りて来ていた。

『グモオオオッ!』

「ミノタウロスか!」

石造りのハンドアックスを振り翳すは、筋肉質にして牛面な巨体を持つ魔物。

ミノタウロスだった。

それが数にして十ばかり現れて襲い来る。

武器もハンドアックスだけでなく、中には石造りの大剣やらグレートアックスを持つ個体も存在した。

アルミラージも持っていたが……

「ネイチャーウエポン」

迷宮にはモンスターの為の武器庫や食糧庫が在り、必要ならモンスターも武器を手取るし、食事だつてしているという訳だ。

「中々に面白いね……」

ニヤリと口角を吊り上げると、ユートは片手直剣のアニールブレイドを手には、ミノタウロスへと突っ込んで行った。

ハンドアックス持ちが、そんなユートに反応をして攻撃してきたが、あっさりと躲して懷に飛び込んで、その素っ首を叩き落とす。

首を喪つては生きていられない、灰化して崩れ去ったミノタウロスA。

アイテムストレージにはそのミノタウロスの魔石、そしてドロップアイテムの【ミノタウロスの角】が納められた。

大剣持ちが仇討ちでもなかろうが、両手で振り上げて襲ってきたものの――

「ホリゾンタル・スクウェア……だったかな？」

平行に四角形を描く剣の軌跡がミノタウロスを斬り裂いて、やはりこの四撃で終わったらしく灰化した。

ソードスキルをユートはSAOで使えなかったが、仲間が使っているのはよく目にしていたから完全なる見様見真似。

アニールブレードを地面に刺して掌を突き出す。

「ルフート気よこの^{からひつ}屍櫃に満ちよ。屍櫃は毒酒の壺の如くなれ、毒酒の壺は^{カラス}腑分け鳥の卵程に、また冥狼^{ガラム}の目玉程になりて炎宿さん」

ユートが詠唱をすると、目の前に顕れる魔法陣——というカルー

ン。
生み出されるのは複数の炎の塊……

「喰らえ、^{エルド・クヴァスト}火 箭！」

幾つもの炎弾がミノタウロスを襲い、それに巻き込まれた数体が焼かれた。

本来は対人用といっても良いくらいな魔法だけど、ユートは四大元素に関わる魔法ならば、威力が大幅に上がるが故にかミノタウロスみたいなタフネスであっても割とイチコロである。

一撃とはいかないけど。

「魔法の基本ルールまでは侵せないから、空が見えないと使えない^{ソールスラッグ}雷 撃は無理だけど、コイツはやっぱり使い勝手が良いな。作中だと可成りの回数使われていたし」

元々が使い勝手が良いのに加えて、四大元素だから威力が増大だからだろう、原典以上に使える感じだ。

「核熱雷弾も無理か？　まあ、あれは放射能汚染があるからやめた方が無難だね」

核熱系は毒による汚染があると、原典ではつきり明言している。

毒——とは放射能の事なのだろう、きっと。

探索を進めると行き成り遭遇エンカウントしなくなり、
 だけどモンスターモンスターの殺
 気みたいなのは周囲から変わらず感じる。

「嘆きの大壁」……か。ただ一種類のモンスターさか生まない。そのモンスターとは即ち！」

総身が七Mモデルはあろうかと云う大巨人。

「ドライアス！」

太陽の勇者が欲しくなる名前を叫ぶユートは、はて？ と首を傾げる。

「いや、違ったか？ 確か——そうだ！ 『叩いて碎け』だったな」

知り合いの少女がへちや顔で——『あんなのと一緒にしないで！』と叫んだ気もするが、ユートは全く取り合わず第一七階層に顕れる最初の階層主……

迷宮の孤王——ゴライアスに立ち向かうべく氣を充実させていく。

ギョロリと人の頭程にもある赤い眼球がユートを睨み付け、まるで威嚇でもするかのように……

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオツツ！』

けたたましい咆哮を迷宮に響かせた。

それを契機に戦闘が開始される。

「ふふ、SAOのイルファング・ザ・コボルドロードを思い出すね」
最初の迷宮の孤王と最初のボス、位置的には似ている境遇なモンスター。

だけどあの時とは違った部分がユートにはある。

「SAOではシステムへと規定された能力しか使えなかったが、今の僕は小宇宙こそ使えないけど他の能力は使える！ さあ、顕れる——ナハト、アージエントリツター！」

金色のコインを投げて、大気中の魔力から創成されるのは、此方風

に云うならば三Mメドルの機体。

頑丈そうな蒼い駆体を持つナハトと、白い駆体を持つアージエントリッター。

アージエントは本来だと「ヴァイスリッター・アージエント」が正式名だが、長いのでアージエントリッターと呼んでいた。

ナハトも「アルトアイゼン・ナハト」らしい。

夜と宵の名を与えられた二機が、ユートの命令に従って魔力フレアを噴き出しながらブースターを使い、敵であるゴライアスへと向かって駆け出す。

スパロボ系統のゴーレムクリエイト創成技術は、最初の転生時のハルケギニア時代から持っていた。

当然、あの頃は原始的とも云える拙い技術でしかなかった訳で、現在は外面は変わらないものの中身は別物レベルになっている。

投げたコインが謂わば、ゴーレムの核みたいな物であり、その内部には小さな外観とは思えないくらいの膨大な術式が織り込まれ、半自立型ゴーレムを生み出す召喚器となっていた。

丈夫に出来ているから、簡単には壊れない筈。

この召喚器もマチルダ・オブ・サウスゴータに嘗て渡した物より小さく高性能となっており、使い勝手や使用する精神力も低くなっている事から、これならば結構使える人間も増えているだろう。

まあ、あれから何百年も経つから性能向上はしていて当たり前、寧ろ変わらなければ単なる怠慢だ。

ナハトが牽制にと左腕に装備された五連チェーンガンを連発をして、アージエントリッターが空中からのパルチザンランチャーBで攻撃する。

どちらも実弾攻撃な為、ゴライアスの皮膚へと食い込む弾丸。

五連チェーンガンは飽く迄も牽制用で威力も低かったが、アージエントリッターのパルチザンランチャーBモードはそこそこに強力でゴライアスも堪らず悲鳴を上げている。

然し、パルチザンランチャーBモードもある意味で罠に過ぎず、本命はナハトが頭の角で切り裂くダレイズ・ホーンを急接近して喰らわ

せ、更には右腕に装備したりボルピング・ブレイカーをジャンプ一番、腹に照準してBANG! BANG! BANG! BANG! BANG!

BANG! BANG! と撃ち込む。
弾丸による衝撃がバンカーに伝わり、比較的柔らかい腹をぶち抜いて追撃——レイヤード・クレイモアを肩から連弾してぶち込んでやると、直ぐ様に後ろへとバックステップで退いて、アージエントリックターによるパルチザンランチャーXモードが撃ち込まれた。

ゴライアスはこの連撃には堪らなかったか、轟音を迷宮内に響かせながら後ろに倒れ込んでしまう。

その間にユートが何をしていたかと云えば……

大地の底に眠り在る凍える魂持ちたる霸王
汝の蒼き力以て我等の行く手を遮るものに
我と汝が力以て滅びと報いを与えんことを

ダイナスト・プラス
「霸王雷撃陣!」

呪文を詠唱していた。

ゴライアスを中心に据えて五芒星を描いて、蒼白い雷撃を降り注がせる。

スレイヤーズ系に於ける霸王グラウ・シェラーの力を借りた呪文、強力な雷撃はゴライアスをして威力が大きく、生命力の高さから死んでこそいないが立ち上がる事が出来ずにいた。

すべての力の源よ

輝き燃える紅き炎よ

盟約の言葉によりて我が手に集いて力となれ

「喰らえよ、ブラスト・ボム 暴爆呪!」

炎でありながら燦然たる煌めきを持つ光球、幾つものそれが一気にゴライアスへとぶちかまされ、皮膚を肉を焼いていく。

『ゴガアアアアッ!』

ピクピクと痙攣してはいても灰化しない。

「へえ、デカイだけあってタフネスな事だ」

先制攻撃からゴーレムと連携しての連続攻撃。

ゴライアスに何もさせず一方的に潰しに掛かって、それでも一応は生きている事に感嘆をする。

流石のユートも完全なるソロでは、ゴライアスとの戦闘で攻撃を受けただろうと考え、ゴーレム創成により手札を増やした訳だが、これだけ生命力が高いなら時間も掛かっただろう。

「だけど終わりだ」

ゴライアスの体内で最も高い魔力を秘めた位置——それを
ウイズダム・アイ
【叡智の瞳】で見極め、その部位を抉り取った。

途端にゴライアスは灰と化し、序でにドロップアイテムも残して消える。

「よし、還れ！」

その命令に従って瞬時に魔素へと還り、核のコインがユートの手に納まって、それをアイテムストレージに戻し、ユートは中継地でありモンスターを生まない第一八階層に足を踏み入れるのだった。



第一八階層、ダンジョンに幾つか存在しているだろうモンスター生まない階層の一つで、情報収集の結果から街すら存在していると聞き驚いた記憶がある。

リヴィラの街。

【ようこそ同業者】たる一文が示す通り、この街は冒険者が滞在して興じた。

数字が書かれているが、それは何代目の街かを示しているらしい。何しろダンジョンの中、何が起きるか判らないとすら云われる此処で、モンスターが生まれないのは確かかも知れないが、他の階層から上がって来る事は俚あると云う。

顔役がレベル3であり、他は基本的にレベル2だからだろう、モン

スター共が大挙して押し寄せてきたら逃げの一手で、収まったら復興をしているのだとか。

街だから店屋も在るし、宿屋も営業中である。

とはいえ……

「うわ、高いな」

「だったら余所に行きな」

呟いただけでこれだ。

単なるポーションが一つ三千ヴアリスとか、どう考えてみてもぼったくりでしかないが、店を経営しているオッサンはニヤニヤしながら平然と地上で五百ヴアリス程度のアイテムを六倍の値段で売っていた。

明らかに客へ喧嘩を売る値段設定だが、此処は即ちダンジョンの第一八階層。

そもそも地上程に物が溢れていないし、どれだけの値段設定でも『欲しければ金を出せ』と強気で往く。

冒険者も無傷で来れるとは限らないし、そうなれば回復アイテムは必須。

武器の交換や修理だって必要になってくるだろう。

この街では、極々普通に『安く買い叩き高く売る』を地でいつていた。

当然、ギルドとは無関係で勝手に作られた換金所も在ったりするが、可成りの格安でしか買わない。

まあ、アイテムストレージを持っているユートにはどうでも良くて、周囲では喧喧囂囂とやり取りしているのを、いつそ冷めた目で観察をしている。

宿屋も必要とはしない。

特殊なテントが在るし、寝心地もこの街のベッドよりずっと良いからだ。

アーティファクト「天狗の隠れ蓑」に近い代物で、見た目よりずっと広い上に充分な生活空間が維持されているのだから。

ぶっちゃけ、ヘスティアのホームよりも良い生活が出来るテントで

ある。

ユートは水場を捜すと、其処にテントを展開した。

取り敢えず今日は寝て、明日にでもまた街へと繰り出せば良いと考えており、明後日には第一九階層へと降りる心算だ。

寝る前に湖で身体を清めると、食事を摂ってさつさとベッドに入り眠る。

地上とは違うサイクルで時間を紡ぐから判り難いのだが、時計で確認した限り地上ではもう夜中。

一種の結界であるテントに入れば、時間も天気も気温も関係無く優雅な暮らしさえ出来る。

ユートは取り敢えず此方での朝になるまで寝た。

目を覚ましたら再び湖で眠気覚ましの様に身体を清めると、朝食を摂って再び街に繰り出す事にする。

試しにダガーを手にし、店の店員らしき冒険者へと見せてみた。

「オッサン、幾らだ？」

「何だ？ この玩具みてーなのは……一〇ヴァリスも出せねーよ」

「じゃ、いいや。この魔剣を一〇ヴァリス以下とか、目が腐ってんな」

「は？ 魔剣だと？ 莫迦言っちゃいけねー。魔剣ってのはもっと……」

「アンタの常識は聞いていない。やっぱり地上で売るのが吉だな」

指でシャーペンローリングも斯くやの短剣ローリングをしつつ、アホな値段を付けた店のオッサンにもう用は無いとばかりに立ち去っていく。

確かにユートが持っているダガーは、武器としてはドラクエ的にⅢの【鎖鎌】と変わらない攻撃力だが、柄に付けた魔宝石によってメラミくらいの火球を出せるフレイムダガーだ。

それが一〇ヴァリス以下とは、見る目が無いと考えるしかなかった。

実験的に造った代物で、使う機会も無いから売ってみてもよかったが、流石にあの値段は有り得ない。

この街の価値は余り無いと判断したユートは、予定を繰り上げて今

日にも下へ降りようと決意した。

・

第7話：ダンジョンでロキ・ファミリアと出逢うのは間違っているだろうか

降りた先ではやはりというか、モンスターで一杯なフロアがある。しかもどうやら今回は、普通の冒険者パーティなら最悪と言っても過言ではないだろうと、ユートは先を見据えて考えていた。

所謂、モンスターハウスと呼ばれるダンジョン型のRPGで見られるトラップであり、DQ外伝トルネコの冒険などで採用されていたものでもある。

尤も、このオラリオではまた別の呼び方であり――【モンスター・パーティー怪物の宴】と云う。

種々様々なモンスターがフロアの全体に広がって、冒険者パーティを取り囲むであろう状況、通常であれば鬨り殺されるか生きた俣で喰われるかのいずれか。

まあ、それも取り囲んでいる相手がユートでさえなければ……の話。

「おお、金貨の群れだな」

ユートからすればこれは金の生る木くらいの認識に過ぎず、アニールブレードを片手にモンスターばかりのフロアへと突っ込んだ。

一時間も過ぎたろうか？ 死ねば入れ替わり立ち替わりモンスターが次々と入ってきたモンスターハウス現象も、湧出の限界を迎えたのか沈静化した。

基本的に一撃必討だから時間が掛からない。

アイテムストレージの方を確認してみれば、魔石の数もドロップアイテムの数もべらぼうなものであり、きつとこれだけでもホームに残るハスティアが見た事もない金額であろう。

「さて、次に行くか」

何でもない様な口調で、階段を降りるユート。

それから割と何日も掛けて中層から下層まで降り、既に深層とも呼

ばれそうな位置まで降りた。

「それにしても……流石は天界でも【神匠】と謳われた鍛冶神。アルカナム 神の力
は無しで造ったとはいえ、使ったのが黒鍛聖衣と同じの黒鍛鋼だった
とはいえ、これだけ出来の良い防具に仕立て上げるとは。【鍛冶】の発
展アビリティを持たない下級鍛冶師らしいヴェルフの造ったバック
ラーも悪くなかったな」

とはいえ、普通の金属で造ったバックラーだからか既に壊れてし
まった、確かゴライアスの次の階層主との戦闘中。

軽鎧は元々が暗黒聖衣を黒鍛聖衣に造り直す為に、新しく造った
ブルーメタル 青鍛鋼を基にした神秘金属——ブラックメタル 黒鍛鋼を使った逸品だ。

ミスリル 白流銀よりは余程に丈夫だし、硬くて軽くて粘性も高い防具に最適
な金属である。

勿論、武器にも使えた。

これにパプニカ製の特殊な布——魔法の闘衣などに用いられた——
と同じ造りの布で織つてある「コート・オブ・ミッドナイト」を併
せて、防御力はそれこそ大魔王にも挑める装備。

武器はアニールブレードと呼んでいるが、その実態はドラクエの
【鋼鉄の剣】を更に丈夫に鍛え上げた【鋼鉄の剣+】といった性能でし
かない。

単純に形をアニールブレードにただけであつて、何かしら特別な
意味合いは持っていない。

この深層まで来るともう力不足でしかないからか、刃毀れをして切
れ味も随分と落ちている。

「また階層主が出るだろうからな、新しく武器を装備し直しておくか
？」

攻撃力はIV準拠となり、四〇の【鋼鉄の剣】より上で五五となつて
いる。

ユートはステータス・ウィンドウを開いて、手にしたアニールブ
レードを仕舞つてしまうと、新しい剣をタップして取り出す。

見た目にはキリトに売った第五〇層ボスのLAで、名前も【エリュ
シデータ】となつていた。

攻撃力は【鋼鉄の剣】より遥かに高い一〇〇。
単純な威力だけならば、【奇跡の剣】並であり使った金属は黒鍛鋼。
色に関しては全く弄っていないが故に、本物？ の【エリュシデー
タ】と同様に真っ黒な剣。



第四九階層。

一般に大荒野と呼ばれる大地、ダンジョンの大広間的な場所。
次々と沸き出るモンスターの一群、ユートはそれをエリュシデー
タを以て斬り裂いていく。

数が余りにも多すぎて、ソロでの対処は難しい。

元々のユートの能力が、この世界で云うレベル5だったのが、ヘス
ティアから【神の恩恵^{ファールナ}】を受けてレベル6相当にまで上がっている。
だが、此処までとなればソロではレベル6であっても手に余った。
とはいえ、ユートが持つのは剣だけではない。

「ブー・レイ・ブー・レイ・ン・デー・ド。血の盟約に従いアバドンの
地より来たれ、ゲヘナの火よ爆炎となり全てを焼き付くせ！」

暗黒魔法の一種だけど、【精霊契約】の魔法により元が闇に強い適正
を持ち、更に強くなったが故にこそ使える魔法。

地獄の最下層、アバドンとゲヘナより喚び出したとされる二万度の
超高熱を、自らの肉体に纏い体当たりをする荒業。

「炎灼熱地獄^{エグ・ゾーダス}！」

岩石すら融解する熱を帯びて飛び回るだけ、それだけでモンスター
が死んで逝くのが判る。

魔石が碎かれる前に死ぬからか、魔石もドロップアイテムも確りと
Get！

難関を抜けたユートの前に顕れるは階層主。

第四九階層の階層主——バロールと戦い、ユートはこれをナハトと
アーベントと更にはソウルゲインと共に撃破をした。

第五〇階層はモンスターが生まれない安全階層。

だけどならば、次の階層は相当なものとなる筈で、ユートはニヤリと笑う。

この辺まで来たならば、如何にレベル6相当であろうとも、ソロでは可成りの負担と無理が生じるとは、前述した通り。

ブラックライノスデフォルミス・スパイダー

黒 犀や巨 大蜘蛛が所狭しと迫っており、他にも今までに現れたモンスターも含まれているが、第四九階層までの常識が最早通じていないレベルで襲われた。

「本つ当に鬱陶しいな……ならば、銀河の星々が砕け散る様を見るが
良い！」

勿論、小宇宙が使えないからモドキでしかないが、ユートはエリユシデータを地面に刺し、両腕を天高く掲げて魔力と闘気を融合させると、スパークさせながら振り降ろす。

ギヤラクシアンエクスプロージョン

「喰らえ、銀 河 爆 碎 ツッ！」

目の前で襲い来る黒犀や巨大蜘蛛に、まるで銀河が大爆発したかの如く威力が炸裂し、全てを消し去ってしまった。

蜘蛛の糸やブラックライノスの角など、ドロップアイテムがアイテムストレージに格納されている。

勿論、魔石もだ。

「フツ、真正ではないけど中々だったな」

エリユシデータを抜き、片手に持った俣で「そして誰も居なくなつた」道を、ユートは悠々と進む。

それから暫く経って何処かのファミリアの一団が、この第五一階層へと足を踏み入れた事には、ユートも流石に気付かなかった。



この第五一階層には強竜カドモスと呼ばれる竜、階層主を抜かせば現段階で確認される最強に位置するモンスターが居る。

凶悪なそのモンスターが守るは、薬品などを作るのに最適な水——カドモスの泉水であり、ユートも薬品は作るから見付けて採らない理由は無。

当然ながらカドモスとの戦闘となる訳ではあるが、ユートにとってカドモス……竜種は相性が良すぎた。

「呪え、呪われよ我が怒り以て竜蛇を呪え赤き墮天使……神の毒。我が悪意にて全ての竜蛇を呪え呪え呪え呪え呪え……呪いなれ！」

聖句を唱えると周囲が赤朱緋紅と、まるでドロリとした粘性の高い流血の如く重苦しい某かに侵される。

結界型の権能——【神の毒より呪いなれ】の効果だ。

その能力は竜蛇の能力を百分の一にまで落として、更にユートの全ステータスが竜蛇に対して十倍化し、その攻撃は竜蛇の因子を持つ相手ならば、快復不可能なダメージを与える。

しかも、竜蛇の因子持ちには凄まじい威圧感を与える事になり、今現在の目の前のカドモスの様に……

『ガ、ガウ……』

腰が引けてしまうのだ。

【竜蛇】という因子持ちに対する絶対的なアドバンテージ、とある世界で竜蛇を呪う【龍喰者】を喰らって手にした権能。

何処ぞのなんたら空間やなんたら時空より凶悪で、こうなったら最早、竜蛇の因子を持った存在に勝ち目は無かった。

デメリットはユート自身も竜因子を使えなくなる。

つまり、ユートの内に在る神器——【白龍皇の光翼】デイベイン・デイベイディングやブーステッド・ギア

【赤龍帝の籠手】も使えないし、アーサーの権能も使えなくなるのだ。

他にも【竜戦士ルシファー】も使えないだろうし、割かし外から得た能力には影響を及ぼしている。

けどそも、この権能を使うなら必要が無い。

この権能は飽く迄も竜蛇の因子を持つ相手にしか使えないから、カドモスだけとか竜蛇のみを相手取るのに使う権能であり、竜蛇に対して相対的に千倍も増力しているに等しいならば、わざわざ他の能力なぞ使わなくても勝てるのだから。

「さあ、死の舞いを踊れ——強竜！」カドモス

斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！

斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！ 斬っ！

『ギエエエエエッ!』

何ら躊躇いも情け容赦も無く、ユートは笑みさえ浮かべてエリユシデータによって剣の舞いを踊る。

快復など赦されぬ剣撃、それを連続して喰らってしまったカドモスは、絶叫を上げながら絶命をした。

それを証明するかのようにカドモスは灰化、アイテムストレージにはカドモスの魔石とドロップアイテムのカドモスの牙の名が挙がっている。

「さて、泉水を採取したら次に行こうか」

有言実行、ユートは泉水の採取をした後は再び同じ気配がする方へ進む。

権能は解除してないから二度目のカドモスも無事に斃して、カドモスの泉水を再び採取した。

勿論、魔石とドロップアイテム——カドモスの皮膜も採取しておく。

カドモスの気配も無くなった事だし、ユートは権能を解除して思考する。

「権能を使えばある程度の神気が漏れる筈、それなのに神気は漏れなかったし、何より魔力で権能が発動をしていたな。つまり、得たスキル——【権能発詔】とはこういう意味か?」

スキルに挙がった理由、使い勝手は良くなったと考えるべきか?

「っ! 人の気配?」

ユートが振り返ると……

「あれ? カドモスが居なくなってるよ?」

短髪でオパール色な瞳、褐色肌に胸が無い少女が大きな声で叫ぶ。次々としてくるのは、同じ顔でありながら長髪で胸が大きな少女、亜麻色のロングヘアーを銀色の髪飾りで纏めた耳が長くてターコイズブルーの瞳の少女、金髪金瞳で白を基調に蒼いラインの服を着て、その上に銀色の胸当てを身に付けた細剣を持つ少女。

「っ!? これは……!」

感じられるのは地下からの気配。

「其処の一団！ 入って来るなっつ！ まだモンスターが居るぞ！」
「は？」

訝しい瞳で視てくるのは褐色肌のロングヘアー。

まるで何を言っているんだと云わんばかりであり、どうやら未だに
気付いていないらしい。

「チィッ！」

盛大に舌打ちする。

ボコッ！

「なっつ！」

「モンスター？」

原作の話をしよう。

原作とは、ユートの大元の世界にて発刊、放映などがされているサ
ブカルチャーの事であり、この世界もユートが識らないだけで、何ら
かのサブカルチャーとして発表されている筈。

その原作に於いて彼女らがこのルーム——カドモスの泉に來た際
にモンスターは現れない。

だが然し、ユートが介入した事によって時間軸的な部分に狂いが生
じる。

結果、本来ならカドモスの魔石を喰らっていたであろうモンスター
は、少しばかり遅れて現れたが故に、真っ正面から少女達は遭遇する
羽目に陥った。

そしてこのモンスター、魔力を持つモノを優先して狙うが故に、
真っ先に襲われたのは高い魔力を持ったエルフの魔術師……

「レフィーヤ！」

三人の少女が叫びながら戦闘準備に入る僅かな間、レフィーヤと呼
ばれる少女の襲撃をモンスターが成功させるには充分な刻。

だけど、此処でも存分にイレギュラーっ振りを発揮するユート。

縮地による刹那の移動、レフィーヤというエルフの少女を抱える
と、すぐにもカドモスの居たルーム内へ退避をした。

目標を見失ったモンスターが一瞬の躊躇をした隙、それを見逃す程
にこの階層まで降りた冒険者は甘くも弱くも無く、三人は攻撃をモン

スターに当てた。

ゾクリッ！

拙い！ あの場合に居てはいけないとユートの戦闘者として、カンピオーネとしての勘が警鐘をガンガンと喧しいくらい鳴らす。

「すぐに此方へ退避を！ 其処に留まるな！」

先の警告が効いていたのだろうか、三人は疑いもせず文句も言わずにユートの言葉に従ってルーム内へと駆け出した。

瞬間、ズガン！ 生命力を喪ったモンスターが爆発したかと思うと、体内から溶解液らしき何かを噴き出したのだ。

「な、何よあれ!？」

そこら辺がジュージューと音を鳴らし、煙を吹きながら溶かされていた。

褐色肌のロングヘアな少女が正に戦慄をした声色で呟き、他の二人もやはり冷や汗を流して視る。

尚、エルフのレフィーヤはお姫様抱っこ状態となって男に抱き締められている所為か、それ処では無いといった心情らしい。

この世界のエルフは潔癖が過ぎてか、自身が認めた相手以外から触れられるのを忌避するきらいがある。

だけどレフィーヤは異性に抱き締められたからか、変に胸が高鳴る事はあっても嫌とは思わない事に驚愕しており、そうなると高鳴る胸の鼓動と自分を抱き締める男性の真面目な表情が相俟って、顔が紅潮をして熱くなってしまう。

見た目には明らかに種族がヒューマン、だけど何故かレフィーヤには同族の匂いを感じられた。

それは当然でもある。

ユートは精霊王と契約をした契約者であり、しかも四属性もの精霊王と契約をした。

エルフはどの世界であれ大抵が精霊とは不可分で、故にレフィーヤはヒューマンとは思えない精霊の気配を感じている。

勿論それだけではなく、ユートは今までにエルフやハーフエルフと交わる機会が割とあって、魂の髄にまで染み込んでいてもおかしくな

いレベルで気配が在ったりするし、レフィーヤはそれを以て異種族より同族みたいに感じたのだ。

しかも、相性が良かったのか触れても忌避感を感じなかった。

だからこそ、実際には違うと認識はしているけど、レフィーヤはまるで恋愛に陥った乙女のドキドキみたいに感じ、ユートのをポケーっと見つめていたのだ。

「大丈夫だったか？」

「へ？ あ、はい！ 大丈夫です……助けて頂いて、ありがとうございます！……ます！」

抱っこされた俣ではあったが、レフィーヤは頭を下げて御礼を言う。

「そうか、怪我が無いなら良かった」

毀れ物でも扱うかの様にソツと降ろす。

「処で、貴方は何処のファミリア？ 仲間とかは？」

「ちよつと、ティオネさんってば……唐突に過ぎますよ？」

「一応は確認しとかないといけないでしょ？ どうやら彼がカドモスを斃して、更には私達にとって目的だった泉水も採取しているみたいだしね」

「……あ」

確かに、カドモスは居ないし泉水も枯れている。

いずれはまた沸くけど、少なくともすぐではない。

「こうなると、クエストは失敗してしまうわ。なら、彼とは交渉するなりしてでも泉水を貰う必要がある。違うかしら？」

「そ、それは……」

ティオネと呼ばれた褐色肌のロングヘア少女に言われた事は正論、レフィーヤ達がそもそも此処まで来たのは「カドモスの泉水」を別のファミリアが出したクエストとして引き受けたが故であり、採れませんでしたとはいかない。

「まあ、それは責任者との合流を果たして安全な場所まで退避をしてからだろ。さつきみたいなモンスターがまた出たら大変だ」

「……そうね」

パサリと長い髪の毛を払うと、ティオネはユートの意見に同意をした。

「二応、名乗っておくわ。私はロキ・ファミリア所属のティオネ・ヒリュテよ、アマゾネスね」

「私はティオナ・ヒリュテだよ。見ての通り、ティオネとは双子の姉妹♪」

「双子？」

ユートは余りにも対称的なお胸様を視る。

「うゝ！ 私のはティオネに吸われたんだよ！」

真っ赤になって貧な乳を押さえて言うティオナ。

「私はエルフで、レフィーヤ・ウイリデイスです」

「……アイズ・ヴァレンシユタイン……だよ？」

アイズは見るからにヒューマンである。

「やれやれ、自己紹介はするしかないか。ヘスティア・ファミリアに所属してる柎木優斗」

「マサキ・ユート？ 極東の人かしら？」

「ん、そんな感じかな？」

ティオネの言う【極東】に聞き覚えは無いけれど、言葉的に自分達の世界では日本を意味していたから、取り敢えず領いておく。

まあ、期せずして名前を知れた美少女四人。

名前と所属くらいの露出は構うまいと、相変わらずなユートであった。

走りながら話している訳だが……

「——ああああああああああああっつ！」

先の方から男の絶叫が響き渡ってくる。

「今の声！」

「ラウル!？」

すぐに声がした方へ向かって走る五人、ユートとて流石に無視は出来ない。

勘頼りで進み、現れてくるモンスターは強引に押し退けて走る走る走る。

「何、あれ！」

「さ、さっきの芋虫？」

先程も襲ってきた、黄緑色を基調とした何処か芋虫っぽいモンスター。

それに追われるのは金髪の小人族、他に何名か……恐らくは四人の仲間であるロキ・ファミリアの一員。

「団長!？」

ティオネの悲痛な悲鳴、それがダンジョン内へ宝かに響き渡った。

・

第8話：芋虫との戯れは間違っているだろうか

「走ってきているのは？」

「ウチらのファミリアよ。金髪の人が団長のフィン・ディムナ。ドワーフの方はガレス・ランドロックね。ウエアウルフ狼人がベート・ローガで、ガレスに担がれているのはラウル・ノールドよ」

互いに走っていたからか話している間に合流する。

「無事だったみたいだね」

「はい、団長！」

フィン・ディムナからの問い掛けに、ティオネが顔を赤らめて返事をした。

それを見ただけで、少なくともティオネがフィンにただならぬ想いを懐いているのは理解出来る。

すぐ後ろには芋虫みたいなモンスター。

「アレって！」

「任せろ！」

ティオナが出ようとするのを押し留め、ユートが前に出ると……
クリスタルウォール
「結晶障壁！」

輝く光の壁で芋虫モンスターを防ぐ。

小宇宙で作るより脆いのだが、それでも鉄壁の防御を誇る障壁だ。

「これで暫くは保つ」

「す、済まない……というか君は？」

「先客だよ。ロキ・ファミリアの団長殿」

「そ、そうか……」

フィン・ディムナの問い掛けに、ユートは先客という一言だけで済みます。

「その担がれてる彼は、いったいどうした？」

「ふむ、あのモンスターは腐食液を吐き出しおるが、それをラウルが受けてしまったのう」

「成程、なら治療するから降ろしてくれるか？」

「良いのかの？」

「構わない、サービスだ」

「ふむ、宜しく頼む」

ドワーフ——ガレス・ランドロックはラウルというヒューマンを、担いでいた肩から静かに降ろす。

「聖なる癒しのその御手よ 母なる大地のその息吹 我が前に横たわる傷つき倒れし彼の者に 我ら全ての力以て 再び力を与えんことを……」

ラウルの身体に右掌を翳して呪文を詠唱する。

リザレクション
「復活」

リカバリー
治癒よりも上位に当たる魔法であり、治癒が対象の活力を代償に癒す魔法なのに対し、此方は周囲の精気を集めて治療に回す。

ラウルの傷はみるみる内に塞がっていき、腐食液を浴びた身体は修復された。

「後は意識を取り戻したら完璧だ」

「ありがとう、助かった」

「どういたしまして」

エリクサー
ポーションやハイポーションでは間に合いそうにはないダメージ、万能薬を使わねばならない処を治療魔法で治して貰えたなら僥幸だろう。

「さて、残るはモンスターの対処か。問題は腐食液を吐き出してくるのと死ぬと爆発して液を撒き散らす、しかも物理的なダメージを与えると腐食液で溶ける」

「うわ、めんどいね」

ティオナがゲンナリとした表情となる。

「武器に不壊属性を付けたなら。フィン・デイムナ」

「何だい？」

「武器を貸してくれるか」

「……判った」

「見知らぬ相手にあつさりと渡すな？」

自分から言って何だが、多少呆れが入った声色となって訊ねた。

「何、君が敵ではないと勘が云っているのさ」

「成程、納得した」

『『『ええっ?』『』』』

二人の会話にティオナを中心に絶叫が響く。

それを他所にユートが行うのはスキル行使であり、使うのは
エクシード・チャージ
【聖剣附与】だ。

「聖騎士ローランが持った聖剣・デュランダル附与」

その効果とは暴君の如く切れ味と、決して滅する事の無い不壊属性。

二つは附与出来ないが、これで少なくともこの槍は一時間は破壊されない。

「今のは?」

「スキル。今のその槍には不壊属性が一時的に掛かっている」
「っ!? アイズの愛剣と同じ!」
デスベレト

驚くフィン・デイルナ。

アイズ・ヴァレンシユタイン——種族はヒューマンであり、レベルは5の第一級冒険者の一角。

愛剣は銘をデスペレートと云い、
デュランダル
不壊属性を持つ。

威力は他の同等の剣より劣るが、少しでも長く戦う事を選んだアイズにとって不可欠な武器だ。

当然ながら不壊属性など簡単に附与は出来ないし、ユートがやったみたいな事は一種の反則だろう。

「ま、今はありがたいね」

不壊属性を施された槍を振りながら言うフィン。

正直、問い質したい気持ちも無いではなかったが、今はあの忌々しいばかりのモンスターを討つのみ!

「ねえ、ねえ。それって、複数にも出来るの?」

「ああ、自分の持つ精神力を代償に一時間だけ、何らかの力を附与出来るスキルだから。数に限度は無い」

「んじゃ、私の大双刃ウルガにもお願い出来る? これ高いから壊したくはないしさ」

「此処を切り抜ける為だ、構わないよ」

ユートはティオナが持つ巨大左右対称となる刃を、柄の両端に付けた大双刃なる武器に不壊属性を付与。

「あつりがとう！」

余りにも重たいであろう武器だが、然しティオナはあつさりと振り回す。

「まったくあの子は……悪いけど此方お願いね」

胸部がティオナと正反対なティオネが、ククリナイフを渡してきた。

「了解」

「後でワシのも頼もう」

「はいはい」

ガレス・ランドロックの斧にも次いで、不壊属性を掛けてやった。

「アンタは良いのか？」

「はん、要らねーよ」

狼人の男——ベート・ローガは面白く無さそうな目で睨むと、さつさと芋虫型モンスターの方へ行く。

「さて、取り敢えず武器に不壊属性は附けた。これから結晶障壁を解除するから、奴らを討つ！」

「で？ どう戦う？」

フィンが質問する。

この戦いに限り、ユートに戦闘指揮を任せるのだとフィンに言われた。

理由は簡単、モンスターの侵攻を防いでいるのも、フィン達の武器に不壊属性を付与したのも、結局の処はユートだったからだ。

フィンはそれならばと、ユートの指揮能力や戦闘力も見てみたくなかった。

情報を制するは何とやらとも云うし、彼はユートと同じく情報を大事にする。

一方のユートは漏らしたくない情報以外は露出し、見せておく事も厭あるから問題なく引き受けた。

「結晶障壁を解除したら、すぐにレフィーヤが魔法で前面の奴らを潰す」

「わ、私ですか？」

「次に残った連中に僕が突っ込んで斃す。斃し切れなかった連中は後ろのフィン達に任せよう」

「君に掛かる負担が多くはないか？」

「大丈夫だよ、フィン」

「判った。見せて貰おう、君の力を……ね」

フィンが納得した処で、作戦を開始する。

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え矢を番えよ。帯びよ炎、森の灯火。ともしび撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降り注ぎ、蛮族共を焼き払え」

足下には魔法円が光り輝き、マジックサークル長杖を両手に持つて前に掲げたレフィーヤは、此処に詠唱を完成させた。

ユートが結晶障壁を解除した瞬間……

「ビュゼレイド・フアラールカツツ！」

業火絢爛な焰の矢が放たれて、芋虫型のモンスターへと一斉に襲い掛かる。

次々に着弾しては芋虫を焼き払い、僅かな時間にて半分以上が焼滅していた。

「よくやった！ 後は此方に任せろ、レフィーヤ！」

自分が役に立てた事が嬉しくて、そして褒め称えられたのがこそばゆくてか、真っ赤になるレフィーヤ。

既に他の面々は襲い来るだろうモンスターに備え、武器を各々が構えている。

ユートが自らの黒き剣——エリユシデータを揮い、芋虫型モンスターを次々に斬り裂いていくが、やはり討ち漏らしは出るもので、それら数体をロキ・ファミリアで叩いていく。

デンベスト
「目覚めよ」

アイズ・ヴァレンシユタインが唯一、行使が可能な附与型エンチャントな風の魔法——

「……エアリエル！」

風を身体に、武器に纏わせてその身を疾風と化し、剣は暴風と成す。よって、防御不可能な筈の溶解液さえがアイズの身にも武器にも届きはせず、神速を以て全てを斬り裂く攻防一体の風の鎧。

「おい、アイズ。此方にも寄越しやがれ！」

ベートが言うが早いのか、アイズは「エアリエル」の魔法を彼の具足へと放つ。

ベート・ローガ——ロキ・ファミリアの第一級冒険者の一角であり、誰よりも強さに固執をする狼人。

その武装は両脚に穿いた具足、第二等級特殊^{スベリオルズ}武装の「フロスヴィルト」……魔法攻撃を吸収し、特性攻撃に変える精製^{ミスリル}金属具足である。

僅かに数体なんて普通なら過剰だが、芋虫型モンスターは死ねば爆発して溶解液を噴き出すし、それだけでなくとも体内の溶解液が武器を溶かしてしまう。

その対策方法である。

「あつ！ 反対側からも、モンスターが!？」

反対側からも、自分達が来た方向からも再び現れた芋虫型モンスターに驚き、レフィーヤが焦りながらも絶叫をする。

「大丈夫さ、レフィーヤ」

「ワシらが此処に居る」

^{バルウム}小人族の男——フィン・ディムナ。

ドワーフの男——ガレス・ランドロック。

共にロキ・ファミリアに於ける最古参、LV. 6の第一級冒険者である。

フィンは^{ブレイバー}【勇者】の二つ名を持ち、ガレスは^{エルガルド}【重傑】の二つ名を持つ。

見た目からは想像も付かないが、フィン・ディムナは実はアラフォーであり、年の功と言い張る知性にてあらゆる状況を打破してきた実績があるロキ・ファミリアの首領。

オウリオに於いて一・二を争う剛力の持ち主であるガレス、この場には居ないハイエルフの女性を含めて三人は謂わば最高幹部だと

云つても過言ではない。

その実力はLV・6という数字からして推して知るべしで、ロキ・ファミリアの中でもトップクラス。

ユートは万が一にでも、というより半分は確信して背後からの襲撃を考えて、わざわざロキ・ファミリアのトップクラスを残した。

それが理解出来ているからこそ、フィンもガレスも大人しく従ったのだ。

尚、
ラウルはL V. 4。

実力に申し分はないが、余り目立ってはいない。

「レフィーヤ、僕らが壁になるから魔法を！」

「はい！」

「ほれ、お前さんもじゃ」

「え？ 自分もっすか？」

レフイーヤは詠唱開始。

ラウルはガレスに引つ張られて壁役を。

激しい戦闘が始まる。



「数が多い。それにやはり後ろでも戦鬪が始まった」

ユートはぼやく。

最初に現れた連中ならば既に全滅したが、先の方で次から次へと増

殖されて、まったくキリが無い。

どうやら、百や二百じゃ利かないくらい居る様だ。

「チツ、ウザいな」

舌打ちしつつ詠唱。

今ならば、アイズからもベートからも見えない位置に居るのは把握している。

大地の底に眠りある凍える魂持ちたる霸王

汝の昏き祝福で我に与えん氷結の怒り以て
我が眼前の敵を討て

それは覇王^{ダイナスト}の凍れる魂、極北の冷たき大地を支配する魔族の将が
一角から力を借りた呪文。

「^{ダイナスト・プレス}覇王氷河烈！」

【力在る言葉】に従い、放たれた氷河さえ生み出すであろう負の温度。

前方にのみ威力を発する為のアレンジはしてるが、基本的な部分は
変わらない強烈なる吹雪が襲う。

芋虫型モンスターは忽ち凍結し、更には粉々に粉碎されていく。

普通に斃せば溶解液にて全てが消失するのだけど、この斃し方は絶
妙だったらしく、アイテムストレージには魔石とドロップアイテムの
名前が挙がっていた。

【ヴィルガの魔石】

【ヴィルガの溶解液】

【ヴィルガの表皮】

【ヴィルガの牙】

「ヴィルガ？　これが芋虫の名前って訳か？」

とはいえ、果たして売れる物なのかどうか？

物に関しては帰ってから要検証するとして、ヴィルガとやらはどう
やら一時的だろうが全滅らしい。

「終わった……の？」

「みたいだね。一時的にだろうけど取り敢えずは」

「けっ！」

追い付いて来たアイズとベート。

「ヒリユテ姉妹は？」

「後ろにも芋虫野郎が出てきたらしくてな」

「そうか」

規定事項故に驚くにも値しない情報。

「LV・6が二人に魔導師が一人、オマケにLV・5が二人なら問題

無いな」

武器の問題さえクリアをすれば、決して遅れは取らないであろう。

「……ラウルも居るよ?」

「うん? ああ、そうだったつけね……」

ユートの中では現在出逢ったロキ・ファミリアの中に在って、最弱にカテゴライズされてはいるのだが、一応は彼もLV・は4だ。

そういうユートはというと見えるLV・は1でしかなく、駆け出しも駆け出しな冒険者の卵に過ぎない。

魔法とスキルは凄まじいものの、基本アビリティは初期としてはちよつと高めの程度でしかなく、こんな深層域で戦えるのは元々の能力がLV・5に相当し、【神の恩恵】でLV・が6相当になったから。ユートは初めから古代の英雄と同じくらいだった。

それだけの話。

勘違いをしてはいけないのが、ユート自身が単純にバグな訳ではない点。

生まれ変わって鍛え直しをするし、それ以前的能力だってそれこそ生命懸けで身に付けたものだ。

文句を言われる筋合いは無いだろう。

それは兎も角、ユート達はフィン達と合流すべく、再び後ろへと向かった。

「やあ、君らも無事か」

「そつちも上手くやってくれたみたいだね」

向こうも同じく考えたのだろう、途中で合流をする事が出来た。

「こうなるとキャンプの方も拙いかな?」

自分達を襲ったヴィルガ——まだ名前は知らない——が第五〇階層のキャンプを襲っていても何らおかしくはなかったのだ。

「確かに……モンスターが階層を上がる事もあるか」

フィンの言葉に肯定し、少し急いだ方が良さそうだとユートは考える。

第五〇階層はモンスターが生まれない安全階層^{セーフティゾーン}だけど、決してモンスターと遭遇をしない訳ではない。

「フィン、あんたのファミリアは第五〇階層に駐留をしているんだな？」

「ああ、そうだよ」

「なら急ごうか」

「君も来るのかい？」

「こうなったら一度帰るのも良さそうだし、そっちも帰る事になるだろう？」

「まあね、本当にモンスターに襲われていたなら」

我知らず、ユートだけではなくフィン達の脚も駆ける様になった。

他人事なユートと異なりフィン達はファミリアだ、安否が定かでない仲間達を急ぎ確認したい。

嗚呼、それなのに。

ダンジョンは生きているとはこの事か？

「親指がうずうず言ってる……来るかな？」

フィンが自分の親指を舐めながら言う。

ガコツ！

ダンジョンに亀裂があちこちに入り、そこから生まれ落ちるブラツクライノスの群れ群れ群れ群れ！

「モンスターハウスか！」

「あ？ 何言ってるやがる。モンスター・パーティー【怪物の宴】だろが！」

ベートがこの現象の此方の言い方を教えてくれた。

「モンスター・パーティー……か。言い得て妙だね」

折に触れてダンジョンはこんな意地悪をする。

そしてこれが冒険者の命を刈り取るのだ。

「私が……いく！」

「アイズ？」

フィンは疎か、レフィーヤでさえ文句も言わない。

つまり、やれるという事なのであろう。

テンペスト
「目覚めよ」

単純な効果であるが故、超短文詠唱な魔法。

「エアリエル！」

風が逆巻き、アイズ・ヴァレンシユタインの身体に纏われる。

嘗て、アイズに主神が教えたジョークがあった。

『アイズたん、強^{つよ}なりたいんやったら必殺技の名前を叫ぶとええよ。そしたら、技の威力が上がるんやで?』

それ以来、アイズは自らの必殺技の——主神が付けた名前を言之葉に乗せる。

「リル・ラフアーガ!」

単純明快、暴風を身に纏って閃光となるアイズ・ヴァレンシユタインは、前方の敵を一切寄せ付けない。

ブラックライノスは次々と斬り裂かれていく。

「流石は第一級冒険者」

既知外な戦闘力だ。

「急いで戻るぞ!」

フィンの号令で駆ける、駆け抜けた先は第五〇階層への戻り口。

見た先にはキャンプ地を襲うヴィルガの群れ。

果たして何百匹居るか、数えるのも莫迦らしい。

驚愕するロキ・ファミリアの面子に、アイズが再び魔法を使おうと口を開くのをユートが止める。

「僕が行こう」

「けど……!」

「試したい事もあるし……上手いけば一網打尽にも出来る陣形だ」
アイズがバツとフィンを見遣ると……

「頼めるかい?」

ニヤリとしながら言う。

「任せろ!」

「なら、頼んだ!」

フィンから全権委任されたユートは、アイズが風を纏った時より逸く駆けた。

「は、やい!」

「あれならあつという間……かな?」

頼んだフィンからして、頬を引き攣らせる。

「聞こえるか、地上の神。ヘステイア、ミアハ、ヘファイストス、ゴブニュ！」

地上の知り合った神々に念話を送る。

「ユート君かい？ あれから随分と経つけど、どうして戻って来ないのさ？」

「ヘステイア、悪いんだけど帰ってからにしてくれ」

「うっ！」

「それで？ ユートは何故我らに声を届けた？」

代わりに訊ねてきたのはミアハ、【青の薬舗】を商う薬神である。

「ちよつと面倒な事になっていてね、僕は本来だと使えない力を使いたい。それにはこの世界の神々から、複数から許可を取らなければならない。力は最低限で二柱から……それで三〇秒だけ使える。そこから一柱増えて三〇秒ずつ、四柱で一分三〇秒だ」

「私は構わない。君が悪い事に力を使うとは思えないのでな」

ミアハが許可した。

「う、ボクもさ」

ヘステイアも許可する。

「まあ、私も構わないわ」

ヘファイストスもやはり許可を出す。

「ゴブニュは？」

「……良からう」

これで全員から許可を得た事となり、ユートは僅かに一分三〇秒だけ本来の力を行使可能となった。

「翔けろ、僕の小宇宙！」

この世界では封じられた小宇宙^{コスモ}の力を。

第9話：対価で背中を晒すのは間違っているだろうか

ヘスティア、ヘファイストス、ミアハ、ゴブニユからの許可によりユートが使える様になった小宇宙は、従来なら普通に使える能力とはいえ、現状では僅かに一分三〇秒のみ。

だが然し、真っ直ぐ突き進むだけのヴィルガの群れを潰すのなら、それだけの時間が在れば充分だ。

フィンから副団長であるハイエルフ、リヴェリアに伝言を頼まれているから、ユートは小宇宙を全開にしてロキ・ファミリアが展開するキャンプ地に向かう。

どの道、ヴィルガ殲滅には其処からが一番やり易いというものもあった。

ヴィルガを無視しつつ、駆け上がったユートは前線で指揮を執るハイエルフの女性——リヴェリアだと思われる彼女に話し掛ける。

「リヴェリア・リヨス・アールヴで間違いないか？」

「な、に……？」

気を張っていたのにも拘わらず、自分に気付かせずにすぐ傍まで接近していたユートに驚愕したらしく、僅かに後退った。

「敵じゃない。ヘスティア・ファミリアに所属をする柎木優斗だ。貴女がロキ・ファミリア副団長リヴェリア・リヨス・アールヴで間違いない？」

再度問われたハイエルフは僅かに黙考後……

「そうだ」

頷いて肯定する。

「現状は理解している」

ヴィルガに強襲をされ、リヴェリア・リヨス・アールヴの指揮の下、ロキ・ファミリアの面々は戦闘をしていた訳だが、こんな絶望的な状況でも戦線が瓦解をする事無く、維持を続けてる辺り彼女のカリスマ性と指揮能力の高さが窺えた。

「ロキ・ファミリア団長のフィン・ディムナから伝言を伝える」

「フィンからの?」

「後で確認しても構わないけどね、間違いなく本物の伝言だから」

「……解った」

暫くの黙考後リヴェリアは頷く。

周囲が驚愕をしながら、『リヴェリア様!』などと絶叫を上げるが、ユートは何処吹く風と謂わんばかりにフィンの伝言を話す。

『今は彼に従ってくれ』——以上だ。金髪の小人族……からのね」
「了解した。どうすれば良いのだ?」

「下がれ。後は僕が奴らを——ヴィルガを討つ!」

「ヴィルガ? あの芋虫の名前か……解った」

すぐにリヴェリアが仲間を下がらせる。

胡散臭い餓鬼の言い分ではあるが、リヴェリアが信じた以上は否や
は無い。

すぐに前線を下げた。

下がる間はユートが魔力を使った結晶障壁クリスタルウォールで防いで、戦線離脱するロキ・ファミリアの援護に回る。

充分な距離を取ったロキ・ファミリア、リヴェリアがユートの隣に
立った。

「全員を下げたぞ?」

「了解。障壁解除後すぐに攻撃をする。この一発で終わらせる威力だから
気を付けてくれよ?」

「判った、そうしよう」

さて、勘違いが無い様に記すが……小宇宙を使える時間は飽く迄も
使用と維持の時間であり、今のユートは小宇宙を使っていない。

結晶障壁も防御力に難がある魔力による展開だし、駆け上がるのに
使った数秒しか消費してないのだ。

よって、まだ制限時間は一分二〇秒以上ある。

尚、制限時間まで使った後のインターバルとして、二十四時間は使
えない。

「モンスターだとはいえ、所詮は蟲に過ぎないなら……こいつで!」
死ねば爆発をして溶解液を撒き散らすのであれば、そうならない様

な攻撃によって斃すのみだ。

ユートは両手を前方にて組み合わせ、腕を真っ直ぐと上に向けて拳げる。

「今こそ翔けろ、僕の小宇宙よ！ セブンセンスズの——黄金の領域まで！」

「む、むう……これは？ 背後に水瓶を手にしたヒトがまるで黄金のオーラの様に見える!？」

リヴェリアは驚愕した。

そう、ユートが使う技は水と氷の魔術師と呼ばれし水瓶座のカミユ最大の拳。

オーロラエクスキュージョン
「極光処刑！」

絶対零度に到達をする程の凍気がユートの拳より放たれて、下から真っ正直に上がってくるヴィルガ共を舐め上げる。

ピキイイインツツ！

第五〇階層全体が凍結してしまったかの如く瞬時に静寂に包まれ、目標であったヴィルガの群れの全てが凍っているのが見えた。

今迄の騒然とした雰囲気が静寂に閉ざされており、ヴィルガは凍結された状態となったのを、フィン・デイルナが率いる第一級冒険者達も驚愕している。

「まさか、これ程とはね」

「ウム、氷結の魔法ならばリヴェリアも使えるがな、規模も威力も段違いよ」

フィンが、ガレスがその力に戦慄を覚えていた。

「凄い……」

「は、はい。アイズさん」

アイズとレフィーヤも、静かな第五〇階層を見つめて啞然としている。

「すつご、私達を置いていく訳だねえ」

「そうね……」

「ケツ！ ま、此処までをソロで来たなら雑魚じゃあねーって事だろ

？」

やはり驚くヒリユテ姉妹と口が悪いベート。

そんな第一級冒険者達を他所に、ユートは構えを再び取り——それはペガサスの一三の星の軌跡を描く。

「ペガサス流星拳！」

その衝撃により、凍結していたヴィルガが一斉に砕け散っていった。

ヴィルガは死んだのだと判断されたか、ユートの持つアイテムストレージ内に大量の魔石とドロップアイテムが格納されていく。

「ふいいー！」

これで良しとばかりに、一息吐いたユート。

それを皮切りに静寂に充たされた空間が、ロキ・ファミリアにより再び騒然となるのであった。



取り敢えずは疲れた事もあり、ロキ・ファミリアは第五〇階層に今日は留まる事を選択したらしい。

怪我人の治療に当たる者も居れば、アイテムの整理をする者も居るし、夕飯の準備を行う者も居る。

一際大きなテント内で、フィン・ディムナを頂点に第一級冒険者——幹部達とユートが話をしていた。

因みにレフィーヤはいえ、リヴェリア・リヨス・アールヴの後継者的にも云われるが、今は飽く迄もレベル3でしかない為に、普通に夕飯の準備を手伝っている。

「助かったよ、君の速度と攻撃力のお陰で被害も大分減ったろうし」

「まあ、こういう時くらいは助け合うのも良いから」

流石に『冒険者は助け合いでしょう』とも言い難いからか？ ユートは無難に言葉を返す。

実際、そんな冒険者など少ないだろうし。

「それに、リヴェリアが信じてくれたから速攻で攻撃が出来たんだ」

「私は君の言葉に嘘を感じなかったただけだ」

胡散臭いのは自分だって理解はしていたし、あつさりと信じてくれたのは僥幸だと云つても良い。

「然し、本当にソロだとは恐れ入るけど……君の名前は寡分にして聴かないな。ヘスティア・ファミリアというのもね。失礼を承知で訊ねるけど、君のレベルは幾つなんだい？」

「まあ、レベルくらいなら構わないけど……1だよ」

『……』

シンと静まり返る。

「えっと、もう一度訊ねるんだけど……レベルは？」

「何度訊かれても1としか答えられない」

「おいおい、吹かしてんじゃねーぞ？　LV・1風情がこんな深層までソロで来れる訳がねーだろーが！」

ベート・ローガが青筋を立ててがなるが、ユートとしてはLV・1としか答え様が無い。

「ヘスティア・ファミリア自体が一ヶ月近く前に設立されたばかりだし、其処の構成員のレベルが高い筈もないだろうに」

「確かに、我々が遠征に出るまでで神ヘスティアなど名前を聞かないな」

リヴェリアが顎に手を添えて言う。

実は改^{コンバージョン}宗でレベルを引き継げるのだが、ユートはその事実を知らない。

「言い方が悪かったかな、僕は素でLV・5くらいはあつたから、【神の恩恵】を受けてからLV・6相当にはなっているよ」

「そ、それは……」

「古の英雄並だな」

絞り出す様に言うフィン・ディムナと、汗を流しているリヴェリア・リヨス・アールヴの二人。

実際、これでも身体強化しまくった連中を相手にしたり、神々とバトったりと洒落にならない事をしてきた身だし、素でもこの世界に於ける強者——LV・5程度は有って然るべき。

「やっぱ信じられるか！ 背中見せてみる！」

「見せる訳が無いだろ？ マナーくらい守れよ」

ベートの叫びにジト目で断わるユート。

SAOでも、能力関連は秘密にするのが普通だし、訊くのはマナー違反だったのだが、この世界の冒険者も其処は同じらしい。

「うつせーよ！ てめえが素直に背中見せりや全部が済むんだ！」

強引に背中を見ようとするベートだが……

「はっ！」

「がはっ!？」

柔よく剛を制するとはかりに投げた。

「そもそも、ベートは神聖文字ヒエログリフを読めるのか？」

「読めんよ。私やアイズは読めるがな」

静謐な声でリヴェリアが笑いながら言う。

クイクイ。

「アイズ？」

「……私も知りたい。貴方のステイタスすら超克する力の一端を」
「？」

リヴェリアを見遣ると、フルフルと静かに首を横に振って……

「アイズは力を求めているのだ。その理由までは話しかねるが」

……と、答えてくれた。

「力を……ねえ？ 等価交換って知っているかな？」

コクリ、頷くアイズ。

全てに於いて何かを求めるなら、基本的に対価を示し払わねばならない。

「ならば、僕のステイタスを見る対価に何を支払う？ 等価交換だ」

「えっと……」

いまいち思い付かないのだろうか？ リヴェリアをチラチラと見ながら頭から煙を出している。

頭は悪くなさそうだが、只知道に偏りがある様な気がした。

「そうだねえ、例えば僕の背中を見るんだしアイズの裸を見せてくれるとか？」

ピシリッ！

そう言った刹那テントの内部が凍り付く。

アイズにだって羞恥心は普通にあるし、流石に今の台詞には真っ赤になってしまい、胸を両腕で隠す様に覆って下がった。

「アッハハハッ！ 良い、君って最高だよ！」

笑い出したのはティオナ・ヒリユテ、バンバン！ とユートの背中を叩きながら大笑いだ。

双子の姉のティオネ・ヒリユテも可笑しいのか？ チラリと見遣ると噴き出しそうになっている。

「てめえ、ムツ殺すぞ！」

ベートは怒り心頭で青筋を浮かべ、ムツころさんの如く叫んだ。

「フツ、アイズ。それで、お前はどうするのだ？」

リヴェエリアが訊ねる。

「そ、それは……」

「お前は彼のステイタスを見たいのだろうか？」

コクリと頷く。

「本来、ステイタスというのは他派閥の者に見せて良いものではない。それを見せようというのだから、確かに相応の対価は求められるだろうさ」

「う、うん」

「訊ねたいが、アイズの裸を見るだけなのだな？」

リヴェエリアの確認に対してユートは、当然だと言わんばかりに首肯した。

「触れたりほしくないさね。一ヶ月近くダンジョン内に居たからね、女の子の肌が恋しくなったって処だよ」

「ふむ？ それならば私も何も言うまいよ。アイズ、後はお前次第だな」

瞑目しながらリヴェエリアも黙ってしまう。

ベートは未だにギャーギャーと煩いが、ティオナによって押さええられていた。

リヴェエリアが黙ったのには理由がある。

まず、ステイタスを見たがったアイズに対する対価だと云う事。

そして、仮にアイズから背中を見せて貰ってもロキは抜き無くステイタスにロックを掛け、とある薬品を使うなりなんなりしなければ見れない事が二つ目。

最後にユートに確認した“見るだけ”という約束。

これならアイズのステイタスは見られまい。

「おい、フィン！ 黙ってねーでお前も止めろ！」

「ベート、僕も彼のステイタスは気になるんだ。知れるなら知りたいね」

「ま、ワシはアイズが良いなら構わんしな」

フィンは賛成派らしく、ガレスはアイズ自身の好きにさせる心算の様だ。

「そもそも、最初に背中を見せろと言ったのはベートじゃないか？

男の彼が君の裸に興味が無いのは当然だしね」

「うつせーよ！」

やはりジタバタしているベートを他所に、アイズは下を向いて黙考中である。

裸を見せるのは恥ずかしいけど、ユートのステイタスは見たいという乙女心？

「条件……がある」

「条件？」

「……そう、リヴェリアにも見せて」

「リヴェリア？」

ふとリヴェリアを見る。

「待て、アイズ。私は肌を晒したりしないぞ？」

「裸を見せるのは私だけ。でも……神聖文字ヒエログリフの解読はリヴェリアの方が上だから」

読めない文字が万が一にも在れば片手落ち。

「了解した。リヴェリアに限り見せよう」

十分後、ユートはアイズの戦士とは思えない肢体を確りと堪能し、満足してからアイズとリヴェリアへと背中を晒す。

暴れるベートは当然ながらガレスに抑えられた。

「LV・1で基本アビリティも恩恵を得たばかりとしては高いが、全てがI評価でしかないか」

だが然し、こんな深層にまで降りてきているからには単なるLV・1とは到底思えないし、問題なのは寧ろスキルと魔法だろう。

「【精霊契約】と【黒魔術】と【神威魔術】……」

「これはどういう事だ？ 恩恵で得られる魔法とは、最大三つのスロットを埋める形になるが、この様な形は知らない」

魔法はスロット方式で、魔法名と詠唱式——場合によっては解除式も有り——と魔法の説明文にて構成がされている。

然し、ユートの魔法スロットは魔法名ではないし、詠唱式も書かれていない。

「魔法の説明文から推測をするに、どうやら詠唱式は別に彼が知っているのではあろうかな……」

正に既知外な魔法。

「スキル……情交飛躍？」
ラブ・ライブ

「ブッ！」

スキルの説明を見た途端にリヴェリアが吹き出す。

普段の彼女からは想像も出来ない。

発現者が男の場合だと女性との情交を一回で基本アビリティに十前後上昇。

同時に絶頂を迎えれば効果は倍増。

絆が深まればボーナスがプラス。

早い話がセ○クスをしたならば、一回につき女性の基本アビリティがある程度ながら上昇するという事。

すぐにアイズの目を塞いで見えない様にした。

「……リヴェリア？」

「お前には未だ早い」

溜息を吐きながら言う。

「それにしても……」

いまいちよく解らない【イエヒー・オール権能発詔】は兎も角、フィン達の武器に不

壊属性を附与したのは【聖剣エクシード・チャージ附与】の筈。

しかも宝石へと用いれば恒常的に附与が可能だし、明らかに鍛冶職人に対して喧嘩を売るスキル。

だがやはり際立つのは、【情交飛躍ラブ・ライブ】というスキル。

基本的にステイタスというのは経験値エクセリアを積み、それを主神によって更新されねば上がる事は決して無い。

然し、ユートと——下品な言い回しをすれば「一発やれば」上がると云う。

いったい何をどうすればそんな訳の解らないスキルが発現するか、リヴェリアを以てして全く理解不能であるとしか言えない。

「訊ねたいのだが？」

「何を？」

服を着直しながら返事をするユート。

「君は自分のスキルや魔法について、ちゃんと把握をしているのだろうか？」

「スキルの【情交飛躍ラブ・ライブ】と魔法である【神威魔術】以外は」

【神威魔術】はこの世界の神々と交流をした上で、新たに術を構築していかなければならないから、未だに手付かずの俣である。

【情交飛躍ラブ・ライブ】は相手が居て、更には神聖文字を読めなければ実験すら俣ならない。

その為、この二つに関してはちよつと把握は出来ない状態だった。

「ただ、感覚的に【情交飛躍】は基本アビリティに於ける限界を超克出来る筈だと思ってるけど……ね」

「なっ!？」

本来、数値はS999がカンストとなるステイタスではあるが、ユートの言う通りならSSにも達すると云う事であり、リヴェリアはその事実には驚愕を隠せないでいたと云う。

第10話：スキルの確認をするのは間違っているだろうか

レフィーヤは荷物を運び終わると、おもむろに両手を開いたり握ったりして、ふと未だに熱を持っていると錯覚してしまう部位に手を添えてみる。

確りと男の子に触れたのは初めてで、抱えられていた部分がまだ熱い。

この世界のエルフは潔癖症な処があり、一般的には性別を問わず触れられるのは本人が認めた相手だけ。

初めて会った相手だと云うのに、触れられた忌避感は今も無かった。

中には触れられた瞬間、手を弾くくらいのエルフだって居る。

レフィーヤは其処までではないが、やはり少なくともファミリアの人間と多少の触れ合いはしようとも、まったくの部外者に触られるのは遠慮願いたい。

少なくとも、この世界の人間はエルフヒトというのはそういう種族である、殆んどがそう認識をしているのだろう、一部の物知らずを除いての話だが……

「ハア、悩んでみても仕方がない……ですよね？ 後でリヴェリア様に相談してみるしかないかな」

ふと、幹部が集まっているテントを見遣ると……

「あれ？ ティオナさんと……ユートさん？」

二人が出入口から出てくるのが見えた。

無乳ではないが微乳である褐色肌の少女が、ユートと連れ立ってテントから出て行ったかと思えば、何故かサポーターの少女を呼び止めて小さなテントを受け取ると、今度はそそくさと人気の無い場所へとこっそり移動を始める。

「あ、怪しい……」

レファイヤはこっそりと後を付けた。

稍、離れた位置にテントを張った二人は中へと入っていき、それっきり全く出て来ない。

ソツと足音を消しつつ、辺りに気配を紛れさせながらテントに近付き、エルフらしい長い耳で聞き耳をしてみると……

「ん、や……」

余りにもティオナらしくない声が響いた。

「……え？ 二人共、いったいナニをしてるの？」

まあ、何をしているのかとユートが問われたなら、きっと『ナニをしていた』と答えるだろうが、幾ら何でも今日出逢ったばかりの二人が、しかも周りが忙しくしている最中で空気を読まなさ過ぎる行為だ。

しかも、幹部が誰も見咎めなかったという事はだ、つまりは黙認をしている。

フィンもガレスもベートもティオネも……アイズやりヴェリアでさえも。

L.V. 5と6の第一級冒険者として高い格を持ち、普段から荒々しいベートもそれなりの常識を持っているというのに、こういう事がティオナがユートとナニをするのを見送った。

意味が解らない。

ティオナ・ヒリュテとはアマゾネスである。

二つ名は「^{アマゾン}大切断」だが、そんな二つ名の由来たるや色気の欠片も無い。

それは兎も角……アマゾネスという種族は基本的に強い男を性的に喰う。

イシユタル・ファミアにアマゾネスが多いのも、冒険者が訪れれば幾らでも喰えるし、上手くやれば子孫も残せるからだ。

とはいえ、アマゾネスとしては変わり者なヒリュテ姉妹は、余りそこら辺に関してはガツガツしてない。

尤も、姉であるティオネ・ヒリュテは団長のフィンに御執心だけど。ヒトに歴史有り。

ヒリユテ姉妹にも過去、色々とあったのである。

そんな双子の片割れたるティオナがだ、男とこっそり一人用の小さなテントを一目憚りながらも建てて、その中へ二人きりで入っていったと思えば、ティオナの色めかしく艶やかな嬌声を上げたのだ。中ではきつと二人は肌を寄せ合い、ユートが色々とティオナに触れている。

時には唇を付けながら、舌をあの褐色の肌へと直接這わせて……ボンツ！

レフィーヤの妄想は本人が顔を真っ赤にして爆発した事で皮肉にも停まって、気が付くとゴクリと固唾を吞んでおり、懲りもしないで再び聞き耳を立てた。

彼女にだつてこの手の事に興味はあるという訳だ。

我知らず正座になって、煩いくらい高鳴つて早鐘を打つ心臓の音、汗がじんわりと流れていていつの間にか体温も感情の昂りに応じてか、高くなっているのにも気付いてないし、ユートがティオナに卑猥な言葉で責める時、ついつい自分が言われている場面を妄想してしまふし、いつものとは全く異なるティオナの態度に自分が応じている妄想をしてみたり、二人のやり取りを聞いている内に息遣いが僅かに荒くなる。

そして到頭、決定的瞬間を迎えたのが解る科白に、それに続く動作による水音がレフィーヤの脳髓を熱く甘く鮮烈に焼いて、知らない間にお腹の奥が熱せられたかの如く。

レフィーヤは『こんなのイケナイ』とか、『私は悪い子です』とか、『ごめんなさい……リヴェリア様、アイズさん』だのと呟きながら耳はテントの中で起きている出来事の音声を拾うのに必死になっていた。余りにも熱くて甘い感覚に支配されて、レフィーヤの右手がつい自然と湿った布越しに秘裂をソツとなぞつても仕方がない。

自分でもナニをやっているのか理解もしておらず、小さな肢体を駆け巡る悦楽に身を委ね、何故だか同調したティオナの嬌声に合わせ、レフィーヤの肢体も跳ねていた。

より正確に云うのなら、ユートの動きに快楽を受け容れたティオナ

の……で、まるつきりテントの内部で秘め事をしているのが恰かも自分である様な気分で、遂にはゾクゾクツと背筋を駆け上がる最高潮を迎え、それでもこっそりと聞き耳を立てている自覚はあつたらしく、袖口を噛み締めながら声を押し殺す。

初めての感覚に戸惑い、更にティオナはレフィーヤと同じタイミングで最高潮に至っていたが、ユートは未だだったのか……

「ティオナ、悪いけど僕はまだだからさ。実験を続けさせて貰うよ?」

「え……? ちょい待ち! 私、今はスゴく!」

「ダメ、待たない」

「ひあつ!」

なんて声が聞こえたかと思うと、再び内部を満たす水音と激しいまでに響いてくるティオナの声。

流石に疲労感から動けないレフィーヤだったけど、確りと音声は聞いていた。

そしてどれくらいの時間が経ったのか、一分? 或いは十分? 脳内が痺れて判断出来なかったのだが、漸くユートも欲望の猛りをティオナのお腹の中へ吐き出したらしい。

ティオナがそれらしい事を叫んでいたから。

「ハアハア……こんなのって初めての感覚で……」

肩で息を吐きながらも、気だるい感覚と虚しい気分を味わいつつ、グツタリとテントに凭れ掛かる。

「私、何をやってるんでしょうか?」

先輩冒険者の情事を盗み聞きし、それをオカズ代わりに自分を慰めるなんて、おバカな事をしてしまったレフィーヤは、虚しさという強敵と戦っていた。

そんなレフィーヤの耳に飛び込むユートの声。

「ティオナ、ロキ・ファミリアって他人の情事を盗み聞きする趣味の間でも居るのか?」

「……へ?」

ビククウウツ!

ティオナは間拔けた声を返すが、実際にやらかしたレフィーヤから

すれば心臓を直撃されたに等しい。

「初めっから最後まで居るんだが、気配の乱れ方から云うと僕らの情事で愉しんでいたみたいだ」

「うえー！ 本当に？ 誰だよりもう……」

「ま、取り敢えず第一回目の実験は終わりだ。どんな具合かはリヴェリアに確認をして貰え」

「そうする」

実験……レフィーヤからすれば意味が解らない会話だが、どうやら先程からの情事は何らかの試し事で、恋愛関係などから及んだ訳では無いのだと推察。

「と、兎に角離れないと」

「何だ、レフィーヤも混ざりたかったのか？」

「ふえっ!？」

其処には上半身に何も身に付けてないユートの姿、下は……穿いていた。

「い、いつの間に!？」

さっきまでティオナとの会話をしていた筈なのに、僅か数秒でレフィーヤから背後を取っている。

「幾らLV. 3だとはいっても、事実上の實力は僕の方が上なんだ。況してや、レフィーヤの未熟な隠行と僕の隠行、一緒にして貰っては困るね」

「っ!」

「自然を親しむエルフだけあって、気配を周囲に溶け込ませたのは評価するが、チラホラと気配が浮かんでは意味が無い」

「はうー!」

エルフは森の民。

故に、森へと馴染む様に極々自然と気配を周囲に溶け込ませる真似も出来る。

気配を消す【気殺】というのは、確かに自分の存在感を隠す技術として一般的だろうが、気配を消してしまうと自然界に遍在している気配に空白が生じてしまうが故に、達人級ともなればそれで気付けるの

だ。

仮令、この事を識らずとも違和感……とでも云うのだろう、そんな超感覚的なもので。

気配を消していた筈なのにバレる……とは、とどのつまりそういう事だった。

「そんな事より、僕らの事を盗み聞きして随分と愉しんでいたみたいだね?」

「ひゃん!」

アンタツチャブルな部位を右の人差し指がなぞり、唯でさえ敏感になっていたソコから電撃みたいな感覚が奔る。

「だ、ダメ……ですよ……こんな……こ、と……」

「身体は期待しているみたいだけど?」

指先にこびり着く飛沫が口以上にモノを言う。

「ま、レフイーヤを苛めるのは後回しにしようか」

「……へ?」

思わず『やめちゃうの?』と口にする処だったが、すぐに口を閉じた。

助けられたとはいえ少しおかしい、自分はこんなにチョロかっただろうか?

羞恥心に紅く頬を染めながら猛省する。

「ティオナ、準備は?」

「オツケー!」

「なら、フィンの所に急ぐとしようか」

「は?」
「???」

二人の会話に付いていけないレフイーヤだったが、どうやら冗談とかではなさそうで、ちよつと下半身に違和感が残るのが気にはなったものの、ユート達に付いて行くしかなかった。



「やあ、来たね」

「待ち構えていたという事は当然？」

「気付いているさ。親指がウズウズ言ってるからね、来るんじゃないかな？」

フィン・ディムナのコレは所謂第六感にも等しく、恐らくは三十年前後という永きに亘る冒険者生活で、彼やファミリアを助けてくれた信頼出来る「システム外スキル」みたいなモノ。

SAOやALOなどの、VRMMOをプレイしていた時に使っていたシステムに既定されないスキル……キリトがALOで使用したスキルコネクトもそうで、裏技に近いものだ。

フィンのそれにしても、決してスキルや魔法や発展アビリティの類いでなく、故にこそ仮に【神の恩恵】を無くしたとして、これが喪われたりはしない。

そういう意味ではユートの「叡智の瞳」も、ハルケギニア時代では【システム外スキル】に相当していると云っても決して過言ではあるまいが……

「なら、今夜の第五〇階層での逗留は中止だね？」

「ああ、既にファミリアの皆には撤収の準備を急がせているよ」

折角、設置したキャンプではあるが仕方がない。

「流石団長だね、フィン」

「ふふ、この感覚に助けられているからね」

愉しそうに笑うフィン、本来なら途中ででも何でも呼びに行くべきかとも話していたが、敢えてフィンはユートに報せないと言う。

ユートであれば自ずと気が付く筈だ……と。

そして目論見通りに戻って来たのだから、フィンならずとも苦笑いが浮かぶ。

まあ、その真意はフィンにせよガレスにせよベートにせよリヴェリアにせよ、勿論の事だが姉のティオネにせよ他人の情事など見たくはないという話。

アイズにはまだ早いし、下手に興味を持たれてしまつて事に及べば、当然ながらアイズを猫っ可愛がりをしているロキがキレル。

曰く——『アイズたんは嫁にやらん!』と言い切る程であり、だからといって婿をファミリア内に取ろうとも思うまい。

何より、まだ早いと判断する理由としてアイズ自身がその手の知識に疎いというのもあり、実際に羞恥心は普通にあるアイズだが、男女関係の機微にはどうしても鈍くなる。

リヴェリアとしては何と無く傍に居たい男——でも出来ればと思うが、そんなに上手くはいかない。

それはまあ良いとして、気付かない様なら仕方がないからティオネ辺りにでも行つて貰つたが、やっぱり気付いてくれたか——と半ば安堵したのは秘密だ。

「リヴェリア、取り敢えずは一発はかましたから後でステイタスを調べてくれ」

「そ、そうか……」

ユートの感覚であれば、きちんと中へ出さねば意味を成さないと思う。

問題はその出せる位置が三ヶ所在り、何処でも良いのか否かという事。

とはいえ、最初の実験なのだからオーソドックスにいき、マニアックな部位には手出ししてはいない。

否、手は出したが……

「それで? 恐らくはもう時間が無いと思うがどうする心算なんだ?」

「敵が……現れるモンスターがどの程度か判らなければ作戦を立てようが無い。とはいえ、あの芋虫モンスターを鑑みれば危険な存在である可能性は高いね」

「そうだな、あれを基準に考えるべきだろう」

当然、ユートも現れるであろう脅威度を判定しかねてはいるが、それなりにはヤバイ……とはいっても、ユート自身はそれ程では無いだろうと考えている——相手であろう。

「多分、僕なら普通に闘えるとは思うけど……?」

「そうなのかい? ああ、あの吹雪の魔法なら!」

「いや、擬似的なら未だしもあれは少なくとも一日は使えない。しかも神々から許可を得ないといけないから面倒なんだ」

「擬似的には使えると?」

「ああ、使うエネルギーの純度の違いだからね」

魔力、氣力、念力、靈力は飽く迄も小宇宙から剥離したエネルギー。実際、どれだけ魔力を籠めようと音速や超音速なんて出せはしないし、出せても音速を越えれば人間は砕け散るしかない。

小宇宙は肉体を確り保護するから、音速を越え光と同じ速度を出しても肉体が壊れたりしないのだから。

尚、某・^{マギア・エレベア}【闇の魔法】は別格だからまた違う。

あれは魔力を呼び水として精霊を召喚し、そいつを自らの肉体に靈体に魔法を融合させる謂わば、魔装機神の精靈憑依^{ボゼッション}に近いものである。う。

但し、魔装機神という器を用いずに自分の肉体を使うからか、肉体が靈質ごと変質してしまう様だが……

「なら、頼んでも?」

「構わない。上手くやれば魔石やドロップアイテムも手に入るからね」

「若しや、あの芋虫からも手に入れていたのかい?」

「まあね」

「いつの間に……」

驚くフィンだが、ユートはサポーターを必要としない魔法——ステータス・ウィンドウを持つ。

フルスペックのあれは、他人からしたなら巫山戯た機能を有している。

「撤退の状況は?」

「まだ六〇パーセントつて処だね。とはいっても上層に上がればモンスターが出てくるから、ベート達には先立って退路を作って貰わないといけないけどね」

「そうか、急いでくれ……可成り近いみたいだ」

感覚というより既に気配が感じられる為、ユートも少し焦りを覚え

ていた。

ユートだけなら兎も角、流石に大量の人間を抱えては彼らが無傷で済ませるのは難しいのだから。

敵が何処から来るか判らない以上、結晶障壁を使っても余り意味は無い。

「もう時間が無いか」

地震。

地面が揺れる。

現れたのはとても巨大なモンスター、それは第一七階層にて現れる階層主——ゴライアスみたいな巨体であった。

「あれが破裂したらヤバかったな。即時撤退が効を奏したといった処か？」

「……だね」

ヒリユテ姉妹やレフィーヤが青褪める中、ユートとフィンは苦笑いだ。

「だけど、僕なら充分に斃せる程度でしかないかな。ゴライアスやウダイオスやバロールに比べれば雑魚でしかない」

「ああ君か、第一七階層と第三七階層と第四九階層の階層主を斃していたのは。考えてみれば当然か」

階層主は別格の強さだったが、ユートもゴーレムを使つての連携で確りと斃してやっている。

「あの巨大モンスターの何がヤバいつて、斃した際に飛び散る溶解液の範囲だ。つまり、ロキ・ファミリアに配慮しなければ如何にも容易い相手だ」

「というと？」

「現れたの位置が良かったつて処だよ」

ユートはニヤリと口角を吊り上げ、撤退を続けているロキ・ファミリアと反対方向へ歩き始める。

そしてロキ・ファミリアが居なくなった処で……

「結晶領域！」
クリスタル・テトリイ

クリスタル・ウォール
結晶障壁や結晶護衣とも異なる独自技、結晶領域を展開して斃し

ても溶解液が誰も犠牲にならない様にした。

まあ、芋虫と同じくやるから飛び散りはしないが、ロキ・ファミリ
アも気分的に脅威だろうから。

「で、アイズ？ どうして出て来たのかな？」

「……一人じゃ危険……だったから」

寧ろ、数が居た方が危険だったのだが、結晶領域は張り終えてしま
ったから、追いつくのは無理。

「判った、僕が奴を封じるからトドメを頼む」

「うん」

奇しくも、アイズ・ヴァレンシュタインと共同作業をする運びと
なったユートだが、其処には愉しそうな笑みが浮かんでいた。

第11話：白兎とのファーストコンタクトは間違っているだろうか

魔力で極光処刑オーロラエクスキューションを使用しても良いが、あれだけの巨体を瞬間的に凍結するのなら、魔力だとタメが大きくなり過ぎるし、何よりも無詠唱の威力ではないから目立つ。

それなら初めから広範囲に影響を及ぼす詠唱型で、普通に魔法を行使した方がアイズが見ている今だと、目立たないであろう。

「さて、何を使うか？」

ふと脳裏に浮かんだのは「魔法先生ネギま！」系の氷結魔法で、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが得意としていたアレ。

始動キーは再転生の折りに破棄したし、普通に初心者用の始動キーで唱えれば良い訳で、ユートなら間違いなく解放後のエヴァンジェリン以上の力で行使可能である筈だ。

「む？」

考え事をしているユートの頭上にキラキラ輝く粉、禍々しいだけの気配を放つそれをユートは避けると、懐から紅い薔薇を取り出して投げ付ける。

ドガン！

薔薇が触れた途端に爆発をする粉。

「成程、これが奴の攻撃という訳……か」

大した威力でもないが、乱発されても面倒臭い。

「とつとと斃すか……」

ユートは浮かび上がり、アイズに向けて叫ぶ。

「アイズ、僕が奴を凍結させるから君は剣でトドメを刺してくれるか？」

「……判った」

相変わらず無表情に近いのだが、それでも何処かしら愉しそうな雰囲気を感じられるアイズは、ユートの言葉に対して素直に頷く。

まあ、この魔法はその気になれば中身ごと粉々に壊せるのだが、折角アイズがユートを心配して残ってくれたのだし、その心意氣を無碍に扱う心算も無い。

先のヴィルガ——芋虫との戦闘では先頭に立っていたからアイズの実力も見れなかったし、存外と丁度良かったとも云えた。

「君は……翔べるんだね？ 頑張つて」

ニコリと微笑まれる。

何と云うか、可愛らしくて実年齢より幼く見えた。

というか、翔べる事への疑念は無いのだろうか？

実はアイズも僅かながら魔法で風を纏い、空を翔ぶ能力を有していたからか、疑問は無かったのだが……

「さて、始めますかね？ プラクテ・ビギ・ナル」

初心者用の始動キーを口にしたユート、ヘンテコな芋虫だか人型だかのモンスターもそれに気付いたか、攻撃を開始しようと動く。

契約に従い

我に従え氷の女王

来れ常の闇

えいえんのひょうが

「ト・シユンボライオン・ディアー・コネートー・モイ・ハー・クリュスタリネー・バシレイア・エピゲネーテートー・タイオーニオン・エレボス・ハイオーニエ・クリュスタレ……」

本来、世界独自の言語で呪を唱えても別世界の精霊には言語が理解を出来ず、発動はしない。

英語に堪能でない日本人が米国人旅行者から頼み事をされ、そそくさと逃げてしまうようなものだ。

だが、この世界では魔法スロットにステイタスとして刻まれた影響からか？ 地球の言語で普通に精霊へと通じていた。

一五〇フィート四方という広範囲に亘り、ほぼ絶対零度と云える極低温にまで温度を下げて凍結してしまう氷結系高等魔法。

【燃える天空】や【千の雷】に匹敵する古代語魔法（ハイエンシェント）。

本来ならこれに付随し、【おわるせかい】と【こおるせかい】のいずれかによつて破碎か凍結かを選ぶ。

だが今回は……

「殺れ、アイズ！」

敢えて、アイズ・ヴァレンシユタインに任せよう。

「目覚めよ」
テンペスト

ユートの言葉に頷くと、アイズも魔法を発動した。

「エアリエル……」

風を纏いて浮かび上がったアイズは、自らの武器たるデスペレートを構えて、閃光の如く突進。

「リル・ラフアーガ！」

ガシャーンッ！

軽快な音を立てながら、気持ちの悪い人を不気味に擬く芋虫を粉碎する。

「Congratulations！」

ユートはモンスターを斃したアイズに祝福の言葉を投げ掛け、地面に降りると残っているであろう魔石の確保へと向かった。

ヴィルガの魔石からして予測は出来ていた訳だが、やはり大きさはヴィルガの倍以上なのは良しとして、色は元来の紫紺色とは異なる色合いをしていた。

「どうした、の？」

勢いを付けていて翔んで行ったアイズが戻って来るなり、訝しい表情……というには無表情に近いけど、兎にも角にもユートへと話し掛けてくる。

「ああ、魔石を回収していたんだけど……ね」

「？ 回収出来たんだね」

「ん？ 破裂させたら魔石もドロップアイテムも溶けて無くなるけど、凍結させて砕いたから魔石は普通に残ったんだよ」

魔石を見せながら言う。

「色が……違う……？」

「そう、ヴィルガ——芋虫もそうだったんだけどな。どうもコイツらは他のモンスターとは毛色が違う」

「……そう」

ロキ・ファミアアでは、基本的に難しい事はフィンやリヴェリアが担当して、他の第一級冒険者は脳筋とまでは云わないが、スルー状態な事もあつてかアイズも『フム』と何か考えてはみたものの、『後でフィンやリヴェリアに相談してみよう』という答えに落ち着いてしまった。

「さて、こうしていても何も始まらない。フィン達と合流をしようか」
「うん」

あのモンスターの魔石はアイテムストレージに入れなかったし、ドロップアイテムも手に入らなかったが故に、名前を確認する事は叶わなかった。

どうでも良い話だが……



「うう……アイズさんが居なくなつてて吃驚したんでしょ？」

「うん、ごめんね？」

胸の内で泣くレフィーヤの頭を撫でながら謝る。

既に独断専行に関してはフィンやリヴェリアからの御叱りを受け、テリオナとテリオネからも色々と言われてしまっている。

ベートは特に何も言っていなかったが……思う処はあったらしい。

あのモンスターの魔石は売却した場合、七：三という比率で分ける事に。

勿論、七がユートだ。

ぶっちゃけ、アイズは単に砕いただけでしかなく、居なくても砕く事が出来たのだから当然だし、フィンも寧ろ九：一でも良かったくらいだと言っていた。

とはいえ、こいつは曰く付きの魔石だけに売却が可能かどうか、仮に可能だったとしても変な連中にでも目を付けられたらと思うと憂鬱となる。

「さて、それじゃあ地上に戻ろうか」

フィンの号令を受けて、ロキ・ファミリアとユートは地上への帰路に着く。

ユートとしてももう攻略といった気分ではないし、アイズやレフィーヤやティオナといった綺麗所と一緒に帰った方が嬉しいから、同じく帰る事にした。

何よりも、ヘスティアは兎も角としてヘファイストスとミアハとゴブリニユには小宇宙使用許可の御礼くらいはしておきたかったし、稼ぎそのものは充分だったというのも大きい。

序でに言えば【情交飛躍^{ラブライブ}】の効果も知りたかった。

「間違いなく、十二程度だがティオナのステータスは上がっていた」

「ホント？ リヴェリア」

「ああ、主に力だな。次に俊敏が上がっていた」

「ヤッホー！」

「ロキ……神による更新とは無関係に上がるとはな。然し、スキルは基本的には持ち主の経験値^{エクセリア}や願望などから顕現をするが、彼は何を考えた行ってきたのやら？」

喜ぶティオナを見遣り、溜息を吐くリヴェリア。

えっちな行為に正当性が表れ、ユートによる性交は冒険者を相手に限りステータスを上げる為だと言え、更にはこういう行為が好きだからこそその顕現であり、しかもやってきたのだろうと当たりを付けた。僅か十二と言う無かれ、一発やれば十二も上がるのなら、幾日も掛けてダンジョンに潜り続けるより遥かに効率的な上昇値。

しかもユートは時間さえ許せば、それこそ一晩中でも抱き続けられると言い、つまり一晩で三百くらいは上げられるという事。

更にはステータス上限、S999を天元突破してのSSすら可能らしい。

アイズが知ればロキなど無視してでも、あの美しく夢い肢体を肉の

欲望による宴に投げ出すだろう。

とある理由から強くなる事に忠実で、強くなれるのなら如何なる事すらやり遂げてみせると意気込む程。

それはロキ・ファミリアの参謀役としても、アイズの母親（ママ）役としても、決して見過ごせない所業。

実際に抱かれたティオナの感想は……

「スツゴいスツゴい鮮烈で激しくって、もつとシてたらハマりきっちゃって抜けられなくなるかも！」

真っ赤に頬を染めながらはにかみ、どう見ても既にハマっていますという風情な女の貌をしたティオナ、流石に骨抜きにまでされてはいないが、果たして彼女が言う——『またやりたいなあ』なんて要望を叶えるべきか迷う。

女の貌をしながら無垢な少女の表情をする様になったティオナは、たった一晩で男共が違う視線を向けている程だ。

相変わらず胸はティオネに奪われたと言われて納得する格差だが、ティオナの今の顔はティオネより女をしていた。

「あのティオナを、たった一晩であそこまで変える、変えてしまう……か」

それはきつと空恐ろしい出来事であろう。



ユートは現在、何をするでもなくアイズやティオナ——第一級冒険者達と共に上へ向かって歩いている。

先の一件から更なる深層へ潜る気も失せた事だし、折角だから換金所で魔石やドロップアイテムを換金しようかと思う。

まあ、ティオナ達が曰く魔石だけであるのなら兎も角として、ドロップアイテムは他のファミリアに交渉して売った方が稼げる場合もあると教わり、ロキ・ファミリアが換金に行く際に一緒に行こうという話に。

歩きながらユートは自身のスキルの考察をする。

あの【情交飛躍^{ラブライブ}】は、確かな効果としてティオナにその証を刻み込んでいた。

ステイタス上昇値12、何週間も深層に潜り続けて漸く増える値を、ユートと一発やっただけで上がる。

それこそ、ユートならば一晩で二十発でも三十発でもやれるし、確かに三百を一晩で増やすのも可能だ。

問題は射精の場所。

ユートの感覚的に視て、恐らく外出しは論外であるだろうし、直腸や口内への射精も効力は半減する。

試したい……などと思って苦笑いをした。

こんな風にいつの間にか『やりたい』という思いが先立つ様になり、だからこそヘスティアはあのスキルを発掘出来たのだろうと、自らを理解する。

考えてみればユートは、今までも口八丁手八丁にて色々とやらかしてきた。

レ〇プは嫌いだし、自発的に他人の女へと手出しはしていなかったユートも、抜け道を以て人妻にすら手を出した事もあった。

所詮は精神的な問題で、それさえ解決すれば幾らでも……というのが何とも。

最近でも、正確には最後までやってこそいないが、船穂や美沙樹とも可成りの際どい行為に及んでいる。

勿論だが樹雷皇には内緒であるし、阿重霞や砂沙美になど言えやしない、
マザコン遙照になんて以ての他である。

しかも、そんな内緒行為を向こうから何度も要求してくる辺り、樹雷皇はもう少しだけ性に於いて妻二人を満足させるべきである、なんてアホ過ぎ且つ身勝手な感想を懷いていた。

「暇だからこんなアホな事ばかり考えるんだな」

解ってはいえるのだけど、勇者フィンからロキ・ファミリアを統括する団長として頼まれてもいる。

中層のモンスターは団員の中でも、下位く中堅層の経験値稼ぎをし

たいから、手出しをしないで欲しい——という。

実際、中層にまで登れば第一級冒険者は戦わずに、第三級以下の冒険者が戦いのメインとなるらしい。

まあ、第一級冒険者——LV・5やLV・6ともなれば中層で獲られる経験値なんて、基本アビリティの上昇の役にも立たないのだから、フィンとしてはまだ成長の余地がある団員を押し上げるべく、そうしているのであろう。

指揮すらラウルという、LV・4が執っていた。

だけど今回は何だか少し様子がおかしいというか、第一級冒険者でも若手達が殺気立っている。

ティオナなんて大双刃^{ウルガ}を振り回しつつ、『モンスターは居ねがー』とかナマハゲみたいに瞳をガラガラさせていた。

多少とはいえステイタスが上がったから試したい、そんな気持ちが犇々と伝わってきている。

本当に多少だから試す程の効果はあるまいに。

「ああもう、まだまだ行けたのに！　ちつとも暴れ足んないよおおつ！」

如実に語るティオナ。

ティオナが辟易としてはいても、本人がまだまだだと言わんばかりの闘志。

胸の大きさに差はあれ、根本的にアマゾネスであり双子なのだろう。

アイズがリーネとかいうサポーターを気遣うけど、ベート・ローガが『そいつらに構うな』と超実力主義者らしい科白を言う。

確かに、上に居る存在がそれを示し続けるのは義務と云えるが、ベートは少しばかり過剰なくらいだ。

第一七階層。

階層主はユートが斃しているから、インターバルが二週間程あった。

斃して既に幾日か過ぎ、今からなら一週間か其処らで復活する筈。階層主が湧出する場から少し離れると、牛^{ミノタウロス}面がワラワラと沸いて

出てくる。

「出たな牛面」

数が数なだけにユートは腰に佩いたエリユシデータを抜剣し、ミノタウロスに対して構えてみせる。

「リヴェリア、この数だし構わないだろう？」

「ああ、多少は間引かねば下の者には厳しいからな。ラウル、フィンの言い付けがある。後学の為にお前が指揮を執れ」

「はいっすー」

指名されたラウルは指揮を執って後に彼ら、忍ぶ処か暴れそうな三人を見遣って声を掛けた。

「御三方、中層では下の者に経験を積ませるのが規則なんですから、空気を読んで下さいね？」

「了解、理解、解ってる」

「ええ、理解してるわよ」

「^{ステゴ}獲物無しだ、ハンデくれーやらねえと」

殺る氣に本氣な三人に、知らずラウルのHPゲージが下がっていく氣が……

そして数分も経たない内に逃げ出すミノタウロス。

「つて、逃げた？」

「おい、てめえら化け物だろうがよ！」

ティオナもベートも驚愕してしまう。

「いかん、追えお前達！ パニック状態のモンスターが何を仕出かすか解らん」

リヴェリアが叫ぶと同時に駆け出す第一級冒険者、そしてレフィーヤ。

同じくユートも氣による身体強化を施し、彼らと共にミノタウロスを追う。

上層へ上がる階段を上へ上へと往くミノタウロス、ベート曰く雑魚が群れている上層に、中層のモンスターが現れては拙い。

一匹一匹を殺しながら、確実に追い詰めていく。

上層部・第五階層。

ラスト一匹の筈だけど、そうになると広いダンジョンでは中々に見付からない。

アイズはキョロキョロとミノタウロスを捜す。

「おい、ベート。臭いとかで捜せないか？」

「俺は犬じゃねー！」

「狼は犬科だ！」

「ぶっ潰すぞゴラァ！」

言い合う中でもベートは自らの役割を果たしていたらしく、すぐにもミノタウロスの居場所に気付く。

「チツ、こつちだ！」

言われた通りに臭いを嗅いで捜した訳で、やっぱりちよつと納得がいかないと目が口程に語っていた。

「よし、アイズ！」

「了解……」

三人で急いでいると……

「う、うわあああつ！」

何と冒険者らしき誰かがミノタウロスに追われて、悲鳴を上げながら逃走しており、脚が縛れたのであろう引っくり返る。

「なっ！ 新米だとおおつ!？」

慌てるベート。

「アイズ、僕が彼を護る。君はミノタウロスを！」

「ん！」

デスペレートを片手に、アイズがミノタウロスへと駆け寄っていく中、ユートは白髪に紅瞳な少年の目の前に立つ。

これが私の全力全開！ 変な幻聴が聞こえた気がしたユートは頭を振って行動開始！

「結晶障壁！」

ガギイイッ！

ネイチャーウェポンによる攻撃は障壁とぶつかり、そのエネルギーはミノタウロスへと跳ね返る。

『ギャアアッ！』

踏鞴を踏んだミノタウロスが見せた隙、それを見逃すアイズ・ヴァレンシュタインではない。

「ハアッ！」

その瞬間、何度も放たれた斬撃はミノタウロスを細切れにしてしまう。

バラバラ死体となってしまったミノタウロスの血液が降り注ぐが、結晶障壁を赤黒く汚しただけで被害は特に受けていない。

「……大丈夫？」

腰でも抜かしたのか？ 壁に寄り添って座り込んだ少年に、アイズが手を差し伸べるのだが……

「だ！」

「だ？」

「だああああああああああああああつ！」

真っ赤になってエコーを放ちつつ、当の少年は一目散に逃走してしまふ。

ベートが然もおかしそうに腹を抱えて、可愛らしくアイズは膨れっ面となる。

これがユートにとってもアイズにとっても、白兔とのファーストコンタクトとなるのであった。

第12話：黄昏の館に帰るのは間違っているだろうか

最後の最後でトラブルな道中記っぽくなっただけ、取り敢えず下級冒険者には被害が及ばなかった事へは素直に喜び、摩天楼の螺旋階段を昇り切る一行。

「やれやれ、やっと戻ってこれたか……」

「ああ、上層にミノタウロスを逃した時は焦りを覚えたが、何とか殲滅も叶ってホツとしたよ」

「そうじゃのう。ユートも頑張ってくれたし、助かったわい」

LV・6のロキ・ファミリア最高幹部と首領による三人の話し合い、地上へと戻れた安心感やはりこの三人を以てしても感じてしまうものらしい。

「さあ皆、帰ろうか。僕達の【黄昏の館】へ」

フィン・デイルナからの号令を受け、ロキ・ファミリアの面々は摩天楼施設——ダンジョンの蓋とも呼べる天を衝く白亜の塔を出ると各々、漸くストレスから解消されたのだとばかりに開放感に満たされていく。

「あ、待ってくれないかなユート」

「うん？ 僕も帰ろうと思ってるんだが……」

「折角だし、うちのホームに御招待したくてね」

「黄昏の館とやらに？」

「ロキに紹介をしたいし、あつちで僕を怨めしそうに睨むティオナが居てね」

成程、これでユートだけ別の方向へと帰るというのはKYだろう。「それにしても、人つてのは変われば変わるもんだ。あの花より団子なティオナが男に執着だからね」

苦笑いのフィン。

「いったいどんな手練手管で籠絡したのやら」

「一回、抱いただけだよ。とはいえ……僕がイクまでに三回はイカせたからね。存外と快楽にハマったんじゃないかな？」

「ふむ、つまりは下半身によるテクニックでかい？　僕には真似が出来そうにはないね。いざという時には使いたいけど……」

「ま、すぐに帰らなけりやならない訳でもないしね。御招待に与ろうか」

「助かるよ。序であの子の相手も頼みたいね」

視線の先にはティオナ・ヒリュテの姿。

元々、ヒリュテ姉妹とはアマゾネスの変わり者だと自らでさえ認識しており、種族の本能とも云える男を求める気持ちが無かった。

勿論、生まれ付き持ち合わせていないのではなく、そういった気持ちが喚起されないに過ぎない。

事実、姉のティオネ・ヒリュテは他ならないフィンに惚れ込み、色々と熱烈なアタックを仕掛けている。

ティオナも相手に恵まれなかっただけで、その気になったら恐ろしいまで執着を見せていた。

その証拠に、黄昏の館へユートが来ると知ってからのティオナの喜び様、腕を組んで先々と進む。

「フム、確かに変わった。それはレフィーヤもだ」

「リヴェリア、それはどういう意味だい？」

「見てみるフィン。彼女の視線の先には彼が居るし、ティオナと腕を組んでから百面相をしているぞ」

「……えっと、レフィーヤにも手を出したのかな？」

「いや、そういう訳では無い様だな。どうもティオナと彼との情事に聞き耳を立てていたらしいし、何より抱き抱えられた時に一切の拒絶感を感じなかったと、本人から聞いたのだ」

「へえ？」

この世界のエルフとは、排他的過ぎるくらいがあつて肌に触れるだけにせよ、激しく拒絶する。

レフィーヤの住んでいた森は、流石に其処までではなかったからか多少は融通が利いていた。

それでもエルフ。

そんなレフィーヤだが、ファミリアの人間でもない初対面の異性、

そんな相手に無遠慮なまでに触れられながら、まったく気にならなかった上に王族^{ハリエルフ}より清々しい精霊の気配、エルフ族として興味は尽きなかったのだ。

しかも情事を見て自分で耽るとか、恥ずかしい処を見せてしまっている。

「ティオナさん、そんなにくっ付いていたら歩き難いじゃないですか!？」

「大丈夫だよ。私達は相性が良いみたいだからね」

「そんな訳無いでしょう! ほら、離れて下さい」

「ふっふん! レフィーヤつてば羨ましいんだ?」

「なっ! そ、そ、そんな事はありません!」

「じゃ、別に良いじゃん。私とユートがどうしていようとさ」

更にギュツと組んだ腕に力を籠める。

残念ながらナイチチ属性なティオナでは、どれだけ力を籠めてこようと胸の柔らかさを堪能は出来ない。

だけど、程良く鍛えられた褐色肌な肢体、その柔らかさと温もりは楽しめた。

「ほら、喧嘩してないで。何ならレフィーヤもくっ付いてみるか?」

「へ? あの、そのう……宜しくお願いします」

真っ赤になりながら頷くレフィーヤ、ティオナとは反対側の腕に組み付く。

エルフとはいえティオナより肉感的で、ふにょんと美乳がユートの腕を沈め、レフィーヤの温もりが腕に強く感じられた。

そんな様子をリヴェリアは苦笑いを浮かべながら、然しまるで娘が彼氏にくっ付く様を見ている母親みたいに優しい表情でもある。

「意外だね」

「何がだ、フィン?」

「レフィーヤはエルフ族としては潔癖症な部分が薄いけど、それでも出逢って間もない異性を相手にあれだけくっ付くなんてね」

「確かに。だが、レフィーヤの気持ちが理解出来ないでもないのだよ」
「へえ、その心は?」

「彼が漂わせる濃密な精霊の気配、それにまるで多くのエルフと肌を合わせたのではないかと思われる程、心地好い感覚。私だとて、レフィーヤ並に若ければなとも思うよ」

ロキ・ファミア初期のメンバーであり、フィンやガレスと共にファミアで最高位のレベル持ち、彼女は見た目は二十代中盤でも通ずるが、実際はもっと年齢が高めである。

フィンが実は四十路というのも冗談にしか聞こえないが、リヴェリアはエルフなだけに顕著だった。

「ティオナもすっかり参っておるのお」

「一回だけ抱かれたけど、よっぽど良かったのかな」

ガレスの言葉にフィンが苦笑いと言う。

高が一発、然れど一発。

下手くそが調子に乗っても白けるだけだが、極上のテクニクで相手を腰砕けにしてしまえる輩も居る。

ユートは大元の世界では「とある理由」から、童貞の俣で死んでしまったが、前世と前々世では可成りの経験をしていた。

二番目の相手に酷評されたが故に、彼女と再会したらその時こそ満足させたいという欲求もあり、愛しい相手を存分に味わったものである。

因みに、初めての相手の時には男として最も恥ずべき大失態を犯した。

その苦々しい経験こそ、今日のユートのセ〇クス・テクニクを支えている要因。

尚、二番目の相手であるエセルドレーダに対して、再会した際には及第点こそ頂いたが、まったくの余裕な態度からまだまだであると理解させられている。

まあ、再会したのは再誕世界で過去に跳んだ時期、一九九二年の事だからそれ程にテクニクが向上していない頃だし、今なら或いは満足させる事も可能かも知れないのだが……

何しろ、相手は数十年の単位を数億……下手をすれば数兆すら越えるループを過ごした存在、大十字九郎並の二ト口砲を備えている彼の

獸殿との閨の回数、更に数倍にも及ぶ筈。

とはいえ、ユートは彼の二代目を襲名したからにはそれが睦事とはいえ、敗けるのは悔しい。

だからこそ、小賢しいが弱点を自らの分身で直接的に責め立てるなど、色々と女性を悦ばせる方法を考えてきたのである。

時々、自分は半生を費やしてナニをやっているのかと自問自答をしていたりもするが、概ねは上手く成功しているから複雑だった。



迷宮都市オリオに於ける北方のメインストリートからやや外れた位置、其処こそ神口キが拠点として構える【黄昏の館】の場所。

ロキ・ファミリアは漸く此処へ歸つて來た。

「おつかえりいいいいいいいいいつつ！」

館の門が開かれた瞬間、赤毛に絶壁な糸目の女性？ が女の子に飛び掛かる。

勿論、ティオネもアイズも簡単躲したし、ティオナも一時的にユー
トから離れて避けてしまう。

冒険者としてはまだまだなレフイーヤは、オロオロしながらユートの腕に胸を押し付ける様にギューツと抱き締めて、女性の襲来に思わず目を閉じる。

フワツ！

行き成り身体が浮き上がった感覚に戸惑うが……

ドガンツ！

「ぎやびりいーん!？」

壁に激突する音と共に、女性の悲鳴？　が上がつたので恐る恐る目を開く。

「は、はわっ!？」

否応なしに自分の現状を知り、頬を真っ赤に染めて変な悲鳴をあげた。

所謂、お姫様抱っこ。

細身だと思っていたが、意外な程に鍛えられた筋肉を持つ腕が背中と脚を支えており、硬い胸板に左側の身体が押し付けられ、顔は吐息が長いエルフの耳に掛かるくらい近い。

否、実際に熱い吐息が掛かって耳を擦る。

異種族の異性がこんなに関近なのは初めての経験であつたし、それが興味津々な男の子だったりするのだから、レフィーヤの胸から心音がドキドキと高鳴るのが自分でも判り、ユートに聞かれたらと思うと更なる紅潮で真っ赤となつた。

英雄譚のお姫様の如く、英雄に浚われないなんていう変な衝動が沸いたけど、流石に頭を振ってそこら辺はリセットする。

此処まで間近に居るから理解も出来たが、ユートの精霊の気配は濃密濃厚過ぎていて、そこら辺の精霊が加護を与えているにしては強過ぎるモノだ。

そしてエルフが無警戒に好意を懐く、王族ハイエルフでさえ例外でなく。

まるでレフィーヤにとつては良く云えばフェロモンであり、悪く云えば麻薬の如く効果だつた。

正確にはエルフにとつてと言うべきか。

胸の高鳴り、子宮の奥がジーンジーンとする感覚、今すぐにでも全てを捧げたくなるくらい強いナニか。

若いレフィーヤは感情の暴発さえ有り得るそれは、ハルケギニア時代には既にある程度は発露していた。

故に、未亡人なシャジャルが夫を失ってからユートに心惹かれ、ハーフとはいえエルフなティファニアも怪しむより受け容れたし、鉄血団結党のファーティマ達とて、最終的にはユートを受け容れている。

ルクシャナだつて婚約者のアリーイーが居なければ、ちよつと怪しかつたのではなからうか？

再誕世界でもハイエルフのテユカやユノに好かれ、ホドリューなど飲み友達なくらい仲が良かったし、某・戦記世界ではハーフなあの娘やハイエルフっ娘と仲良しだつた。

ハイエルフっ娘に特定の男が居なければ、これも怪しかっただろう。

エルフ族との仲は概ね、良好だったのだ。

レフィーヤは目を閉じ、ユートの身体の温もりへと身を任せる。

「痛たたた……ちよい酷ないか？　つーか、レフィーヤを抱っこしてる彼は誰やのん？　入団希望者か？」

「いや、違うよロキ。彼は客人なんだよ」

「客人なあ……」

フィンの説明でチラリとユートを見遣るロキ。

「レフィーヤが堕ちとる様な気がするんやけど？」

「色々あつてね。深層域で会ったんだけど、僕らも助けられたんだ。それと、『カドモスの泉水』を根刮ぎ先越されてね。買い取りの交渉も含めて歓迎会でもしようかと」

「ふーん、LV. 6が三人も居って助けられるとか、何やエライ目におうたか」

「それらも込みで報告をさせて貰うさ。彼のお陰もあつて今回の遠征での犠牲者は無しだ。到達階層も増やせなかったけどね」

「うん、了解や。フィン、お帰りな」

「ああ、ただいまロキ」

とても騒がしい場所で、だけどアイズはこの拠点^{ホーム}は落ち着く。

「アイズもお帰りい」

「ただいま、ロキ……」

ツンツンとアイズの身体に触れて……

「うん、身体がズキズキと痛むなあ？　ちやくんと、安まなあかんよ？」

真面目な目で言うロキ。

今度のターゲットとなるのはリヴェリア、クルリと踵を返してしまった。

ユート以外はリヴェリアやフィンすら気付かなかったダメージに、ロキは割とアツサリ気付いてしまう。

仕方がない神ひとでもやはり神様なのだ、アイズはそんな風に思いつつも、荷運びをしようとするのだけど……

「あ、アイズさん！ 片付けは私らがやりますんで」

「お先にシャワーどうぞ」

「え、でも……」

「良いです、良いんです。順番ですから……ね？」

よそよそしい態度。

急に居心地が悪くなり、ティオナから誘われた事も手伝い、アイズはシャワールームへと向かった。

その後、シャワールームでは裸の少女達がガールズトーク？ に花咲かせていたりするが、ロキの乱入とか色々とおったらしい。

ユートは見えていないが、夜中の客室で寝物語代わりにティオナから聞かされただけである。



「うん、このくらいの価格だろうね」

「カドモスの泉水」を採ったユートから、フィンはこれを買収取る交渉をしていた訳だが、ハツキリ言って今回の場合は利益よりもファミリアの信頼の為に、ユートから買い取る。

この「カドモスの泉水」とは、ロキ・ファミリアがディアンケヒト・ファミリアから依頼を受けた代物、だからロキ・ファミリアが渡せないとなると、手酷くはないがダメージだ。

ディアンケヒト・ファミリアは薬物系のファミリアであり、「カドモスの泉水」は薬品を作るのに適したアイテムである。

だからこそ、恐らく売値となるであろう値段に近い額でも買い取った。

正確には万能薬を二十本ばかり、物々交換的に支払いが行われる。

ディアンケヒト・ファミリアの万能薬は、最高品質で一本が五〇〇

〇〇〇ヴァリスで取り引きされる為、二十本となれば一千万。

それ故に、九五〇〇〇〇〇ヴァリスで必要となるであろう量を引き

取った。

一応、物々交換だとはいえ価格的に五百万の稼ぎ……ではあるが、やはり先に取りられたのは痛い。

残りはユートが自分自身で使うから、何処かに売りに出す心算は無かった。

ユートが客間に案内されていくのを見守り、その後にロキへ今回の件の報告。

ユートに会う前の行動、出逢ってから行動などを細かく報告していく。

「ほう……ドチビントコの眷属やったんか」

ドチビ——ヘステシアの事をロキはそう呼ぶ。

確かに「ロリ巨乳」などと云われるくらい背は低いヘステシア、それに反比例するあの巨乳がロキはム力つくらしい。

「しかし、ドチビントコ以外でもユートや何て名前は聞かんぞ？」

深層域までソロで潜れるんならLV・5 かて高いやろ」

「いや、LV・1だよ」

「は？ 何の冗談よソレ」

「いや、リヴェリアが確認をしているからね。間違いは無い筈さ」

「ちゅー事は、恩恵を得る前からLV・5 相当は固いやろな……古の英雄か？ アイツは」

「英雄並か」

昔はそもそも次々と殺されていたとはいえ、ダンジョンのモンスターに恩恵無しで挑み、故にこそ現在で云う第一級冒険者並な人間も現れていた。

現代では恩恵を与えられるのが常識となり、素では種族的な力しか持たない。

人間も亜人種も。

氣や魔力による強化すらされておらず、だからこそ恩恵だけであの力は逆説的におかしかったり。

「それとスキルだね」

「スキル？ 何や、教えてもらたんか？」

「ああ、【情交飛躍】といってね。有り体に言うと、性行為をしたら相手の基本アビリティを十前後かな？ 強化するらしい」

「ハア？ 何やねん、その面白美味しいスキルは！」

明らかなレアスキル。

というよりも、ユニークスキルと呼んで差し支えは無いだろう。

「ティオナが試したけど、リヴェリア曰く実際に力を中心に上がってたらしい。ロキによる更新無しにね」

「ホホウ？ そらまた……んでか、ティオナがどつか女の顔をしとつたんは」

「……だろうね」

本当によく見ている神、だからこそフィンとしても付いて行ける。

ティオナはやってからであるが、レフィーヤはやる前からあんな調子であり、やったらファミリアを抜けて改宗しかねないな……とフィンは思った。

「恐らく、今夜はティオナが彼の部屋に入り込むよ。邪魔はしない方が身の為だと言っておく。アマゾネスのアレは手に逐えない」

「実感が籠つとるなあ」

ティオネに狙われているフィンとしては、ロキが言う通り実感をしている。

「まあ、そういう事ならな……明日にでも更新して、どんなもんか見てみよか」

尚、翌朝になってシャワーを浴びたティオナのステータスを更新したロキは、三百以上も更新無しで上がった基本アビリティを見てツツコミ叫んだ。

「己らはいつたい、何十発やっとなねん！」

それはきつと、黄昏の館中に飮したと云う。

第13話：少女達の先行きは間違っているだろうか

今夜最後の一発だと謂わんばかりの勢いで、ユートは熱く白濁とした欲望の塊をティオナの最奥で吐き出して、同時にティオナ自身も全身汗に塗れで絶叫し、涙を零しながら快楽に打ち奮えてから、肩で息を吐きながらユートの胸板に顔を埋めていた。

荒い息を整えて二十分か其処らが経ち、真つ暗闇なユートに貸し与えられていた小さな個室に、情事の後の臭いを漂わせながらも、謂わばピロートークというのに花咲かせる。

「え……マジ？」

「ああ、階層主だろう？ 叩いて砕け……じゃなくて、ゴライアスと、白宮殿の骸王ウダイオスと四九階層のバロール。確かに僕は連中を斃しているな」

「だって、ユートってソロだったじゃん!？」

「？ そうだが……」

階層主はその階層からするとシャレにならない程の強さを誇り、普通ならソロで討てる様に甘くはない。

ユートが自分より強い事は認識するが、ティオナもLV. 5で第一級冒険者に数えられ、ロキ・ファミリアの幹部の一人だ。

当然、最初の階層主たるゴライアスを始めとして、骸王ウダイオスやバロールともロキ・ファミリア総出で戦い、そして今を生きている事こそが何よりの証明として勝利してきた。

「確かに私達が遠征をした時に階層主は居なかった。だけどソロなんて……」

「勘違いがあるな」

「え？」

「確かにソロ、冒険者としては個人でのみダンジョンに入り、階層主と闘うのに他の人間は居なかったよ。けど、僕もちよつとした物を持っているね」

「ひよつとしたら魔剣？」

「うん？ 魔剣？」

魔剣——魔法の力を武器に与えた物で、それなりの値段で取り引きされる。

嘗ては海を焼き山を崩した「クロツゾの魔剣」ならば別だけど、オリジナルである魔法には及ばないとされていたが……

「魔剣も持っているけど、そんなチャチい代物じゃないよ。ゴーレムだ」

「ゴーレム？」

「蒼き夜の孤狼アルトアイゼン・ナハト。白き夕闇の騎士ヴァイスリッター・アーベント。強大な力を持つ自立型魔導兵器ゴーレム、正確には、ガーゴレム——ハルケギニアでガーゴイルとゴーレムの特性を足したモノ——と共に闘った」

「魔導兵器？」

「ああ。ゴライアスならばまだしも、骸王ウダイオスとバロールは流石に一人ではキツかったしね」

ウダイオスは斃せなくもなかったが、戦力が在るのに使わないで疲弊してみてもしょうがない。

まあ、バロールもその気になれば一人で往けた。

疲れるからガーゴレムのナハトやアーベントに加えて他にも使ったけど。

小宇宙も使えず魔力や気による強化も無し、それで何処まで戦れるのかを自ら確かめたかったのだ。

元々、強化無しで第一級冒険者としてやっていけるくらいの実力は有ったし、恩恵を得てからはLV・6上位相当の能力も有る。

況んや、氣などを強化で使えばLV・7にも届く。

単純な身体能力だけで。

「へえ、見てみたい！」

「機会があればね」

「むう……」

まさか、こんな場所にて展開する訳にもゆくまい。

剥れるティオナだけど、殊更に不機嫌になる訳でも無く、ユートの

胸板に頬を擦り寄せながら腕を背中へ回して抱き着いた。

「流石に眠たいよ……」

欠伸をして呟いたと思ったら、あつという間に寢息を立てて眠ってしまう。

総回数にして二十六回。

十二時頃から午前三時までの約三時間、休憩も碌すつぽしないでやり続けたからティオナと云えど体力的な限界が来たらしい。

ユートは分身がまだまだ元気なのだが、それは無限にリロードされているのだから当然であろう。

「ま、僕も寝るか」

ティオナの程良く鍛えられていてしなやかな肢体を抱き締め、ユートも欠伸を一つして目を閉じた。

こうして抱き締めてみると解るが、一人一人で肢体の感触は随分と異なる。

ユートはこの違いを感じながら抱くのが好きだ。

そして夜が明けた。

とはいえ、今は午前六時というユートが眠りに就いてから三時間程度。

黄昏の館の庭へと出て、ユートはアイテムストレージから妙法村正を出すと、鞘から抜き放って素振りを開始する。

ちよつとしたランニングと準備体操、軽めの素振りなどは体調を整える為に、出来る時間がある場合には必ずやっていた。

「ユート、早いね」

そんなユートの許に現れたのは、長い金髪に金瞳で白い服を身に着けた美少女……アイズ・ヴァレンシユタインである。

「おはよう、アイズ」

「うん、おはよう」

薄く笑みを浮かべつつ、ユートの挨拶に応えた。

手にした愛^{デスベレト}剣を抜剣、ユートとは異なる振り方でアイズも軽く素振りを始める。

「ユートも……鍛練？」

「つて、程じゃないかな。時間があれば朝から体調を整えるのに運動をしているだけだし、本格的な鍛練って訳じゃないよ」

「……そっか」

納得したのか、素振りに戻ったアイズを見つめて、再びユートも素振り。

良い具合に解れた身体、村正を納刀してストレッチを始めた。

「ねえ、ちよつと戦ってみようか？」

「アイズとか？ そいつも少し面白いかもな……」

デスペレートをユートに対峙をして構えたアイズ、ユートもニツと口角を吊り上げると、妙法村正をアイテムストレージに仕舞うと新たに出すは黒き魔剣——エリユシデータを構える。

「それじゃあ」

「うん、始めよう」

ダンツ！ 互いに脚を踏み出すと瞬間的に接敵し、ユートのエリユシデータとアイズのデスペレートが、甲高い金属音を鳴り響かせて十字に鏢迫り合う。

更なる瞬間に、お互いが離れて次の瞬間には又もや鏢迫り合い、刃を幾度幾度と重ねて周囲に剣撃の音を響かせていた。

ユートの流派——緒方逸真流の剣士は剣による戦いを刀舞と呼ぶ。

これは正に刀舞^{ソード・ダンス}。

「はああっ！」

「ふっ！」

元よりユートは手数にて勝負する緒方逸真流の使い手なれば、アイズの選択は誤りだったと云えよう。

そして、一撃に懸ける重さもまた緒方逸真流の極意なれば……

ヴォーパルスドライブ
「奪 命 撃！」

刹那のバックステップ、其処から縮地法による最接近からの突き——単発重攻撃である奪 命 撃だ。^{ヴォーパルスドライブ}

咄嗟にデスペレートの刃を寝かせて受け止めたが、その勢いは殺せなかったとみえて、脚の踏ん張りが利かずに後ろへアイズが圧されていた。

ドンッ！

「ぐっ！」

黄昏の館の壁にぶつかって罅を入れ、漸く止まったものの背中に手痛いダメージを受けてしまうアイズ。

「止まったと安心はしない方が良いな」

「——え？」

いつの間にかユートの手にはもう一振り、白い刃の剣が握られている。

闇祓う白き剣【ダークリパルサー】だ。

スターバースト
「星光」

拙い！

アイズがそう思った時には最早遅かった。

ストリーム
「連流撃！」

L V・5の第一級冒険者たるアイズの目を以てしても尚、見切れはしない怒濤の二刀連撃が襲う。

これが本来の使い手であればまだ見切れたろうが、生憎とユートはこの連撃に慣れており、何より生身でも充分に逸い。

息も吐かせぬ十六連撃。

ガキン！

デスペレートをはね飛ばされ、首筋に【ダークリパルサー】を突き付けられてしまったアイズは、敗けを認めてホールドアップ。

「……参った」

パンパンパン！

拍手の音にアイズが驚きながら振り向くと……

「フィン？」

ロキ・ファミアリア最強のフィン・デймナが岩へと座り、笑顔で手を叩いている姿が在った。

全く気付いていなかったアイズは、それこそ目を見開いて驚いている。

「で、どうだった？」

一方のユートはフィンが居た事に気付いていたか、驚く事もなく瞑

目をしながら訊ねる。

「どうやら此方に気付いていたみたいだね。気配は消していた心算だけど?」

「ああ、だから気付いた」

「へえ?」

「世界には生き物だけでなく、遍く全てに気配というものが存在する。其処で気配を消すとその場だけが気配の空白を生み、違和感を生じさせるものなんだ。だから解るのさ」

「成程、気配を消したのがそもその間違いか」

「穏行なら気配を消すんじゃない、周囲と同化をするのをお勧めしよう」

「忠告、痛み入るよ」

フィンは苦笑いをする。

ユートは座り込んでしまったアイズに手を貸すと、引っ張って起き上がらせながら再び訊ねた。

「で? フィンの目から見てどうだった?」

「スターバーストストリームだったかい? もの凄い連撃だね。まさかアイズが手も足も出せない俣で、敗北を喫するなんて」

「フィンなら見切れた?」

「どうかな、僕にも見切れなかった可能性は高いよ。何よりさっきのは本気じゃなかっただろう?」

「そりゃ、敵でもないのに『本気』で潰しに掛かったりはしないさ」

ガン!

アイズはショックを受けてしまう。

自分は可成り本気だったと云うのに、ユートは全く本気ではなかったのだ。

確かに『本気』の殺意を懷いた訳ではなく、何より虎の子の『エアリエル』を使ってもいない。

だが、それを云ったならユートも魔法を使っていた訳ではなかったし、未知の何かを持っている可能性だってある。

全力全開手加減無しでとまではいかなかったのだ、アイズもユート

もお互いがお互いに。

それでも解る事がある。

ユートは強い、少なくとも自分よりずっと。

それは自分では不可能な第五一階層への単独走破、これを成し遂げた事からも明らかだろう。

「あの十六連撃よりも上は在るのかい？」

「ん？ これは元々が他人の技の模倣だからちよつとアレだけど。光環連旋撃ジ・イクリプスっていう二十七連撃の奥義が在る」

「それはまた……」

二十七連撃——光環連旋撃ジ・イクリプス。

どうやら、やはりというべきかユートも全力という訳ではなかったらしい。



朝、爽やかな日差しが窓から入ってくる中で、然し爽やかとは程遠い濁り切った瞳の、十五歳にあるまじき形相をした少女がベッドに踞っていた。

ロキ・ファミリアに於ける第二級冒険者、エルフ族のレフイーヤ・ウイリデイスである。

「ね、眠れなかった……」

これというのも、ユートとティオナが昨晚はずっと同衾している筈で、気になって気になって仕方がないからだった。

強い精霊力を漂わせて、エルフを惹き付ける某かを纏うユート、そんなユートにモンスターから救われ、まるで英雄譚に登場するであろう、英雄とお姫様みたいなシチュエーションにて抱き締められ、恥ずかしかったけど何と無く喜びすら感じていたが、そんな彼がティオナと行き成り関係を持った事が不満だったし、後からスキル関係の実験だと教えたものの、やはり納得がいかない。

黄昏の館に戻ってからティオナは積極的にユートへと絡み、まるでもう恋人か何かの様なくつつきつ振りを見せ付ける。

そして実験の続きと称して再びユートの寝床に突撃をして一晩……ティオナが自分の部屋に戻る事は結局無い俤に朝となった。

「ハア、今日はアイテムや魔石を換金しに行く日……サボる訳にはいかないし、起きないと」

ゴソゴソと布団から出たレフィーヤは、装備を整えて洗面所へと向かうと顔を洗ってサツパリする。

「ふう。そういえば結局、ティオナさんはどうしたんでしょ？」

ユートさんの部屋で寝たのは判りますけど、もう自室に戻ったんでしょうかね？」

やはり気になりつつも、アイズが朝の鍛練をしている筈などと、レフィーヤはいそいそと庭へ出た。

「あ、アイズさん……っっていうかユートさんも？」

思わず隠れてしまう。

「ねえ、ちよつと戦ってみようか？」

「アイズとか？ そいつも少し面白いかもな……」

二人の会話を聞いて驚くレフィーヤ。

その直後の模擬戦を一通り観て、レフィーヤは二人の戦闘力に驚きを隠せないでいた。

目で追う事すら困難で、さつきまでの浮わついていた気分が吹き飛ぶ。

「す、凄い……」

レフィーヤは魔法使い、故に剣士として動くアイズみたいな戦い方はしない。

だからといって、接近戦が出来ないというのは問題な訳で、目を凝らして二人の模擬戦を観ていた。

殆んど解らないけど。

何しろ、全くと云つても過言ではないくらい見えないのだから。

アイズはスピード型ではあるが、どちらかと云えば力押しタイプだと剣には素人なレフィーヤも理解をしていたが、ユートも同じスピード型なのにアイズとは異なるタイプ。

その程度には解った。

ユートはアイズの攻撃を往なし、その反動を速度に乗せて反撃をしている。

その後は寧ろ逆に力押しとしか思えない連撃を繰り出し、フィンが現れて模擬戦も終わりを迎えた。

よく解らない戦いだっただものの、レフィーヤにとって憧れのアイズと互角以上に戦えたユート、普段なら敵意すら懐きそうなのに、今のレフィーヤはユートに見惚れるのみ。

「アイズさんとあれだけの戦いが出来るなんて……」

仮にこれがまだユートが識らない後輩の白兎なら、完全に敵意しか浮かばなかったかも知れないが……

「さて、それじゃあ朝食の時間だから食堂に行こう」

フィンの言葉にハツとなるレフィーヤは……

「レフィーヤ、いつまでも隠れてないで行くよ」

ユートに声を掛けられて愕然とした。

「つて、バレてる？」

未熟なレフィーヤ故に、フィンすら隠れ切れなかったユートに対し、凡そ隠れ仰せる筈もないのだ。

洩々、出ていく。

「うう、ユートさんは本当にL V・1ですか？ 私、自信がガリゴリと削り取られているんですが……」

元々、殆んど無い自信ではあっても、L V・2からロキ・ファミリアに入団してL V・3にランクアップをしたレフィーヤはなりに自信は有った……筈。

それが、冒険者になつて一ヶ月足らずのL V・1たるユートは、そんな自分を遥かに凌駕をしている。

最初の能力が高かったとは聞いたが、【神の恩恵】^{ファルナ}も無しで英雄染みた能力を持つなどとても信じられない話。

だが、レフィーヤからすれば王族たるリヴェリア・リヨス・アールヴは元より、憧憬の対象であるアイズ・ヴァレンシユタインまでがユートから背中を見せられ、其処に刻まれた神聖文字^{ヒエログリフ}を読んで判断した。

間違いなくLV・1。

数値も初期ステータスとしては高いが、そんなにも特別なものではない。

スキルと魔法に関してはおかしいけど。

リヴェリアもレフイーヤも魔法関連はバグっているのだが、ユートはそれに輪を掛けていると思われる。

リヴェリアの【^{ナイン・ヘル}九魔姫】やレフイーヤの【^{サウザンド・エルフ}千の妖精】の二つ名が示す、本来は魔法スロットの限界数たる三つの魔法を越えて使える二人。

特にレフイーヤ、エルフの魔法であるならば詠唱文と効果を完全に把握して、対象の魔法と召喚分の精神を支払えば扱えるという、正に反則レベルの力。

だけど、それでもルールに抵触してはいない。

飽く迄もその魔法個体を使えるが故なのに対して、ユートの魔法は群としての魔法と云えた。

明らかにおかしい反則もいい処。

まあ、ユートはオラリオの……この世界の理からは外れているのだが、それはレフイーヤに窺い知れない事実であろう。

そしてファミリアの主神ロキの部屋、其処から途徹もない絶叫が上がった。

「な、何やのこれえ!？」

「どうしたの?」

「どうもこうもあるかい! 確かにドチビン所の^{こども}眷属のスキルについては聞いたつたが、更新無しで三百オーバーってえ……ティオナ、己らいつたい、何十発やっとなねん!」

名前：ティオナ・ヒリユテ

所属：ロキ・ファミリア

種族：アマゾネス

職業：冒険者

力：A889+120

耐久：A 8 6 7 + 6 0

器用：B 7 7 8 + 3 3

俊敏：A 8 0 1 + 1 1 8

魔力：I 0 + 0

強化数値：+ 3 3 1

【発展アビリティ】

拳打G

潜水G

対異常H

破碎I

【魔法】

無し

【スキル】

狂化招乱

大熱闘

「しかも、力が一〇〇九つてえ……評価がSSの限界突破とか！」

「嘘、マジに？」

元来、基本アビリティの数値限界はS 9 9 9。

これを数値として越える事は有り得ない筈だけど、事実としてティオナの数値はソレを越えている。

「恐るべし、【ラブライプ情交飛躍】……やね」

これはドチビは兎も角、ユートとは仲良くした方がお得かも知れないと、ロキはトリックスターとしての頭脳を働かせて考える。

「出来たらウチに改_{コンバージョン}宗して欲しいくらいやが……まあ、ウチの眷属とは幸い仲良しみたいやし、無理してうちが嫌われたら元も子も無いな」

ロキ・ファミリアの女性陣は綺麗処が多く、能力の不足からサポートに甘んじる者も居る。

中にはどんな手段を以てしても力が欲しい者だって居るだろうし、上手くやればロキ・ファミリアの強化にも繋がるだろう。

その為ならあのロリ巨乳な「ドチビ」と、ある程度は歩み寄るくらいしたって構わない。

「嗚呼、これや！　これやから地上は面白い！」

因みに、ぶつくさと呟くロキに対してティオナが、不気味なモノを視る様な目を向けているけど、全く以て気付いてはいなかった。

・

第14話：魔石の換金は間違っているだろうか

朝食時、フィンに紹介をされる形で壇上に上がったユートは、本当に短い間ながら供に出来た事へ感謝を伝えると共に、今日の換金にも付いて行く意向を話す事となる。

一緒に行くのはアイズ、レフィーヤ、ヒリユテ姉妹の四人だとフィンが言う。

四人は四様であつても、歓迎をしてくれていた。

また、換金を終えてから遠征後の御約束の宴会にも出る事になる為、その時も『宜しく』と一言。

朝食を済ませた直後に、何人か女の子をロキが集めていたけど、ユートは特に不審には思わずティオナに引つ張られて外に出た。

既にアイズもティオネもレフィーヤも揃っており、準備万端に整っている風情で此方を見ている。

勿論、換金に出かけるであろう面子も集まっているらしく、大勢が中庭にワイワイガヤガヤと騒がしく、これがロキ・ファミリアの御約束だと理解が出来る。

「やあ、遅くなつたね」

後ろからフィンが笑顔で皆に声を掛けてきた。

フィンは小人族であり、故に他の種族に比べてしまうと小柄だが、LV・6でロキ・ファミリア最強たる団長の名は伊達ではなく、全員が直立不動となった。

ダンジョンから持ち帰った戦利品——魔石やドロップアイテムや拾得物の換金というのは、謂わば遠征後の最大イベント。

勿論、消費したアイテムの補充や消耗した武具などの修復は元より、様々な仕事が目白押しなのだ。

しかも最大派閥といった肩書きは伊達でも酔狂でもなく、人数が人数なだけに扱う量も半端ではない為、留守番も居るが団員殆んど総出で街に繰り出す。

それぞれが役割に従い、皆で換金をするのだ。

今回、アイズ達に振られた役割はいつものものだけではなく、ユー
トの案内や換金のやり方初心者編を見せるという事。

他派閥のユートに随分と親切だが、当然ながらロキにも考えあつて
の話。

「みんな〜！ 夜は恒例の打ち上げやからな〜っ！ 遅れんように〜
！」

ロキからの送り出しに応えしゅーっぱーっ、進行！ とばかりに歩
き出す。

目抜き通り——位置的には八本が存在する中でも北西のメインスト
リートへと出ると、通称【冒険者通り】を全員で進んでいった。

有名ファミリアの進行、それは多くの者が目撃をするし、ヒソヒソ
と遠巻きに見ながら話もしている。

「う〜ん、何かやだな……こういうのって。ベート辺りなら喜びそう
だけど」

「ベートとて其処まで下品ではないぞ、ティオナよ。アヤツはアヤツ
なりに第一級冒険者として矜持と自覚がある」

「ええ？ うっそだー！ ガレスっては何でベートの肩を持つの？」
「蔑むのと増長して傲るのは違う。少なくともアヤツの中ではきっち
り線引きが為されておるらしい」

「意味解んないよー」
「少なくとも、ベートには強さに関する拘りつてのが有るみたいだよ」

ユートが言う。
「そうなのかな？」

現在、ベートは本拠地で雑用を押し付けられて待機をしている処
だ。

そんなベートの話題を挙げつつも、ユートを含めてロキ・ファミリ
ア一行は、白い柱で造られた荘厳なる万神殿パンテオンの前庭にまでやって来
た。

ギルドの本部なだけに、佇まいは立派なもの。

ユートも登録やら何やらで何度か訪れてるのだが、目的は基本的に
エイナ・チユールと会う事。

美人なハーフエルフで、仕事も有能らしい。

何故かユートは妖精種族——殊更にエルフ族関係やドワーフ族から好意を寄せられ易いらしく、ハーフとはいえエルフのエイナからも軽い好意を感じた。

レフィーヤの時みたく、直接的な某かをしなければ

それ以上の関係にはならないだろうが、ユートとしてはそういうのもアリかなうとは思っている。

彼女の持論には閉口してしまうけど。

その昔、ハルケギニアの時代にユートはアルビオン戦役の後に、冒険者が稼ぐ為と仲間を鍛える為に自らがダンジョンを構築して、それを使つてのレベルアップに励んだもの。

トリスティン王国の隅、決して人里に近くない場所であり、ダンジョンの内容は地下百階層にも及んだ。

一階層の広さは空間湾曲技術も使い、この世界に於けるダンジョン並には拡がりを見せていた。

モンスターは地下一階層から地下十二階層までは、ハルケギニアの魔獣や亜人——オーク鬼やトロール鬼やオーガーやミノタウロス——などを転移させて湧出、十三階層以降は別の世界のモンスターなどを転移召喚するシステムを構築して、様々なモンスターが蔓延る凶悪なダンジョンと化す。

まあ、余りにも凶悪が過ぎたらしくてギーシュ達は最初、泣き叫びながら這う這うの体で逃げていたりした訳だが……

もう遙かな過去の話だ。

それから二度の転生を経ており、相対的には数百年を越える時間が経つ。

あの頃の者は閃姫契約をした娘達以外、もう存在もしてはいないのだ。

それが少し寂しくて。

「僕とリヴェリア、ガレスは魔石の換金に行く。此処からは各々の目的地向かってくれ。換金したお金はどうかちよろまかさないでくれよ？　ねえ、ラウル」

「あれは本当に魔が差しただけっす！ 本当にあれつきりですよ、团长!」

「はは。じゃあ、一旦解散をしようか」

こうしてロキ・ファミリアは解散して、それぞれの目的を果たすべく動く。

ユートも先ずは魔石の方を換金するべく、フィン達に続いて換金所へと向かう事となった。

勿論、一時はアイズ達もフィン達と一緒にである。

「ふむ、此処が換金所か」

職員が座り、カウンターが設置されている。

どうやら現在は冒険者が換金中らしく、どんな感じかを見学してみる事に。

「待てよ、こんだけな筈がねーだろ？ もっぺん数えてみるよ!」

「どう言われようとこの額に変わりありませんよ」

「ふ、巫山戯んなよ!? これじゃ……クソ!」

修羅場つていた。

「何だあれ?」

「ああ、ソーマ・ファミリアの団員だよ」

ティオナがユートの疑問に答えて教えてくれる。

「ソーマ・ファミリア……つまり、神ソーマの派閥。ソーマって神酒の事か?」

ユートがパツと思い出せるのは、「真・女神転生」などに出てくるアイテムの「ソーマ」だったり。

大元はインド系神話に於ける飲み物で、ゾロアスター教の「ハオマ」と起源を同じくする。

ソーマは神格化されている筈だから、確かにソーマという神がこの世界に存在してもおかしくない。

何故ならこの世界の神は地球の神々と同じ名前を持っており、ある程度であれば似た関係を持つ神も居るみたいだから。

例が神ミアハと神ディアンケヒトだろう。

これはミアハから聞いた話だが、どうやらディアンケヒトとは仲違

いをしているのは確からしい。

果たして彼らが地球みたいな親子かは知らないが、そういった事象も加味されているのだ。

「随分と必死だな」

「よくは判らないんだけどねえ？　何かソーマ・ファミリアの連中つて稼ぐのにすつごい必死なんだよ」

「だから、ああやって食い下がるみたいね」

「成程……」

ティオナとティオネは、どうやら彼らソーマ・ファミリアの無様にも見えるだろう必死さに辟易しているらしく、嘆息しながら白けた瞳で見ながら説明する。

ユートからしても少しばかり不愉快だったが、人はそれぞれで違う……異なる視点に立って行動するのだと割り切って、見学を止めると別の空いたカウンターへ向かう為に歩く。

フィンもリヴェリア達とカウンターに向かった。

「そういうやさ、ユートって荷物とか持っていないけど、換金する魔石やドロップアイテムは？」

「ああ、ちゃんと持っているから心配は要らないよ」

「そう？」

まあ、実際にもユートはモンスターをこれでもかと斃しまくっていた訳だし、それでも荷物を持っていなかったから、何らかの手法で荷物を持っているのだと考えるしかない。

「スキルかな？」

「訊いてみたら？」

「そだね」

身も蓋もないティオネからの提案に、考えるのが少し苦手な肉体派のティオナはあっさり頷き同意した。

「ねえ、ユート？」

「うん？」

ティオネなら未だしも、ティオナが腕に組み付いても柔らかな双丘は無く、ただど程よく鍛えられている肉体のしなやかさには、ユ―

トも満足をしながらも問い掛けに応える。

「ユートの荷物って結局、どういう理屈で運んでるのかなって思ってたさ」

「ああ、魔法だよ。創作魔法の『ステータス・ウィンドウ』と云ってね、恩恵によるスロットとは無関係に扱えるモノなんだ。更にはフルスペックで制限解除、だから僕は無制限に魔石やドロップアイテムを身軽に運べるって訳だ」

正にサポーター要らず。

「え、ナニソレ……怖い」

流石に引いたらしいが、すぐに有用性に気付く。

「恩恵と無関係って事は、可成り便利だよな。しかも無制限にアイテムを仕舞えるとか……」

「若しかして、後付けとかも可能なかしら？」

ティオネは肉体派だが、妹よりは頭が切れる。

だから気付けた。

「うん、そもそも『ステータス・ウィンドウ』の魔法は術式をカード化してて、それをインストールし焼き付ける事で、簡単に使える様になるからね」

四人——アイズとレフイーヤとヒリユテ姉妹が一斉にユートの方を向く。

「本当に？」

「ああ……こいつを使えばあつという間に」

「ほしい！」

「……私も」

「確かに便利よね」

「はい」

いの一番にティオナが、次にアイズが欲した。そして、ティオネとレフイーヤも同じ意見。

「百万ヴァリスで最低限のスペックのモノを売る」

「ひゃ、百万……」

「少し、高いね」

別に第一級冒険者であるティオナとアイズならば、百万ヴァリスは高いと云える程でもないが、いつ大金が必要になるか判らないのだから余り不用意には使えなかった。

「最低限……という事は、何段階か有るのね？」

「ティオネ、正解」

「最低限だとどの程度？」

「アイテムは五種類を五つずつ格納可能、お金はだいたい五万ヴァリスくらいを仕舞える。後は魔法に付随したスキルを一つ、付ける事が可能となるな」

「可成り限定的ね。スキルというのは？ 恩恵と関係は無いのよね？」

「無い。僕が編纂してきたスキルが有るから、それを使える様になる。例えば、【疾走】だと走る速度などが習熟度に応じて速くなる……とかね」

基本、SAOやDQなどのスキルが使える。

例えば、【戦闘時回復】バトル・ヒーリングや【火炎斬り】など。

「それは便利ね。フルスペックとやらは？」

「格納が可能な金額及び、アイテム数に制限が無くなるのと、スキル数が二十個にまで増える」

「……後からスペックを上げる事は？」

「勿論、出来る」

ティオネからの質問に、ユートは淀みなく答える。

「それで、フルスペックの値段は？」

「十億ヴァリス」

時が凍り付く。

余りにも余りでべらぼうな価格に、全員が固まってしまったからだ。

因みに、アイテムの自動収納はフルスペックでないと実現はしない。

「貴方のはフルスペックってやつよね？」

「勿論だよ」

暫し考え込むティオネ。

ユートは今の内にと換金をするべく、ギルドの職員へと話し掛けた。

とはいえ、換金が出来る魔石の数がロキ・ファミリア総出並ときては、小さなカウンターで並べるなんて不可能だ……という訳で、別室を用意して貰う。

何のモンスターの魔石で幾つ有るか、それも「ステータス・ウィンドウ」には表示されている為、価値の審査も数えるのもすぐに済んでしまった。

キラアートの魔石など千を越えており、数えるのに一人では難儀をする。

仕方無く職員はロキ・ファミリアの遠征並な魔石を数名で、割かし時間を掛けて数えるしかない。

「後、これらだね」

比較的というのも莫迦らしい大きさの魔石、どれくらいかと云えばそれは小さな子供程の物だ。

「こ、これは？」

三つの巨大な魔石を見ながら、ユートへとギルドの職員が訊ねてきた。

「ゴライアスとウダイオスとバロールの魔石だ」

「っ!? モンスターレックス 迷宮の孤王……」

普通なら単独撃破なんて現実的ではなく、そんな事が出来るのは彼の【猛者】くらいで、次点が【勇者】であろうか？

序でにドロップアイテムも換金していく。

数が余りに多かったし、中には普通なら御目に掛かれないレアアイテムなんかも有り、換金しなかった物を除いても魔石とドロップアイテムで一億ヴァリスを悠に越えていた。

他のレア物なドロップアイテムは、ティオネからの忠告からこれから移動する所で売る事になっている。

「後は……」

どうにも色がおかしい、ヴィルガの魔石だ。

本来、魔石とは紫紺色が普通なのだがヴィルガのはケバいい極彩色。ちやんと換金が出来るのかも怪しかった。

「少し良いかね？」

ヴィルガの魔石を出そうとしたその時——背後から突如として話し掛けてくるフードを被る男？

「別に構わないが、連れが驚くからそういう現れ方はしないでくれるか？」

「ふむ、それは済まない」

悪びれた風でもなく謝罪の言葉を口にする。

「何の用かな？」

「君が持つ特殊な魔石……それを全て買い取りたいのだが、どうだろうか？」

「へえ、随分と良い目を持っているみたいだねえ？ 幾らで買う？」

「通常の三倍出そう」

「良いだろう。此処で出すのは困るのだろうから……どうするのかかな？」

「付いて来て欲しい」

ユートは頷くと……

「アイズ達は暫く待っていてくれないか？」

彼女らへと声を掛ける。

「ん、判った……」

声を掛けられたアイズを始めとして、残りの三人も頷いてくれた。

「それじゃ、案内してくれるか」

「此方へ」

段々と下へ降りている様に感じるが、道は灯りの一つも点されていないから真つ暗である。

それなりに歩いて辿り着いた先には、まるで玉座に座る王の如く巨大な人。

「神……だな？」

「ウラノスだ」

「ウラノス？」

ユートの世界ではギリシア神話体系の天空神。

「フェルズ、この者か？ 彼の魔石を大量にギルドへ持ち込んだのは」

「ああ、そうだよウラノス……本来なら斃せば魔石も喪われる筈が、彼は持ち帰ってしまった。余り出回らせたくはないからね」

「……そうだな。買い取りは任せる」

「判った」

フェルズと呼ばれた黒衣がユートに向き直る。

「魔石を出してくれ」

右腕を振り、ステータス・ウィンドウを展開して、アイテム欄からヴィルガの魔石をタップすると大量の魔石が部屋に顕れた。

「ほう、面白い魔法だな。ふむ……まさかこれ程の数だとはな」

「六三七個だ」

「ふむ……」

フェルズが紙に何事かを書き記して、書き終えたのかそれを渡してくる。

「先程のカウンターの職員にこれを渡せば、君に金を支払ってくれるだろう……何も詮索せずに受け取ってくれ給え」

「詮索はしないさ。だけど質問がある」

「何かね？」

「今後も同じ種類の魔石を手に入れたら、買い取りはしてくれるのか？」

「私の名を呼べば伺おう」

「フェルズだったか？」

「そうだ」

「了解した。それとヴィルガのドロップアイテムの方は普通に換金するのか？」

「そちらは問題無い」

訊きたい事を訊いたら、ユートは手を振りながらもさっさと出口に向かう。

「毎度あり」

そしてアイズやティオナらが待つ換金所へ戻った。

.

第15話：ティオネの商談は間違っているだろうか

結構な稼ぎをウラノスとフェルズを相手に獲た事、それはこれからの暮らしに大いに役立つだろう。

次なる行き先はアイズ達の持つ——ユートが売った——カドモスの泉水を依頼主の許である。

清潔な白一色の石材にて造られた巨大なる建造物、それには『ディアンケヒト・ファミリア』を表す光玉と薬草のエンブレムが飾られており、堂々自らの拠点であると示していた。

「ヤッホー、アミッド！ ひっさしぶりー！」

「いらっしやいませ、ロキ・ファミリアの皆様」

建物に入るなりティオナが右手を挙げ、カウンターに立つ長い銀糸の様に綺麗な髪の毛、まるで精緻なる人形みたいな整った容姿、一五〇Cにも届かないだろうユーキレベルな身長に、紫水晶の様な双眸に儚げな長い睫毛が掛かり、とても美しい少女へ挨拶をする。

アミッドと呼ばれた少女も銀髪をサラリとこぼし、ロキ・ファミリアに対して一礼をしてきた。

「ティオナ、彼女は？」

「アミッド・テアサナーレって名前ですね、二つ名は【戦場の聖女】^{デア・セイント}って云うんだ！」

「デア・セイント……ね。二つ名つてのは、アイズの【剣姫】みたいな？」

「そ、LV・2以上になると神様が考えてくれるよ。因みに私は【大切断】……アマゾンだね」

「だ、大切断と書いてアマゾンって……仮面ライダーアマゾンじゃないか」

アマゾネスだからか？　とも思ったが、アマゾネスはこの場にもう一人。

「ティオネは？」

「ん？　【怒蛇】でヨルムガンドよ」

「ヨルムガンド、ミドガルズオルムの別名か……」

チラリとレフィーヤを見遣ると……

「私は教えましたよね？ あれ？ まだ言ってますでしたか？

【千の妖精】でサウザンド・エルフと、そう呼ばれています……」

恥ずかしそうに頬を染めつつも二つ名を伝える。

否、実際に恥ずかしいのかも知れない。

「……【剣姫】」

「いや、アイズのは間違いなく知っているから」

負けじとアイズが言うのにツツコミを入れた。

一応、フィン・デイルナやリヴェリア・リヨス・アールヴやガレス・ランドロックが【勇者】や【九魔姫】や【重傑】と呼ばれているのは聞いていたが、よもやそれが神々による名付けだとは思わなかった。
「若しかして僕もLV. 2になったら付けられてしまうのか？ 二つ名を」

「はい、そうですね」

割かしあっけらかんと言うレフィーヤ、それだけ当たり前な事象なのだろう。

「因みに、ロキ・ファミリア以外で二つ名の例を訊きたいんだけど……」

「オツケー」

ティオナが知る余所様の二つ名を挙げていく。

羅列されるそれらを聞いたユートは、顔を掌で覆いながら天井を仰ぎ見た。

「痛い、余りにも酷く痛々しい中二病な名前だ」

神々の名付けのセンスが中二病真っ盛りなのか？ 或いは面白可笑しく巫山戯半分になざと付けたのか？

何と無く後者な気がし、ロキやヘスティアに確認を取ろうと決意した。

ユートも権能に中二病も真っ青な名前を付けたが、面白半分で他人にその様な名前を付けて笑い者にするのなら、最早それはユートにとって【討つべき邪悪】と変わらない。

そんな事を考えているとアミッドが口を開く。

「それで、御話し中に申し訳がありませんが。ロキ・ファミリアの皆様がいらしたのは依頼の品を納めに来て下さったと、そう考えて宜しいのでしょうか？」

「あ、ああ！　ゴメンね、アミッド。そうだよ」

ティオナがアミッドからの質問に答えると、ティオナがカドモスの泉水を取り出してカウンターに置く。

「ディアンケヒト・ファミリアから依頼をされていたカドモスの泉水よ。要求量も満たしている筈だから、確認してみて」

冒険者依頼^{クエスト}、それを聞いてユートが思い出すのは前々世の頃の事、自らが生み出したダンジョンに一喜一憂する冒険者。

それに、前世で散々つばら遊んだVRMMO―RPGであるSAOやALO。

他にもザールブルグの事など多岐に亘る訳だが……

「そういうえば、キリト達を連れて来るのも面白いかも知れないって思ったけど、〃コスト的に〃 全員はまだ呼べそうにないな」

今は不可能だろうけど、その内に喚んでみると愉しいだろうと考え笑う。

アミッドが泉水を一頻り調べ、問題は無いと判断をしたらしく再び一礼。

「確かに……依頼の遂行をありがとうございました。ファミリアを代表して御礼を申し上げます。つきましては此方が報酬となりますので、御受け取り下さい」

ユートがフィンから事前に聞かされていた通りで、万能薬^{エリクサー}が二十も用意された。

薬品販売を手掛けているディアンケヒト・ファミリアが販売する中に在って、最高品質を誇るそれらの品は単価にして五〇万ヴァリスはくだらないとか。

二十本で一千万ヴァリスともなれば、間違って落としてもしたら大変だ。

ティオナは暫し考えて、ユートにこっそりと話しを持ち掛けてく

る。

「ねえ、ユート？」

「どうした？」

「貴方、確かカドモスを斃したのよね？ 二頭も」

「ああ、斃したな」

「皮膜をドロップしなかったかしら？」

「しているが……」

ティオネは我が意を得たりと口角を吊り上げる。

「カドモスの皮膜は防具の素材に良いけど、薬品なんかの触媒とかでも良い素材となるわ。私が此処で高く売れるから、上手くやったら報酬として私に貴方のアレ……くれないかしら？」

「アレって、ステータス・ウィンドウか？」

「ええ、どうかしら？」

「皮膜の相場は？」

「数百万ヴァリスね」

結構な高値だ。

「対価を一割としたら少し足りないが？」

「フツ、見ていなさいな。私が一千万ヴァリス以上の値で売って見せるわよ」

自信満々に言うティオネはアミッドの居るカウンターの前に立つと、仁義無き交渉を始めるべくおもむろに口を開いた。

「ねえ、アミッド」

「はい？」

「実はね、探索中に深層で珍しいドロップアイテムが手に入ったの。序でに鑑定して貰っても良いかしら？ 良い値を付けてくれるなら此処で換金するわ」

「判りました、善処を致しましょう」

ユートがアイテムストレージ内のカドモスの皮膜をタップ、ストレージから出してアミッドへと渡す。

「これは……」

「カドモス皮膜よ。運良く手に入ったの」

手袋を填めて渡された物を見定めるアミッド。

防具の素材にして良し、回復系アイテムの素材にしても良しな優秀なアイテムであるが故にか、商業系のファミリアからしたら喉から手が出る程欲しい物。

更には深層の、【迷宮の孤王】を除けば最強クラスのモンスターが稀に落とすレアアイテムという事も手伝って、これ一つで確かに数百万は惜しくない。

「カドモスの皮膜、本物の様ですね。品質も上々」

「そう？　それで買値は幾らを付けてくれる？」

「七〇〇万ヴァリスでお引き取りしましょう」

「フフ、一五〇〇」

何と提示された倍額以上を吹っ掛けた。

それを聞いたレフィーヤが思わず万能薬の入った箱を取り落として、アイズが地面ギリギリで何とかかんとか受け止める。

「お戯れを、八〇〇までなら出しましょう」

人形染みた美貌に陰りは無いが、それでも肩を震わせるアミッドは冷静に百万をプラスした。

「ね、アミッド？　貴女が言った通りでこの皮膜……品質は申し分ないと思っているわ。今までに出回った物より遥かに上等だって自負出来る程。だ・か・ら……一四〇〇」

互いに譲り合っていても妥協はしないのが商談。

行き成りな状況にアイズ達は推移を見守るしか無くなり、とはいえカドモスの皮膜はユートが手に入れたドロップアイテム、代わりに商談をするのは慣れてないユートの為だが、流石に吹っ掛け過ぎである。

「ちよ、ちよつとティオネ……やり過ぎだよ？」

「フツ、ティオナ」

「な、何き？」

「アンタだってまだ慣れないユートの為に何かしたいと思わない？」

「そ、そりや……まあ」

ティオナがステイタスを上げる実験で、身体を許しただけでなく随

分と心をも許しているのは火を見るより明らか、こんな風に言えばティオナは黙ると考え、試しに言ってみたら実際に押し黙ってしまった。

そんな双子の妹を『可愛いものね』と思いながら、アミッドとの商談に手加減無しで挑んだ。

あの魔法……ステータス・ウィンドウとやらは随分と秀逸なものだし、はつきり言ってティオナはこれからの探索に向けてあの魔法が欲しい。

初期段階では大した恩恵も得られないが、取り敢えず自分に実装を試して損は無さそうだと判断。

ならば、この程度の手間は惜しむまい。

実際に初期段階の場合、五種類のアイテムを五個ずつまで格納可能、これは余りにも少ないだろうけど、在るのと無いのでは大きく違ってくる。

例えば第一八層リヴィアの街ではドロップアイテムや魔石の換金が可能だが、可成り足下を見られた価格設定なのだ。

だから少しでも魔石などを地上まで確保したいし、お金も十万ヴァリス程度でも格納が出来るなら、荷物も減らせるというもの。

しかも、行きしなで水や食料をアイテムストレージに入れておけば、それだけでポーチやバッグが要らず戦闘が楽になる。

スキルというのは未知数だけど、それは後で聞けば済む話だし。

「八五〇……これ以上は出せません」

「今回、殺り合った強竜は活きが良くってね、危うく死に掛けたわ。私達が削った寿命の分も加味してくれると有り難いわ。一三五〇でどうかしら？」

ティオナの言い分を聞いたティオナ達、いけしやあしやあと……実際に皮膜を手にしたのは、カドモスと戦ったのはユートであり、ティオナは何もしてない。

まあ、そもそも交渉自体がユートの為だから敢えて口出しはしなかった。

「ふう、私の一存では流石に決めかねます。少々御待ち下さい、ディア

ンケヒト様と相談してきますので」

幾ら何でも、千を越えてしまうとアミッドが動かせるヴァリスを越えているらしく、ディアンケヒトへと話を通す必要を感じた。

とはいえ、それを見逃すティオネではない。

「そう、じゃあ仕方ない。この皮膜は他のファミリアへ持っていきましようか。時間も無いしね」

ティオネとはそれなりに長い付き合い、彼女がそう言うなら間違いなく余所へ持っていくだろう。

アミッドは小さく溜息を吐き、諦めた様な表情となつて振り返る。

「一二〇〇で、それで買い取らせて頂きます」

「ありがとう、アミッド。持つべきものは友人ね」

千二百ヴァリスという、可成りの大金が大袋に入れられてドシヤリとカウンターに置かれ、それをアイズが恭しく受け取った。

「ゴメン、アミッド」

「いえ、足下をみて冒険者依頼を発注したのは此方が先ですので……」

可愛らしく微笑む。

「お互いに痛み分けて手打ちに致しましょう」

それは見惚れるくらいにとっても良い笑顔だった。

元より、アミッドは聡明で心優しい少女である為、治療師として自分達を癒してくれる彼女にアイズ達も心を許している。

そしてアミッドもファミリアという“柵”を越え、アイズ達を信頼していた。

だからこの程度の遣り取りで壊れはしない仲だし、寧ろ、これくらいが丁度良いくらいである。

「もう、次からアミッドと顔が会わせ辛いよ」

「あの子だって理解してくれてるわよ。それに百万を越えなきや意味無いし」

「百万？」

「そ、という訳ではいいこれ……一二〇〇万ヴァリス。一割で百二十万ヴァリスだから、ちよつとオマケしてくれると嬉しいわ」

スツゴく良い笑顔を浮かべて請求してきた。

「仕方がないな。獲得出来るスキルを一つ増やそう」

「それで構わないわ。でもスキルって結局、何なの？ 私達が【神の恩

恵】で獲られるスキルとは別物なんでしょう？」

「まあね。出掛ける前にも言ったけど、僕が編纂したスキルが使える」

【疾走】だと足が速くなるって話だったわね」

「そう。他にもレフイーヤなら【魔力上昇】を取れば魔力値が一・二倍になる」

「うわ、確かに便利です」

【魔力上昇】の効果を聞いたレフイーヤが感嘆の声を上げ、キラキラとした瞳でユートを見遣る。

「他にも【アタッカー】は物理、魔法に拘わらず最終ダメージを一・二倍にするから、レフイーヤのみならずアイズやティオナ達にもわるくない効果だ」

「ふむ、それが二つ……」

「無くても困らないけど、有ったら便利な機能拡張って処だね」

ユートはインストールするカードを取り出し、更に術式への介入を行った。

初期段階の【ステータス・ウィンドウ】にスキル枠を増やしているのだ。

実はフルスペックに於けるスキル二〇とは正確ではなく、単純にスペック別に仕分ける為のもの。

だからこそ、スキル数を増やすのは可能である。

「はい、これがインストールカードだ」

「フフ、ありがとう」

以前にも何度か誰かしら渡していたインストールカードで、よく覚えてるのがギヤスパ・ヴラディにユートの【千貌】を幾つかに機能を分けたその一つ、【女体化】を渡した時。

何しろ、有り得ない反応をしてくれたから。

「すぐに使うなら人気が無い場所へ行こう」

「人気が無い場所？」

「実は、男だと単に内側が熱いで済むんだが、女性の場合は何故か加え

て性的に興奮するんだよ」

「は？」

意味が解らないと謂わんばかりなティオネ、アイズとレフィーヤは顔を紅く染めてしまう。

「インストールの際に内側から熱を持つんだけどな、女性はその奥にオーガズムを感じるらしくてね」

「ふう、それは団長以外の男性に見せられるものではないわね」

取り敢えずは、人通りが無い場所を選んで更に裏側に回しておく。

万が一、誰かに見られてしまわない様に。

「で、インストールってのはどうやるのよ？」

「胸元を開いて肌に直接的に触れてやれば、後は勝手にインストールカードの方で入り込むさ」

「胸元……見ないですよ？」

「はいはい」

後ろを向くユート。

ティオネとしてはやはり団長——フィン・デIMUMナ以外には見せたくないという事だろう。

妹とは違って豊かな胸を外気に晒して、ティオネは手にしたインストールカードを双丘の間に押し付け、カードの認証を待つ。

ズブリ……

「くっ！」

「ティオネ!？」

「ティオネ！」

「ティオネさん！」

アイズ、ティオナ、レフィーヤが声を上げる。

ズブズブズブ……

カードがティオネの体内に潜り込み始めていた。

「ん、うん！」

内股となって太股を擦り合わせているティオネは、ユートが言っていた言葉の意味を理解する。

カードが徐々に入ってくる度に全身を貫く快感は、確かに性的な興

奮だった。

ユートがおかしいと思ったのは、曲がり形にも男の筈のギヤスパ―・ヴラデイが何故か性的な興奮をしていたからだ。

唯でさえギヤスパ―・ヴラデイは男の娘としか言い様が無い顔、それがカードの効果で【女体化】していたからさあ大変。

まだ当時は未熟であつたユートは、そんなギヤスパ―の姿に屹立させた。

「うん、あ……」

ユートは見えていないが、衣擦れと嬌声と雌の臭いでどんな状況か解る程度に、ユートは性経験がある。

実際、今にも脱いでしまいうような勢いで服を掻き毟っているティオネは、熱に浮かされて大粒の汗を流しながら、股間からは汗とは違う湿り気を帯びさせて、色艶のある声を押し殺しつつ啼いていた。

カードの術式が解放されインストールが開始して、既に数分が経とうとしているが、漸くティオネの様子が落ち着いてくる。

「ハアハアハア……もう、こつち向いて構わないわ」

ユートが振り返ってみれば良い具合に乱れた服装のティオネ、ちょうど満足そうなを見る限りは性交——ではなく成功したらしい。

「それで、どうやって使えば良いのかしら？」

「右手をこうして、ステータス・ウィンドウを使いたいとイメージしながら振ったら展開する筈」

実際にやって見せた。

「こう？」

真似てみたが、ティオネのステータス・ウィンドウは展開しない。

「出ないわよう？」

「ふむ、イメージ不足か。だったら『ステータス・オープン』と言いながら先程の動作を」

「ステータス・オープン」

言われた通りにすると、今度こそステータス・ウィンドウが開かれた。

「出た！」

それはティオネの背中に刻まれた【神の恩恵】によるステイタス、確かに言っていた筈の機能だ。

「慣れれば最初のやり方で開ける筈だよ」

「成程……」

ステータス・ウィンドウを開いて解る使い方。

メニューをタップして、ウィンドウ内を見る。

「スキル……【身体強化】【料理】【体術】【釣り】【疾走】【火炎斬り】【大地斬】【海波斬】【睡眠斬り】【大防御】【隠蔽】【アタッカー】【底力】」
他にも色々と在る。

何気にスパロボも混じっている様で、然しSP回復とかは精神力の回復なのだろうか？

「アイテムは空ね」

「そりや、まだ何も容れていないからな。ああ、裏技っぽいけど幾つかを纏めた場合はそれで一つになる」

「どういう事？」

「その万能薬、十個で纏められているよね？」

「そうね」

「この場合、万能薬を十個じゃなく万能薬セット一個という扱いだね」
「へえ、便利じゃない」

とはいえ、個別には出せないという欠点もあった。

万能薬セットは、万能薬セットで全部出るのだ。

「スキルつてすぐに決めないといけないの？」

「いや、コストが足りなきゃ覚えられないから暫くは放っておく事も出来る」

「フム、一旦覚えたらもう変えられない？」

「消費したコストは戻らないけど、セット後に解除も出来る仕様だよ」

「成程……ね。じゃあ……取り敢えず【アタッカー】だけセットしましょうか」

【アタッカー】をタップすると、二つ存在しているスキル枠の一つが埋まる。

これでティオネの攻撃は最終ダメージが一・二倍、現状では大した

事もなかったりするが、それでも僅かながら攻撃の威力は増す。

「クス、上手く使えるなら団長にも勧めようかしら？　結構、面白いわね」

ティオネは割と気に入った様で、暫くは「ステータス・ウィンドウ」を弄って遊んでいた。

・

第16話：ロキ・ファミリアの宴会は間違っているだろうか

「さて、万能薬はアイテムストレージに容れたから、団長から頼まれたお仕事も終わりね。これからどうしようか？」

ティオネが訊ねると……

「あ、ティオネ。私はちよつと武器の整備に行きたいけど構わない？」
「ゴブニュ・ファミリア？ 私も行くと、大双刃の刃が劣化しちやつてさ」

アイズと妹のティオナが神ゴブニュが主神をしているファミリア、ゴブニュ・ファミリアの工房に行きたい旨を伝えてくる。

「良いわよ。ユートから得たステータス・ウインドウで報酬も仕舞えましね？ 私とレフィーヤも付いていきましよう」

「あ、はい！」

レフィーヤが頷く。

予備武器なら未だしも、自分達が普段から使っているメインウェポンは自己管理が当たり前。

武器の劣化や破損には、自己負担で対応をする。

寧ろ、自分の武装を誰か任せにするなど冒険者としては有り得ない。

アイズのデスペレートは不壊属性デユランダルではあるが、使えばポツキリと逝かないだけで刃自体は劣化してしまう。

何しろ、あのヴィルガの溶解液をしこたま浴びたのだから、刃が相当に劣化をしているのも無理は無い。

ティオナの大双刃とは、超硬金属アダマンタイトをふんだんに使い、工房の職人達が数人掛かりで不眠不休で鍛え上げた専属武器オーダーメイド。

本来なら不壊属性を持たないコレは、ヴィルガとの戦いで溶けてもおかしくはなかったが、ユートによるスキル【エクスード・チャージ聖剣附与】で不壊属性を附与した為、デスペレートと同じく刃の劣化に留まっている。

あのスキルはユートが識る聖剣の能力を、武器に対して一つだけ一時間に限り附与が可能で、デュランダルというシャルルマーニュ十二勇士のローランが使った剣の能力を与えた。

よって、一時的に不壊属性が宿っていたのだ。

大双刃を買い換えともなれば、きつと億単位の借金を背負っていただろうが、単なる整備レベルなら安く済むであろう。

素材のアダマタイトがユートの識る「神金剛」であれば、高がモンスター^①の溶解液で溶けたりはしなかったろうが、所詮は硬いだけの金属でそこまでの高い能力は望めないのだ。

北と北西のメインストリートに挟まれた区画、路地裏深くに存在する石造りの平屋、そこそがゴブニュ・ファミリアの拠点。

武器防具といった装備品の整備製作を行うファミリアであり、ユートが防具の製作を頼んだ「ヘファイトス・ファミリア」に比べ、知名度や勢力などは見劣りするのだが、造り上げられた武具の性能という面に於いて劣るものではない。

「そういや、ユートの剣って何処のファミリア製？　ヘファイトス・ファミリアかな？　それともゴブニュ・ファミリア？　ひよつとしてもっと別のファミリアだったりする？」

「自家製」

「なんだそつか……って、自家製というと自分で造ったって事？」

「そうだよ」

質問したティオナだけでなく、アイズもレフィーヤもティオネも驚く。

「エリユシデータもダークリパルサーも、形や銘とかは他から持ってきたけど、造ったのは僕だよ」

後に【黒の剣士】に譲渡される二振り、それこそは【黒の剣士】が嘗て揮った剣そのものの形である。

勿論、ゲームS A Oに於いて登場した【クリスタライト・インゴット】なんて存在しないから、ダークリパルサーの素材は全く別の金属を用いている。

エリユシデータは黒鍛鋼^{ブラックメタル}だけど、ダークリパルサーの場合は素材

がはぐれメタル鋼。

早い話がはぐれメタルというDQなモンスターを、ユートがプチツと毒針にて急所を突いて殺した後に、地面にドロリと溶け消える前に拾って、保存した物を特殊な方法でインゴット化してから、鍛冶で鍛え上げて武器に変えている訳で、商品名「はぐれメタル鋼」として、ダークリパルサーを造ったのだ。

類似品に「メタスラ鋼」や「メタルキング鋼」などが有り、「プラチナキング鋼」が最高品となる。

流白銀^{ミスリル}よりも手に入れ難いが、品質的には流白銀以上の代物。

神の金属にこそ劣るが、神秘金属としては良い品というのがユートの評価。

何処ぞの魔界の名工辺りは嬉しそうに受け取って、最高品質の武器を次々に鍛え上げていったと云う。

「私も武器を補充しようかしら？」

ティオネの武器はククリナイフのゾルアス、投剣のフィルカ。

武器の性質上、数を揃える必要性があるから予備を幾つか持っておリ、今回の遠征ではヴィルガを相手に可成り喪い、ステータス・ウィンドウが無ければ一旦は本拠地に戻って、すぐにゴブニュ・ファミリアへと赴いて製作を依頼しなければならなかった。

ステータス・ウィンドウのお陰で報酬——一千万ヴァリス相当の万能薬を持ち運ぶ必要が無いからこそ、アイズ達と共に行ける。

何しろ、フィルカなんて投剣という性質上で使い捨ての武器だ。

単純な戦闘なら拾ってから再利用も可能だろうが、今回はブラックライノスの群れに投げたり、ヴィルガに投げたりしていた。

フィルカが踏み潰されるは溶けるは、喪失する理由に事欠かない。

三つの槌が刻まれているエンブレム、それがゴブニュのファミリアを示している紋様だろう。

「ごめんくださいーい！」

ゴブニュ・ファミリアの拠点に着いて、ティオナが元気よく挨拶をしながらも扉を開けると……

「いらつしやあい……つていうか、げえええっ!? 関羽……じゃなく

て【^{アマゾン}大切断】！」

「バカな、ティオナ・ヒリユテだとおおお!？」

「いや、あのさあ……私の二つ名で『げえええっ!』とか、それは止めてくれないかな?」

ジト目なティオナ。

「どうしたんだ?」

「ああ、あの子はよく武器を壊しては此処の連中へと心労を掛けるからね」

ティオネの言葉を肯定するかの如く……

「親方、クラツシャーが! 【壊し屋】が現れましたあああつ!」

「くそ、今日はいつたい何の用だ!？」

戦々恐々とするゴブニュ・ファミリアのメンバー。

それこそ、先日に見掛けたミノタウロスに追い詰められる白髪の少年の様に、まるで恐怖の象徴でも視るかの目であったと云う。

「ティオナの大双刃は知ってるでしょ?」

「ん、あのバカでかい」

「此処のファミリアが数日は不眠不休で鍛え上げたらしいし、またぞろ壊された日にはキレたくもなるわ」

「成程な」

あれは斬るより正に叩いて砕く武器で、大きさなど相当だから必要となる金属の量もそれに比例する。

それを不眠不休で鍛え上げたのに、簡単に壊されては堪ったものではない。

ユートも鍛冶はするし、その気持ちは解らないでもなかった。

「くっそ、また壊しやがったんだな?」

「え、ちが……」

「ああ、そうさ! そうに決まっている!」

「ええ……?」

「どうせ、不眠不休で鍛えたあのウルガもモンスターに溶かされたとか言っつて、また新たに造れとか言うんだよな? そうだよな! ドチキシヨオオオッ!」

「まだ何も言っていないんだけどなあ……」

最早、悪夢の如くだ。

「取り敢えず、あれは放っておくしかないか」

ユートはアイズを連れ、奥に居るであろうゴブニュの方へと向かう。

「何をしに来た？」

「剣の整備をお願いにきました……」

無言で手を差し出すのは白い髭を伸ばす短身だが、鍛え上げられた筋肉を持つまるで細身のドワーフといった風情の老身、彼こそがこのファミリアの主神たるゴブニュ本神である。

腰に佩いていたデスペレートと、鞘に納まった俣でアイズが渡すと、スラリと抜き放ってゴブニュは刀身をマジマジと眺めた。

「ふん、また派手に使ったものだ。刃がやけに劣化してるが何を斬った？」

「何でも溶かす液とその液を吐き出すモンスターを、可成りの数……」

「まったく、不壊属性といえど切れ味は鈍る。元に戻るまでに時間が掛かるな。代剣を出してやるから暫くはそいつを使っている」

アイズの顔色が悪くなるのは遠慮しているからか？

「生半な武器ではすぐにも使い潰すだけ。素直に甘えておけ。ほら振ってみろ」

渡されたのはデスペレートと比べても細身な剣で、不壊属性のデスペレートを鑑みれば頼り無い。

そんな剣を腰に据えて、鞘走らせると抜刀！

「ほう、今回は違うな」

「違う？」

「何故かは知らんが、今日に限って無駄な力が入ってはおらん」
「っ！」

ドキン！ 胸が高鳴る。

先日に出逢ったあの白い兎みたいな少年のお陰か、何だかアイズは世界が広がったみたいな錯覚を覚え、我知らず感謝を籠めた。

「それで、ユート。お前さんは何の用事だ？ 先達て頭に声が響いて

きたが」

「うん、その件で御礼を」

「ふむ？」

「ゴブニユが許可してくれて助かった。お陰で犠牲も出さずロキ・ファミリアのメンバーを護れたよ」

「そうか、それは何より」

ゴブニユとて一端にファミリアを持つ身、他の派閥だとはいえ地上人^{こども}に犠牲が出なかったのは、胸を撫で下ろす気分だ。

「取り敢えず、趣味には合わないだろうけどお土産。ファミリアの皆で食べてくれると嬉しいかな？」

ホールケーキを五つばかり寄越して言う。

「まあ、疲れた日には甘いものを欲するであろうし、有り難く戴こう」
折角の手土産を邪険にするのもあれだし、ゴブニユはそれを受け取った。

「それと、こいつを」

「インゴットか？ 見た事が無い金属だが……」

ヘファイストスにも見せた黒鍛鋼インゴット。

「ヘファイストスはこの一つ一本に、五十万ヴァリスという値段を付けた」

「ほう、五十万か」

「十本を進呈するから……試しに幾らか剣でも打つてもっと欲しくなったら言うといい。その時には一本を五十万ヴァリスで売る」

つまり五百万相当。

ヘファイストスも言う、武器にして良し防具にして良しの黒鍛鋼、ユートとしては決してこれで儲けようとは思わないが、無料での提供は有り得ない。

故に、ヘファイストスが付けた価格で売る訳だ。

玄人から見た誇りを懸けての値段設定で。

徒に高くも、だからといって莫迦みたいに安くも無い値段設定であるが故に、ユートはこの価格で譲ると決めたのである。

「楽しみにしているが良い……店頭に並ぶ時にはこれが何百倍にも価

値を持った武具にしておこう」

「それは確かに楽しみだ」

買うのか否かは兎も角、どれだけの物に仕上げるかは楽しみだった。



更には何故だかミアハが紙袋を持って歩いてた為、ユートは回復系アイテムの素材をお土産の代わりに渡すと、序でに食材を幾らか譲っておく。

ミアハ・ファミリア……ディアンケヒト・ファミリアと同様に薬品系ファミリアであり、然し彼方と違って団員は団長だけの貧乏なファミリアらしい。

何とかなんとか作っているポーションやハイポーションで食い繋ぎ、ディアンケヒト・ファミリアからの借金返済に右往左往をする経済が火の車だとか。

お金を渡してもダメダメだろうから、ユートは食材を渡したのである。

用事も終わり、ユートはティオナに引かれるが俣に【豊穡の女主人】と銘打たれた看板の店に入る。

遠征の後には盛大な酒宴を開催し、皆を労うというのがこのロキ・ファミリアでの習慣だ。

「ミア母ちゃん、来たで」

ロキも既に星が出て明るくない夜空の頃、この店に扉を開けて入ってきた。

「お、ユートも来たな」

最初から呼ばれていたからティオナに引かれずとも来たが、彼女としては愉しくて仕方がないのだろう。

何しろ、ティオナは姉のティオネと共に淫蕩を地で往くアマゾネスからしてみれば変わり者だった。

アマゾネスは基本的には女しか生まれず、他種族と交わらねば子孫

を残せない種族である。

その所為か現代日本風に云えば肉食系女子の極み、良さげな男を見付けたなら取っ捕まえ拉致って種付けをさせる程。

ティオナもティオネも、そんな性が薄い。

今でこそティオネは団長——フィン・ディムナに対してお熱だが、ティオナは未だ恋すら知らなかった。

そんな彼女が、何故だかユートのスキルの実験へと積極的に関わり、それ以後もまるで恋する乙女の如くユートの傍を堪能する。

それだけユートを気に入ったのだろう。

ユート自身もこれだけの好意を前面に押し出されて気付けない様な、鈍感系な主人公レベルなアンポンタンではないし、何より夜中に部屋に忍んで来られたらもう決定的。

ユートが知る某・娼館のアマゾネスとは決定的に異なるティオナが、自分に対しては素直に性を押し付けて来るのだから。

まあ、実際に娼館に於けるサンジョウノ・春姫以外にも抱ける娘が居るのは、ユートからしても嬉しいから文句など無い。

リリルカ・アーデは抱いて以後は見ないし……

閑話休題

「おっしや！ みんな遠征御苦労さん！ 今日恒例の宴や、飲めええっ！」

あちこちで上がる乾杯の声声、ユートも挨拶なぞ今更だと謂わんばかりで、肉にかぶり付き度数も値段もバカ高い酒を煽る。

それはもう遠慮無く。

あつという間に料理も酒も無くなってしまった。

「うわ、ユートってば早過ぎるよ？」

「僕は何処ぞの自称・超絶美形主人公と同じ、女の子と食事は喰える時に……」

「キャッ!？」

行き成り抱き寄せられ、ティオナは思わず可愛いらしく悲鳴を上げ

てしまう。

「喰っちゃう事になっているんだよ。ま、ラーズ辺りは下品で浅ましいだけだ……なんて言うけどね」

「もう、バカだよな」

満更でもない表情で言うティオナ。

「リユー、酒と料理の御代わりお願いね!」

「ハア、判りました」

エルフのリユー・リオンに注文をする。

遠征前に此処で食事をした事が何度かあり、彼女とも顔見知り程度には面識を持っていた。

そして、エルフだからかやはりレフィーヤやリヴェリアと似た反応。

特に、手が偶々だが触れ合った後のリユーの狼狽は面白いくらいだ。

先程、どうにも面白くなさそうに睨んでいたのは、ティオナと仲好しこよしと急接近したから、無意識にムツとしたのだろう。

「団長注ぎます。どうぞ」

「ああ、ティオネ……ありがとう。だけどさつきから僕は尋常じゃないペースでお酒を飲まされてるけど、酔い潰した後、僕をどうする心算だい?」

「あら、他意なんてありませんよ? さ、もう一杯」

「ほんつとうにブレねー、この女だけは……」

どんどん注ぐティオネ、たじたじなフィン、ジト目なベート。

「うおおっ! ガレスー! ウチと飲み比べで勝負やあああつ!」

「良かろう、返り討ちにしてやるわい」

「因みに、勝った方はリヴェリアのおっぱいを自由に出来る権利付きや!」

「じ、自分もやるっす!」

ロキの勝負宣言にガレスが応え、戯れ言にラウルや他の団員が手を挙げる。

「リ、リヴェリア様?」

「言わせておけ……」

オロオロするレフィーヤだが、瞑目しながら静かにグラスを傾けていた。

「御待たせしました」

大量の料理に酒瓶を手に見れたリユーが、ユートの前に次々と並べる。

本人はテーブルのあちこちから料理をかつぱらい、勝手気儘に大量に食べてはいたけど、新たに来た料理もすぐに手を付けた。

周りの団員がアイズへと酒を勧めるが、リヴェリアに一喝された挙げ句の果てにベートに奪われる。

どうやらアイズは酒癖が悪いらしい。

皆が食い、酔って宴会も良い具合に進んでいる。

ユートもブラックホールみたいに料理を胃に収め、蟒蛇の如く酒を次々と飲み干していた。

きつと、ユートだけでも何十万ヴァリスと飲み食いしている筈。

そんな時……

「そうだアイズ！ お前、あの時の話を聞かせてやれよっ！」

アイズの斜向かいに座るベートが、酒を飲みながら酔っ払い特有の濁った瞳で見つつも、御機嫌な様子で何らかの話を催促する。

意味が解らず首を傾げるアイズ。

「ほれあれだつて、あれ！ 帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！ 最後の一匹をお前が五層で始末をしたろ？ んで、ほれ！ あん時居た白髪野郎の！」

それはユートとアイズが救った少年の話だ。

あわやという処でユートの結晶障壁が護り、アイズのデスペレートが細切れにしてやった時の。

「ミノタウロスつて、確か一七層で襲い掛かってきたから、返り討ちにしてやったら逃げ出した奴ら？」

「それそれ、奇跡みてーにどんどん上層^{うえ}に上って行きやがって、俺達が泡食って追い掛けてったの！ それで居たんだよな……如何にも駆け出しですつて云う様なよ、ひよろくせー冒険者^{ガキ}が！」

その余りの言い種には、アイズも表情を歪める。

「抱腹もんだったぜえ？　兎みてえに壁際に追い込まれてよ！　可哀想になるくれー震え上がっちゃって、顔を引き攣らせてやんの」

「ふむう？　それで、その冒険者はどうなったん？　助かったんか？」

「ああ、ユートの奴が障壁で護ってよ、アイズがミノを細切れにしたかんなー！」

泣きたい顔を必死に抑えるアイズは、太股の上で拳を握り締めていた。

止めて……大切な記憶^{ゆめ}を見せてくれたあの小さな冒険者の少年を汚さないで……と。

だけどベートは続ける。

「それにだぜ？　そいつあ……叫びながらどっかに行っちゃってよ！　くつく、うちのお姫様は助けた相手に逃げられてやんの！」

テーブルに着いた全員が大爆笑、ロキもアイズたん萌え！　とか言いながら、大声で笑っていた。

酒の席での戯れ言とは、アイズが思っていないのにも気付かないで。

・

第17話：ベル・クラネルが宴会に混ざるのは間違っているだろうか

ベートは足組みをして、酔った顔でヘラヘラと笑いながら、アイズの心境など理解もせずに続ける。

「しかし、久々に胸糞悪くなったな。あんな情けねー奴を目にしてよ。野郎のくせして泣くわ泣くわ」

いい加減で顔を上げて、アイズがリヴェリアを見遣ると、心得たもので冷たい視線でベートを睨み……

「いい加減でその煩い口を閉じろ、ベート。そもそもミノタウロスを逃がしたのは我らの不手際。巻き込んでしまった少年に謝罪する事はあれ、酒の肴にする様な権利は無い。恥を知れ」

静謐な声で言い放つ。

笑っていた周囲はロキも含め、流石にグサリと突き刺さったらしいが、ベートは何処吹く風。

「へいへい……さっすが、エルフ様は誇り高いねえ。けどよ、んな救えねー奴をわざわざ擁護してどうなるってんだ？ ゴミをゴミだと言って何が悪い」

当然ながら平行線の言い合いに発展するだけ。

特に酔いが回り切っているベートに遠慮は無いし、アイズへの配慮なんてもっと無かった。

「これやめえ、リヴェリアもベートも。んな言い合い……酒が不味くなるわ」

折角の宴会席上での会話ではないし、ロキも堪らず口を挟んだが効果無し。

「アイズはどう思うよ？ 自分の目の前で震え上がるしか出来ねー野郎をよ」

「あの状況では仕方がなかったと思います……」

「けっ、んじや質問を変えるぜ？ あの餓鬼と俺……ツガイにするな

らどっちが良いんだ？」

「ベート、君はナニを言ってるか理解してる？」

「うっせー！」

フィンが目を丸くしながら訊ねたが、酔った者には道理が通じないのが正しく道理というか？

「ほら、選べよアイズ……雌のお前ならどっちの雄に尻尾を振って滅茶苦茶にされてえんだ？」

周り……特にアイズの隣に座るレフィーヤはベートのアホな質問に、真つ赤な顔でオロオロしている。

然しながら素面なアイズは真面目な表情となって、ベートを睨み付けながらも言ったものだ。

「ユートが良いです」

シンと静まり返る席上、酔っていた団員達が一斉にユートを見遣つて、更にはティオナがギョツとユートの腕を力強い掴む。

「い、今……何だった？」

「少なくとも、私はそんな事を言うベートさんとだけはゴメンですし、選べと言われるなら私は……ユートを選びます」

アイズの脳裏に思い起こされるは、ユートのランクに合わない余りの強さ。

手合わせ程度だが実際に剣を合わせ、L V. 5である第一級冒険者の自分より明らかに強い。

これで一ヶ月くらい前に【神の恩恵^{ファルナ}】を授かったばかりであると、ユートは言っていたし自分も背中を確認し、L V. 1であると理解もしている。

顕れた基本アビリティ、それだって決して高いという訳ではない。

古代、神々が暇潰しだと称して降臨する以前より、確かに存在した真の英雄の如く【神の恩恵】に頼らぬあの能力、それに依存気味な自分達とは違う強さ。

しかも不感症アマゾネスと呼ばれても不思議がないあの、ティオナ・ヒリユテが頬を染めて求める程で、アイズも兎みたいな少年とは別の意味で過去を想起させるユートに惹かれたし、あの手合わせで強

さを確認してから、ちよつと心臓が高鳴ったくらいだ。

まだ、好きだとか恋だとか愛しているだとかは理解も出来ないアイズだけど、ベートが言う様に若し相手を選べと強制されたなら、はつきりユートを選ぶ。

純粹無垢なアイズとて、男女の交わりくらい理解をしてはいるし、だからこそベートに告げたのだ。

「クツクツ、無様だな」

「う、うるせーババア！」

リヴェリアが小さく腹を抱えつつ笑うと、酔っていないながら何処か涙目になったベートが叫ぶ。

何しろ、これでは盛大にフラれてしかも想い人を告げられたに等しく、ベートとて泣きたくなるだろう。

とはいえ、ロキを含めてロキ・ファミリアの面々にジト目で睨まれたユートとしては堪らない。

「完全に巻き込まれたな」

無い胸を当てるティオナを見て、溜息を吐きなくなる衝動に駆られた。

「だ、だったら奴が迫ってきたら受け容れんのか？」

L.V. 1なぞ下級冒険者でしかなく、本来であればアイズにとつてもベートにとつても雑魚としか呼べない筈だが、ベートも知っているユートの力は愚直なまでに強さを求めるアイズが惹かれてもおかしくない、だからこそその質問。

これが対象があゝの兎野郎なら——あんな雑魚じゃあアイズ・ヴァレンシユタインに釣り合わない、声も高らかに言い放てたろう。

だが、ユートはベートも素直ではないが認める強さを持つだけに、そんな事は言えない。

況してや、アイズは聞かされていないユートが持つスキル——【情交飛躍】の情報はベートも知っていたから、余計にアイズに言えない話だと認識する。

若しもアイズが知れば、間違いなくユートに股を開くだろうから。最近、伸び悩んでいるのは察しているだけにそんな想像が浮かん

だ。

『私を……強くして?』

頬を朱に染めてベッドの上で腕を伸ばし、ユートを誘うアイズとか
思いたくも無い想像だった。

「ベルさん!」

アイズが答えるより前に店員の叫びが訝する。

ふと見れば白髪の少年が「豊穡の女主人」から駆け抜けようとして
おり、鈍色の髪の毛の店員が驚きつつ名前を呼んだらしい。

居たたまれない雰囲気を変えるチャンス!

ユートは【イエヒー・オール権能発詔】というスキルから、必要な権能の聖句を口ず
さむ。

「無限に連なり出口無し、螺旋を描く世界。気に入らなければもう一
度、気に入る結末までやり直そう」

転生しても変わらず持つこの能力は実に便利だ。

【ハイパー・クロックアップ刻の支配者】

《HYPER CLOCK UP!》

女性の声で電子音声が鳴り響く。

瞬間、ロキすら何が起きたのか理解に苦しむ現象が引き起こされ
た。

時間の巻き戻し。

ユートは店を出て行こうとする白髪の少年の襟首を掴み、ミアの前
に突き出すかの様に立たせた。

《HYPER CLOCK OVER!》

そして時間は動き出す。

「あ、れ……?」

認識はしていなくとも、実力者や神や捕まっていた白髪の少年は違
和感を感じたらしく、キヨロキヨロと辺りを見回してしまう。

アイズも何かがおかしいと考えていた。

あの白髪の少年——ベルと呼ばれた彼は自分の認識では店から出
て行った筈、それが何故かユートに捕らわれて【ミア母さん】の前に
突き出されている。

否、捕まっているのなら店から出ていなかった？
解らない。

ロキはもつと顯著だ。

「まさか、時間を操ったとでも云うんか？」

糸目を見開いて呟く。

「少年、食い逃げは良くないな？ 支払いが出来ないくらいに飲み食いしたか？ それともまさか、食い逃げ前提で入ったのか？」

「ち、違います！ その、済みませんでした……ちゃんと支払いますから！」

「その前に少年……」

「は、はい？」

「君は確か僕とアイズとで救けた冒険者だな？」

「えつと……ヴァレンシユタインさんに助けられたと云うならそうです」

どうやら衝撃的過ぎて、ユートの障壁には気付かずアイズしか見えていなかったらしい。

まあ、別に恩を売リたかった訳でもなかったから、構いはしないのだが……

「ふむ、確かに成り立て。何処のファミリアだ？」

「う……へ、ヘスティア様のファミリアで、す」

食い逃げに為り掛けたのは事実だし、反省をしていないと思われるギルドへと突き出されては困るから、ベルと呼ばれた少年は自らの所属を明かした。

「ドチビン所かい」

ロキからしたら不倶戴天の敵——おっぱい的な意味で——な神。

「ヘスティアの眷属だと？ って事は後輩？」

「へ？ 後輩って、それじゃあ貴方が神様の言つてた一ヶ月近く帰って来ない、放蕩眷属!？」

「ほう、ヘスティアの奴はそんな放言をしたのか？ 人が稼ぐ為にダンジョンに潜ってんのに、遊び回っているみたいにか？ 随分と面白い事をほざくな……」

「ヒッ！ ヒイイツ!？」

クスクスと嗤うユート、その背後から漂う真っ黒なオーラに怯える少年。

涙目になって鈍色の髪の毛の店員——シル・フローヴァを見ると、プイツと目を逸らされてしまう。

ガン！

本当に泣きたくなった。

「ま、それは後でヘスティアをとつちめるとして……少年の名前は？」

「べ、ベル・クラネル……ですはい。田舎暮らしでしたが祖父の死を契機にこの迷宮都市^{オラリオ}に出てきました」

「そうか、僕の名はユート……マサキ・優斗だ」

極東ではこう名乗るのが正しいと聞く。

「ユートさん……確かに、神様が言っていた名前だ」

どうやら放蕩眷属以外、名前もちゃんと聞かされていた様で、名乗ったら同じ派閥だと認識された。

「ほれ、ベル来い」

「へ？」

何故だか襟首を掴んだ俣で猫みたいに連れ去られ、あたふたしてしまふベル。

「ミアさん、支払いはちよつと待ってくれ」

「ん、あいよ」

知らない仲でもないし、ユートには何か考えでもあるのだろうと、ドワーフの女主人たるミアは手を振って仕事へと戻る。

当たり前だがシル・フローヴァや猫^{キャット・ビープル}人達、店員も仕事へ戻す事は忘れない。

引つ張られた形でロキの前に来てしまったベルは、視線がきになるのか冷や汗を流している。

「ロキ、ベルを宴会に加えるけど構わないな？」

「ええええーっ!？」

とんでも発言に驚愕し、ベルは絶叫してしまう。

「ううん？ 何でや？」

「僕もだが、ロキ・ファミリアの不手際で危ない目に遭わせた挙げ句、ベートは誇るはロキ達は大笑いするはとやらかしたよな？」

「うぐっ！　せやかてな、ドチビン所の眷属やぞ？」

「それは僕もだが？」

「うっ！」

ドチビ——ヘスティアとは喧嘩ばかりのロキ。

お互いに反りが合わないらしく、どうしても会えば喧嘩をしてしまう。

「良いじゃないか、喧嘩してるのはヘスティア本神であり、別に眷属こどもが憎い訳じゃないだろ？」

「せやけどなあ……」

ユートは懷から中身の入った瓶を取り出し、コルク栓を開けると空になっていたロキのグラスに並々と、その中身を注いでやる。

「うん？　この透明感に溢れた香りは……」

「それでも飲んで、取り敢えずヘスティアとの諍いは忘れてさ、アイズも何だか少し気にしているしね？　アイズに嫌われてまで我を張る理由も無いだろ」

ロキが口を付けてみればズッキューン！　と喉を焼くアルコールとひたすらに美味しい味が直撃した。

「こ、これ！　まさか？」

「ちよつと買ってみたんだ……一瓶でン万ヴァリスもするだけあるだろ？」

「お、応……」

ロキはこれが一等のオキニという奴で、間違いないくらいに神酒ソーマだった。

勿論、成功作などではなく一般に資金稼ぎの為にか、売り出されている失敗作に過ぎないだろう。

それでも飲む者を魅了し虜と化す酒だ。

「で、ベルの参加は？」

瓶を置いてやると……

「ああ、かめへんよ。自分ベル云うたか？　楽しんで往くとエエわ」

ニツコニコしながらも、ユートへと返答した。

「ひえっ!? あ、ありがとうございますぅございますぅっ!」

一瞬で御機嫌となつて、前言を翻したロキにベルは兎に角、礼を言つておく。

「ただいま」

「お帰り、ユート」

ティオナがニパツと笑い掛け挨拶を返してくれた。

「ユート……少し、彼……ベル・クラネルだっけ? 話したい」

「構わないよ、ほらベル」

「ふえ?」

目の前の金髪金瞳の少女——アイズ・ヴァレンシユタインが話したなどと、憧憬の対象に言われてしまつて驚愕をする。

ユートに背を押されて、つんのめりながらアイズの真ん前へと立つたベルに、微笑みと申し訳なさが同居した複雑な表情を浮かべ、何と頭を下げてきた。

「——へ?」

「ゴメンね?」

「はい?」

何故に謝罪をされたか、サッパリ理解が及ばない。

「私は君を恐がらせてしまつたみたいだから……」

「恐がらせてつて?」

「君は私が手を差し伸べた時に、手に着いた血を見て逃げてしまった。私の……配慮が足りなかったから」

「へあ? ちちち、違います! 違いますから!」

「違う……の?」

コテンと首を傾げる姿、それはL.V. 5の第一級冒険者とは思えないくらいに可憐で、アイズ・ヴァレンシユタインの容姿はまるで精霊の様だとベルは真っ赤になりながら思う。

「えっと、逃げちゃったのはその……」

オロオロしつつしどろもどろな思考を纏めながら、何とかアイズが納得の出来そうな理由を捜すものの、思い付かなかった。

余りにも綺麗なアイズを見て、ベルは思わず逃げ出してしまった童貞君に過ぎなくて、まさか『貴方の美しさに居ても立っても居れませんでした』などと言える筈もなく。

「多分、アイズが綺麗だったから気後れして逃げたんだろうさ」

なのに、ユートがあつさと暴露してくれる。

「う、うわあああつ!? 貴方は何を言っちゃってしてくれてるんですかああつ!」

絶賛大混乱!

最早、場はカオスだ。

「ユートも……そう思う……のかな?」

「うゝん」

期待を籠めた瞳で訊ねてみれば、何故か苦笑いを浮かべるユートにガアアン! と、何だか凄い衝撃を受けた気がするアイズ。

ティオナとは仲良しで、レフィーヤとも話しているユート、アイズも何と無くもつと話したくなったが、性格上から中々に難しい。

だから、ベルの感情を聞いた時に其処へ託つけて、試しに訊いたらこれだ。

然し、ユートは頬を掻きながら……

「僕から見たら寧ろ可愛いつて感じかな?」

普通に誉めてくれた。

トクン! 絶妙で巧みな事を言われ——た気がする——アイズは胸に温かい何かが宿るのに気付く。

「……ありがとうユート、その、ベルも……」

「そ、そんな!」

もうベルは感極まって、真っ赤になり過ぎて頭から煙を噴いていた。

「ほれ、ベルも座って飲み食いしとけ」

「え? あ、うん。だけど良いのかな?」

「ロキ・ファミリアの主神が構わないと言ったんだし仮令、団長のフィンだってこのくらい反対しないよ」

「ロキ・ファミリアの団長って確か、【勇者】と名高いフィン・デイルム

ナさんですよね!？」

「お、知ってるのか？」

「有名人ですよ？ 知らない人が珍しい！」

こうして、ベルも宴会に混ざって美味しい食事を鰹腹食べる事となる。

主神様は侘しく待ち惚けだが、今のベルには彼女を気遣う余裕など全く無く、ユートなんてそもそも気遣う心算すら無い。

「そうだ、レフィーヤ」

「はい、何ですか？」

「森の民たるエルフなら、きつと味が解ると思うから飲んでみる？」

先程、ロキに渡した瓶とは異なる瓶をテーブルへとドン！ と置き、ユートは硝子製のコップに中身を継いでレフィーヤの前に。

「これ!？」

軽く嗅いだ香りは芳醇、何の果実かは判らなかつたけど、強いて挙げるとするなら桃が近いだろうか？

余りに良い匂いにゴクリと固唾を呑む。

「どうぞ」

促されたレフィーヤは、コップを両手で包み込む様に持ち、ソツと小さな口を開いて中身を煽った。

ゴクン！

飲んだ瞬間に目を見開いて残りを全部飲む。

惚けーつと、アルコールも入ってないジュースを飲んで、まるで酔っ払ったかの如く蕩けた表情。

「な、何ですか？ この……この世の物とは思えない果実ジュースは!？」

レフィーヤの語彙では、もう言い表せないくらいの美味で、しかも全く味わった事がない初めての味。

これなら何百、何千……何億ヴァリスを支払っても飲みたいと思わせる。

「ほう？ そんなに美味しいものなのか？」

「ハッ！ リ、リヴェリア様!？」

いつの間にか、傍に王族たるリヴェリア・リヨス・アールヴが、レ
フイーヤを見下ろしながら立っていた。

「ユート、良ければ私にも戴けないだろうか？」

「良いよ」

新しいグラスに注ぐと、リヴェリアへと渡す。

「成程、これは……」

香りを楽しむと王族らしい上品な振る舞いでグラスを傾けて、少し
ずつ確実に中身を胃へ流し込む。

舌で、食道で、全身にて確りと味わいながら。

勿論、香りを楽しむのも忘れずに……だ。

「何という美味なのか」

溜息しか出ない。

リヴェリアをしてこれより上を知らなかった。

「飲んだ事は無いが、或いはロキが欲する完成品たる神酒すら上回る
かもな」

少なくとも、未完成品に過ぎない数万ヴァリス程度の神酒では及ば
ない。

リヴェリアのお墨付き、こうなれば彼女を信奉するエルフは黙って
居られず、わらわらと集まってくる。

ユートは希望者の全員に振る舞ってやり、リヴェリアにはお土産と
して一瓶を進呈しておいた。

アイズも飲んで幸せそうな表情となる。

「流石は、オークションに出品されて、居住可能惑星と同じ値段が付い
ただけの事はあるね……」

その大人気っ振りに吃驚なユートであったと云う。

第18話：白兔の魔改造は間違っているだろうか

宴会も終わってベルが食べたパスタや飲み物分……その代金もロキ・ファミリアが支払ってくれたから、懷も痛まなかったベル。

ヘステイアへのお土産まで持たされ、ベルは何だか申し訳ないくらいに恐縮してしまう。

ベートに諺られて泣きながら出て行こうとしたが、今や憧憬の対象と会話を交わしながら食事までして、とつても感無量。

然しながらベルの心にはささくれ立ったみたいにな、ベートの言葉が蝕む。

——僕は弱い。

アイズ・ヴァレンシユタイン、L.V. 5の第一級冒険者たる彼女と比べるのは烏滸がましいのかも知れないけれど、ただあの時にミノタウロスをあつさりとは斬り伏せた実力、血に塗れたというのに損なわれる事のない美しさに憧れた。

一目で心奪われたのだ。

だけどベートの言っていた通り、弱い自分がアイズ・ヴァレンシユタインの隣に並び立つなど許されないと思うし、それにもう一人——思い出したのである。

今現在、ベルの隣で歩くマサキ・優斗という青年にも救われた事を。

そうだ、黄金の透明に煌めく障壁によってあの猛牛の攻撃を弾いていたのは、間違いなく彼だった。

「くりすたるうおーる」

「うん？ ああ、思い出してくれたのか？」

「あ、はい！ あの時に僕をミノタウロスから助けてくれたのはアイズさんだけじゃなく、ユートさんもだったって……あの障壁が僕を助けてくれて、それを張ったのが貴方だったと！」

「正解だ、ベル」

言われてすぐに直立不動から腰を九〇度にまで前方に曲げ、頭を下げたベルがユートに向けて叫ぶ。

「ありがとうございます！　それと、忘れてしまっていて済みませんでした！」

好感の持てる態度だ。

礼を言って謝る、それが普通に来るヒューマン。

「(若しかしたら彼こそがこの世界の主人公か?)」

ピンチから救われて——そして立ち上がるかどうかは今後次第だが、それが叶うなら確かに主人公としての資格は充分であろう。

「(ま、良いか)」

いずれは真価を発揮するのを楽しみにしていよう、自身の新しい双子の兄——柁木天地の様に、いつかの双子の兄——ネギ・スプリングフィールドみたいに。

「あの、ユートさんのアレは魔法……なんですか？」

何だかキラキラした紅色の瞳で見られている。

「魔法じゃない……けど、魔力を使っているから魔法と言っても良いのか」

「はい？」

「いや、そうだな。魔法って事で構わないかな」

「凄い！　凄いですよ！　僕はまだ、スキルも魔法も発現してないんです！」

「普通はLV. 1じゃあ、魔法もスキルも発現しないものらしいし、ベルもいずれは発現するだろう」

「けど、ユートさんも僕より半月程度前ですよ？　つまりLV. 1の筈……」

彼の最短LV. アップの記録保持者——アイズ・ヴァレンシユタインでさえ、一年間を掛けたと云う。

なれば、ユートもLV. は未だに1でしかない。

「確かにLV. は初期段階だけだね。僕は君とは違ってオラリオに来る前から闘ってきた。だからかな？　魔法もスキルも発現しているんだよ」

自嘲気味に言うユート、然しベルはと云えば……

「す、凄いです！　魔法ばかりかスキルまでも!?　いったいどんなス

キルなんですか!？」

更にキラキラと瞳を輝かせながら訊いてきた。

まあ、他派閥なら教えるのも憚られるが、ベルは同じヘスティア・ファミリアの一員だし、ウブなベルには【情交飛躍】は未だしも他は構うまい。

それに、ベルの声は何だか懐かしいものがあつて、少し甘くなつていた。

「武器に僕の知る聖剣の力を附与する【エクシード・チャージ聖剣附与】」

「聖剣つて、英雄譚なんかに出てくるみたいなの？」

「……ま、そうだね」

この世界の聖剣なんて識らないが、確かに英雄達が持つ聖剣の力であらう。

飽く迄もユートが識る……という条件付きだけど、間違いなく『聖剣』であると認識した武器の特殊能力を附与が可能。

例えば、同じ【エクスカリバー】であつても星により鍛えられた神造兵装と、折れて錬金術で鍛え直した劣化聖剣、効力がまるで異なっているがこれを個別に与える事が出来た。

つまりはそういう事だ。

ロキ・ファミリアと共闘した際は、武器を溶かしてしまう溶解液を吐いてくるヴィルガが相手だったし、決して壊れない不壊属性を与える【デュランダル】の効果を附与している。

真実事実など無関係に、飽く迄もユートの知識を基として……だ。

【イエヒール・オール権能発詔】は別に教えずとも構うまいし、取り敢えずは【聖剣附与】だけを伝えておいた。

それにあればユートの使う権能を、この世界の神の力だとダンジョンに誤認をされない為の、云つてみればこの世界でしか意味を為さない死にスキルだから。

第一、ベルは【聖剣附与】だけで興奮しているし、それだけで充分。

「はあ、僕も強くなりたい……魔法だって使いたい、スキルも欲しい」「強くなりたい……か」

「はい」

「なら、稽古くらいは付けてやろうか？」

「へ？ 稽古を……」

「ああ、稽古でも経験値は得られるからね。上手くすれば数値も伸びるさ」

ユートが教えてやれば、才能が皆無かやる気が皆無でない限り、時間が掛かっても基本的には修得が可能であると既に判っている。

魔法やスキルに関して、ベルの才能という意味では未知数でも、単純に経験値を得るのは可能だろう。

「スキルは兎も角として、魔法はそうだな……今現在は駄目だが、その内に修得させて上げよう」

「へ？ 魔法の修得なんて出来るんですか？」

「まあね」

インストールカードを使えば、カード内に封入した術式を焼き付けて使用可能となる為、魔法くらいなら簡単に使える様になる。

「今は駄目なんですか？」

「簡単に修得が出来るつてのはね、ある意味で諸刃の剣なんだよ。資質を腐らせ易いつて事なんだ」

「つまり、弱い内に頼り切りになって伸びなくなるつて事ですか？」

「正解だよ」

「解りました……」

ちよつと残念そうだ。

「LV. が上がったなら、御褒美に魔法を上げるさ」

「本当ですか!？」

「ああ、その前に魔法を覚える可能性もあるけどね、それならそれで方向性の違う魔法を覚えれば良い」

「はいー」

インストールカードによる焼き付け、それは恩恵の魔法スロットとは無関係に修得させるが故に、情報の拡散には注意が必要。

任意に魔法スロット拡張が可能なアルテナという国の魔導書すら越える効果、何しろその拡張も結局の処は魔法スロットの最大数である三つを越えないから。

魔法スロットと無関係という事は、焼き付けによる負担にさえ目を瞑れば幾つでも好きなだけ修得が可能となるに他ならない。

「取り敢えず、腹ごなしを兼ねてダンジョンに行ってみようか？」

「え？ 今からですか？」

「強くなりたいんだろ？ なら少しでも闘おうか」

「は、はい！」

スパルタ式だった。



「うわあああつ！ 死ぬ、死んじやううううつ！」

「逃げ回って獲られる経験値は俊敏だけだ！ 攻撃をしろ、ダメージを受けろ」

「無茶苦茶だあああつ！ こなくそ！」

ガキン！ パリン！

「折れた!？」

自棄になって攻撃を試みたら、手持ちの支給品なナイフがポツキリ逝った。

「つたく、仕様がないな。ベル、すぐに僕の後ろにまで下がれ！」

「は、はいいいっ！」

攻撃手段を喪ったベルはすたこらさきと、俊敏を活かしてユートの後ろへと下がってしまう。

「いっ!？」

ユートを見遣れば、凄まじい熱量が両手に集中してベルに熱気が当たる。

頭上で両手を合わせて、真横に伸ばす様に広げると熱気が半円を描く。

両腕を前に突き出して、ユートは叫んだ。

「極大閃熱呪文ツツ！」

ダンジョンの床から天井までも焼き尽くす勢いで、熱エネルギーの奔流が射出され、集まっていた蟻型のモンスター、キラーアントが消

滅していった。

「ふいいつ」

エネルギーの奔流が収まった後、その先にキラアアントはもう存在しない。

「こ、これが魔法？」

余りの凄まじさに戦慄を覚えたベル。

自分ではまるで歯が立たないキラアアント、それを一瞬で数十匹も居たそいつらを消し去った魔法。

成程、弱い今の自分にはある意味で劇薬だった……過ぎたる力は何とやらと。

だけどあれ程ではないにしろ、間近で魔法を見て逆に上級冒険者になるのが楽しみでもある。

「ベル、取り敢えず装備がダメダメ過ぎるのは理解が出来たな？」

「は、はい。ですけど幾ら何でも七階層は無謀だと思います……」

しかも、何を思ったのかキラアアントを生きるか死ぬかにまで傷付けて放置。

それに惹かれたキラアアントが次々と沸いて出た。

「僕の腕力は大した事がないですし、支給品のナイフなんて攻撃力も低いから、キラアアントの甲殻は傷付けられませんよ」

六階層から現れるウォーシャドーは、防御力もまだ低めで斃せなくもないが、キラアアントの甲殻はまだ傷一つ付けられない。

「ベル、それは闘い方がおかしいんだ」

「へ？」

「例えば、フルアーマーの人間へ馬鹿正直に鎧に剣を振り下ろす必要は無い」

「えっと……」

「鎧の継ぎ目や動かす為に柔らかい関節部、其処を狙ってやれば良いんだ」

「あ、キラアアントも！」

「そう、脚を破壊しても良いだろう。身体を動かす為に甲殻に覆われない継ぎ目でも良いな。歯が立たないなら立つ部分を攻めろ」

「はい！」

基本アビリティが上がっていけば、いずれは甲殻を破壊も出来るだろうけど、出来ないなら出来ないなりに闘う術を教える。

「まあ、武器は換えなきゃ駄目だろうな」

「あ！」

ベルの手には最早、用を為さないナイフが未だに握られていた。

「これを使え」

渡されたのは支給品とはえらい違いのナイフ。

刃も大きいみたいで鞘はそれに合わせた大きさで、鰐の部位には緑色の宝玉が填まっている。

「パプニカのナイフ・レプリカと云う」

「レプリカ？」

「そう、オリジナルを元に造った模造品。とはいえ、攻撃力は変わらん」

攻撃力は24と高め。

支給品のナイフは「ひのきの棒」よりはマシ程度、こん棒に比べたら弱い。

「これならベルの腕力でも甲殻に傷付けるのも可能だろうが、さっき言った通りに闘う様にな？」

「わ、判りました！」

誘き寄せる「死に掛けのキラアアント」も吹き飛んでいたが、いい加減で沸き出たモンスター。

ベルは教わった通りに、「パプニカのナイフ・レプリカ」を手に戦った。

成程、甲殻がスパスパと斬れる辺り良い武器だ。

とはいえ、狙いは体躯の継ぎ目や脚の関節であり、甲殻は試しに斬っただけ。

「うりゃ！ せいっ！」

キラアアントの体躯が、スッパリと切断される。

その度に死ぬキラアアントは捨て置き、次のキラアアントの脚を斬って動けなくなった処を狙い、頭へとパプニカのナイフ・レプリカ

を突き立てた。

まだ未熟故にダメージを貰う事もあるが、それでも致命傷は確り避けている。

本来の世界線に於いて、ベル・クラネルは現段階でもウォーシャドー程度なら斃せるが、流石にキラアアントは簡単ではない。

それこそ「あのスキル」を発現させた上で、何度かダンジョンに潜って基本アビリティのパラメーターを上げれば可能だろうが……

「ベル！ ナイフはリーチが短い分、軽くて威力も低いからな体術を混ぜたり、斬る回数を増やせ！」

「は、はい！」

早速、蹴りを入れて転がせてから柔らかい腹を刺したり、連撃でバラバラにしたりと飲み込みは早い。

これならば良いペースで基本アビリティが上がり、更にはステータスに依らない技術も手に入る。

この世界に於ける冒険者は皆が皆、【神の恩恵】に頼り過ぎていた。勿論、単純に能力が上がるだけで勝ち続けられる程ダンジョンは甘くはなく、技術を確り会得して深層にまで進出する者も居る。

ロキ・ファミリアがそうだし、フレイヤ・ファミリアもそうだろう。実際に、【神の恩恵】の数値はどれだけ努力をしてきたかの確認にもなる。

その最たる者こそがこの迷宮都市最強のLV・保持者——【勇者】オツタル。

【勇者】フィン・デイルナや【重傑】ガレス・ランドロックや【九魔姫】リヴェリア・リヨス・アールヴでさえ届かぬ高み、それが彼のフレイヤ・ファミリアの首領なのだから。

ユートから視てベル・クラネルは今の処、見るべきは俊敏が若干高い程度でしかなく、然しながら努力をして自らの血肉に変えていけるなら、英雄にだって成れるものだど理解しているが故に、長い目で見ていると考えている。

「何か、主人公に似つかわしいチートでも在ればな。一誠の【赤龍帝の籠手】みたいなのか、最弱であれ短期間で最強に成れそうなのかし

らを持つていれば、ベルもきつと英雄足り得るんだろうが……」

主人公が与えられる……主人公を主人公足らしめる何か——竜の紋章でも何でも良いので在れば、それを切っ掛けに化けるだろう。

「神の恩恵」が在るんだから、スキル関連に出てきそうだよね」

或いは魔法か？

ベル曰くどうやら未だに魔法もスキルも発現していないらしいが、レアスキルか何か発現をすればベルが主人公だと確認が出来るのかも知れない。

結局、今日はキラアントをベルが二十匹ばかりを斃せたから帰る事に。

ユートが極大閃熱呪文で潰したのや、六階層で斃したウォーシャドーや他にもコボルトやゴブリンなど、雑魚も含めて三万ヴァリス以上を僅かな時間で稼ぐ。

その額にベルは金貨を見ながら震えていた。



「あ、神様！　ただいま帰りました」

「遅いじゃないかベル君。いったい何処に行っていたんだい？」

「それが、『豊穰の女主人』で食事をしたんですが、ロキ・ファミリアの方々と御一緒にしまして……」

「ロキィ〜？　全く、君はヴァレン某に助けられた事といい、ロキと縁でもあるのかい？」

ヘスティアがスツゴく嫌そうな顔で云う。

そんな彼女の背後に影。

「ぐはっ!？」

ユートが両拳でヘスティアの^{こめかみ}蟀谷を挟み込むと、グリグリとしながらその小さな肢体を浮かせてやる。

所謂、『うめぼし』だ。

「ぎにやあああああああああああつっ!？」

涙目になりながら絶叫を上げ、自由な両脚をジタバタと動かすヘス

ティア。

「か、神様あつ!？」

ユートの突然の暴挙に、ベルも何が何やら？

「へ・ス・ティ・アちゃん？ 誰が放蕩眷属だ？ だ・れ・が!」

「ユ、ユ、ユート君!! 帰っていたのかい?」

「ああ、その通りだとも」

「痛い、痛い! お願いだから放しておくれえっ!」

グゥリグリッ! 捻り込む様に拳を動かされては、然しもの
デウス・デア

【超越存在】も堪らない。

「まったく!」

パツと放す。

「きゃん!？」

行き成り放されて尻餅を突いたヘスティア。

「此方はファミリアの為に稼いで来たのに、放蕩眷属とか陰口を叩かれるとは」

「うう、ごめんよ。だってちつとも帰って来ないから寂しかったんだ……ベル君が眷属になつてくれなければずっと独りなんだぜ?」

「それは悪かったがね」

ユートは右手で空中にて某かしながら言う。

「ほら」

そして大きな袋を出し、ヘスティアの前に投げた。

ガシャン!

重々しい大きな金属音と共に、巨大な白い袋が落ちてきて驚愕する。

「な、何だいこれ?」

「ファミリア運営資金だ。一千万ヴァリス入ってる……って、どうした?」

ヘスティアとベルが一齐に動かなくなつて不審に思ったユートは、取り敢えずロリ巨乳御自慢の巨乳を揉んでみるも、嫌がる素振りには疎か叫びもしない。

「……気絶してるし」

パタパタと目の前で掌を上下させても視線はまるで動かないし、ベルの目の前でヘスティアの服を開いて巨乳をさらけ出したのに、ベルも全く動じない。

どうやら二人共が揃って気絶したらしかった。

「二十万ヴァリスはちよつと毒だったか？」

苦笑いをしながら言う。

「ま、丁度良いか」

本拠地がボロ教会の地下という、ヘファイストスやロキに比べて余りに余りな状態だし、改築をする心算だったから一気にやってしまおうと考えたのだ。

小宇宙を使えないというのは正直に言えばキツイのだが、それでもやってやれない事はない。

【魔法少女リリカルなのは】の世界のギリシアにて聖域を構築したり、ゲートの向こう側——アルヌスに都市を創ったアレだ。

ハルケギニアの魔法——【鍊金】の上位互換である【鍊成】を更に突き詰め、【創成】にまで高めた力。

イメージの俣に世界すら構築可能なソレを、ユートは教会の地下へと流す。

ほんの僅かな時間で全ての処理は終わり、ヘスティア・ファミリアの新たな本拠地は完成をした。

二人を両脇に抱えると、新本拠地へと入ってベルはソファーへ、ヘスティアはベッドへと投げ出してから新しい部屋へと向かう。

空間歪曲技術も用いて、小さな空間を可成り拡張しておいたから、部屋なんて幾つも存在している。

その最初の部屋が元々、ヘスティア・ファミリアの本拠地だった部分であり、其処から新しい扉を開いて廊下を進めば、幾つか扉が有って開けば大きな部屋が存在していた。

とはいえ、まだ部屋だけで家具も何も無い。

取り敢えず、【ゲヌークの壺】を設置して下水道も設え、風呂やシャワーなどが使えてキッチンも造る。

因みに【ゲヌークの壺】とは、ユートがハルケギニア時代に世界間

漂流をした際にザールブルグで作り方を覚えたアイテムだ。

蒸留水がコンコンと湧き出るから便利である。

「パチパチ水」が出る壺も在り、ソーダ水を作る事も出来た。

「部屋は……いずれ閃姫や何やら喚ぶし、若しかしたらヘステイアの眷属が増えるかもだからな。数は在れば在っただけ良いか」

大浴場も造っておくが、各部屋にも小さな浴場とか有っても困らない。

ユートの部屋を造って、ベルの部屋にヘステイアの部屋も造る。

各部屋に「ゲヌークの壺」を設置したから、普通に風呂にも入れるだろう。

勿論、大きな湯タンクも有るからその気になれば、風呂を沸かさず入れる。

「取り敢えず完成かな？」

ベルを「ベルの部屋」のベッドに投げ入れて布団を掛けてやり、ヘステイアも「ヘステイアの部屋」へと連れて行く。

未だに巨乳が晒された尻で揺れていた。

ヘステイアをベッドへと寝かせ、設えた金庫にお金を仕舞ってユート本人も、自分の部屋へと戻る。

シャワーを浴びて身体を拭くと、裸の尻にベッドに入って目を閉じた。

ユートは基本的に裸で寝るから問題は無い。

「明日はどうしようかな？　ヘファイストスに会って防具の感想を述べてから、リリも捜したいな。それに久し振りに春姫を抱きに行こうか……………」

結構、疲れが出ていたのだろうか？　ユートの意識は次第に落ちていった。

第19話：エルフなウェイトレスとの逢瀬の約束は間違っているだろうか

「あれ？ ボク……」

真新しいベッドと布団、そして目を開けると……

「知らない天井だ」

見知らぬ天井があつた。

「どうしてこんな知らない部屋に？」

女神ヘスティアはキョロキョロと辺りを見回して、部屋そのものに見覚えが無い事に焦りを覚える。

「つて、うおっ!? 何でボクはおっぱいを晒しているんだい！」

プルンプルンと動く度、左右上下に揺れてる巨乳。

きつとベル・クラネル君が視れば、鼻血でも噴き出して倒れただろう。

「ひよつとして、ボク……誰かに御持ち帰りされてしまった!? そ、そんな、ベル君……ボクは……」

状況的に、晒された胸に知らない部屋のベッドへと寝ていた点、御持ち帰りをされたと判断するのに充分過ぎるのだ。

青褪めるヘスティア。

「くつ、何処の誰だい！ 女神であるボクを御持ち帰りするなんて！」

最早、涙目となって愚痴愚痴と呟くヘスティアは、取り敢えず晒された尻だったおっぱいをいそいそ仕舞って、犯人を捜すべく部屋を出ようとベッドを降り、大腿で歩き出す。

コンコン！

「ヒッ！」

突然のノックに息を呑む辺り、どうやら強がっていただけらしい。

まあ、女の子が知らない間に知らない男から御持ち帰りをされ、それで愉快になどなれる筈もない。

怒るにせよ泣くにせよ、或いは不安がるにしても……喜びはしない

もの。

「だ、誰だい？」

「神様？ 僕です。ベルですけど、入れて貰っても良いですか？」
「ベル君!？」

すぐにドアを開くと確かにベルが立っていた。

「ボクを御持ち帰りしたのはベル君だったのかい？」

「うえ？ 御持ち帰り!? ち、違いますよ!？」

「な、何だ……違うのか」

ちよつとガツカリ。

「だとしたら誰が？」

「えつとですね、僕も知らない部屋に寝かされていたんですが、部屋の扉に名札が付いていたんです」

「名札!？」

部屋の外に出て扉を確認すると――「ヘスティアの部屋」と書かれていた。

ヒエログリフ
神聖文字ではなく共通文字コイネーで書かれた名札。

「ボクの……部屋だつて？ それじゃまるで此処が、ボクらの本拠地みたいじゃないか!？」

「それが……調べてみたら正しく、此処はあの教会の地下にある部屋から続いているんですよ神様」

「な、何だつてええええええええええええつ!？」

驚愕のヘスティアは急ぎ廊下を駆けてみると……

「ほ、本当だ」

その先に在ったのはいつもの寢床であつたと云う。

確りと食べ掛けであつたじやが丸君も残っていて、それが如何にも自身の住処であると醸し出す。

「気に入つて貰えたかな」

「うわっ!？」

背後から突然声を掛けられた二人は、ビクリと肩を震わせて叫んだ。

「ユートさん!」

「ユート君かい！」

相手は話を聞いたかったマサキ・優斗その人。

自分のホームなのに勝手を知らない場所をユートに案内され辿り着いた場所、それはみんなでワイワイガヤガヤと騒げる広さを持つ空間……リビングだった。

「それで、これはいったい何なんだい？」

「見ての通り、ヘスティア・ファミリアの本拠地だ。ちよつと改装したけど」

「ちよつと!？」

明らかに数十……というか百倍は広くなってしまった本拠地、ちよつとというには余りにも大きい。

「今までは遠征の事もあったから着手しなかったが、あんな狭苦しい一室だけで僕ら三人が暮らせる？」

「うっ！　そう言われると辛いんだけどね」

ヘファイス托スが用意を

してくれたのは、雨風を凌げる教会の地下にあるあの一室だった訳で、ファミリアの団員が増えれば当然ながら直面する問題が広さ。

ヘスティアとベルが暮らすだけでも精一杯なのに、最初の団員たるユートまで増えたら容量不足となる。

そういう意味ではこうして広くなった本拠地は歓迎するべきであり、ヘスティアの不手際から狭い部屋を押し付ける訳にもいかず、黙るしかなかった。

「今のヘスティアファミリアの本拠地は各人の部屋にくわえて、このリビングに食堂や訓練室などが在る。特に訓練室は街中で剣を揮う訳にもいかないだし、必要な設備だろう。それに僕の工房や武器や防具なんかの製作を行う鍛冶部屋、一応は各人の部屋にも小さいながら有るけど、大浴場も用意をしておいた」

広い個人部屋に運動場に大浴場だとか最早、これは現代的な高級ホテル並だったと云う。

「ま、助かるのは事実なんだけど……さ。昨日の今日っていうか昨夜の内だろ？　どうやってこんな地下にこれだけ大規模な設備を揃え

「たんだい？」

「まあ、ちよつと特殊能力をつかつてね。家具は元から持っていた物を出したに過ぎないよ」

「ふーん……」

納得し切れはしないが、これだけのモノを用意して貰つておいて、文句を言うのも違うから取り敢えずは生返事を返す。

「さて、これからの事とかも鑑みると掃除洗濯調理、やるべき事は人を雇つてでもしないとな」

「当面はボクがやるよ」

「ヘスティアが？」

「バイトもあるけど君らには冒険者として、そっちに集中して貰いたいからね」

「判つたよ」

既にバイトなぞしなくても暮らせるし、借金の返済も可能となつてはいるが、だからといってヘファイストスの所でやっていたみたいな食つちや寝をしていて愛想を尽かされ、ユートやベルが出て行ったら生きる希望を失う。

特にユートなど事実上、「神の恩恵」を必要としていないから、愛想を尽かされたらすぐに出て行く。

だからこそ、ヘスティアは何かしら頑張つて魅せねば主神として居たたまれないのである。

立つ瀬がないのだよ。

「ベルは基本的に訓練だ。ダンジョンにも潜つて貰うけど、確りと闘い方を確立した方が良いからね」

「は、はいー」

ベルは良い返事をする。

「ユート君はこれからどうするんだい？」

「うん？　ベルの訓練に付き合つたりはするけど……基本的には独自行動だね。まだまだやるべき事は一杯あるんだし……」

「そっか」

主に性欲解消とか。

流石のユートも【特定の相手に懸想している】とかに手は出し難いし、何よりヘスティアは処女神だ。

この世界では単純に男神に興味を示さなかったただけであり、処女であり続ける意味を見出だしていないらしいが……

ユートが見る限りでは、ヘスティアはベルに特別な感情を懐いている。

これが百合なら相手ごと喰ったろうが、そうでないならユートにとってどれだけ魅力的に映ろうと、対象範囲外にカテゴライズされてしまう。

よって、この本拠地では性欲解消は不可能。

自慰？　しません。

ティオナを抱いていたから速急に欲しいとは思っていないが、やはりそこら辺の利便性は欲しかった。

「取り敢えず、朝食にしようか」

「そうだね。だけど何を食べるんだい？　若しかして食糧も確保済みとか？」

「食糧は有るけど、今から調理とかは面倒臭いだろ。この遅い時間なら既に【豊穰の女主人】が開いてる。食べに行こう」

「お金は……」

「一ヶ月近く深層域に遠征していたんだ。一千万ヴァリスしか稼げない訳もないだろう？　僕が奢るから」

「なら良いかな。ベル君も構わないかい？」

「あ、はい」

つい先日に見様を晒した店ではあるものの、ユートもヘスティアも外食する気満々だったし、ベルもお腹が空いて鳴っている。

「んじゃ、レッツゴー！」

【豊穰の女主人】へ移動をする三人——正確に云うと二人と一柱——は店内に入り、アーニヤ・フロームルの案内で席に着く。

アーニヤ・フロームルは茶髪をショートカットにした猫^{キャットピープル}人で、

ユートの見立てでは普通に顔は可愛いけれど所謂、アホの子である。

おば可愛いアーニヤは、正に残念美人。

まあ、ユートのお目当てはリユーと呼ばれるエルフ女性なので、アーニヤ・フロームルがどうであれ関係などありはしない。

リユー本人もユートの事を意識している。

初めて逢った際に偶々、手が触れたのを驚いた顔になって、自分の手をまじまじと見つめながら固まり、ちらほらとユートの方へと目を向けていたリユー。

この時はまだユートも、この世界のエルフの特性などを知らず、だからリユーの行動に首を傾げた。

その後給仕に来たシル・フローヴァから、エルフの特性について教えて貰って得心がいったのだ、

「ハア……」

「あからさまに溜息を吐かなくても良いだろうに」

「このお店は店員に御酌をさせる場ではありません」

「ミアさんは許可したんだろう？」

「だからこうして居ます」

リユー・リオンに御酌をして貰い酒を煽るユート、どうせ幾ら飲んでも酔わないのだからと、朝っぱらからアルコール度数も考えずに飲んでいる。

勿論、朝御飯も普通に食べながらの話だ。

とはいえ、もう朝としては遅い時間だから昼食も兼ねていた。

美人エルフの御酌は気分良く飲めるし、不埒な悪行三昧をしなければミア母さんはオツケーを出してくれたので、折角だからリユーにも酒を飲ませてしまう。

少しばかり酔いが回ったのか、リユーの白い頬が赤みを帯びている。

確かアーニヤ・フロームルを唆して聞き出したリユーの年齢は二一歳だという話だが、ほろ酔い状態のリユーは可愛らしさの方が目立つ。

この佯、酔い潰してしまつてベッドに運びたいなんて不埒な衝動さえ俄に沸き起こる程、彼女の可愛いさは凶悪だ。

勿論、やらないが……

「何故か分かりませんが貴方は酔いませんね」

「まあね」

これだけ飲んでいて未だに正体を失う処か、顔を赤らめさえないユートを見て不思議そうだ。

「僕は今生で酒に酔った事は確かに無いな」

「……それでも貴方は飲むのですか？」

「味は解るから」

ユートにとってアルコール——酒とは酔っ払う為のアイテムではない。

純粹に味そのものを楽しむ為のものだ。

そもそもユートが酔わなくなったのは古く、ハルケギニア時代の事だというから驚きだ。

水の精霊王と契約をした結果、一切の毒を受け付けなくなったというか、勝手に分解してしまうから。

恐らくは肉体に変調を来すとして、アルコール成分を毒素と認識しているのだろう。

本当に味わうだけが目的で飲むのである。

ユートのグラスに酒を注ぐリユー、返礼に注いだユートと互いに注ぎ合っている二人。

そして互いに煽る。

「判りました、私の負けという事ですな」

グラスを置いて宣言。

「多少の心得はあった心算でしたが、酔わない貴方にはそもそも勝てる道理ありませんから……」

「ええっ？ リユーさんとユートさん、いつから勝負なんて!？」

青天の霹靂と謂わんばかりに驚愕し、目を見開いているベル。

「お互いに飲み始めた時なんだが？」

「そうですか……」

目と目で通じ合ったとでも云うのか、互いに注ぎ合ってニヤと笑ったあの時、あの瞬間に始まったらしい飲み勝負。

「それで、貴方が勝利した訳だが何を報償に望みますか？ 勿論、常識

の範囲で……ですが」

当たり前だがえっちな望みは却下される。

精々、お金で支払うなら一〇〇ヴァリス程度であらうか？

リユートの美しい肢体が、僅かに一〇〇ヴァリスなど有り得ない、それは誰にでも理解が及ぶだろう。

「そうだね、いずれ暇を見てベルの戦闘訓練でも付けてくれるか？」

ピクリと眉根を顰めたりリユートだが、ユートくらいになれば気付いてもおかしくないと考えて、すぐに眉を元に戻す。

「貴方がそれを望むならクラネルさんを鍛えるくらいは吝かではありませんよ。シルの伴侶となる方に簡単に死なれても困る」

「エルフ君！ 君は何を言ってるんだい!？」

慌てて叫ぶヘスティアの所為で、ベルは文句を言いそびれてしまう。

然し、リユートは気にした素振りも見せず更に言い放った。

「ですがクラネルさんを鍛える事は、貴方が望むべき事では無い」

「望みとは無関係に鍛えてくれるって事？」

「はい。ですので望みは別の何かを……」

ユートがリユートの顔を観察すると、何か期待めいた綺麗な翠色の――エメラルドみたいな瞳。

正直、リユートが護身の為なのか何か常にスカートの下に隠してる小太刀の存在から、彼女の得意な獲物が小太刀と当たりを付けて、ベルのナイフ以外の獲物に小太刀を考えたからリユートに訓練を頼みなかった。

ユートも小太刀くらい使えるが、実は実戦での使用は殆んどしていなかった、冒険者時代に使ってたであろう彼女に教わった方が、恐らくベルにとって有意義であると判断する。

とはいえ、勿体無いと思ったのも事実だ。

それに自惚れて良いのならば、リユートはきつとそつちを期待してる。

ユートは自分が何故かエルフに好かれ易いのだと、理解をしていたけどそれがリユートにも軽い影響を与えているのだと気付いた。

スターである「インフアント・ドラゴン」だね」

ユートも以前に遠征で顕れたのを斃したが、レアであり且つミノタウロスより強い筈の能力。

「どうして僕はドラゴンに武器を持って相対をしてるんですか？」

「そりゃこれからアレと戦うからさ、ベルが」

「ですよねえっ?!」

シクシクと涙を流して、パプニカナイフ・レプリカを手にして駆けるベル。

とはいえ、幾ら俊敏さを武器に最接近をしてナイフで斬り付けても、ベルの腕力では毛ほどにも傷を付けられない。

当然だろう、ドラゴンの鱗はドラクエでは鋼鉄並の硬度を持つとされる。

この世界でも適応されるかは兎も角、それでも相当の硬度なのは間違いない。

ベルの基本アビリティに於ける「力」の項目は評価が未だにIでしかなくて、俊敏がHになっている程度でしかないのだ。

パプニカのナイフ・レプリカの攻撃力はオリジナルと同じか、下手をしたならそれ以上ではあるのだが、使い手がへっぽこでは意味がなかった。

一応、成長促進型のレアスキル——リアリス・フレーゼ【憧憬一途】を発現しているけど、ユートの意見により実はステイタスの更新をしていない。

【憧憬一途】

- ・早熟する
- ・懸想おもいが続く限り効果持続
- ・懸想の丈により効果向上

この文面からベルが想いを寄せる相手に対して強く憧憬を懷き、それがベルの中で続けばどんどん成長をしていくらしい。

何処までも成長——飛躍していけるレアスキルだ。

ベルには内緒で教えて貰ったスキル、とはいえ教導に手加減などし

ない。

スキルの効果は大きい、それならユートのやり方にも幅が広がる。ユートは考えた。

まるでゲームのパラメーターみたいな【神の恩恵】^{ファールナ}だが、それならゲームみたいな効果をも期待が出来るのでは？

つまり、レベルが低い内からレベルの高い敵と戦えばより大きな経験値を得るに至り、より早く強くレベルアップするのでは？

ティオナから聞いた話ではアイズは現在、ステータスの数値的には伸び悩んでいるのだと云うし、何よりもティオナ自身もユートのスキルによって大幅に上昇していなければ、やっぱり大した上昇はしていなかった筈だ……と。

L V・5である第一級冒険者としては、既に可成りのパラメーターだから。

事実、アイズに教えて貰った基本アビリティの上昇数値は、二〇も上がってはいなかったらしい。

アイズは深層のモンスターをこれでもか……と云わんばかりに殺しているが、それで上がった数値が僅か十程度だ。

アイズのL V・5としての成長は既に限界であり、これ以上を望むならそれは即ち器の昇華——ランクのアップが必須なのだろう。

ならば逆に云うならば、低い数値の俦で強敵と戦えば数値は上がり易くなり、続けていればコンスタンスに数値は上がる。

勿論、それにも限度というものはあるのだろうが、今のベルなら効果抜群だ。

最終更新がレアスキルを得た——ベルは知らないが——時のもので、それではインファント・ドラゴンは斃せないだろう。

それでもベルがドラゴンと戦う事にこそ意味があるのであり、斃すのはユートがやれば良いのだから。

「ベル、間違っているぞ」

「何がですか!？」

「狙うのは鱗じゃない！ 眼だ、口の中だ！ 硬い鱗は今のベルには斬れない、だけど柔らかい眼や口内ならベルでも斬れる！」

「っ！ 解りました！」

まあ、それで万事が上手くいきはしないのだけど、ベルはアドバイスに従ってインファント・ドラゴンの眼をナイフで突き、暴れながら大口を開けた瞬間に、もう一振り——パプニカのナイフ・レプリカで突く。

更にグリグリと喉奥にまで突き立てた刃を動かし、だめ押しにダメージを与えていく。

「がはっ！」

殴られて吹き飛ばされ、壁に激突して気絶した。

「詰めが甘いけど……よく頑張ったものだね」

『グギヤアアアッ！』

「喧しいわ、爆裂呪文！」

ドカーンッ！

極大爆裂呪文も斯くやの大爆発に、インファント・ドラゴンの首は喪われていた。

ユートは魔石とドロップアイテムが、ストレージ内に格納されたのを確認し、ベルを肩に担いで呟く。

「リレミト」

その瞬間、ユートの姿はダンジョンから消えた。

第20話：戦女神との再会は間違っているだろうか

インフロント・ドラゴンと闘った翌日、目を覚ましたベルはシャワーを浴びて広くなった本拠地を歩き、食堂らしき大部屋へと向かっていた。

「ハア、流石に死ぬかと思った……けど生きて部屋に寝ていたって事は、ドラゴンはユートさんが斃してくれたんだろうな」

ラフな格好なベルは鎧を纏っておらず、恐らく寝辛いと思ったユートが脱がせたのだろうと考えた。

食堂と書かれたプレートの扉を開くと、ベルの鼻腔を擦る美味しそうな香りが漂って、その途端にグーツと胃が食べ物を求めて鳴り始める。

「うわ、良い匂いだな」

「おはようベル君」

「あ、神様……おはようございます」

席に着いて足をプラプラさせながら、何だか美味しそうなものを食べる主神様——ヘスティアに挨拶をされたベルは、いつもの通りに挨拶を交わす。

「美味しそうですね、今日の朝御飯は何ですか？」

「ベーコンエッグだよ」

カリッカリに程よく焼かれたベーコンに、目玉焼きが乗ったベーコンエッグ。

ヘスティアのお皿には、ベルが今にも涎を垂らしたくなるくらい美味しそうなベーコンエッグに、スライスされたパンが有った。

皿の隣にはマグカップ、中身は茶色い液体——珈琲が入っている。

「ベル君も食べるだろ？」

「え、はい」

「おーい、メイド君！」

「へ？ メイド？」

右手を挙げてプラプラと振りながら叫ぶヘスティアの言葉に、ベル

は首を傾げるしかなかったと云う。

「御待たせッス」

現れたのは年齢的にベルと同年くらいだろうか、白い柔肌を包み込む【豊穣の女主人】とはまた趣の異なるデザインのメイド服を身に纏い、金髪を黒リボンでツインテールに結わい付けた青い瞳で吊り目がちな少女であった。

アイズ・ヴァレンシユタインとはまたタイプが違うのだが、ベルからしたなら凄く可愛い女の子。

「えつと、あれ？　神様、ウチにメイドさんなんて居ましたっけ？」

少なくとも、昨夜までは見ていない顔だった筈で、そもそも貧乏ファミリアにウェイトレスやメイドなど雇う余裕は無い。

仮にユートがファミリアに納めた上納金で雇ったにしても、流石に昨日の今日で雇える筈も無かった。

「うーん、この子はユート君が連れて来たんだよ」

「またですか？」

「そう、またなんだ」

どうにも常識から外れた行動ばかりするユートに、ベルもちよつと頭を抱えたくなってしまう。

「ベル・クラネルさんッスね？　ウチはミッテルト。墮天使ミッテルト・アルジエントッス。この度、このファミリアでメイドを——萌衣奴を務める事になった者ッス。今後とも宜しく」

「あ、御丁寧にどうも」

笑顔で頭を下げられて、思わずベルも下げた。

「これから、ファミリアの家事は取り仕切らせて頂くッス。ベルさんはどうぞ、安心して冒険者家業を頑張って下さいッス」

八重歯がチャーミングなミッテルトの笑顔に対し、女慣れをしていないベルは紅くなりつつ……

「此方こそ」

頭を掻きながら言う。

暫く待つと、ヘステイアが食べていたのと同じ料理がテーブルに並べられた。

「うわ、本当に美味そうですね。戴きます」

お腹が空き過ぎていたからか、本当に美味しいのだと謂わんばかりに料理を頬張っていく。

其処へミッテルト自身、自分の料理を同じ席に座って食べ始めた。メイドとはいえ彼女は別に使用人ではなく、立場上はベルと同じなのだから、特に遠慮はしなくて良い。

「ふむ、メイド君。とても美味しい朝食だったよ」

「それは良かったツス」

その笑顔はベルをしてもドキリと胸が高鳴る程で、若しもアイズ・ヴァレンシュタインへの憧憬が無ければ血迷いかねないくらい、ミッテルトの満面の微笑みは魅力的に映った。

墮天使は人をその魅力で墮落させるのが性分故に、この結果は本来であるならミッテルトは充分過ぎる程の成果を挙げている。

とはいえ、今やご主人様への愛に生きるミッテルトだからか？ ベルの表情が変化して複雑だった。

食後、ベルは今日の予定をヘスティアに訊ねる。

「今日かい？ 確かベル君はメイド君と昼まで訓練、それからソロでダンジョン攻略。五階層まで降りても良いらしいよ」

「ミッテルトさんと訓練……ですか？」

首を傾げるベル。

ウェイトレスっぽい服装だからか、何と無く非戦闘員のシル・フローヴァを思い浮かべてしまう。

「別に心配はしなくても良いツスよ？ ウチ、これでも冒険者のLV.に換算をしたら4はあるツスから」

「はい？ LV. 4!？」

「はいツス。だからベルのLV. 1のステータスじゃ傷一つ付かないツスよ？ 況してや、更新を許されていないベルは今の処、力のパラメーターは低いツス」

泣きたくなる現実だが、今のベルがミッテルトへと全力全開手加減抜きで攻撃しても、恐らく毛程にも傷を付けられないだろう。

「うう……」

「これもご主人様の教導の方針ツス。【神の恩恵】で経験値を得るというのは、弱い状態で強いモンスターとかを斃せば、上がる幅が大きくなる」と予測されたツスよ。だから逐一、更新をするより大幅に短時間でのパラメーターアップが可能だと思われるツス。勿論、限度はあるから暫くしたら更新をして階層を降りて、同じ事を繰り返すツス」

「な、成程……」

「昨夜も、インフアント・ドラゴンと戦わせたのは、良質な経験値を得る為という布石ツスね。そしてウチとの訓練もそうツス」

「わ、解りました！ 宜しく願いますミッテルトさん！」

「任されたツス！」

何処ぞの魔王少女が如く横チエキで応じた。

「そういうえばユートさんはどうしたんですか？」

「ご主人様ならイシユタル・ファミリアが経営してる娼館ツス」

「しよ、娼館っ!？」

田舎者な元農民のベルだったが、娼館くらいは識っていたらしく真っ赤に顔を染めて驚く。

「何か、当たりな娼婦を見付けて専属契約を結んだって言ってたツスからねえ、昨夜は嘸やお楽しみだったに違いないツス」

「お、お楽しみって……」

初心な坊や^{うぶ}でしかないベル、想像すら出来ない世界にクラクラする。

ミッテルトは自身の経験から、ユートの性欲の強さと行為の激しさを知っているし、行為の前後での優しさも知っているのだ。

男の素肌を見ただけでも気絶する初心を通り越した娼婦なだけに、初めてを貰かれて優しくされたなら、コロツとイってしまうのだろうなと予測していた。

「あ、そうそい。メイド君……否、ミッテルト君」

「何ツスカ？」

「君にも【神の恩恵】を刻む様に言われたんだけど、後でボクの部屋に来てくれないかい？」

「？ 此処で良いツスよ」

「ベル君も居るのに良い訳がないだろ!？」

「ウチは別に視られたって構わないツス」

「ダメだったらダメだ!」

「ま、判ったツス。片付けたら行くツスよ」

「そうしてくれ」

疲れた表情になって食器をキッチンに持って行き、ヘスティアは食堂を出ていくのであった。

「ベルは食べたなら食器を戻して訓練室に行くツス」

「判りました」

既に食べ終えたらしく、ミッテルトも食器をキッチンへと持っていく、やはり食堂を後にする。



ヘスティアの部屋。

主神たるヘスティアには殊更に大きな部屋が宛がわれており、ベッドもスティタス更新で眷属^{ことも}を寝転がせ易い様、大きめな物を用立てられていた。

「じゃあ、ミッテルト君は服を脱いで此処に俯せになってくれるかい?」

「了解ツス。然し皮肉な話ツスねえ」

「何がだい?」

「元々は神の方針に付いていけなくて墮天したツス。それが別のとはいえ神から恩恵を授かるとか……」

「ふむふむ。確かに皮肉が利いてるけど、難しく考えなくても良くないかい?」

「そうツスね」

寝転がるミッテルト。

ヘスティアは針で指先に傷を付け、その垂れ流されている神血^{イコル}を以てスティタスを刻む。

【神の恩恵】とは神々が自らの内に流れる神血で、人間に強くなる為

の切っ掛けを与える行為。

眷属の積み重ねた経験値を主神が抽出し、神聖文字として背中に刻み込む。

それにより得られるのは人の身の丈を越えるだろう身体能力、魔法と呼ばれる超常現象にスキルと呼ばれる奇跡に近いチカラ。

それ即ち、神がヒトへと開く神に至る未知なる道。

無限に広がる可能性だ。

人間ではないミツテルトだが、神ではないのだから恩恵は普通に得られると、ユートは予想している。

だからこそその試し。

「んっ……くうっ！」

見た目の幼さと反比例をする艶かしい声は、背中を滑らせる指の感触がくすぐったいのだろう。

「よし、上手くいったよ」

羊皮紙にステイタスの写しを渡すヘステイア。

ミツテルト・アルジエント

種族：墮天使

LV. 1

力：I 8

耐久：I 1 8

器用：I 1 0

俊敏：I 3 2

魔力：I 0

《魔法》

「ライトニングハーツ」

・雷系超短文魔法

・追加詠唱によって威力、精度などの拡大

詠唱式『雷よ在れ』

《スキル》

ダイクネス
黒翼展開

・翼の数で能力解放

・解放により擬似的LV・の上昇

フォールダウン・シャイン

墮天乃光

・光力由来の能力

・イメージ次第で形状変化

「これがウチのステイタスっすか……」

「元々がヒト種じゃなかったからか、行き成り魔法やスキルが顕れて
いるね……ユート君もだったけど」

「翼の数でツスか。つまり今の状態だと普通の冒険者のLV・1と然
程には変わらないツスかね？」

「だろうね。尤も、君ならLV・2くらいは倒せてしまっただけだ」

ミッテルトの黒い翼は、現在だと八枚である。

あの世界で云うと最上級墮天使に相当する能力で、幹部クラスの十
枚には未だに届いていない。

また、ミッテルト達は勘違いをしているのだけど、今の状態でLV・
2相当の能力となっている。

つまり、二枚展開によりLV・3相当で、八枚展開はLV・6相当
だった。

流石は神に至る奇跡だけあり、滅茶苦茶な能力として顕現をしてい
る。

これでも二度目の転生でユートが出逢い、可成りの永い刻を越えて
傍に侍り、三度目の転生にまで使い魔的に付いてきたのだ。

下級墮天使ミッテルトは最早存在せず、最上級墮天使ミッテルトと
なった身。

このステイタスは当然の帰結なのであろう。

墮天使の寿命だからか、仮に数百年、千年と共に居ても変わらぬ容
姿だからか閃姫となる必要性も無い。

ユート自身、性奴隷的な扱いだったり言葉的に扱いが酷かったりす
るのだが、割と御気に入りでもある。

萌衣奴として修業させたのだって、閃姫よりも安いコストで喚べる

身の回りの世話係と、夜の世話係が欲しかったから。

シエスタの招喚コストは存外と高いのだ。

似た事をするシエスタを筆頭としたハルケギニアの時代からのメイド達だが、それとの違いは正室的な扱いのシエスタや、側室的な或いは妾的な彼女らと奴隷に近いミッテルト。

まあ、端から見ても判らない違いに過ぎない。

強いて云えば愛情度か？

ミッテルトにも愛情は注いでいるが、やはり奥様方と奴隷は立場が違うか。

とはいえ元々が敵対者であったミッテルトなのを、上司だったレインナーレがなし崩しで味方となった後、気絶してたから生き延びてやはりなし崩しでユートの下へと身を寄せた。

墮天使陣営には戻れない以上、ユートがリアス・グレモリーのどちらかの庇護を得ねば、墮天使陣営から粛清をされるだけだから。

だからこそ身分が奴隷、御綺麗な呼び方で萌衣奴となった訳である。

その後は修業の甲斐もあつてか、順調に翼の数を増やしていった中級墮天使、上級墮天使へと昇格した。

性奴隷に近いとはいえ、強くなれた事は純粹に嬉しかったし、ユートも普段は意地悪な事も言ってるが、夜の御世話の時にはとても優しくしてくれる。

行為の真つ最中は凄く激しくて気持ちが悪くって、終われば優しくて温かかったから、ミッテルトは慕う気持ちの方が強い。

墮天使陣営の首領であるアザゼルから戻っても良いと言われても、ユートの側を選ぶくらいには。

「それでは主神様、これからベルの訓練に行くッス」

「ああ、ベル君を宜しく頼んだぜ！ それと、ボクはこれから本拠地を空ける事になるけど、二三日は帰らない予定だから。それも伝えておいておくれ」

ミッテルトは扉の前にて一礼し、ヘスティアの部屋を辞するとベルの待つ訓練室へと向かうのだった。



少し刻は遡り早朝。

娼館の一室に敷かれている蒲団の中、二人の男女が気持ち良さげに寝ている。

一人は言わずもがなで、マサキ・優斗だ。

今一人、少女の方は狐人^{ルナル}という種族で、長い金髪に狐の耳を持った美しい娘である。

何しろ、元々は位の高い神に仕える家柄に生まれ、特に不自由無く暮らしていたのだ、ある意味では貴族に近いとも云えた。

その名前はサンジョウノ・春姫、娼婦でありながらすぐに気絶していた所為で実は処女だった為、巡り合わせからユートに初めてを捧げた際、ユートのみに買われる専属娼婦の契約を交わしている。

まだまだ回数を熟してはいないが、それでもそろそろ激しい行為にも耐えられる様になり、昨夜は同僚から教わった奉仕もした。

目を覚ましたユートは、まだ目を閉じて寝息を立てる春姫の頭を撫でる。

本当は欲しいのだけど、何故か主神たるイシユタル自らが春姫を縛り付けて、手放す心算が無いと云う。

春姫とは仲が良いらしい「アイシャ」という名前のアマゾネスからの情報で、主神の肝煎りでは身請けも不可能と舌打ちをしつつ、取り敢えず専属契約で我慢をしておいた。

それなりに金は取られてしまうが、ユートの見れば春姫にその程度の散財は惜しくない。

春姫もファミリアの一員として恩恵を授かっているらしいから、ユートと性交をする事でステイタス上昇が行われている筈だけど、背中にステイタスが刻まれておらず首を傾げたものだったが、ティオナも同じくで訊けば主神がステイタスをロックしているとか。

ロックされていると主神がロックを外すか、或いは解錠薬^{ステイタス・シーフ}を使うしかないとか。

スベスベな背中を擦ると身を振り、くすぐったそうに呻き声を上げる春姫は、ユートの分身の血流が早くなるくらい魅力的であり、眠る春姫を組み敷いて分身たる槍を鞘へと宛がうと、ゆつくりと納刀をした。

勿論、すぐに目を覚ました春姫と朝っぱらから更に数ラウンド、致してしまったのは云うまでもない。



結局、昼近くまで春姫とにやんにやんしてしまい、店のシャワーを使って身綺麗にしたユートは、昼食を近場の店で済ませてヘファイストスに会うべく彼女の本拠地へと向かう。

「は？ 居ない？」

「ええ、ヘファイストス様は暫く前に出掛けられて、今は留守にしています」

応対してきた鍛冶師が言うには、ヘファイストスはガネーシャ・ファミリアの本拠地で開かれる宴に参加するべく、出掛けたとか。

もう少し早ければ会えたらしいが、春姫とのお楽しみの方は外せなかつたし、仕方ないと諦める。

宴が終われば帰ってくるだろうし、夜になってまた来れば良いかと思った。

「つと、そうだ。ヴェルフという鍛冶師は居るか？」

「ヴェルフ？ まあ、居るには居るがね。呼んで来ましようか？」

「頼む」

何故か複雑な表情となった鍛冶師は、ヴェルフを呼ぶべく入口から動いた。

ややあつて、赤毛の男が不機嫌そうな顔となつてやって来る。

紛う事無きヴェルフ・クロッゾであった。

「魔剣なら造らねーぞ？」

「魔剣？ 何を言っているんだ己れは……」

「あ、アンタは！」

目を見開いたヴェルフ。

「僕はヘファイストスに鎧の感想を言いに来たけど、居なかったから序でに君の盾の感想を言おうと呼んだんだが？」

「お、応！」

身構えるヴェルフに対して淡々と告げる。

「鍛冶の発展アビリティを持たない身と、素材的に見て悪くはなかったね」

「本当か!？」

「とはいえ、叩いて砕け——ゴライアスまで保たなかったし、やっぱり僕には余り意味が無いかな」

「ぐっ！　ゴライアスって言うが、アンタはLV・1の筈じゃないのか？」

「LV・は……ね」

目に見える恩恵的には、確かに下級冒険者でしかないユートだが、元々の強さから深層域まで遠征に行けるだけの能力は有った。

「ま、僕には要らないが……うちのファミリアに新しく入団してきたメンバーが居てね。彼にはヴェルフの武具が必要になる」

「新しくって、つまり真正正銘のLV・1か？」

「僕が鍛えてるからすぐにランクアップするさ」

「……成程な。つまりは、俺が二人三脚で武具を造る相手は……」

「そう、ベル・クラネル。ヘスティア・ファミリアの期待の新人ってな」
「そうか。なら、やあああつてやるぜっっ！」

その後はユートが持つ剣をヴェルフに見せたりと、割と楽しい時間を過ごす。

男友達も良いものだ。

時間が過ぎるのも忘れてヘファイストス・ファミリアの本拠地にて楽しんで、いつの間にか夜になっているのにも気付かずに居た。
だから。

「——優斗？」

「え？」

声を掛けられたユートが振り向くと……

「会いたかった！」

ロングヘアの菫色な髪の毛に碧色の瞳、それは見ユートにとってはよく知った顔であった。

「沙織……お嬢さん……？」

否、この感じはサーシャなのか？」

即ち、戦女神アテナ。

・

第21話：神の宴でのお話は間違っているだろうか

ガネーシャ・ファミリアの本拠地——「アイアム・ガネーシャ」という建造物がどっしりと建っている。

それは人型がどっしりと座っている形をしており、ガネーシャが常に被っているマスクと同様、象の顔をしているおかしな建物。

「うわあ……」

しかも入口が股間の真下だとか、ヘスティアは複雑な表情となつて呟く。

「股間が入口だとかさ……ガネーシャの奴、頭は大丈夫なのかい？」

本当は来る心算などなかった【神の宴】であるが、神友のヘファイストスにはどうしても用が有るが故、ユートが自室に用意してくれていた純白のドレスにて着飾り、こうしてガネーシャの本拠地まで来た。

何故だかスリーサイズがピッタリなのは少し話し合いが必要な気もしたけど、折角の好意に甘えてドレスを着て、アクセサリーを身に付けての来場である。

それを見ていた男神共はいつもみたく『ロリ巨乳』呼ばわりせず、何処か気品に溢れるヘスティアの姿に見惚れていた。

派手派手しくないドレスとアクセサリーだったが、然し地味な訳でもなかったからか、ヘスティアの容姿にマッチして当社比二割増しに美を体現している。

美の女神でもないのに。

実際、着飾ったヘスティアに見惚れている男神の中には美の女神フレイヤや、或いは歓楽街の支配者であるイシュタルに気を寄せる者共も居る辺り、男という哀しい生き物は神も地上人も変わらないのだろうか？

とはいえ、ユートが用意したドレスはヘスティアの巨乳を下品にならない程度にチラ見せし、背の低さなどアクセントくらいにしかならず、マイナスにはみられてはいなかったし、寧ろそれが巨乳を際立た

せる。

何と無く視線の意味を察するヘステイアだったが、それで増長はしない。

「アイアム・ガネーシャ」の股間——もとい、入口を通り抜けて広いメインの会場に入ると、立食形式でテーブルには沢山の食べ物が並んでいた。

少し前までのヘステイアであれば、ベルへのお土産にタッパーへ食事を詰められるだけ詰め、自分自身も大量に食してはつきり云えば色気も何もあつたものじやなくなるが、今や食事には困っていないからか？ 軽く渴いた喉を湿らせるといった程度にワインを飲むに留まっている。

白い肌がほんのり桃色に染めると、唯でさえ高まる色気に艶やかさが増し増しとなり、男神共は『ロリに目覚めてしまう！』とか呻きながら前屈みに……

「うーん、ヘファイストスは何処に居るのかな？」

基本的に「神の宴」にはオラリオ内の神々が招かれる訳で、何処ぞの酒造りが大好きな神みたいなのや、貧乏暇無しな薬神でもなければ参加をしている筈。

斯く云うヘステイアも、ヘファイストスに用事がなければ不参加だった。

「ヘステイア、貴女も来ていたのね」

短く刈った赤毛に右目を眼帯で覆った、真っ赤なパーティードレスを身に纏った女神ヘファイストス。

丁度、搜していた相手から声を掛けられた。

「ヘファイストス！」

「二ヶ月振りね」

ヘステイアが彼女と以前に会ったのは、遠征準備にユートと本拠地に言った時であり、それも約一ヶ月前くらいの話。

それからは特に用事も無かったし、ヘファイストスは鍛冶師としてもファミリアの主神としても忙しく、ヘステイアだってアルバイトを未だ続けていたから、互いに会いに行っていない。

「兎に角、会えて良かったよヘファイストス！」

「何よ、言っておくけれどもう一ヴァリスも貸さないわよ？　まあ、今の貴女には必要無いでしょうけど」

「勿論さ！　ボクが神友の懐を漁る神だとも？」

「いや貴女、ついこの間までウチでゴロゴロしていたじゃないの」
「うぐっ！　それは……」

ヘファイストスの鋭過ぎるツツコミを受け、息を詰まらせてしまう。

「確か、曰く『明日からは本気出す』だったかしら？　翌日も『明日からは本気出す』って言ってゴロゴロしていたけどね？」
「がはっ!？」

正に【自宅警備員】的な科白であつたと云う。

まあ、ゴロゴロしていて警備員は失格だろうが……

「ふふ、相変わらずなのねヘス」

「うん？　ボクをヘスって呼ぶのは……」

にこやかな笑顔を浮かべるのは、純白のドレスに身を包み右手に先端が翼を広げた様な意匠な黄金の杖、腰までサラリと伸ばしている長い藍色の髪の毛に碧色の瞳、ヘファイストスの後ろから歩む姿は高貴さを醸し出しながら、何処か庶民的な所作が親しみを感じさせる佇まい。

「あら、アテナ」

「サーシャー！」

ヘファイストスとヘステイアが同時に彼女の名前を呼ぶが、何故か二人は違う名前で呼んでいた。

「ヘス、久し振り」

「うん、久し振りだね！」

彼女は知恵と芸術と工芸を司る戦女神アテナ。

然し、ヘステイアは何故かアテナの事をサーシャと呼んでおり、アテナもまたヘステイアをヘスと愛称で呼ぶ神友の間柄。

これに純潔神アルテミスを加えると、三大^{トッブスリー}処女神となる。

尤も、純正の純潔神とは違ってアテナは処女性には拘りが無く、単

純にその気になれる男が居なかったに過ぎない。

これはヘステティアも同様であり、故にこそこの二人は神友になれたのだろう。

ヘファイストスは二人の共通の神友なのだ。

「サーシャはまだヘファイストスの所かい？」

「うん、中々居ないよね。ファミリアに入りたいつて言ってくれる人」

「だよねえ……」

片やベルみたいにファミリア行脚で冷遇されている一般人も居れば、片やヘステティアやらアテナみたいに冒険者志望の地上人捜しに奔走し、尚且つファミリアに入団してくれる者が居ないと嘆く。

逆にベルとヘステティアの様に、互いに需要を見出だせれば眷属に……といった流れにもなる。

残念ながらアテナは現状でヘステティアみたいな運命の出逢いはなく、ヘファイストスの世話になりながら眷属を捜していた。

「けど、ヘファイストスも酷いよな」

「何がよ？」

「ボクの事は無理矢理にでも追い出した癖に、サーシャは今でも本拠に住まわせてるんだろう？」

「あのねえ、貴女は本当にゴロゴロしてただけだったけどね、アテナはウチでアルバイトをしながら眷属捜しも真面目にしてるの。追い出す必要が無いわね」

「げふっ！」

盛大に自爆した。

とはいえ、基本的に変わらない神だから食っちゃ寝しても太らないし、それでヘステティアの美が損なわれたりはしなかったが……

ヘステティアが無駄に遊び呆けている間に、アテナは確りと地に足を付けてくらしていたのが、何を間違ったのかヘステティアには眷属が二人——ミッテルトが増えて三人になっているにも拘わらず、アテナには未だに頼るべき依る辺となるであろう、眷属には全く巡り会えないでいた。

「それでサーシャ、君ってこういう宴には余り来ないのに、今日はどう

「風が吹くのを待たない？」

「実はね、先日ダンジョンで小宇宙を感じたの」

「コスモ……サーシャが言っていたボク達の、神の力——アルカナムの劣化版」

「あれは……私がよく知る小宇宙だったわ」

「そ、そうなのかい？」

「テンマもアローン兄さんももう居ない。若し可能性があるとしたら彼だけ」

嘗て、蟹座のマニゴールドと魚座のアルバフィカと共にイタリアより聖域にやって来た少年。

その際には暗黒街の暗黒聖闘士を斃すのに一役買っており、マニゴールドもアルバフィカも彼を敵対者とは見ていなかった。

教皇は当然ながら疑惑の目で視ていた訳だが、それは嘗て似た様な出来事が起きていたからだ。

牡羊座・アリエスの黄金聖闘士アヴニールという、未来から来た男である。

彼と同じく未来から来たユート、これは疑惑を持っても当然である。



『ユートと言いましたね。貴方がいったい何処から来たのか、そして何故その……杯座クラテリスの白銀聖衣を身に纏ってるのか、私達は理解をしなければなりません。現在我らに杯座の同胞は存在していない』

『僕は……正真正銘、杯座の白銀聖闘士だ』

但し、麒麟星座の青銅聖闘士だったり双子座の黄金聖闘士だったりするが……

『ならば、御主はアヴニールの同胞という事か？』

『誰だ？』

『前聖戦に於いて我々の前に現れた牡羊座の聖闘士、アヴニールだ』
『牡羊座？ いったいいつの時代から来た？ 僕の知る牡羊座はアヴ

ニールなんて名前じゃないし、次代の牡羊座も違う筈だ』

冥王ハーデスとの最終聖戦で牡羊座はムウであり、順当に往けばその弟子である貴鬼が牡羊座を継ぐ。

アヴニールなんて聖闘士など、黄金聖闘士処か雑兵にも名前を聞かない。

『確か、アヴニール本人は一九九〇年代だ……と』

『僕の居た時代だな……』

それで得心がいった。

ユートはこの世界に干渉した事で一巡目からND——二巡目にシフトした世界が自分の世界と認識していたが、どうやら三巡目だったらしい。

『そういう事な……』

『どういう事か？』

『僕の世界とはアヴニールの居た世界からシフトした三巡目の世界、この世界を基点とするアヴニールによる干渉を受けた世界が二巡目の世界、そして恐らくはアヴニールの居た滅亡した世界が一巡目の世界だ』

『ふむ……』

理解したのかしてはいないのか、教皇セージは顎を擦りながら頷く。

『ならば、彼は見事に世界を救えたのだろうか？』

『そうかもね』

冥王ハーデスは斃した。

ならば、確かにアヴニールは世界を救ったのだ。



あの出逢いから暫くして魚座のアルバフィカが死亡をして、ユートがピスケスを一時的に継ぎ闘った。

ひよっとしたら聖戦が始まってからは、テンマより長く側に居たであらう。

人影が……

「あらあら、色々とお話が弾んでるのね」

長い銀髪の女神。

「フ、フレイヤ！」

「あ、フレイヤ」

ヘステイアは引き気味、サーシャは喜色満面で女神フレイヤを迎えた。

「あら、ヘステイア。若しかしてお邪魔だった？」

「そ、そんな事はないけど……ボクは君が少し苦手なんだよ」

「フフ、貴方のそういう処が私は好きよ」

「ヘファイストスやサーシャと居たのかい？」

「ええ、偶々ヘファイストスとアテナを見掛けたから一緒に廻っていたのだけど……少し用があつて離れていたのよ」

神でさえうつとりとする様な美しい容姿、綺麗な銀の髪の毛に紫水晶の瞳……それが男神は疎か女神さえ見惚れるので業が深い。

「そうなのかい？ まあ、ボクは苦手な君より大嫌いな奴が……」

言った瞬間、赤毛糸目で絶壁貧乳な女性が手を振りながら走って来る。

「おい！ ファイトン！ フレイヤ！ アテナ！ ドチビ……ツツ！」

即ち、ロキだ。

「居るんだけどね！」

立派なドレスに身を包むロキ、完全なる絶壁であるが故に簡単に男装が出来そうな感じだが、パーティードレスを着れば成程確かに女性であつたと云う。

ロキはヘステイアとの仲こそ不倶戴天であるけど、彼女の神友たるヘファイストスやサーシャとは意外なくらいに仲が良い。

やはり胸か？

それとも相性が徹底的に悪いのだろうか？

ヘファイストスもサーシャも身長に合った平均値、それに比べてヘステイアは身長の高さ顔の幼さに反比例して、その胸は余りにも大き

いモノであり凶器。

正反対の絶壁なロキは、やはりヘステイアの凶器を羨むのだろう。ヘステイア側に立てば、ロキが彼女を羨んで苛ついて突っ掛かり、それが故にヘステイアとの仲が悪くなったと考えられる。

ロキ側に立つなら彼女の動きが気に食わないから、ヘステイアがロキを一方的に嫌ったから仲が悪くなったとも考えられた。

まあ……いずれにしても二人の仲が悪いのは変わらない事実であり、その過程を余人が知った処で誰も楽しくはないだろう。

「何しに来たんだ、君は」

「何や、理由がなきゃ来ちゃあかんのか？——『今宵は宴じゃ〜っ！』とかいうノリやろ？ 寧ろ、理由を探す方が無粋っちゅうもんやないか。はあ……マジで空気読めてへんよなあ、こんどチビは」

ビキビキッ！ 青筋が浮かび上がるくらい怒りに顔を歪ませるヘステイア。

「顔がスゴい事になっているわよ？」

ヘファイストスが指摘、取り敢えず表情を戻す。

「き、君のファミリアへと所属しているヴァレン何某について訊きたいんだよ」

「ああ、噂の【剣姫】ね？ それは私もちよつと聞きたいかも知れない」ヘステイアの質問を受けたヘファイストスも乗り、ロキへと視線を向ける。

「あん？ ドチビがウチに願い事やなんてな、明日は槍か鉄槌でも降るんとちやうか？ こう、神々の最終戦争！ みたいな感じで」

随分と物騒な事を宣った事はスルーし、ヘステイアは重大な質問をした。

「……訊くよ、ヘファイストス曰く噂の【剣姫】は、付き合っている様な男とか或いは伴侶が居るかい？」

「あほう、アイズはウチのお気に入りや。嫁には絶対出さんし、誰にもくれてやらんわ。ウチ以外にあの子へちよつかい出してきたらそいつは八つ裂きや！」

「ちいっ！」

「何でそのタイミングで舌打ちしてんのよ？」

呆れるヘファイストス。

「まあ、いつか奪われそうで戦々恐々やがな……」

「ん、何か言ったかい？」

「何も言うたらんわ！」

ロキは心配していた。

あのユートのもっているレアスキル、あれをアイズが知れば間違いなく彼女はユートに股を開く。

強さに焦られるが故に、アイズが躊躇う理由なんて有り得ない。

ヘステイアは不満だ。

ベルの獲たレアスキル、リアリス・フレイゼ【憧憬一途】の対象となっているのは、間違いないロキの所の【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインである。

懸想が強ければ強い程、それに比例してベルは成長を促される筈。

今はユートの命令から、ステイタスの更新をしてはいないが、修業が一段落ついて更新したらきつと驚くべき飛躍ことどもをしていよう。

だけど何故？ 選りにも選ってロキの眷属ことどもだったのかと思う。

地上の子供達は自分達、神々と違って変化し易い。

それはきつと喜ばしい、だけど素直に喜べない自分に嫌悪した。

「ああ、折角やからウチからも質問や」

「珍しいね？ 何だい？」

「ドチビン所の子供やけど……まさかウチらの力を使うてへんよな？」

「ボクらの？ アルカナム【神の力】を？ 使う訳が無いだろ！」

「ならエエわ」

あんな、他人に多大過ぎる影響を与えるスキルが、自然発生するものなのか？ ロキはだからヘステイアの反則を疑った。

だが、いけ好かない女神だとはいえ嘘を吐ける性格でもないし、だからすぐに追求をやめたのだ。

神々に人類は隠し事が出来ず嘘も吐けない、だけど神の考えている事は神にも解らないもの。

そして神は曲者が多い。

とはいえ、アテナみたいな純朴に過ぎる女神も居る訳だが……

「にしても、ドチビが普通にドレスやとはな」

「ふん、悪かったね」

「別に、あの子なら買えるやろうしなあ。フレイヤ、ちよう飲みに付き合えや」

「あらあら、仕方ないわねロキったら。私も取り敢えずは知りたい事も知れたし構わないわよ」

そう言いロキは美の女神フレイヤと去って行つた。

「……何だったの？」

「さあ？」

あつかんベーをしているヘステイアと去るロキと、二人を見ながらヘファイストスとサーシャは首を傾げるしかなかったと云う。

「じゃあ、取り敢えず私達も河岸を変えましょうか。ウチの本拠に御招待させて貰うわ」

ヘファイストスの言葉に従い、ヘステイアとサーシャは彼女の本拠に向かう。

其処では丁度良くユートが赤毛の男と話していた。

それを見たサーシャは、瞳を潤ませながら呟く。

「――優斗？」

「え？」

サーシャが声を掛けたらユートが振り向く。

「会いたかった！」

駆けるサーシャはユートの背中に腕を回し、しっかりとその身体に抱き付く。

「あゝ！」

驚くヘステイア。

「沙織……お嬢さん……？ 否、この感じはサーシャなのか？」

嗚呼、間違いない。

自分の知る優斗だ！

アローンもテンマも居なくなり唯一、出会える可能性があった男の子。

アテナの聖闘士・双子座のユートだった。

この世界のアテナとして生まれ変わったサーシャ、何億年が経ったか判らないけど、嘗ての自分を知る者に出会えた瞬間だった。

・

第22話：新たな眷属は間違っているだろうか

感極まったサーシャに抱き付かれたユートだけど、そんなどさくさ紛れに確りと抱き寄せている。

勿論、サワサワと柔肌を堪能するのも忘れないが、サーシャは嫌がる処か頬を朱に染め受け容れていた。

アテナという“神”だとはいっても、サーシャ自身は人間の腹より誕生をしているから、精神も城戸沙織より人間に近い。

沙織は人間として数年を暮らし、その後は城戸光政から戦女神アテナの化身だと教えられ、自覚を持つて神と人間の二重生活をしていたのだが……

肉体的には人間をエミュレートした神体だ。

それは兎も角、サーシャだって思春期を人界で過ごした事もあり、恋愛に興味が無かった訳ではない。

アテナだから聖域の周りの男に惹かれず、だからといってハーデスの器だった兄のアローンは論外だし、テンマはやっぱり兄妹？ 姉弟？ 杓だろう。

それでも聖戦を生き残れていれば、擬似的な恋愛はテンマとも出来ていたかも知れない。

が、所詮は訪れる事の無かったifに過ぎないし、この世界のアテナとして生まれ変わって数億年。

二度と会えないテンマや兄より、僅かながら可能性があるユートを想ってきたからか、ユートのえっちな行為を受け容れる程度に、好感度は高かったらしい。

「もう、相変わらずだね。けどちよつと嬉しいかも」

因みに、相変わらずとは言うが別にサーシャへこれをやった事は一度も無く、ユートがセリンサ達候補生や巫女達に対して軽くスキンシップをしているのを、彼女に道すがらなどで見られていただけだ。当たり前だがサーシャもそれを羨ましいだとか思ってた見えていた訳ではなくて、『またやってる』と苦笑いをしながらである。

だが側付きの巫女達とはいえ――『あれ、気持ち良いのよね』と頬を朱に染めていた。

候補生だろうが巫女であろうが、聖域という一種の閉ざされたコミュニティに所属をする以上、どうしてもストレスが嵩むもの。

ユートはそんなストレス持ちの彼女らにマッサージを施していく。そう、最初は当たり障りの全く無いマッサージで、次第に触れる部位を必然的に増やしていき、向こうが触れられても嫌悪感を持たない様に精神をアンロックさせていくからか、次第にエスカレートをした。

肩を首筋を腰を……と、本当に当たり障り無い場所からうなじ、脇腹、果てはおっぱいまで到達せしめればしめたもので、相手だつてそこまですればナニをされているか理解をするが、マッサージされているのだと蕩けた頭で受け容れて、最終的には最後まで赦す者までもが居たくらいだ。

悪魔の如く手腕は教皇も『頭が痛いわい』と言わしめ、後のシオンが統治をする聖域でも頭痛に悩まされたとか……

今ではサーシャも理解が出来た、皆がいったい何を求めてユートに身を任せていたのかを。

だからこそ、今は素直な気持ちでユートからの接触を楽しめているのだ。

とはいえ、ユートもだがサーシャもいつまでも抱き合つてはいられない。

何しろ、真っ赤になっているヘスティアとやれやれとジト目なヘファイストスが見ていたし、ヴェルフも目を逸らしてポリポリと指で頬を掻いている状態で、衆人環視とまでは云わないまでも人前なのだから。

それにユートは訊きたい事だつていくつかある。

温もりと柔らかさを惜しみつつサーシャを引き剥がすと、両肩へと手を置いてまるで子供に質問でもするかの様に優しく訊ねる。

「どうしてサーシャがこの世界に居るんだ？」

「……その前に教えて欲しいんだけど」

「教える？ 何を？」

「ユートが最後に私を認識したのはいつ頃？」

「ハーデスとの決戦が終わってから十四年くらいか、カイロスが聖域を襲撃しに来て、教皇となったシオンと共に双子座^{ジエミニ}として対処していた時、君とテンマの小宇宙を感知……カイロスをアテナの楯が持つ力で討ち祓い、ペガサスとアテナの聖衣を置いていった際だね」

「そっか……」

何処かホツとした様子のサーシャは……

「ちゃんと私の知っているユートだね」

文字通り、女神の微笑みで不安が払拭されたのだと吐露をした。

「私はその後、本来であればオリンポス山の本拠地で眠る私の本体に還り、再び分体を降ろすまで天界にてアテナとして過ごす筈だったのだけど、分体が還ったのは確かなのに私はこうしてこの世界のアテナとして生まれ変わってしまった。容姿も見ての通り昔の私の俤で」

当然、ヘステイア達みたいな地球と同じロールを与えられた神々が居るなら、サーシャではないアテナが彼女とは別の容姿で誕生をしていただろうが、それがサーシャを取り込む形を以て別神として再誕させた。

そういう事だろう。

「私が地上に降りたのも、億に一つの可能性を求めて……ひょっとしたらユートに逢えるかもって考えて、ヘステイアにくつついて来たんだよ？」

「成程……」

どうやらユートがこの地に喚ばれた理由の一つは、神の何億年にも亘る想念であつたらしい。

「テンマやアローンを喚ぼうとは思わなかった？」

「それは百パーセント無理だと解ってるからね。私だつて仮にも神なんだよ？ 死と転生を神たる私が確認した以上、最早決して覆らない宿命だもの」

アローンはまだ兎も角、テンマは決戦後に死んでの星矢として転生、この流れは確定した未来となった。

であるからにはテンマという意識は存在しないし、記憶すら喪われている。

喚び出せる筈がない。

「私が逢いたかったのは、テンマであって城戸沙織の星矢じゃないから」

「次善で僕……か」

「う、ごめんなさい」

「いや、サーシャに再会出来たのは嬉しいからね」

周りはいまいち理解が追いつかないが、本人レベルではすっかり解り合っているから問題は無い。

サーシャはユートから聞いて知っていた。

仮に死んで転生しても、テンマやアローンとは違って記憶と意識を保有して、次代に引き継げる事を。

だから逢うならユート、それしか希望は無かった。

事実としてユートはスプリングフィールドから柩木へと転生をしているけど、前世の方も確りと覚えているのだから。

「それで、サーシャは僕と逢えたらどうする心算だったんだ？」

「うん、私のファミリアに入って欲しくて。だから今回だってヘスに間違いなくユートだったら、改宗を頼んでいたんだよ」

「ふむ、ヘスティア！ 僕の改コンバージョン宗の準備を頼むな」

「アツサリ見限られた？」

これにはヘスティアとてショックを隠せない。

きつと泣いても赦されるのではなからうか？

「ひ、酷くないかい？」

実際に涙目で縋り付く。

先にもヘスティア自身が述べたが、ユートは彼女のファミリアに於ける謂わば稼ぎ頭というやつであり、新人でしかないベルなんかとは比べ物にならない程、ダンジョンでは稼げる。

ベルだと一万ヴァリスも現在だと一日で稼げない、それがユートなら軽く潜るだけで一日に十万、二十万ヴァリスと稼げるのだ。

こればかりはヘスティアが如何にベルスキーであろうとも、決して

覆す事など出来ない事実だった。

第五層で更新無しのソロプレイ、これでベルが稼げるのは精々が二、三千程度でしかなく、二人が慎ましく食べていくなら何とでもなるかも知れないのだが、装備品やギルドに納める為の税金や普段で使う品物、更にはいざという時の為に貯蓄も考えると、これは如何にも足りないだろう。

せめてステイタス更新が赦されれば、それでも倍額は稼げるかも知れない。

然し、ベルの将来の為の修業を毎日の糧の為に食い潰すのは、主神として如何なものかとも思う。

「別にベルを見限った心算は無いから安心しろ」

「ボクは!?!」

「サーシャ。今は僕も大した事が出来ないが、いつか聖^{サンクチュアリ}域みたく御殿を建てて暮らそう」

「無視されたっ!?!」

ヘステイアの様子が余りにもおかしくて、遂に嘔き出してしまうサーシャ。

「ユート、人が悪いわ」

「そうだな」

当たり前だがヘステイアを見限った心算も無い。

「それで? アテナもだけどユートはどうするの?」

黙って事の成り行きを聴いていたヘファイストス、だが到頭というべきか口を出してきた。

「うん、そうだね……僕がサーシャのファミリアへと改宗するのは決定事項だ」

「……アテナ・ファミリアが誕生する訳ね?」

「んで、ファミリアが出来たらヘステイア・ファミリアと同盟を組む」
「同盟?」

「そうさ。昔、ゲームでもファミリア——ゲーム中ではギルドと呼んでたけど、ギルド【ZOG】とギルド【レリック】で同盟を組んでいてね、二つの小規模なギルドが組んで大規模ギルドに拮抗していたん

だよ」

「ゲーム……ねえ」

とはいえ、ヘファイストスにバーチャルやらテレビゲームやら言っても理解は出来まい。

それはヘステイアもそうだが、文明レベルが二百数十年前なサーシャもだ。

「同盟……見限られた訳じゃないのは嬉しいけれど、改宗はするんだね？」

「ヘステイアがベッドの中で僕を受け容れてくれるのなら考えたけどね、それは出来ないんだろう？」

「うつー！ ごめんよ、ボクにはベル君が……」

真つ赤に顔を染めながら言うヘステイア、どうやら遊び心ではなくはたまた、美の女神みたいなものでもなくて、割と本気でベルの事を想っているらしい。

処女神とか云われても、純潔神アルテミスとは違って、またギリシア神話での二柱とも異なり、決して処女性に拘りがある訳ではないヘステイアは、相手が眷属こどもだとはいえ乙女の恋心が燃えている。

いつかは処女を捧げて……とか考えていそうだ。

ユートは趣味ではなかったらしく、ベルが居なければ或いは転んだかもだが、どうやらそうはならなかったらしい。

「それで、同盟を組んだとしてどうするのかしら？」

「本拠地はあの廃教会の下で充分、改装もしたから。ヘステイア・ファミリアとアテナ・ファミリア共同で使える広さが今はある」

「確かに……」

ヘステイアが頷く。

「改装？ まあ、誰も使わない辺鄙な場所の教会だったから構わないけどね……それで僅かな時間で広さを確保したの？」

「まあね、いずれ遊びにでも来れば良いよ。鍛冶工房も在るから、ヘファイストスもヴェルフも楽しめると思うからさ」

「へえ？ それならいつか寄らせて貰おうかしら」

腕組みをしながら愉しげなヘファイストス。

「ミッテルト君も改宗するのかい？」

「うん？ ああ、ミッテはその仄でも良いよ。あの娘は基本的にメイドをさせておくから。アテナ・ファミリアには別の娘を入れる」

「別の娘？」

「昔に回収した娘が居るんだよ。ずっと放置してきたけどね、折角だから封印から解除しよう」

ユートは、アイテムストレージからカードを出す。

仮面ライダー剣みたたく、誰かしらを封印する為の札をハルケギニア時代、最終決戦後の放浪時でザールブルグ在住の時に製作して、その後に移動した世界にてとある少女を封じた。

元々は敵対者だった悪女だけど、分体の少女と統合された事で再び良心を獲ており、悪女だった頃の性格は偶に戦闘時にS化するくらいでしか残ってない。

いつそ気持ち良いくらい悪女だったが、容姿は割と美少女にカテゴリーズされるから、分体の少女に頼んで再び分離したのだ。

記憶も力も、基本的には分体の少女に残した謂わば搾り滓レベルでしかなく、残されたのは美少女としての容姿と、力と記憶の残滓程度だった。

記憶も明確なものでなく、無意識に残るくらいの僅かなモノ。

本人に残った明確な記憶は名前と、幼い頃に幼馴染みと唄った歌くらい。

「さあ、数百年は放置したけど開封の時だ！」

《REMOTE》

カードの大元が剣である以上、クラブのカテゴリー10【リモート・ティピア】で開封される。

まあ、このカード自体がユートの権能——【至高と究極の聖魔獣】で再現した物だが、効果は仮面ライダー剣の劇中で使われていたラウズカードと同じ。

だからこそ可能。

闘神都市で生活していた頃に、這い寄る混沌が転生者を送り込む際

の特典として喚び込んだが、上手く逃れた女神サラスワティへとクラブスートは預けたが、今は返還されている。

カードから光が溢れて、ブランク化すると同時に顕れたのは、黒髪をボブカットにした吊り目がちな顔、それなりには肉付きの良い肢体、それを覆い隠す様に着ているレオタードっぽく服装に、何故か背中からは虫系の羽根が二枚生えている美少女であったと云う。

「あ、私は……」

「久しいね、ラブレス」

「ユート……さん？」

ユートに敵対した悪女とは思えないくらい弱々しく訊ねる様は、庇護をしたくなるくらいに可愛い。

元々、その世界の守護者の一つの王女で、本来だと心優しくったのを敵の黒幕が慈愛や良心を分離したのが悪女ラブレス。

然し、分体が本体であった彼女を吸収してしまい、お陰で再び分離した彼女は分体だった少女の良心とか慈愛を得ている。

それが故の現在だ。

「あの、私を封印から解除したという事は何か用事があるのですよね？」

「まあね。君には其処に居る女神の眷属になつて貰いたいんだ」

「女神様？」

「初めまして、サーシャ……女神アテナです」

「あ、初めまして。私の名はラブレスです」

お互いに何とも間拔けな挨拶を交わす。

「細かい話はサーシャにして貰うとして、早速だけどヘファイストスに場所を借りて【神の恩恵】を刻んで貰おうかな」

「うん。ヘファイストス、何処か借りれない？」

「貴女に貸していた私室にベッドが在るでしょう？ 其処を使いなさいな」

「あ、そっか。それじゃあラブレス、行こっか」

「えっと、はい……」

サーシャに手を繋がれ、ラブレスは建物——ヘファイストスの本拠

に入る。

「それじゃ、さつさと話を詰めておこうか」

「うん、そうだね……」

ヘステイアは何とも言えない顔で頷いた。



レオタードタイプな服装だから、背中を晒すとなれば産まれた俣の姿になるか上半身だけ晒すかのいずれかになる訳だが、ラブレスは八〇センチくらいのサイズのおっぱいを腕で隠し、頬を朱に染めて立つ。

レオタードの肩紐部分を外して、上半身だけ裸体を晒したという訳だ。

幾ら女同士でも完全に脱ぐには抵抗があつた様で、ラブレスもサーシャも普通の対応となつた。

「あ、この羽根つて本物なんだね」

「あ、はい。私達の一族は個人差こそありますが、誰しも羽根を持ちます」

そのくらいは覚えていたらしい。

「へえ」

ベッドに俯せとなって、背中を晒したラブレスの上に馬乗りとなり、サーシャはナイフで指を傷付けた。

プツツと小さな傷が付いて流れ落ちる血液、聖衣に着ければ進化すら促して、更には小宇宙を極限にまで高めれば、神衣カムイというオリンポス十二神しか纏う事を許されない闘衣に最も近い神聖衣となる程、強力な神威が籠つたモノ。

それを使つてラブレスの背中に描かれるものこそ、【神ファルナの恩恵】と呼ばれるモノだ。

シュツシュツと指を動かすサーシャ、これが初めての経験だからか少しばかり興奮気味であつた。

ラブレス・ソーディアン

所属：アテナ・ファミリア

種族：シャーマン

LV・1

力：I 8

耐久：I 6

器用：I 1 5

俊敏：I 3 8

魔力：I 6 6

《魔法》

【神雷降臨】

- ・雷系超短文魔法。

詠唱式『剛魔神雷降臨』

【鬼光術】

- ・自然と内なる力を融合、【鬼光】と換えて放つ剛魔人族の術。
- ・本来の内なる力は氣だがシャーマン故に魔力使用。

【鬼光剣】

- ・超短文魔法。

・剛魔神族の持つ鬼光術の最終奥義。本来はシャーマンが使える術と異なるが、シャーマン族の伝説の戦士イシユタルの娘で、僅かなアネスとしての精神からの再現が可能となった。

詠唱式『来たれ鬼光剣』

《スキル》

【体感学習^{ラーニング}】

- ・受ける事で習得する。

・資質が無ければ無習得。・資質が低い場合は複数回を受けて習得。

【神霊^{シャーマニズム}乃術】

- ・本来の魔法。
- ・系統立てて使用可能。
- ・基本的に魔法名だけでの発動。

「な、何……これ？」

数値こそそれ程に高くはなかったが、魔法スロットを三つ使つて意味不明なる魔法が顕れ、スキルも二つが発現していると云う。

しかも、スキルは前者が完全なレアスキルであり、後者がどうやらシャーマンとやらが本来使える魔法を編纂した魔導書的なモノ。

「恩恵を与えたのは初めてだけど、これが普通って事は無い……よね？」

流石はユートの知り合いというか、非常識に過ぎる能力を持つらしい。

「恐らく、彼女の中の無意識下にある知識や経験値、それを私が暴き出した形なんだろうけど……」

まだ基本アビリティの方が低めだし、今はそれ程の力にはなるまいが、それでも凄まじい魔法にスキル。

尚、彼女らに姓は存在していないが、ユートが与えていたから真名として顕れたらしい。

「これはユートに要相談……かな？」

「あの、何か問題が？」

「ううん、貴女は気にしなくても良いんだよ」

「そうですか？」

恩恵は刻み終わつたし、サーシャはそれを羊皮紙にコピるとロツクを掛けて、盗み見るには解除薬を使うしか無い様にする。

へスティアはロツクを掛けるという知識が無いが、サーシャはちゃんと勉強をしていたらしくて、確りとそれを応用していた。

「さあ、終わりましたよ。それじゃあ服を着直して戻りましょう」

「はい」



ラブレスを連れて戻ったサーシャは、ユートが決めたヘステイアとの同盟関係に関する条約を聞く。

まず、本拠は教会の地下を引き続き使う。

次に、ベルの修業はやはり引き続き行われる。

次に、ダンジョン探索は基本的にベルがユートに追い付くまで別々に行うが、訓練目的の場合は別。

次に、必要とあれば互いに補助をし合う。

他にも細かく決めたが、だいたいがこんなものだ。

「それでサーシャ、ラブレスのステイタスを見せて」

「うん」

サーシャがステイタスをコピーした羊皮紙を渡す。

其処に書かれた内容に、ユートは難しい表情。

「元々、シャーマン一族は魔法に長けた種族でフィジカル面は低い。だけど彼女の父親たるシャーマン王はシャーマン族の伝説の戦士だったから、肉体は剛魔神と同等の能力にシャーマンの魔法を使った。剛魔神族の伝説の戦士も王族だった事から、そもそもが伝説の戦士とは王族から顕れるという事だろうが、少なくとも伝説の戦士の子供が伝説の戦士の力を直に引き継ぐなんて話、シャーマン王から聞いてはいない。しかもフィジカルが剛魔神並な訳じゃなく、鬼光術を扱える様になっているとかね」

「おかしい話なの？」

「シャーマンの魔法は魔力を元に、剛魔神の鬼光術は氣と自然界のエネルギーを融合したモノを使うから、そもそも魔法の成り立ちからして違うんだよ」

神雷降臨は剛魔神の伝説の戦士が最初に使った魔法であり、ラブレスはそれを喰らっていた筈である。

「記憶喪失がこのスキルに影響を与えた訳か。恐らくラブレスが神雷降臨を喰らったから、鬼光術の片鱗を覚えていたんだろうね」

まさかそれで扱えるとは思わなかったが、サーシャの神の血を受けた影響とかもあるのだろう。

「ま、神すらも千年の間に自分達が与える恩恵については理解仕切れてないし、こういうバグみたいな事も起きてもおかしくないか」

何より、自分自身もだがミッテルトもラブレスも、異世界からの来訪者だ。

この世界の住人とは違う効果が出ても、決して有り得ないとは云えない。

「そういえば、ヴェルフが居るのは何故かしら？」

「ヘファイストス様、今更ですか？」

赤毛の鍛冶師は嘆息し、経緯——ユートがヘファイストスに防具の感想を言いに来たが不在で、物の序でにヴェルフの造ったバックラーの感想を言うべく呼び出された事を話す。

「そうなのね。それで？ 私の造った防具はどうだったかしら？ 貴方の提供してくれた黒鍛鋼を使ったとはいえ、それなりに巧く造れた心算だけど」

「良かったよ。基本的には躲すタイプだから攻撃を受ける回数は少なかったが、働きは充分にしてくれた。流石は【神匠】だね」

短いながら、最高の誉め言葉で感想を伝える。

ヘファイストスは最高の笑みでそれに返した。

「じゃあ、ヴェルフ。ベルの新しい防具は頼むよ」

「任せろ！」

取り敢えず、用事も終わったから四人——ヘステシアとサーシャとユートとラブレスは本拠へ帰る。

その際にはサーシャが右腕を、ラブレスが左腕を、両手に華状態で本拠に帰ったからか？ 男共の視線がとてもキツかったと云う。

第2章：怪物祭

第23話：リリルカ・アーデとの再会は間違っているだろうか

「剛魔・神雷降臨！」

『ギャビリイイーン！』

ピシャーンツ！ 強大な雷の束がモンスターへと降り注ぎ、敵対していたそいつらを纏めて黒焦げに。

ダンジョン内部の気と水分を天井近くで操作し、雷撃として静電気を強く束ねて落とす「神雷降臨」という魔法は、魔法耐性とか高くないと一撃で敵対者を屠れる程に強い。

流石に一五層のモンスターともなれば、大型は一撃とまではいかないだろう、然しまだ小型種なら確実に屠っていた。

「す、凄い。これが魔法、ラブレスさんの魔法……」

未だに、魔法もスキルも発現していない——と思わされている——ベルは羨望の眼差しでラブレスを見るしかなかった。

「ベル、ラブレスを羨んでる暇は無いぞ？ 小型種のモンスターがまた集まって来ているし、お前も戦闘に参加をしろ！」

「は、はいいいっ！」

ユートにケツを蹴られ、慌ててナイフを揮う。

そのナイフは黒々とした刃で、ベルが然るべき意志を以て手にすると神聖文字ヒエログリフが浮かび、切れ味が増す。

とはいえ、他人が持つと刃が何も斬れない凡骨以下の死んだナイフに成り下がる為、ベル専用としか言い様が無い武器だ。

このベル専用ナイフに付いた銘は「神ヘステイアのナイフ」と云い、主神のヘステイアがヘファイストスに頼み、彼の「神匠」が自ら鎚を揮って鍛えたという正に逸品。

アテナであるサーシャがラブレスに「神の恩恵」を刻む間、同盟条約を締結した後にヘステイアがヘファイストスに頼み込んだ。

無論、ヘファイストスは白眼視した訳だが……

何しろ、ヘファイストス・ファミリアの武具とは、どれもこれもが一級品とされており、まだLV. などが低い鍛冶師は低い値段で売っているが、基本的にはナイフ一振りがン千万ヴァリスも珍しくない。幾ら神友とはいっても、技術者が自らの腕を安売りなどする筈もなく断った訳だが、其処ヘユートが介入をしてきて話が変わる。

お金は払うから、ベルに武器を打って欲しいと言われたヘファイストス。

だからユートの識らない原典の世界線では三日は経っていたナイフ造りにも、即日からヘステイアの手も借りてナイフを打った。

値段は言わずもがな。

ヘステイアがナイフへと【神聖文字】を刻んだ為、ナイフにステイタスが発生した特殊兵装。

モンスター・フィリア

怪物 祭が始まる前に完成をみたナイフはベルにすぐにも贈られて、喜び興奮をしたベルに抱き締められたヘステイアは感慨無量と、真っ赤になって倒れた。

完徹で造った甲斐があったと云うもの。

朝を待ちユートと共に、紹介されたラブレスも伴ってのダンジョン探索。

連れて行かれた先は中層の第一五層で、ミノタウロスすら現れる場所だ。

ベルは震えてしまうが、斃すのはユートがやるから兎に角、戦えと無情にも突き放されてしまう。

ラブレスはまだ基本的な事も学んでおらず、ユートの言葉に従うだけで言われるが俣に魔法を使った。

ダズ・ダルテ

「大裂撃ツッー」

爆裂を起こしてモンスターを打ち砕く。

小型であるが故に効いてはいても、ステイタスが低いから一撃とはいかない。

かといって、神雷降臨を何発も使える程の精神力もまだ無いラブレスは、魔法で傷付けてユートにトドメを刺して貰うか、ベルが傷付け

たモンスターに大型の魔法を撃ち込んで斃すか、いずれかになる。

『ブモオオオッ!』

低い唸り声が響いた。

「ヒッ!」

思わず息を呑んだベル、足も震えている。

「そうか、ベルは第五層で確かアレに襲われたな」

謂わばトラウマ。

今のベルではミノタウロスを相手に出来ない。

ズシンズシンと足音を響かせて現れる牛頭人体……LV. 2相当のモンスターであるミノタウロスだ。

「来たれ鬼光剣!」

左掌から右拳をぶつけ、引き出す様にエネルギーが剣の形に顕現、物質化して完全な剣として顕れた。

斬っっ!

断ち難い筈のミノタウロスの肉だが、それをアツサリと斬り裂いてネイチャーウエポンの斧を持つ右腕を落とした。

「フフ、どう? 痛い? 痛いでしょう? アハハ、アハハハハッ
ッ!」

斬! 斬! 斬!

嬉しそうな表情でミノタウロスを斬り刻み、返り血で顔を汚しながら更に斬撃を喰らわせていく。

「アハハハハ! 気・持・ち・良いいい!」

角を落とし目玉を抉り、残された左腕も斬り落としたラブレスは、ニヤッと口角を吊り上げて嗤うと、真ん中から一刀両断にしてトドメと成す。

鬼光剣はすぐに消失し、ラブレスもフラリと崩れ落ちてしまうが、其処は駆け付けたユートに支えられ、何とか立ち上がる。

「ラブレスの今の精神力で鬼光剣はまだ早いな」

「ご、ごめんなさい……」

先程まで嗤いながら戦っていたとは思えないしおらしさ、ベルはあのドSでしかないラブレスと今現在の可愛いラブレス、この余りの

ギャップに首を傾げる事しか出来ない。

神がこれを見ればきつと『ギャップ萌え！』とか、要らん事を叫び出す事請け合いである。

鬼光剣は鬼光術に於ける最終奥義、この術を使った少年も独力では完成せず、最後の最後で死んだおっちゃんの力を借りて、鬼光剣を発動させたのだ。

LV・1のラブレスでは扱えたとしてもすぐガス欠となるし、まだ使うのには制限が掛かるのだろう。

とはいえ、多少の誇張はあれど如何なるモノも斬り裂く最強の剣、それこそが鬼光剣という奥義。

ならば階層主とさえ戦える戦力と成り得る。

一方のベルはミノタウロスに震え、未だに未更新で能力が低いとはいえ中層の戦いでトドメなど、殆んど刺せていない現状では役立たずの体だが、確かな光るモノを備えてもいた。

最初は弱くとも大成するタイプであろう。

「そろそろ更新させるか」

こんな中層で戦わせたのは経験値を稼ぐ為、より強い敵と戦えば良質な経験値を得られるからだ。

今は戦うだけで良い。

それでも経験値は入り、確実な基本アビリティ向上に役立つのだ。

それに、ユートは密かに補助系呪文を掛けている。

スカラ、バイキルト、ピオラ、フバーハなどだ。

尚、魔法であつたからかラブレスにも掛けた際に、どうやら修得したらしい。

【ラーニング体感学習】——恐るべし。

特にヘルハウンドと戦うなら、フバーハは役に立つ呪文だから修得が出来るならさせておきたい。

「インストールカード無しで覚えるとか大概だなあ、ラブレスも……」

昔なら有り得なかった、然しながらサーシャの神血による恩恵の効果、それがラブレスを良い方向に押し上げたのだ。

地上に戻ったユートは、纏めて魔石やドロップアイテムを売却し

た。

ユート自身も戦った分、やはりお金は多くて五十万は稼げてしま
う。

上層ではとても稼げず、中層ならではか。

「ベル、今晚辺りステイタスの更新をしておけ」

「え？ 良いんですか？」

「ああ、単独での探索階層も七階層まで許可するが、基本的にはラブレ
スと一緒に行くように」

「は、はい！」

嬉しそうに走るベルは、漸くのステイタスの更新に浮かれていた。
どれだけ上昇したのか、凄く楽しみだからだ。

「さて、ラブレスは先に帰っていてくれ」

「はい」

ユートはラブレスを帰すとオラリオ探索に出掛け、何かしらを捜し
ているのかキョロキョロとしている。

「お、あれは！」

見付けたのは幽霊少女。

積尸気を扱えるユートは当然、幽霊なども普通に視る事が可能。

視た処、冒険者だったらしい服装でしかも若い。

二十歳にも達していない辺り、恐らくLV. 1程度の元下級冒険者
だろう。

未だに冒険者と呼ぶにはスレてない眼差し、ブーツとオラリオの街
並みを見つめているだけの幽霊少女。

ユートはその幽霊に声を掛ける事にした。



二時間か其処らで廃屋から出てきたユート。

廃屋の中には声を掛けた元冒険者な幽霊の少女が、グツタリとしな
がらも然しだらしく涎を口元から垂れ流しつつ、何処か満足気な表
情で空ろを視ていた。

しかも幽霊とはいえ裸体を晒している訳で、ナニがあつたのか丸判りである。

情報収集がてらナンパ、上手く誘い出せたら廃屋に連れ込み、言葉巧みに肉欲をも刺激——霊体だが——しつつ最後までやり遂げ、やりながら色々と知っている事を訊いた。

面白い事も識っており、お礼も兼ねてとタツプリとイカせてやる。それが彼女の現状。

勿論、一時的な実体化をして女性の肢体をエミュレートしてやった訳だが……

前世では六十年モノや、三百年モノな幽霊を相手に同じ事を仕出かしており、手馴れたものだった。

違うのは積尸気冥界波でユートの冥界の極楽浄土へ送り、死後の安寧を約束していた事くらい。

「汝の魂に幸いあれ」

文字通り昇天した少女に最後の言葉で送る。

ユートは少女からの情報を元に、捜し出すべきモノを捜すべく動き出した。

暫く歩くと廃屋と廃屋の間的な場所で、ヒステリックな男の声が響く。

「あれかな？ 透明化呪文」

姿を消して気配も周囲に同化してから近付いた。

それなりに筋肉質な男、ソイツが険しい表情となって小柄な、恐らく小人族でパツと見でFFの白魔道士っぽいローブを着ており、癖毛らしい茶髪を覗かせている様はユートの知る少女に対し、叫びながら乱暴に手を引っ張っている。

端から視れば幼気な少女を強姦しようとする下種にしか見えず、しかもユートはサポーターとしてのリリは要らないが、女の子としてのリリは気に入っているからか、ピキッ！ と青筋を額に浮かべていた。

笑顔で。

実際、ローブごと腕を引っ張られた所為だろうか、ローブが捲れて

ボロボロな服装と柔肌が露出した。

何故か服の下部分が破れたボロな為、お腹が完全に丸出し状態となっていて、小人族だから見た目に反して決して幼女ではないし、胸に脹らみがそれなりにはあったから、何だかエロティカルな格好で倒れる。

そしてズボンにも見える赤い超ミニスカートから、眩しいまでの太股と秘部を隠す白いショーツが露わになって、元々の可愛い容貌と処女をユートに捧げ色気が出たのも相俟って、男が喉を鳴らすくらい淫靡な姿を晒していた。

摩れた黒いストッキングがそれを強調する。

男はリリのそんな姿に、股間を醜く膨らませながら髪の毛を掴み、無理矢理に起き上がらせるとニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべて口を開く。

「おい、リリルカ……許して欲しかったらやらせろ」

「――は？」

目を見開くりり。

実は今までで何のかんのいって、リリの肉体を求めてきたのは賭けをして寝る事になったユートのみ。

ユートに会うまでに一度たりとて身体を許した事が無かったのは、単純に要求をされた事が無いから。

小人族の自分は異種族、下手をすれば同族から視ても魅力が無いのかとなど、安堵しながらも首を傾げた事だっている。

だからこそ、ユートに求められた時も嫌がる素振りこそ見せたが、実は自分にも異性に求められる魅力があるのだと悦びも感じた。

だが、それは賭けで勝利したからと遠慮無く奪ったとはいえ、何処か愛情の様なものを感じたから許せたのであって、目の前の男に許せるかと言われれば『断じて否』と答えるだろう。

只々、イヤらしいだけの視線なんて嬉しくもない。

「い、嫌です！ だいたいお金はもう渡せるだけ渡しました、これ以上はどうにも出来ません！」

勿論、嘘八百である。

ユートから受け取っていたお金はノームの貸金庫、宝石といったしょくたにして詰め込んだ。

リリがこの男に渡したのは飽く迄も、見せ金でしかないから損失は損失だが、全体から視れば三分程度の損失でしかない。

リリとしてもお金は渡せないし、貞操だつてユートに初めてを散らされたとはいっても、そこら辺の莫迦にくれてやる程に安い心算もなかった。

だが然し、問題となるのはリリのLV. が1で男のLV. が2だという事。

たった一つ違うだけで、これが大違いなのだ。

つまり、元から小柄なのに加えて力の基本アビリティが余り上がらないリリ、この筋肉質な男に腕力で敵う筈もなく、ズルズルと引き摺られながら更に人気の無い場所に連れ込まれ、当たり前だがこんな裏道に居る連中が助けてくれる訳もないから、リリの貞操は最早風前の灯火。

「てめえに断る権限なんざねーんだよ！ 大人しく、俺のモノを啣えてりやいいんだからな！」

そう言つてガチャガチャとベルトを外し、ズボンを下ろす姿は焦りが見え見えで寧ろ滑稽だが、リリとしてはこれから起きる悪夢を思うと笑え……

「見ろ！ 俺のモノを！」

「プツ、ちっさ！」

……てしまった。

思わず嘔き出したり、当の強姦魔はといえば顎が外れんばかりに口を開き、下半身モロ出しで情けない格好を晒す。

この男のモノはリリが言う程に小さくはないけど、リリが思い起す比較対象が余りにも悪かった。

何しろ、ユートだ。

元は常識的な範囲だが、ハルケギニア時代——前々世でクトウル——という邪神に犯され、タツプリと精を注ぎ込まれた結果として、無限リロードに大量の精液の生成、更に分身の肥大化と夜の性生活部分が軒

並みに強化され、魂にまで刻み込まれてしまったから大変、リリの目の前の滑稽な男の分身の三倍以上はあろうかという大きさで、然し相手に大き過ぎる負担を与えず寧ろ、どういう理屈か二度目からはすんなり入り、リリの情欲を引き出した。

可哀想だが目の前の男とでは、潜ってきた修羅場が既に違い過ぎる。

「こ、こ、このアマー！」

涙ぐみながらリリに襲い掛かる男だが、プスッ！ とマヌケな音が響くと共に欲情を顕していた分身が、ヘニヤヘニヤと縮んだ。

「――は？」

男は突然の事に咂然となって、すぐに縮んで皮を被る分身を掴んだ。

「おい、どうなってんだ？ 何で……小さく？」

擦ったりと刺激を与えても全く無反応。

「無駄だ、お前に『不能の短剣』を刺した。そいつに刺されると二度と勃ち上がる事は無い！」

「な、何だと!？」

肩を見れば確かに短剣、先程のマヌケな音はこいつが刺さった音らしい。

「ユ、ユート様？」

呆然となって眩くりり。

高速移動で男の隣に立ち短剣を抜くが、血の一滴も短剣には付着しておらず、男の肩からも血は全く流れ出てはいない。

男が気付かなかったのも痛みが無かったから。

「お前の子孫なんて残す様な価値も無いし、世界的に問題なんて全く無いな？」

「ふ、巫山戯るな！」

未だにおっぴろげた俣、男が剣を揮う。

「巫山戯てなどいないさ、リリに手えだそうとしたんだからなあ……お前の代でお前の遺伝子は仕舞いだ」

ドグッ！

「げはっ!？」

喧嘩キックで壁まで吹き飛ばしてやると、男は全く動かなくなってしまう。

どうやらあつさりと気絶したらしい。

「ふん、公然猥褻罪にでも問われて捕まれ!」

隣れにも下半身を晒した俣に気絶し、しかも二度とは役に勃たない分身がふにやりと寝ている。

「さて、落ち着いて話せる場所に移動しようか?」

ドキリ! 賭けに負けたのが原因とはいえ、一度は身体を許した相手だからだろうか? 行き成り爽やかな笑顔を魅せるユートに、リリの胸が高鳴った。

「は、はい……」

どの道、こんな場所には一秒たりと居たくなかった事でもあったし、紅い頬を見せまいとリリは俯きがちに頷いた。

それで連れて来られたのは雰囲気の良い喫茶店? みたいな店である。

「あ、あの……結構高そうなお店ですけど」

「割と高いね。けど問題は無いから何か飲み物なり、食べ物なり頼むと良いよ」

これだ。

サポーターなんて要らないと拒絶しておきながら、リリを抱いた後は余りにも優しく、あの時も翌朝に大金をポンとくれた。

今もこんな風に接してくれている。

とはいえ、ひねくれ者なりリリは精々高い品物を集ってやろうと、値段が一桁は上のケーキやお茶を注文してみたが、ユートもそれなりに高価なモノを頼んでいる辺り、リリの目論見なんてあつさり瓦解していた。

「それで、リリにお話でもあるのですか?」

ケーキを食べてお茶にて後味を消し、喉を湿らせたリリは問いたい事を問う。

「捜していたんだよ」

「リリを……ですか？」

「ああ」

「けど、ユート様はサポーターを必要としてない筈」

「そうだね、僕にはサポーターが必要無い」

「ならば、何故ですか？ それとも……また抱きたいとかでしょうか？」

躊躇いがちに訊く。

「……まあ、リリくらいの娘ならまた抱きたいかな？ でもそんな理由で捜していた訳じゃないさ」

リリは少し思案して……

「僕には……ですか」

答えに辿り着く。

「つまり、新しい御仲間が増えたのでそちらの方にはサポーターが必要と？」

「流石、頭の回転が早い。その通りだよ」

頷いたユートはリリの頭を撫でる。

「もう、リリはこう見えて子供ではありません！」

心地好さと恥ずかしさと意地っ張りな部分と緬い交ぜとなり、顔を真っ赤に染めながらもユートの手を取ってどかせた。

「一応、一五歳なんです」

「そうだね」

言っておいてなんだが、いざ手が離れると淋しいと感じてしまう。
「僕が所属していたヘスティア・ファミリアだけど、遠征に行っていた一ヶ月の間に新人が入っていてね。今は彼の訓練やら何やらに付きつきりだよ。だけど、いつまでもそうはして居られないし、僕が居る間ならまだ良いけど離れたらもうサポートも出来ないんだ。だから的確なサポートと、魔石やドロップアイテムの収集が出来そうなの、そんな優秀な人材が欲しい」

「そ、それでリリを？」

「ああ、出来たら一時的なパーティじゃなく改宗込みで来て欲しいんだよ」

「改宗……それは難しいと思います」

「どうして？」

「ファミリア退団はリリも考えています。でもそれには大金が必要で
すから」

「そうでなければリリも、冒険者を嵌めてまで金を獲たいと思わ
ない。」

全ては「ソーマ・ファミリア」を脱退する為。

退団したとしてその後をどうするかまで決めてはいないが兎に角、
あのファミリアに居続けたいとは微塵にも思わなかった。

「なら、そこら辺は此方で何とかしよう」

「——え？」



ヘスティア&アテナ・ファミリア本拠——【聖域の竈（仮）】にて、
ヘスティアの部屋のベッドに寝転んでいるベル・クラネル。

勿論、エロな意味では決してなくてスティタス更新の為である。

「漸く更新か、どうなったか楽しみですよ神様」

「ボクもさ。それじゃあ、久し振りな更新だ……」

針でプツツと傷付けて、流れ落ちる神血。イコル

それを用いてヘスティアは手慣れた感じで、ベルの背中に書かれた
スティタスを更新していく。

ベル・クラネル

所属：ヘスティア・ファミリア

種族：ヒューマン

L V. 1

力：E 4 5 2

耐久：G 2 8 1

器用：F 4 6 8

俊敏：D 5 8 3

魔力：10

《魔法》

二

《スキル》

【憧憬一途】

- ・ 早熟する
- ・ 懸想が続く限り効果持続
- ・ 懸想の丈により効果向上

「な、何じやこりやあああああああつっ!？」

その日、廃教会に大凡そ女神らしくない絶叫が響いたのだと云う。

・

第24話：ソーマ・ファミリアとの交渉は間違っているだろうか

これ程に上がった能力、ヘスティアも驚愕して絶叫をするしかない。

「何がどうなってるんだいこれは!? ついこないだまでベル君の基本アビリティはH評価すら無かった。なのにF評価に俊敏に到ってはD評価ああつ!」

躲すタイプだからだろう耐久は低いが、それにしても大きく上がっている。

「えつと、神様?」

「あ、ああ……ごめんよ、ベル君。余りにも現実離れしてたもんだからさ」

「は、はあ……」

そこまでののかと何だかまいち他人事みたいな、現実味が沸かないベル。

以前、スティタス更新をしたのがミノタウロスに襲われた直後、それから日数もそれなりに経っており、ベルもその日数を遊んでいた訳でもなく、修業やそれに準じたダンジョンに於ける実戦経験の獲得、ユート曰く低い能力値の俤で強い敵と戦えば、それらの分だけ獲られる経験値エクセリアが何割増しかになる筈との事で、実は更新許可を楽しみにしていた。

元々の能力がヘスティア・ファミリアに入って半月程度で低く、それから行き成り第十層でインフアント・ドラゴンと戦わされて、更に第七層でキラアアントと延々と戦い、遂先日にとっては本来なら有り得ない中層たる第一五層で戦闘。

メインで戦っていたのがユート、サブがラブレスで自分はオマケに過ぎなかったとはいえ、それでも戦って経験値を獲ていたのだ。

苦勞に見合うだけのリターンが無ければ心が折れ、二度とは立ち上がれなかったかも知れない。

何処か現実味が無かったベルの頭に、徐々にだけど今のステイタスが染み渡ってきて、顔を真っ赤にしながら『報われた!』と涙すら流して羊皮紙を抱き締めてしまう。

「ぶつちやけ、今のベル君はソロで七層くらいはイケるくらいだと思う。おめでとうベル君、ユート君からの虐めにも等しい修業に克ち残った君の勝利だ!」

「か、神様……ありがとうございます!」

感極まったベルは……

「ふえ? ベ、ベル君?」

ヘステイアに抱き付く。

茹で蛸の如く真っ赤になったヘステイア。

「そういえば、ユート君はどうしたんだい?」

ちよつと惜しみながら、それでもベルから離れて話を進める。

ヘステイア的にはこれからベッドインでも良かったのだが、流石に其処までをベルに期待するのは酷というものだろう。

ダンジョンに出会いを求めて来たにしては初心で、今だってステイタス更新で感極まったから抱き付いたに過ぎない。

冷静ならまず不可能だ。

「ああ、何だか用事があるみたいで別れて来ました」

「そっか、最後の更新……正確には最初で最後の更新をしておきたかったけど、仕方がないのかな?」

実はユート、全く更新をした事がなかった。

つまり未だに初期値。

まあ、アテナ・ファミリアに改宗したらその際に更新もされようが、彼女としては自分も一度くらいは更新しておきたかった。

改宗自体はアテナであるサーシャが引越してから行う予定で、彼女の引越しは怪物祭^{モンスターフェア}後に行われる。

つまり、ユートは未だにヘステイア・ファミリアに所属の俣であった。

そんなユートだったが、リリルカ・アーデと一ヶ月くらい振りに再会を果たしており、楽しく話をしていた訳だが――



何故かソーマ・ファミリアの主神ソーマの目の前にリリと共に立ち、不敵なる表情となつて相対中だ。

「お、お久し振りです……ソーマ様」

主神に頭を下げるリリ。

「うむ、誰だったかな？ 我がファミリアにも団員はそれなりに居つてな、一人一人を覚えてはおらん」

随分な言い種であるが、そもそもリリは一団員に過ぎない身分な上、冒険者ではなくサポーターに過ぎなかったし、何よりここ最近はステイタス更新に訪れてもいなかった。

何より、主神ソーマとは酒造りにしか興味を示さない超暇神で、団員の顔を覚えるくらいならリソースを酒造に割くし、ファミリアそのものがソーマにとっては酒造りの為の組織。

ユートが見るに、ソーマは今でさえ早く酒造りへと戻りたいと考え、視線など御座なりではない。

リリルカ・アーデを――団員を視ていなかった。

「随分と前に死にました、アーデ夫妻の娘でリリルカ・アーデと申します」

「そんな事もあったか？」

何年も前だとはいえど、仮にも自らのファミリアの団員、それを忘れていたのだから業が深い。

だけどリリは思い出していた、嘗て両親が死んだばかりの頃にひもじい思いをしていた時、じゃが丸君を恵んで貰った事を。

あの時の男性とソーマの顔がダブる。

きつと余りにもひもじそうで、自分の本拠に居るから団員の一人だと考えて、単なる気紛れだったのだろうけど、施しをした。

偶々、目に入ったから。

それでも、当時のリリはそれで生き延びたのだ。

「本日はお願いがあつて、ソーマ様の貴重な御時間を割いて頂きました」

「まったくだ。早く済ませてくれ……」

「じ、実は同行された方に誘われまして……リリを雇いたいと仰有られ、それを受けたいと思っています。つきましては、改宗も込みでとの事でして……それをソーマ様に認めて頂きたく面会を望みました」

「改宗……か」

コンバージョン

改宗——所属ファミリアを抜け、別のファミリアに所属をする行為であり、これを行うには前のファミリアの主神から許可を得ねばならず、リリはその許可を求めている面会だった。

それも、ソーマに代わりファミリアを取り仕切る男——【酒守】ザニス・ルストラが留守なのを見計らつて。

ザニスはソーマ・ファミリアの団長で、LV. 2とランクは低いものの謂わば最古参の一人。

ソーマが、ファミリアの運営に興味を持たないのを良い事に、好き勝手をしている独裁者でもある。

ザニスが居ては話が拗れるだけだとリリは判断し、彼が所用で出ている今の内に済ませる心算だった。

ユートの提案に乗ったのは理由がある。

元々、ファミリア脱退は目的の一つでもあつたし、その為に犯罪行為にすら手を染めていた。

別にユートの所属しているファミリアに入りたいという訳でもないが、此処に来るまでの会話からその気になったリリは、実の処は御安いのかも知れない。



「あの、どうしてリリを？　リリは単なる荷物持ち、サポーターに過ぎません。戦闘能力なんて雀の涙程度にしか……はつきり言つて自衛がやつとですよ？」

「リリが可愛いからだよ」

「――へ？」

思わず間拔けな声で応じてしまう。

「前に抱いた時、十回くらいはヤっちゃっただろ？」

「そ、そうですね……」

その時の事を想起したらしく、モジモジとして曖昧な返事をする。
初めてだった。

十五年間、碌に触られた事も無い自らの肉体だが、それをあんな好きに貪られた訳で、しかも中盤からははしたない嬌声を上げて、自分で股を開いてしまつて濡れそぼる秘部に、ユートの分身を納めて激しく動いてしまつた程。

もう『赤ちゃんがデキるかも……』とか、後の事は考えられなくなつた。

激しく淫らに乱れてしまったものだ。

アレを思い出すと女の疼きを感じてしまい、お腹の奥がジユンと熱くなる。

「相手が処女だと普通なら二〜三回くらいで留めるんだけど、リリが余りに可愛かったから十回とか遂々、やってしまつたんだよ」

「う……」

こんなに女として持ち上げられたのは初めてだし、それであんなにされたとか言われては、複雑な心境ではあつてもちよつと嬉しいかもとか思つてしまった。

この際、何人もの女性とやっている発言はリリ自身の心の平穩の為、全力でのスルーを決め込んでいる。

「ふ、ふんだ！ ど、どうせ他にも沢山の娘に同じ事を言ってるのでしょう？」

だけでも女の甘い疼きが子宮を直撃していたり、思わずユートに對して本音が漏れてしまった。

「まあ、そうだね」

ムカツ！ 言い知れない苛立ちを感じる。

「そ、其処は御世辞でも嘘でも『君だけだよ』とか、そう言われればり

リは内心で喜びますよ?」

勿論、そんな解り易過ぎる御世辞で喜ぶ程にリリは世間知らずではない。

況してやユートは先程、複数の女性と蜜月な関係——まさか百人を越えるとは思わないにせよ——を築いていると告白したばかり。

そんな嘘をリリが喜べる筈も無かった——

「けど、御世辞も嘘も言った事は一度だって無いよ」

——その筈だったのに。

リリは茫然となった表情ながら、顔を真っ赤に染めて今の科白を反芻して……

「あう……」

胸を高鳴らせた。

嘘でも良いなんてそれこそ大嘘だったりりだけど、真面目な顔で微笑みを浮かべながら『御世辞も嘘も言わない』なんて言われて、唯でさえ胸がドキドキしていたのに、不意打ちみたいに言われた所為か『嬉しい』と感じてしまう。

沢山の中の一人であると公言されたのに、ニヤケるのが止められなかった。

「……っつ!」

今なら『これから宿屋でしけ込もう』だとか誘われたら、ひよつとして断らずにのこのこと付いて行ってしまうかも知れない。

冒険者が嫌いで、自分の初めてを奪ったユートなんか大嫌いとか思っていた筈なのに、何とも御安いものだとりりは自身のチョロさに頭を抱えたい。

パツと手が握られる。

——え? 本当に今から宿屋ですか!? なんて、頭の中が御ピンク妄想だったりりだけど、ユートはと云えば真面目言う。

「[ソーマ・ファミリア]の本拠に着いたぞ?」

「へ? あ、はい!」

目的を履き違えていた事に驚愕し、ブンブンと首を横に振って気合を入れ直して本拠を睨む。

「往きましょう！」



このファミリアを纏めるのはLV・2の上級冒険者——【酒守】の
ガンダルヴァ
二つ名を持つザニス・ルストラである。

そして団長である以上、決して弱くてはならない。

基本的にソーマ・ファミリアの団員は殆んどのがLV・1で、何人か幹部級がやつとLV・2である。

何が言いたいか？

ザニス・ルストラも偶にダンジョンへ赴き、少なくともステイタスが追い付かれない様になっているのだと云う事。

そして、今日がその日。

「ザニス様が本拠に居ない今がチャンスです！」

ザニス・ルストラを評するなら、それは厭らしい男であろうか？

別に女性にセクハラを働く訳ではなくて、性格的な厭らしさではあるが……

リリが曰く、ソーマ・ファミリアの主神ソーマは、趣味の酒作りにしか興味は無く、ファミリアの運営は団長のザニスに丸投げ。

これ幸いとザニスは好き放題し放題、私利私欲の為に神酒^{ソーマ}を利用して操り、金の荒稼ぎなどやってきたのだとか。

ザニス・ルストラとは、正に欲望一直線の男。

「然し、高がLV・2程度で団長とか……ソーマ・ファミリアの底が知れるな」

とはいえ、ロキ・ファミリアの団長——【勇者】のフィン・ディムナを基準にするのはきつと間違いで、況してやフレイヤ・ファミリアの団長——【猛者】のオツタルを基準にするのはもつと間違っている。

何しろ、片やLV・6で片や最強のLV・7だ。

ユートは識らないけど、大抵のファミリアの団長はLV・3くらいである。

中にはそれこそザニスと同じLV・2で団長というのもあるだろうし、そもそもアテナ・ファミリアだとLV・1のユートが団長を務めるのだから。

ソーマ・ファミリア本拠にやって来た二人、早速だけどソーマに会うべく彼の部屋へと向かった。

「本日はソーマ様に御願いがあつて参りました」

「俺は忙しい。聞いてはやるが手短にしろ」

リリからすればこいつは謂わばラッキー。

ソーマは完全な趣味神、趣味の酒作り以外には全く以て関心を示さないというのに、今回はどんな風の吹き回しかは知らないけど、話は聞いてくれるらしい。

これ幸いに改宗の話をした訳だが……

「ほう、我々の“同士”を引き抜きたいと？」

聞き覚えのある声が背後から響く。

「……っ!？」

その声思わずリリが振り返ると……

「随分な話の様だ」

「ザ、ザニス様!？」

ザニス・ルストラがニヤニヤしながら立っていた。

「ど、どうして？ 今日確かダンジョンに降りる日の筈では!？」

「なーに、ちよいっとお前の姿を見てなアーデ」

しまった！ リリは舌打ちしたくなるのを何とか堪えつつザニスを見る。

「珍しく男と愉しげに手を繋いでいたから何事かと思ったら、まさかソーマ様に退団の話をしているとは。よもやその男に誑らかされでもしたのか？」

「なっ!？」

紅くなるのを止められないリリを冷ややかに見て、ザニスは自分の考えが正しいと理解した。

「ほう？ その男、どうしてアーデを欲する？」

「別に、うちのファミリアと同盟を組むファミリアに新人が居てね。

サポーターを付けたいから知り合いのリリを選んだだけだ」

「成程？」

ユートは間違っても自分自身のリリを欲した理由を伝えず、建前だけを冷静に口に出してやる。

建前も理由といえ理由だが、ユートがリリを手に入れた本音は女として。

だけど、それを正直に話そうものならザニス・ルストラは間違いなく足元を見てくるだろうから、ユートは建前のみを伝えたのだ。

「ソーマ様、私が交渉をして構いませんな？」

「……任せる」

雑事に興味は無いと謂わんばかりに頷くと、自らの作業に戻るソーマを見て、リリは悲鳴を上げたい。

ソーマだけなら或いは、交渉を面倒臭がり二つ返事で認めたかも知れないが、相手がザニスではもう駄目かも知れないからだ。

「まあ、退団を認めるのは吝かではない」

「本当ですか!？」

「然しだ、本来ならアーデが稼いだであろう金額一部でも支払って貰わねばな」

要は金を出せと云う。

ユートからすれば想定の範囲内だが、問題は脱退金の金額だった。

「一億だ」

「――は？」

リリは我が耳を疑う。

「私はアーデを評価していてね、彼女はきっと十億だって稼ぎ出せる。ならば、一億は妥当な線だろうか？」

莫迦な、有り得ない。

自分は所詮、サポーターに過ぎない上に他の連中から搾取され続け、ノームの貸金庫に三百万ヴァリスがやつとの額。

しかも百万はユートから受け取ったもので、実質的にはこの数年間で漸く稼いだ二百万ヴァリス程度。

それもサポーターとして稼いだのではなく、冒険者を食い物にした

犯罪行為で稼いだ金額なのだ。

それが十億を稼げる？ 有り得る筈もない。

それに搾取されたりして確実に目減りしてるのに、これは完つ全つにザニスの嫌がらせでしかなかった。

「二割で良い」

「――ソーマ様!？」

突然のソーマの言葉に驚きを隠せないザニス。

ザニスからすればユートを恐らく良くてLV・2、下手をすればLV・1だとしており、間違いなく一億など支払えぬと理解をした上で吹っ掛けたのに、あろう事か主神^{ソーマ}が邪魔をしてくれたのだから当然であらう。

「これを飲み、感想を言つて尚もその娘に執心するなら一億の一割で改宗を認めて構わない」

コトリと置かれたグラスには透明な液体が並々と注がれており、先程ソーマが席を外したのがこれを用意する為だと解る。

「こいつは……」

何とも涼やかな香りが、テーブルから少し離れているユートにも芳しい。

少し前、【豊穰の女主人】で開けた神酒の失敗作とされるアレ――ソーマと似ていながら、此方の方が遥かに上だった。

「ソーマ……か。しかも、ロギが随分と飲みたがっていた完成品つてやつだな」

行き成りの事で困惑するユートだが、リリは青褪めた表情となる。

「だ、駄目です！ それを飲んででは！」

「黙れア―デ、貴様はまだソーマ・ファミリアの一員だぞ？ 情報漏洩は決して許されん！」

「くっ！」

見ればザニスが先程とは打って変わってニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべて、まるでこれから起こる事が楽しみで仕方がないと謂わんばかりに、口角を吊り上げていた。

リリは識っている。

完成品のソーマを飲むと人はケダモノになり、それを求めるばかりになる。

何故なら、リリも嘗ては一杯の神酒ソーマを飲んでケダモノになり、無茶な金稼ぎに躍起となった時期が確かに在ったのだから。

それこそが、ユートが前に見たソーマ・ファミリアの冒険者の必死さの理由。

神酒欲しさに金金金。

りりは怖い。

神酒を飲んでユートが変わってしまい、自分を捨てるかも知れないから。

りりは怖い。

あの濁った目で神酒を求めるユートを見るのが。

リリは怖い。

結局、ユートが他の連中と同じだと失望してしまう自分自身が。

嫌だ！

そんな場面は見たくも無かったし、何よりもまたも神酒に未来を奪われるなど絶対に嫌だった。

「ふうん……まあ、僕も飲んでみたかったし丁度良いかな？　後で口
キに自慢も出来そうだし」

事情もリリの葛藤も知らないユートは、グラスを手にとると口を付ける。

コクリ……

見紛う事無く飲んだ。

鼻を香る涼やかな匂い、失敗作なんて比べ物にもならない喉越し、清涼な後味などが渾然一体となる。

終わった。

りりは泣きたくなる。

自分が元のファミリアに戻るのはまだ良かったが、ユートまでが神酒の虜になってしまう。

そうなれば彼の所屬するファミリアは滅茶苦茶だ。

「美味しい、ロキが飲みたがる訳だね」
それが一口を煽った……ユートの感想だった。

・

第25話：閃姫達のユート探索は間違っているだろうか

榎木家。

今現在、榎木優斗が居なくなつた事で騒然となっている訳だが、特に酷いのが砂沙美である。

砂沙美は一番心が折れそうだった時、ユートにより救われた為か愛と依存が凄まじいまでに高まっているからだ。

「優斗さん……」

しかも普段からご飯を作るのは砂沙美とノイケで、よってノイケにこの辺での負担がのし掛かる。

まあ、ノイケが来るまではそもそも砂沙美が一人でやってきた作業であるし、ノイケ本人も問題無いと言っているのだが……

何処に居るのかどうして居なくなつたのか、砂沙美は疎かユートと天地の祖父である榎木勝仁でさえ解らないのでは、もうどうしようもなかった。

「ただいま」

其処へ明るい声で榎木家に帰って来たのは……

「祐希ちゃん！」

緒方祐希、ユートにとっては義妹であり恋人にも等しい存在——比翼連理だ。

「祐希ちゃん！ 優斗さんが居なくなっちゃった！」

「はい？ 兄貴が？」

砂沙美に突撃されてしまったユーキ、昔ならユーキの方が身長も僅かに高かったものの、今では圧倒的に身長や胸が大きくてちよつと泣きたい。

「えっと、状況が解らないからどうしたものか」

津名魅との完全な融合を果たした砂沙美にも捜せない時点で、少なくともこの地球^{せかい}に居ないのは確定しているが、それでも情報が少な過

ぎた。

「兎も角さ、何がどうなったのか説明をしてよ」

砂沙美はユーキの求めに応じて話す、ユートが行方知れずになったのだと判ったその状況を。

「成程、それなら兄貴は今地球には居ないね」

「そうなの!？」

「恐らく完全な異世界か、若しくは異世界レベルにまで違う平行異世界の地球に跳ばされてるよ」

「異世界は良いとしても、平行異世界の地球?」

砂沙美は意味を理解しかねたらしく、可愛らしくも小首をコテンと傾げる。

「解り難かったかなあ?　つまり、この世界の国とか全く無い異なる歴史やら、或いは喪われた歴史を歩んだ地球だよ」

「はあ……」

例えば、ドラゴンボール世界の地球は地球と呼ばれながら国も恐らく地形も、全てが本来の地球とは異なる世界だ。

ハンター×ハンターの世界でもある。

どんな歴史でどう成立した世界かは明かされていないが、弓状列島は在ったけど普通に全く異なる国々。

これなら、異形が犇めくハイスクールD×D世界の方が近いくらいだ。

まあ、ハンター世界だって異形が犇めくけど。

津名魅でさえ感知が不能な世界となれば、そういった遠い世界か異世界。

つまりはそういう事だ。

「じゃあ、どうしたら?　私の中の津名魅ちゃんできえどうにもならないって、捜せないって事かな?」

良い具合にベツタリで、しかも年月を経た砂沙美は今や嘗て津名魅が取っていた容姿だけに、ユートにとっては美味しい女性。

ユーキはニコリと笑みを浮かべて方策を言う。

「ボクが捜そう」

「どうやって?」

「ボクら閃姫は兄貴とラインが繋がっているからね、それを通じてゲートへ入れば運次第だけど、誰かしら見付けられるでしょ」

「ゲートって?」

「日本だと埼玉県の麻帆良というアンタッチャブル、其処に存在している」

「この世界で埼玉県に在る麻帆良は『触れざる土地』として、誰も入らないから開発も全くされていない。

入ろうにも入れない。

【双子座之迷宮】っぽいのが敷かれているのだ。

入れるのはユートと閃姫のみであり、ユーキも資格は有るからゲートを使う。

「うう、お願いします」

「任された」

麻帆良地方へと到着後、閃姫をある程度集合させたユーキは事情を説明した。

戦えない者や他に忙しい者は呼んでいない。

「つまり、優斗君を捜す為にゲートでランダムジャンプをするんだね?」

「そうだよ、すずか」

月村すずかの質問に頷くユーキ。

ラインで繋がりを持つが故に、成功率は万に一つであってもゼロではない。

仮に砂沙美や阿重霞がやった場合、閃姫契約をしていない以上は確率的にゼロなのだから当然の帰結だ。

まあ、阿重霞は契約していないだけで既に出逢った時点で実年齢が七二〇歳、生理年齢が二〇歳だったのだから、砂沙美とは違って閨は供にしている。

大好きだったお兄様との決別、そのケジメも付けて初めて抱かれた訳だ。

「私達がユートを捜して、ゲートを潜るのは解つたのデスが……」

「見付けられなかったら、私達はどうなるの？」

訊ねたのは何故か閃姫の契約をした二人。

「見付けられないなら次元の狭間を彷徨う事になるんだろうけど、誰かが見付けて報告が上がった時点で、君らをボクが引き揚げる。だから心配は要らないよ」

「そうデスカ」

「安心した」

納得したらしい。

まるで大規模な鏡の迷宮みたいなゲートの向こう、それを閃姫達はちや〜んと知らされている。

何しろ、万が一にユートと一緒に連れて行く段になって、行き成りゲートへと入ると混乱してしまうし。

「それじゃ皆、行つてらっしゃーい」

迷わずゲートに飛び込む閃姫達、但しその場に残るユーキとシエスタ。

シエスタは、カトレアやジェシカとは異なり戦えるのだが、とある理由から残らざるを得ない。

「私とユーキさんは招喚をいつ受けるか判りません、仕方ないんでしょうね」

そう、招喚頻度で云うとユートの為に存在するとさえ謂わしめる比翼連理たるユーキ、そしてユートの為のメイドを自他共に認めるシエスタが同率一位。

何故なら、余り自分では生活面で考慮しないユートは自分の生活向上の為に、シエスタを喚ぶ。

或いは副官が欲しいならユーキという認識が強い。
だから基本的には二人がまず喚ばれる。

この天地世界に転生した折りには、生活面で云えば母親や姉が数年間は見えてくれたし、それ以降だと父親の秘書っぽい女性が何やかんやと世話をしていたくれたから、副官のユーキを最初に招喚している。

尚、父親の柁木信幸とは後妻として正式に結婚し、【柁木剣士】とい

うユートや天地の異母弟が誕生。

元々は異世界人らしく、然し柎木清音とは仲良しだった為か、柎木家にはよく出入りをしていたのだ。

生活能力が割と高かった信幸が居たから、シエスタを喚ぶより副官のユーキだったのは間違いないけど、彼女の役割も小さくはなかったのだろう。

津希媛つきひめが居たから、仮に生活面でのサポートが全く無くとも食いつばぐれはしないにしても、やはり凡夫に見える信幸も何処か超然的だった。

少しだけユートが存在する世界の未来――

ダンジョンの中に突如、次元震が発生をする。

「此処にユートが？」

「はい、ボク達が顕現したなら間違いないく居ます」

「洞窟……か？ 矢鱈と広いんだが」

「ダンジョンですかね？」

嘗て、ユートがハルケギニアに創ったダンジョン、その事を知っている二人は顕れた先でキョロキョロと辺りを見回す。

そんな時、ダンジョン内に男の絶叫が響いてきた。

「目を、目を開けてくれ！ 俺は……俺は仲間を喪いたくないんだ！」

絶叫の元へ向かってみると数名の人間が、複数匹の黒い犬や白い兎などに囲まれており、筋肉質なざんばら髪の方が倒れ伏している少女に叫んでいた。

解る。

少女の心臓は鼓動を停めており、既に息もしていない死者である事が。

背中に刺さる斧が致命傷となり、失血死をさせたのであろう事は明白。

「残念だがオレ達に彼女を救う術は無いな」

「そう……ですね」

「だが、あのモンスター共から残りの連中を助ける事は可能だろう」

「は、はい！」

そして二人は駆け出す、己れ的心情に従って。



本来の時間の迷宮都市、ソーマ・ファミリアの主神ソーマの部屋。
神酒の謂わば完成版とも云えるソレは、まるで麻薬の如く飲んだ人間を虜にして常習させてしまう。

リリも一度は飲んで獣に堕ちた神酒、だけどユートは事も無げに言い放った。

『美味い』

酒の味が解らない訳ではなく、然し普通に飲んでしまったユートは味を反芻しているが、瞳に濁りなんて見当たらない。

「神樹の酒程じゃないが、確かにこれの為に必死だって連中は居るだろうね」

「神樹の酒？ 聞いた事も無いがそれは何だ？」

ソーマが訊ねる。

「とある樹の果実を酒にした代物だよ」

飲んでも神酒^{ソーマ}みたいな事にはなるまいが、味そのものは「神樹の酒」の方が上だと認識した。

ユートは皇家の樹の主、それも津名魅が直に下賜をした樹であり、津名魅を除けば全ての皇家の樹を従わせる事すら可能な。

始祖の樹たる津名魅——その一部から生誕した娘とも云える樹、スレイヤーズの魔族や神に近いやり方で生まれた真祖の樹。

ユートが名付けた名前は「津希媛」と云う。

樹雷皇阿主沙と何故だか決闘騒ぎに発展をした際、津希媛の力で【霧封】との契約を解除してやった事もあり、危険視をされたのはもう十数年も前の話。

異母弟の柁木剣士が生まれる前、それ処か柁木信幸が継母となる柁木玲亜との婚姻を行うより以前の事。

樹雷が津希媛を初めて知った瞬間でもあった。

第一世代以上の樹と契約したマスターで、第一皇女たる柁木・阿重

霞・樹雷と第二皇女の柁木・砂沙美・樹雷を樹雷皇の名の許に、婚約させると口に出させたユートは名実共に次期樹雷皇と名高い。

実際に柁木・優斗・樹雷の名前を拝命している。

しかも、ユートはあろう事か【瀬戸の盾】や【鬼姫の金庫番】にまでコナを掛ける剛の……業の者。

因みに阿主沙も知らない事ではあるが、あの当時に言っていた——『何なら、アンタの奥さん方も貰おうか?』という科白が半分だけ本当になっている。

ユートは偶にやって来る二人——船穂と美沙樹への過剰なスキンシップを敢行しており、流石にやってはいないがとんと御無沙汰な二人は女を感じていた。

それは兎も角、酒の話にソーマは食い付いた訳で、【神樹の酒】の事を聞きたそうにしている。

簡単な概要だけでは納得がいかないらしい。

それはそうだ、自分の作る酒に酔い痴れる眷属達に嫌気が差して趣味に集中してきたソーマ、それなのにユートは酔いもしないで味の感想を言つて、しかも神酒より美味しい酒を知るとまで言う。

「若し本当に神酒を上回るなら飲んでみたい……」

「神樹の酒は僕らの所だとオークションに一回だけ出た際、世界を一つ手にするだけの金額が動いたぞ? 一升瓶を一本だけでだ」

「なっ!？」

「だから飲みたいなら代価は可成りなモノでないと。実際、希少価値と需要なんかを含めれば相当だしね」

「む、ウウム」

とはいえ、このオラリオではそもそも流通すらしていない以上、希少価値くらいしか無いのだが……

「どうすれば飲める?」

自分の神酒で酔い痴れないユートに興味を懷いて、更にそんなユートが推している【神樹の酒】の味……気にならない訳がない。

「そうだね、なら現時点で貯蔵しているのや隠しているのを含めた全ての神酒、それとこの……」

懷から出す振りをして、アイテムストレージから出した小さな酒瓶。

「二升瓶から十分の一を分けたこの小瓶を一つと交換なら良いが？」
リリとザニスは顎が外れそうなくらい、あんどりと口を開けて呆然となる。

失敗作の神酒が一升瓶を一本で約六〇〇〇ヴァリスはするのだから、完成品を市場に出した訳ではないが少なくとも数十倍、下手したら百倍、千倍の値段が付いてもおかしくはない。

そんな神酒を全て出して一升瓶の十分の一程度による交換だとか、ザニスからすれば有り得ないレート。

「判った」

「ソーマ様!？」

だがソーマはアツサリと承諾してしまった。
有り得ない、本当に有り得ない話である。

ソーマ・ファミリアの者が神酒を一口飲むのにどれだけ稼いでいるか、ソーマは全く知らないのだろう。

それにしたって自信作の筈の神酒を全て吐き出し、僅か小瓶を一本だけ手に入れようなどと、あの酒にはそんな価値が本当にあるとでも云うのか？

ザニスには解らないが、主神の命令では仕方ない。

本人はソーマを小馬鹿にしているものの、好き勝手を出来るのは彼が居るからだとも理解していた。

小賢しい故に。

ソーマが雑事をザニスに任せるから勝手が出来て、欲しいモノも幾らでも手に入れられる。

欲しい。

酒も食い物も女も全て。

そんなザニスであるが故にソーマの機嫌は損ねる訳にもいかず、だから神酒の全てを——隠してあるモノまでも出すしかなかった。

神は地上人こどもの嘘を容易く見破るからこそ、一切の嘘を吐けないザニスは「全て」を吐き出す。

「また、随分と溜め込んでいたもんだな」

ユートは感心する。

一升瓶は約一・ハリツトルな訳だが、それが四斗の酒樽で四十升分が入っているのが百樽は有った。

約七千二百リツトルだ。

よくもこれだけ溜め込んだものだ、ユートが言うのも無理からぬ事。

「然しな、出したは良いがどうやって持ち帰る？」

一樽でも普通は人間一人で持ち上がらない重量で、それが百樽も有っては当然ながらソーマにもどうしようもなかった。

「問題は無い」

右手でステータス・ウィンドウを操作、アイテムストレージへ百の酒樽を一瞬にて収納してしまう。

「これが、サポーター要らずの秘密……ですか」

リリが呟いた。

「確かに対価は戴いた……これが【神樹の酒】だ」

一・ハリツトル瓶の僅か十分の一、一・八デシリツトル程度の量しか入っていない小さな小さな瓶。

ユートはそれわソーマに渡してやる。

「これが……」

コルク栓を開けると匂うは果実の香りか？

ソーマはそれを煽った。

「つつつ!？」

飲んだ瞬間目を見開き、何処か恍惚とした表情となって飲み込んだ。

「ま、まさか……この味は天界で作った神酒さえ凌駕するのか!？」

驚愕するソーマだけど、何しろこの酒の素材となるのは皇家の樹の実、津名魅という頂神の石柱が樹雷に贈った神の樹の実。

ソーマが神だとはいえ、天界版の神酒の素材は天界に存在する物

で、其処へ以てソーマが【神の力】^{アルカナム}を用いて作り上げたというモノ。

素材としてはどうしても二段は劣り、それが味へとダイレクトに反

映された。

結果、天界版神酒と神樹の酒では後者に軍配が拵がったという。

「さて、それじゃあこれがリリの脱退金で一千万だ」

ユートが袋をアイテムストレージから取り出すと、それをソーマとザニスの前に置いた。

「二万ヴァリス硬貨で千枚が入っている」

「くっ！」

何だかよく判らない内、要求額たる一億ヴァリスが一千万ヴァリスになってしまったが仕方ない、ザニスが取り敢えず袋を受け取ろうと手を伸ばす。

「その前に袋のエンブレムを見て貰おうか」

「エンブレム？ これは、ウインクする道化師!？」

それが意味する処は――

「ロキ・ファミリア？」

「そう、そいつは僕が先に手に入れたとあるアイテムを買い取るべく、ロキ・ファミリアの団長フィン・ディムナが手ずから数えて封をした金だ。若し、それにケチを付けるならその場合はロキ・ファミリアに

――延いては【勇者】^{ブレイバー}と【怒蛇】^{ヨルムガンド}に喧嘩を売る行為だと知れ」

「何故に【怒蛇】^{ヨルムガンド}まで？」

リリが首を傾げる。

【怒蛇】^{ヨルムガンド} ティオネ・ヒリュテってのはフィン・ディムナを愛しているから、フィンを虚仮にされたとなればぶちギレるんじゃないかな？」

「うわあ……」

ぶちギレるLV・5……恐ろしい結果にしかないだろう。

「わ、解った」

ザニスは大人しく頷き、一千万ヴァリスの入った袋を受け取る。

「後は、改宗が出来る様にして貰おうかな」

「了解した」

ソーマはリリの背中に在る恩恵に手を加える。

その作業に時間は殆んど掛からず、僅か一分足らずで終了した。

「これで別の神が恩恵を引き継ぐ形で眷属に出来る」

ユートは嘆息をしながらザニスからの刺客を冷やかに見つめ、愚かなオツサン達とザニスの末路を決める手に出るのだった。

・

第26話：リリルカ・アーデの改宗は間違っているだろうか

「それにしても……リリ」

「な、何ですか？」

十人から囲まれた状況、リリは緊張感から堅い返事になってしま
う。

「あのカヌウとかオツサン……オツサンがケモミミって誰得なんだろうな？」

リリはずっこけた。

「な、な、何を益体も無い事を仰有りますか!？」

そうは言うが、ケモミミとはやはり美少女とか美女が付けているから萌えるのであって、汚いオツサンに付いていても萌えるよりは寧ろ萎えるであろう。

「……取り敢えず、リリが犬耳を付けて上げますから今はこれを何とかして欲しいです」

「犬耳を付ける？」

「は、はい……」

リリには魔法が有る。

その名も「シンダー・エラ」と云い、解り易く云えばシンデレラの事。

【神の恩恵】にて顕れる魔法やスキル、これは当人の願望や潜在意識ほんしつなどにより千差万別、そこは顕れたスキルや魔法の名前も含まれてるとか。

ならばリリは実に解り易く顕れていた。

即ち、【上昇志向と変身願望】というやつである。

【シンデレラ】は大抵の者なら知る有名な御伽噺、それはみすばらしい少女が一夜の夢とばかりにお城の舞踏会に参加して、最終的には王子様に見初められて婚姻にまで至る、サクセス・ストーリー！。

舞踏会に参加するべく、Cinder^{灰被り}のElla^{エラ}はまるでお姫様みたいに姿を変えて、最後に本物のお姫様に成った。

今のリリから変わりたいという願望が、こんな最低最悪な所から抜け出したいという潜在意識が、リリにこの魔^{シンダー・エラ}法を与えたのだろう。

まあ、体格が近いモノにしか成れないし想像が至らないと失敗するが、単純に犬^{シアンスロープ}人に成った自分を想像するのなら割と上手くいく。

リリが言う犬耳を付けるというのはこういう意味。

「じゃあさ、犬耳なりりとやりたいな♪」

「ユート様……」

ぶれない、本当にぶれないユートにリリは緊張感が抜けてしまう。

「別に、シタけりや犬耳だろうがエルフ耳だろうが生やして差し上げますから！　今はこの状況をどうかしてください！」

泣きたいリリは叫ぶ。

リリは現在、アテナ・ファミリアに移籍——改宗をするべくソーマからの措置を受けている。

普通は移籍先の神が同時に「神の恩恵」を授けて、すぐにも戦える様にするのだろうが、生憎とアテナはヘファイストス・ファミリアで引越し準備中。

現在のリリは普通の小人族程度の力しか無いから、LV. 1ばかりの力ヌウ達とはいえ、一人でもリリに向かって来たら死ぬ。

何しろ、雑魚だとはいえモンスターを殺せる冒険者な訳で、一般人なんて正に赤子の手を捻るが如し。

曲がり形にも恩恵を持っていたリリは、非力だったにしても一般人に負ける程ではなかったのだ。

それが恩恵を一時的に使えなくなったりした訳で、不安で不安で仕方がないとユートの服の裾を掴む。

「絶対だいじょうぶだよ」

「ユート様……」

頭を撫でながら何処ぞの札捕獲者な無敵の呪文を囁くと、ポケットにスツと手をつ突っ込んでまた出す。

リリの提案は美味しい。

汚ならしいオッサン共のケモミミで穢れた目だが、可愛いリリのケモミミにて目の保養をしながら、性的に可愛がれるのだから。

「さて、オッサン。あんたはリリの知り合いみたいだからソーマ・ファミリアの連中か？　ザニスの命令で動いている訳だな」

「そうさ、大人しくてめえが持ち出した神酒^{ソーマ}と其処のアーデを寄越せば生命だけは助けてやる」

「まあ、ボコるけどな！」

「ギャハハ！」

「ちげーねーぜ！」

カヌウとかいうオッサンに追従する連中。

バカ笑いとかがウザイ。

コイツら何処のチーマーだよと言いたくなる。

「アーデとはリリの事か。神酒は正式な報酬として、ソーマ本神から受け取った物だが、それを寄越せとかザニスは言っているのか？　流石にそれはどうだ？　況してやりりはもうソーマ・ファミリアの一員じゃあ無い、お前らに渡す理由は産毛の先程にも無いな」

「てめえの意見なんざ聞いちやいねーんだ。この数をどうにか出来るのかよ……アアン？」

数の暴力に酔った莫迦、カヌウとその他のソーマ・ファミリアの連中は、相手の実力も計れないらしい。

「こんな事したらギルドだって黙っちゃいないぞ」

基本的に中立だとはいつてみても、こんな騒ぎを起こされてはオウリオの民が冒険者を危険視しかねないから、場合によっては動く事も考えられる。

例えば警告が飛んだり、何処かの趣味神の唯一とも云える趣味を、アッサリとギルドが取り上げたりもするのだから。

「は、ギルドなんざ怖かねーんだよ！　中立とか抜かして碌に介入もしねー！」

「あんな弱腰連中、俺らが怖がると思ったかよ！」

「そーそー、ギルド連中はチキンだからな！」

「ギャハハッ！」

この場にギルド員が居ないからと言いたい放題。
そしてやはりバカ笑いがウザかった。

というか、コイツら本当にギルドに悪意でもあるのだろうか？ と思えるが、恐らくはユートから神酒とリリを奪い返すべくハツタリをかましているのだ。

ギルドなんて怖くないと言えばギルドに頼れない、そう考えるだろうと安易な思考に陥った。

愚かに過ぎる。

実際に高がLV・1程度の一冒険者如きがギルドに睨まれるなど、自殺行為でしかない事はカヌウ達だてよく知っているだろう。

「そうか。エイナ、ソーマ・ファミリア団長ザニスの一派がこう言うけるけど、どんな感じかな？」

手にした小さな某かを耳に添え、この場に居ない筈の者の名前を呼ぶ。

「肅清でしようか？」

機械から声が響いた。

しかも声の主は明らかにエイナ・チュール。

しかも普段の受付嬢としての声色では決してなく、ドスの利いた893も裸足で逃げ出しそうな声。

まあ、自分が誇りを持つてしている仕事を貶されれば怒り心頭は已む得まい。

「ギルドとしては貴方が暴れたとしても、周囲へ余り迷惑を掛けなければ中立ですので目を瞑りましょう。それがロイマン氏達トップの判断です」

スピーカーモードで周囲にも聞こえる様になっていた訳だが、それを聞いていたカヌウ達は青褪める。

散々にギルドへの陰口を叩いたのも、知られていないと思い込んでいたからに過ぎない。

「ギルドからの了解は取れたな。だったら、さっさとお前らを始末させて貰う」

「くっ、クソがああっ！」

最早、これまでと思つたか某・八代將軍様に『御手向かいしますぞ』的に襲つて来るカヌウ達。

ホーロドニースメルチ

「極冷竜巻！」

『『『ウギヤアアアアアアツツ！』』』』

相手が悪い。

全員が吹き上がる冷たい竜巻に上空へ吹き飛ばされてしまい、零下二〇〇度の白銀聖衣さえ凍り付くだろうマイナスの空気に身体が凍結していく。

フリージングコフィン

「コンボ・氷結唐櫃」

何処かの世界線に於いて氷河が時貞に使つたコンボだが、極光処刑にまで至る程にカヌウ達は強くない。

ゴトン！　ゴトン！　鈍い音と共に墜ちてきたのはカヌウ達の氷像。

「ふん、汚ねー花火というより汚ねー氷像だな」

魔力という二段は劣つた力で再現した技だったが、凍結して氷像となつてしまったカヌウ達は最早、生きてはいても二度と元に戻る事などあるまい。

ホーロドニースメルチ

「周囲が凍結しないよう、極冷竜巻の方にしたのは、やっぱり正解だったな」

とはいえ空気が急速冷凍された為、辺りには季節感がずれた雪が降っている。

地を滑る様に進むだろう極光処刑や極小氷晶より、巻き上げる形の極冷竜巻の方が周囲への被害も少ないと考えたが、取り敢えずは間違いはなかった。

「にしても、アイズやティオナは割と強かったけど、奴らは弱かった。LV・1というのはやっぱり一般人に毛が生えた様なもんか」

実はLV・2も密かに居たのだが、所詮はアイズ達みたいな第一級冒険者などと比べるのは酷だろう。

アッサリと極冷竜巻にて吹っ飛んだカヌウ達だが、アイズやティオナやバートなら防ぐなり躲すなりと、幾らでも対処は出来た。

況んや、フィンみたいなLV・6となつて久しい、オラリオの強者

なら反撃すらするだろう。

最終的に勝てるかどうかは別にして、この一撃を受けて殺られる程に弱くはないのだから。

結局、魔力を用いた魔法に劣化した技だし。

「エイナ、終わった。現場検証をしたいなら早目に。早く来ないと僕も帰るぞ」

「判った、すぐに行くわ」

携帯電話——ユート謹製の携帯魔伝話の通話を切ったらしく音が消える。

「それじゃ、少し待とう」

「は、はい……」

リリは素直に頷く。

待っている間は退屈そのものだし、リリはギュツとユートの手を握った俣、意を決した様子を睨いて背の高いユートを見上げると、口を開いた。

「あの、ユート様はどうしてあんなにも御強いのでしょうか？」

「うん？ たゆまぬ修業と激しい実戦……だね」

実際には三度に亘る転生により、魂の純度と強度が増しているのもあったし、転生特典もそう。

更に今回の転生に於いて津名魅から与えられた特典——真祖の船・津希姫。

樹雷四大皇家が一つ柁木に生まれたからか、光鷹翼を天地同様に自力で構築する能力も得ている。

矢陰が欲した光鷹真剣も天地と同じく出せた。

ズルとまで云わないが、それなりに外部干渉を受けたのも事実である。

全ては【侵食するモノ】を討ち滅ぼす為に。

星騎士の宿命の俣に。

とはいえ、リリにそれを話してどうなるでも無い。

「ひゃわっ!？」

だからユートはリリの手から逃れ、背後に回り込むとギュツと抱き

締めた。

突然の事に驚くりり。

周囲には誰も居ないからと頬を撫で、小振りながら出ている胸を揉む。

「あ、アーン！」

ユートの手技で敏感になったのか、リリの小さな口から甘ったるい嬌声が漏れ出てしまう。

「い、行き成り……ナニをするんです……かあ……」

頬を朱にそめて甘い声で抗議をするが、リリは振りほどく素振りを見せない。

続けて欲しいという意味表示として、キスにまで及ぶユートだったがリリは未だに抵抗が弱かった。

「こうしてリリの温もりを堪能すると、実はリリ自身のパワーアップに繋がるかしらどうだ？」

「はえ？　そ、そんな訳が無いでしゅ……」

「僕のスキルに【情交飛躍^{ラブ・ライブ}】ってのが在って、効果は有り体に云うとヤれば一発で十く十二くらいの数値が上がる」

「えっと、冗談？」

「いや、マジ」

「え？　だとしたらリリは若しかして……」

「御察しの通り、既に以前の情交で四〇くらいは上がっている筈」

余りな内容についていけないリリだけど、まさかの展開にゴクリと思わず固唾を呑んだ。

実際には口の中に出して半分になったり、同時にイって倍くらいになったりしたから総計で五二ポイントとなっていた。

ユートは見えていないし、リリも知らないが主に俊敏や器用が上がり、次点として魔力に振られている。

力が入っているというのも烏滸がましいし、耐久に至っては入っていない。

それがリリの資質。

攻撃力が低い上に耐久も無いとなれば、近接戦闘には堪えられない

だろうし、攻撃魔法が使える訳でも無く遠距離攻撃も叶わない。

実際、リリは右腕に小さなボーガンつぽい弓を身に付けており、力のパラメーターに依存はしない。

軽く弾ける上にある程度の連射が可能、威力的には上層くらいしか使えないにしても、どうせ中層なんて足を踏み入れた事も無い。

「【情交飛躍】のパラメーター振り分け、あれって自動だからな。手動で振り分けとか出来ればリリにも力や耐久を与えられる」

何とかならないかと考えていると……

「あれ？ ひよつとしたら何とかなるか……」

何だか閃いた。

カンピオーネの勘はこういった部分に聡く、出来るなら出来ると閃くのだ。

よく【サルバトレ・ドニ】辺りが、『何かやれそうなんだよね』とか『出来ない気がしない』と言ってはやり遂げているのが正にそれであろう。

「（スキル——それは恩恵を受けた者の本質や経験や知識などにより発現する。そして願望が程好く影響を及ぼすとか。つまりスキルを『こう扱いたい』と強く願えば幾らか変化が起きてもおかしくはない）」

「（出来る！ 出来るじゃないか！ パラメーターの手動振り分け！）」

リリの為に強く強く願ったからか、ユートのスキル【情交飛躍】ラブ・ライブに変化が顕れていた。

【情交飛躍】ラブ・ライブ

・発現者が男の場合で女性との情交を一回で基本アビリティに一〇〇十二上昇。

・同時に絶頂を迎えれば効果は倍増。

・絆が深まればボーナスがプラス。

・プレイヤーの意志でパラメーターの振り分けを自動と手動の切り換え可。

早い話が面倒なり不要なりでパラメーターを自動、リリみたいに狙った部分を強化したいなら手動と変えられる様になつたらしい。次にリリを抱くのが俄然楽しみになる。

「ふにや」

「おや？」



暫くすると、エイナ・チュールがギルドの査察団を率いてやって来る。

「お疲れ様、ユート君」

「もう、吃驚したよ〜？　行き成り貴方から渡された魔伝話機が鳴つて、此方の会話が流れてくるし」

「つて、神様達みたいな事を言わないで！　お願い、頭が痛くなるから……」

「神って中二病だったり、2Chの住人なのかな？」

事情聴取を受けたユートとりりだが、粗方は携帯型魔伝話機で知っていたから事実確認が主だった。

逮捕され、後にはソーマ・ファミリアの新しい団長に、ドワーフのチャンドラ・イヒトが就いたとか風の噂で聴く。

携帯型魔伝話機はユートがオラリオに来る前から、ユーキのアドバイスを受けつつ造っていた物であり、動力にこの世界の魔石を使える様に改良してある。

魔導具はユートの領分。

持っているのはユート、エイナ、ヘスティア、ヘファイストス、新たにアテナであるサーシャだ。

まだ普及はしてないが、その内に量産体制を整えて普及させる予定。

エイナに渡したのは遠征から帰ってから、報告に向かった際だったけどこの時はこっぴどく怒られた。

一ヶ月近く連絡が無く、死亡を視野に入れて涙していたら、明るく受付に来たのだからそりや怒る。

魔伝話機を渡してから、早々に退散をした。

それは兎も角、リリとは手を繋いでいるからか？ エイナは氣を利かせてすぐに解放してくれる。

再び歩く二人。

「ユート様、これから宿屋にでも行くのですか？」

「宿屋？ ああ！ いや、まずはリリの改宗をしないといけないから、僕の主神に会って貰う」

「そ、そうでしたか」

てつきりすぐにでも戴かれるものだとばかり思い、ちよつと恥ずかしくなる。

だけど場所がおかしい。

「あの、ユート様は確かヘスティア様の眷属ではありませんでしたか？」

「いや、改宗してアテナ・ファミリアに移籍する予定になってる。だから暫定的にサーシャ……アテナが僕の主神だよ」

「——は？」

改宗自体は引越した後、だから背中スティタスは未だにヘスティ

ア・ファミリアのものが、精神的にアテナ・ファミリアの一員となっていた。

「アテナはファミリアを作る前、ヘファイストスの所で世話になっていたから、今は引越しの準備中だ。だからリリの改宗はそっちで行う」

「判りました」

ユート自身の改宗に関しては予定通り引越後に行うにしても、リリの場合は【神の恩恵】が無いと困るから先に行く。

だったらユートの改宗も序でに……と考えるかも知れないが、元々が強大な力を持つユートが改宗に伴う更新でパラメーターが上がる、今後で上げ難くなるから遅くても構わないという考え方だった。

「サーシャ、アテナは在宅かな？」

「うん？ あんたか。居る筈だぜ、待つてな」

ヘファイストス・ファミリアの本拠地、門番に問い合わせるとサーシャを連れてきてくれる。

「ユート、どうしたの？」

「この子……リリルカ・アーデと云うんだが、ソーマ・ファミリアからの改宗を頼みたいんだ」

「ああ、新しい眷属こどもという訳ね。判った。リリルカ・アーデさん、着いて来て貰えるかな？」

「は、はい！」

ヘファイストス・ファミリア本拠地に宛がわれていた自室に招き入れ、リリの服を脱がせて背中に自らの神血イコルを使い、更新の要領で改宗を行う。

背中の紋様がソーマからアテナに変化し、更に更新も同時に進んでいく。

「あれ？ リリルカ」

「はい？」

「若しかしてユートに抱かれた？」

「ブフッ！ な、な、何ですか!？」

「だって、更新と無関係な部分で数値が出てるし」

「あゝ！」

そういえば、スキルによって数値が上がると言っていた気がする。
スキル名は【ラブ・ライブ情交飛躍】だとか。

「飛躍ポイント五二かく。お腹に三回とお口に一回って処かな？」
スツゴいの確だった。

一回目で一二。

二回目で一一。

口で五。

三回目で二四。

総計で五二ポイント。

処女だったから身体への御触りを主に時間を取り、本番は三回で済ませた。

リリルカ・アーデ

所属：アテナ・ファミリア

種族：パルウム

職業：サポーター

L V・1

力：I 4 2 ↓ 4 5 (+1)

耐久：I 4 2 ↓ 4 8

器用：H 1 4 3 ↓ 1 4 8 (+20)

俊敏：G 2 8 5 ↓ 2 9 6 (+18)

魔力：F 3 1 7 ↓ 3 2 5 (+13)

飛躍ポイント：52

《魔法》

【シンダー・エラ】

- ・変身魔法。
- ・変身像は詠唱時のイメージ依存。具体性欠如の際は失敗。フアンブル
- 模倣推奨。

- ・詠唱式【貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの】
- ・解呪式【響く十二時のお告げ】

《スキル》

【アーテル・アシスト縁下力持】

- ・ 一定以上の装備過重時に於ける補正。
- ・ 能力補正は重量に比例。

微妙な数値に、ちよつと複雑な表情となつてしまふリリルカ・アーデだった。

・

第27話：詐欺行為を見咎めるのは間違っているだろうか

無事に改宗も終わって、サーシャに連れられたリリが戻ってくる。

「はい、ユート」

サーシャから渡されたのはリリのステイタスが書かれた羊皮紙で、それをジッと見つめられてしまうリリは背筋がむず痒い。

ステイタスを見られるのは謂わば、自分の全てを詳細に視られるのと同じ。

基本アビリティのパラメーターから魔法にスキル、ランクやそれに伴った発展スキルまで全てを……だ。

これらを晒せば弱点なども判るし、当人の成長傾向も魔法やスキルで思想なんかも解ってしまう。

裸身を晒して胸や秘裂や菊門を見せるのと何が違うというのか？

実は何も違いなど無かったりする。

「シンダー・エラ、灰被りのエラ……シンデレラか。内容的には強い変身願望が魔法に顕れたのか？」

ビクッ！ リリの肩が震えたと視線を彷徨わせて、顔は真っ赤な染まる。

「若しかして犬耳やエルフ耳を生やすって、この魔法による変身なのかな？」

「は、はい……」

「この魔法、系統的にどんな感じなんだ？」

「系統ですか？」

「幻影を駆使するとか色々あるよね」

「ああ、成程。幻影とかではないです。変身自体は、私の体格に近くないと出来ませんが、モンスターの姿に成る事だって可能です。耳を生やすのも私は耳の感覚を感じられますし、温もりも確りありますね」

実際、その耳はリリの耳が変化したものだろうか？

「実際、一部だけの変身も可能ですから。リリの姿にエルフ耳や犬耳で種族を変えて魅せられます」

「へえ……」

正にリリに犬耳エルフ耳が生えた状態。

ユートは下半身の一部が少し硬化したのを自覚し、リリの姿を想像したら性欲が沸き上がり、ゴクリと唾を呑み込んでしまう。

やはりケモミミは汚ないオツサン^{カヌウ}よりも、美少女が生やしているに限るのだから。

エルフ耳だつてロイマンなるギルド長とリヴェリアやレフィーヤやエイナで、どちらを支持するのか訊かれればユートは間違いなく後者を選ぶだろう。

ロイマンを選んだ人間が居るなら、彼と結婚を前提に付き合うと良い。

金だけなら持っている。

「何ならちよつと御見せしましょうか？」

「うくん、リリの可愛いところを見たら我慢が出来なくなりそうだな」

「えうつ！ も、もう……リップサービスが過ぎますユート様。リリはヒューマンの尺度で見れば子供にしか見えない筈です」

パルウムの尺度ならば、それなりに大人っぽいのかも知れない、何しろリリはこう見えて一五歳だし。

だけど頬を朱に染めて、俯くリリの顔は恥ずかしそうだけど喜んでいる。

今、犬人に変身をしていたなら尻尾をブンブンと振っていただろうし、そんな可愛い姿を見たらユートも萌えて木陰にリリを連れ込んで、押し倒してしまっていたかも知れない。

閃姫招喚をしてないし、いつでもやれる状況が整ってないから、何気にユートも少し溜まり気味だから。

ミッテルトとはやれるのだが、ここ暫くはファミリア関連リリ関連でバタバタとしていたし。

リリを割と気に入っているのも理由だが……

「うん、まずは冒険用とかの装備品や服を整えて食事をしてからとか思ったが、やっぱり我慢出来ないな」

「ふえ？」

がつしりと手を繋いで、ユートは“自分で準備”をしていたオラリオ郊外へと建てたラブホテルに直行、リリを連れ込みユート専用の部屋に入る。

お金は勿論支払ってなどいないし、ホテルの従業員も何も言わない。

土地を買って瞬時に建物を建造、二日くらい前から営業を始めたばかりの真新しいラブホテル。

営業云々に関してギルドの許可はエイナに怒られたあの日に既に取っており、僅か二日とはいえそれなりに盛況だと聞いた。

宿屋でやるにしても問題がちよつとあり、その問題が解決したラブホテル故に利用者も多い。

二時間で千ヴァリスに、二十四時間をフルに泊まるなら一万二千ヴァリスと、バカみたいに高い金額ではあったが、サービスも良いから爆発的な人気らしい。

勿論、行列を作るだとかは無いのだが……

まず、宿屋と違って造りから音が漏れない。

やってる最中の嬌声が響くのは恥ずかしいものだ。

避妊具も完備。

やりたいが子供がデキたら困る時に必須。

飲み物や軽食も有るし、バスルームも完備したから休憩したい時、やった後の汚れを落としたい時に役立つ設備である。

ユート専用の部屋とは、ユートが女の子を連れ込む為に宿屋を捜すより、簡単に使える部屋を持っていた方が便利で、他の部屋より絢爛で広く造られ最上階に存在していた。

工事期間も無くて土地を購入すれば、イメージだけで建造してしまえるユートな訳で、千年前にバベルの前身となる建造物でダンジョンの蓋を造ろうとしていた古代人を嘲笑う行為だ。

尚、ギルド関連の施設を幾つか建造する契約を交わして土地を購入

したから、実は割と良い土地だったにも拘わらず、二束三文的な値段で購入している。

「す、凄いお部屋ですね」

扉を閉め内側からロックしたから、誰かが訪ねて来るなんて事にはならない。

「リリ、始めようか?」

「は、はい……」

頭を撫でられて嬉しそうに返事をしたりリリ。

「貴方の刻印^{キズ}は私のもの、私の刻印^{キズ}は私のもの」

詠唱式を唱えてイメージを固める事により変身。

光を放ってそれが収まると其処には、犬耳が頭に付いて尻尾を腰に揺らすリリの姿が在った。

「おお! やっぱり汚ないオッサンなんかとは一線を画するね。凄く可愛いよ」

「そ、そうでしょうか?」

などと言いつつ腰の尻尾はブンブンと揺れていて、それがより一層に可愛いらしさを演出している。

耳もピクピク動く。

「本当に可愛いな」

「はひやつ!?! ん!」

我慢が出来ずに触ってしまうと、普通に神経が通っているらしくリリは感触に声を漏らす。

「やん、ダメ……ですう。ん、あ……はう!?!」

別に性感帯を触れられている訳でもないのに嬌声を上げ、遂には腰砕けとなってユートの腰にしがみ付きながら所謂、女の子座りで腰をへたり込ませる。

甘い息を荒く吐きながら目に涙を浮かべ、恥ずかしそうに顔を伏せる姿は性欲を助長させる結果となり、ふとリリが顔を上げてみれば下半身の一部が自己主張をしており、リリは更に顔を真っ赤にしてしまう。

「く、苦しそうですから」

そう言つてリリはユートのズボンのベルトを取り、チャックを降ろしてパンツからユートの分身を外へと解放してやる。

「ひやつ!」

自分の腕くらいはありそうなサイズが露わとなり、一度は視たとはいえやはり驚いてしまった。

「す、すごっ!」

嘗て、前々世でクトウルーなる邪神に犯された為、勃起時には普通を逸脱したサイズにまで脹れ上がり、数多の少女を女性を虜とした要因の一つだ。

ここまで来たなら最早、言葉より行動であろう。

「リリ……」

「キャッ!」

お姫様抱つこで抱えて、キングサイズのベッドへと転がし、小さなリリの肢体へと覆い被さると唇を自分の唇で塞ぎ、優しく肢体をまさぐりながらギシギシとベッドのスプリングを軋ませつつ、望んでいたケモミミなりりと激しい一夜を過ごすのであった。



チウンチウンと雀の鳴き声が響く中、然しラブホテル内には聞こえないからか未だに昨夜の痕が残っている状態の俤、抱き締め合つて眠るユートとリリ。

いつの間にかエルフ耳なりリリだが、どうやら何度か変身した姿を変えており、その度に萌えて燃えあがっていたらしい。

リリは身長がユートの腰くらいまでしかないから、ユートの胸にスッポリ納まった形で寝ている。

否、正確には既に目は覚ましていた。

まだ夕方にさえならない時間帯にホテルまで来て、食事を摂るのとトイレ以外ではやり続け、いつの間にかリリは疲労から眠ってしまったが、覚えている限りで五十発もの行為。

普通ならユートだけなら未だしも、リリはとづくに体力の限界だつ

たろうに、何故か五十回ものセ○クスに耐えていた。

理由は簡単。

とあるマッド製ドリンクを飲ませながらやった為、リリの体力が常人に比べて遥かに高くなったから。

しかも閨事専用。

お陰で精神強化まで為されており、しかも性欲をも強化されていたからリリも欲しくて欲しくて堪らないといった風情で、ユートを求める事に。

「響く十二時のお告げ」

解除式を口にして本来のリリに戻る。

「ユート様……」

リリの小さな肢体の中、ユートの指や舌が触れていない場所など最早無くて、リリは肉体的にも精神的にもユート無しは考えられない程、性の絶頂を味わい続けていたからかユート胸に顔を伏せその名前を呟く。

今、この瞬間だけは貴方はリリだけのモノですと、そう言いたかったから。

ユートが起きてホテルを出れば、この幸せな時間も終わりを告げるのだ。

だからこそ、今だけでも想いを享受したかった。

ユートが起きて、二人でシャワーを浴びて昨夜から付着した乾いた液体を洗い流し、すっきりした表情で部屋に戻ると……

「あの、これは？ 手切れ金とかでは無いですよね」

「手切れ金？ リリを手放す気は無いんだが？」

「そうですか……」

やはり恥ずかしい。

「じゃあ、この水晶は？」

「うん？ 良いものを魅せて貰ったからお礼かな」

「は、はあ……」

「僕は故郷に弟が居てね。とある理由から水晶が好きだから、修業とかを上手くやったら御褒美に水晶を上げていたんだ。上げると喜ぶ

から遂……ね」

「リリにも水晶をと?」

「他の宝石でも良いが?」

「いえ、喜んで戴きます」

それなりに良質な水晶、売ったらお小遣いくらいにはなりそうだが、リリに売る心算など毛頭無かった。

「じゃあ、僕のファミリアの本拠地に行こうか」

「はい、ユート様!」

再び手を繋いでユートとリリは本拠地へ向かう。
そして辿り着いた。

「うわ……」

其処はとてもではないが本拠地とは思えない建物、廃教会は今にも崩れてきそうで怖い。

「地上部分は無関係じゃないけど、取り敢えずどうでも良いんだ。地下に行く」

「は、はい!」

地下に下りたら下りたでボロボロな部屋だったが、更に先の扉を開いたらリリも吃驚してしまう。

先程までの廃教会や部屋とまるで違う別世界。

「ようこそ、ヘスティア・アテナ同盟の本拠地へ」

広大なリビング。

恐らくは先程の部屋こそが入口で、此処が真の意味で団員が集う部屋。

其処から更に奥に続くであろう扉が在り、この地下が地上の廃教会などものともしない広さだと理解し、そしてそれを考えると此処——オウリオの地下は凄い事になっているのでは? という疑念が沸く。
実は空間圧縮技術の賜物で拵けており、実際に使った空間は大した面積ではなかったりするが、リリには判らない事実である。

柂木家で明らかに面積がおかしい鷹羽の部屋とか、それを鑑みれば理解も出来るのだが、オウリオの人間に理解を求めるのは間違っている

るだろう。

ユートの技術なら普通に【精神と時の部屋】レベルにおかしな拡張方が可能な訳で、この程度の広さなら自重をした方であった。

「此処がリリの部屋で良いかな？」

まだネームプレートには名前が記載されておらず、誰も部屋の住人が居ないと判る扉を開けると、其処は隣の扉の距離を考えれば明らかに有り得ない広さを持った空間が広がっており、机と椅子に普通のサイズなベッド、本棚や鏡台や服棚まで完備されている上に、布団や季節違いの服などを仕舞う為の空間も確保されていて、しかもバスルームやトイレに冷蔵庫や水道や小さなキッチンまでも付属していたり。

流石に昨夜泊まったラブホテルの部屋に比べたら、二段階は落ちる部屋なのかも知れないが、寝る為やら休むだけなら充分過ぎる程の内装である。

しかも、すぐに住めるという至れり尽くせりな環境だから、リリとしてはもう驚きを通り越して呆れた。

アテナ——サーシャが、引つ越してでんやわんやとしているのは飽く迄も私物の整理、部屋の片付けなどに時間を取られているからに過ぎず、ヘファイストスに全てを丸投げしていれば引つ越しはすぐに終わる。

勿論、そんな真似が出来る程に豪胆な性格はしていないから、サーシャは部屋を確り片していた。

尚、主神の二柱とユートとベルの部屋は特別製で、他より広くて多機能を有したものである。

「部屋は防音が確りしているから、お互いに時間が合えば同じ部屋と同じベッドで色々やれるよ？」

「ブッ！」

耳元で囁かれたリリは、思わず嘔き出してしまう。

「バ、バカですか！ 昨夜はあれだけリリをいぢめた癖に！ まだ足りないなんて云う御心算ですかっ!? 性欲の権化！」

恥ずかしさと照れ隠し、緋い混ぜになった気持ちが抑え切れず、リリはユートを部屋から押し出して扉をバタンツ！ と乱暴に閉めて

しまった。

五十発というリリからすれば前代未聞な回数をやり続け、ユートの有り得ない性欲はよく知る訳だけど、まさか一日足らずでまたも性に関して話してくるとは思いも寄らない。

「ハア……柔らかな御布団ですね」

上着代わりのローブを脱いで、下に着ていた襦袢服やスカートや下衣まで脱ぎ捨てて、全裸になってからベッドへとダイブした。

昨夜のユートとの閨事の疲労感もあってか、すぐにウトウトとして意識を手放し寝息を立て始める。

殆んど無かった安心感を全開の就寝、リリは自分の幸福を漸く満喫していた。



もうすぐ怪物祭が始まる訳だが、その前に怪物祭後のダンジョン攻略などの為、ユートはベルと共に使った消耗品の補充をするべく、**【青の薬舗】**へと訪れる。

聞けばベルは貧乏な零細ファミリア故にか、此処が薬品の類いの補充場であると云う。

「こんにちは、ナアーザさん」

「こんにちは、ベル」

眠たそうな瞳をしている亜麻色の髪の毛の犬人が、ベルと気軽に挨拶を交わす辺り御得意様だと判る。

「おや、新しいお客様？」

「ん、まあね」

ミアハとは知り合いな訳だが、ヘスティアから直に紹介されてポーションを貰っただけだし、この店には顔を出してはいなかった。

だからこそ、ナアーザと呼ばれた少女ともユートは初対面なのだ。「良ければ御得意様になって欲しい」

眠たげな瞳ながらニコリと言うが、何だかおかしい副音声聞こえた様な？

「それでベル、今日はどんな用？」

「あ、はい。消耗品であるポーションを買い揃えないといけなくって」
「成程、大口の買い注文は嬉しいよ」

見た処、ディアンケヒト・ファミリアに比べると、御世辞にも流行っているとは思えないし、ベルの買い物が収入源なのだろう。

「それじゃあ、ポーションを二十個で一万ヴァリス。オマケして九千ヴァリスで良いよ」

「ありがとうございます」

「それは此方の科白」

「あ、そうですね」

和氣藹々と話す二人ではあるが、ユートの視る目が厳しく光る。

「待て！」

「何？」

「このポーション……」

その言葉にナアーザの頬を汗が伝う。

銀色の義手とは反対方向の腕を取り……

「ぎつあつ!!」

ナイフで突き刺し二つの傷を穿つ。

「ナ、ナアーザさん!! ユートさん何を！」

驚愕のベルが紅の瞳を見開いて抗議をしてきた。

「さて御立ち合い、此処に取り出したるはミアハから貰ったポーション、そしてベルにナアーザが売ろうとしたポーションだ」

ベルは首を傾げるけど、ナアーザは青褪める。

ミアハのポーションと、ナアーザのポーション。

同時に同じ深さの傷へと垂らす。

「……え？」

明らかにナアーザから買おうとしたポーションでの治りが遅く、ベルはそれを呆然とした顔で見ていた。

「ど、どうして？」

「恐らくこいつは幾つかに分けたポーションに水増しして、甘味とかで味を整えただけの物だからだよ」

「なっ!？」

「当然、そんな代物だから回復力は低くなるわな」

未だに治り切らない手の甲の傷、そしてミアハから貰ったポーシヨンの方は既に完全治癒している。

「商売とは信用が第一だ。然し彼女はその信用を喪う詐欺行為を働いた。ギルドに通報したら【青の薬舗】は活動停止処分かな？」

「そ、それじゃナアーザさんやミアハ様は？」

「ナアーザは自業自得で、ミアハは監督不行き届き。いずれにせよ店なんてやれはしないだろう」

最早、ナアーザは青褪めるといふより顔面蒼白で、幽鬼みたいな有り様だ。

「お願い、何でもするから通報はしないで」

土下座してまで頼んでくるナアーザ。

「通報されて営業が停止に追い込まれたら……」

銀色の腕に目を向けて、兎にも角にも土下座をして赦しを得なければならぬ理由、それがナアーザには存在していた。

だが、現実には厳しい。

「二応、ベルと僕は別々のファミリアだ。だが残念な事に君が詐欺を働いていた期間、僕はヘスティア・ファミリアに所属していた。つまり間接的には僕に対しても詐欺を働いているし、ベルが無かった事にすれば良い話じゃないんだ」

「それは……」

「それとも」

土下座しているナアーザの顎を掴み上向かせると、ニヤリと悪い笑みを浮かべるユート。

「何ならその^{からだ}肢体で媚を売ってみるか？」

「っ!？」

相変わらず眠たげな瞳ではあるが、それでも最大限に見開いて頬を朱に染め、その視線から逃れる様に顔を無理矢理に逸らす。

「空音で騙してきたんだ、言葉じゃなく肢体で返すのも一つの手だぞ？」

「そんな事……は」

「だいいち、さつき何でもするからと言った筈だが、それすら詐欺の環境か？」

「あ……」

もうナアーザにはユートの追及を躲す術が無いし、ベルからの援護を期待するのも実質的に筋違いだ。

「待つては貰えないか」

「ミアハ様！」

青いローブ姿の男神——ミアハの登場にナアーザとベルがハモつた。

「ミアハ、ナアーザの責任は商売人としては重たい。先にも言ったけど商売つてのは信用が第一、そいつを彼女は喪った訳だからね」

「む、むう……」

「イカサマはバレなければイカサマじゃなく技術だ。然し一度バレたらサマ師に生き延びる機会は無い」

「そ、そうなのだが」

ミアハも理解はする。

とはいえ、ナアーザとの二人三脚のファミリア運営は切っ掛けがナアーザに、そしてやらかしたミアハ。

つまり今回の件にミアハは関わってないが、間接的にはミアハにも責はある。

ナアーザだけに責任を押し付ける訳にもいかない。

「それとも、ミアハも今回の件に関わってるのか？」

「違う！ ミアハ様は関係無い！ 責任は私にある、だから私だけに問うて！」

「ナアーザよ、そなた」

ユートの言葉を全否定、流石にミアハも驚く。

まあ、ミアハが関わっているなんて実際には考えてもいない事だ。「それで？ こんな詐欺を働いたのは何故だ？」

「……言わずもがな、お金が欲しかったから」

それは正に意外でも何でも無い、至極真つ当な理由であつたと云

・ う。

第28話：ミアハ・ファミリアの取り込みは間違っているだろうか

「確かにお金は大事だね。お金が欲しくて犯罪を犯す人間の何と多い事か」

「……くっ！」

ナアーザが居た堪れない様子で顔を逸らす。

「僕もお金は必要なだけは欲しい。だから冒険者となったんだ」

「っ！ 私だつて冒険者……だった！ けど！」

銀色の右腕を左手で押さえながら叫ぶ。

「義手……か。モンスターにでも喰われたのか？」

ビクリッ！ 肩を震わせて驚愕に目を見開きつつ、ナアーザはユートを見た。

「凶星みたいだね。冒険者ならよくある悲劇つてやつかな？ 察するにその義手は魔導具だろうし高価なんだろう、ならば可成り借金を抱えたんだろうが……」

「うっ、私は……っ！」

ヨロリと足下が揺れた気がするナアーザ、痛ましい過去が頭の中を過る。

「待つて欲しい。全ては私が……私が悪いのだ！」

「違う！ ミアハ様が悪いんじゃない、私が彼処でモンスターに斃されたから、生きた佝喰われて！」

元々、ミアハ・ファミリアは零細ファミリアなんかではなく、中堅処のそれなりに知れたファミリアだったのだが、冒険者をしていたナアーザとそのパーティが全滅の憂き目に遭う。

ナアーザ・エリスイスは生きた佝に肉体を喰われ、救助こそされたがボロボロの死に掛けという有り様。

万能薬エリクサーなどを使い、何とか肉体の再生こそ叶ったものの、完全に喰われて喪った右腕だけは再生も利かなかった。

しかも生きた俣喰われた経験はナアーズの心に影を落とし、PTSを患ってしまいダンジョンに潜る事も出来なくなつた。

『痛い、もうやめて、もう許して、私を食べないで！　痛い痛い痛い痛い
 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
 いっ！』

泣こうが叫ぼうが群がるモンスターはナアーズの肉を貪り、その度に神経は痛みを脳へ訴える。

血が流れ、涙を零して、恐怖で股から臭い液体すら垂れ流し、救助されるまでの間に受けた痛みと傷は、ナア―ザの心胆をへし折るには充分なもの。

そんなナアーザのせめて肉体だけでも何とかしたいと思い、ミアハはファミリアの団員が止めるのも聞かずにライバルというか天敵とも云える神——ディアンケヒトに大借金を拵えてまでも【銀の腕】アガートラムを造って貰い、それをナアーザへと与えた。

団員はミアハを見限り、ナアーザを除く全員が改宗を望んで、ミアハはそれを仕方がないと認める。

ダンジョンにも潜れない元冒険者のナアーザが唯一の団員となり、ミアハに残されたのは借金のみ。

幸い、ナアーズは調合の発展アビリティを持っていたから、【青の薬舗】にて売るポジションなどを作成する事は出来たし、取り敢えず利子だけでも返済していく方針で再動。

だが、ミアハの八方美人つ振りや無自覺な天然ジゴロ的な行動、しかも作ったポジションを無料で配ったりして、ナーザ子の心を親が知らずだ。

だから悪いとは思ったのだが、都会慣れしていないベルに親切にする振りをして水増しポジションを売り付けるなんてマネをする。

理解はしていた。

あんな僅かにしか効果が無いポーションを持って、ダンジョン探索

なんか出掛けたらいつか死ぬ。

五分の一に分けたとて、水増しや香料甘味料などで匂いや味を誤魔化した物、実際の効果はもっと下回る程度であろう。

本来のHP回復量が仮に一〇〇だったなら、下手をすれば一〇程度にしかないかも知れないのだ。

躲すタイプなベルは今までそこまでの怪我はせず、水増しポーションで回復をし切れる程度だった。

だいいち、本来の回復量

を余り知らなかったベルは気付く余地も無い。

ミアハのポーションも、気付かぬ間にちよつと酷い怪我に使い、同じくらいの回復量だと思い込んだ。

そう、ベルは運が良い。

無謀なダンジョン探索をエイナに止められており、それをソロの時には忠実に守っていたから、死なずに済んでいたのである。

「ベルには悪いと本当に思っていたけど、私には他に選択肢も無かった」

迫る借金返済の日。

まともな経営をしてくれない主神。

ダンジョンに潜れなくなった元冒険者な自分。

日々の糧は必須だったし借金も返さねばならない、だからベルを食い物に金を稼ごうとしたのだ。

新しい薬の案もあるが、それを実現する為には足りない物も多いから。

「そうか、話は理解した。じゃあギルドに行こうか」

シン……

辺りが凍結したかの如く静寂が支配をする。

「あの、ユートさん？」

「何だ、ベル？」

「此処は普通、ナアーザさんを赦す場面なのでは？」

「どうして？ 理由は聞いたが、だからといって罪が消えたりはしないんだぞ」

「そ、それは……」

「まあ、これでファミリアは消滅するし、残されるのは借金と犯罪者のレッテルのみか。ミアハも二度とはファミリアを作れなくなるだろうな」

言われて青褪めてしまうナアーザ、普段の無表情に近い眠たげな顔とは全く異なる涙目でユートのズボンに縋り付き……

「お願い、何でもする！ 貴方が望む事なら何だってするから、それだけは！」

自分がどうなろうと構わない、せめてミアハだけでも救いたかった。

「運も間も悪かったんだ。もう少し発覚が遅けりや、僕は改宗してアテナ・ファミリアに移籍していたが、今はまだベルと同じヘスティア・ファミリア所属で、しかもベルより先輩だからベルに命令権なんて無い。ベルが受けた被害だからと放つても置けないからね」

アテナ・ファミリアへと移籍した後なら、同盟関係とはいえベルに全てを任せる選択も有り得たのだが、生憎とユートはヘスティア・ファミリアだし、ファミリアに損害を与えた輩には厳しくならざるを得ない。

「あの、僕は！」

「ベルは御人好しだから、ナアーザ・エリスイスを赦すかも知れない。だけど、世の中にはやって良い事と悪い事がある。何よりベルの目指すモノは邪を討ち、魔を滅し、悪を許さぬ存在だった筈だけど？」

「うぐっ！」

その名は【英雄】……

西に盗賊が居れば残らず撃退し、東に魔王が在れば命懸けで殲滅する。

それが英雄だ。

ナアーザはそれに比べれば小悪党レベルの悪事に過ぎないが、それでも悪は悪であるし何より冒険者になって日が浅いベル・クラネルの生命に関わった。

「ユートよ、思い留まっては貰えぬか？ 私はどうなっても構わぬの

だ。だが、せめてナアーザだけは別のファミリアに改宗をさせるくらいしてやりたいのだ」

ギルドに報告をしたならナアーザは間違いなく犯罪者として扱われる訳だし、そうなれば何処のファミリアも受け容れまい。

況してや、ダンジョンに潜れない半端者では役立たずと断じられるだろう。

ミアハは最後の手段として天界に帰還すれば良い、だけどこの先にも人生があるナアーザは、ミアハとしても放つては置けない。

「やれやれ、互いに底い合うとか。単なる悪党なら、ギルドにさつさと報告して断罪するんだが……」

ミアハもナアーザも自分より仲間……というには少し語弊もあるが、取り敢えず好感は持てる相手。

それにナアーザは普通に美少女だし、ファミリアの事を考えれば断罪するより取り込みが良いかも知れないと二人を交互に見遣り、小さく溜息を吐いた。

「まあ、他ならない被害者のベルが怒っていないし、そうだね……許すのも違うから此方からの提案つてのを提示しよう。乗るならば執行猶予とするけど？」

「執行猶予つて？」

ナアーザが首を傾げている辺り、この世界には無い制度なのだろうか？

「執行猶予つてのは、罪を犯した者が執行猶予期間に何らかの事件を起こさずに居れば、言い渡された刑が将来的に効力を失う制度。とはいえ、そういった刑を言い渡されたって云う事実までは消えないけどね」

例えば——『禁錮三年、執行猶予五年』の判決が出た場面だと、実際に禁錮刑三年の刑が執行される前に五年間の猶予期間が有り、この五年間で微罪すら犯さずに居れば、五年後に金錮三年に伏さなくてもよくなる制度。

但し、刑の言い渡し自体が消える訳ではない。
謂わば、それはレッテルとして生涯に亘り残る。

当たり前だが決して無罪になる訳ではないのだ。

「それで、提案とは？」

「まず、アテナ・ファミリアとヘスティア・ファミリアの同盟専属薬師として、ダンジョンに潜るのに必要な薬品を作って貰う」

「無料で!？」

「少なくとも、個人部屋に薬品工房もある生活だし、素材は此方で用意をする。衣食住の心配は要らない」

「うっ！」

生活が保証されるなら、確かに赤字とは云えない。

「次に、ミアハも主神としてではなく薬神として薬の製造に頑張って貰う。此方が使うポーション以上に作れば【青の薬舗】で売っても構わない」

「ふむ、それなら貯蓄も少しは可能であるな」

ミアハが頷く。

「後、ナアーザにはダンジョンに潜って貰う」

「二なっ!？」

大抵の命令には従う心算だった二人だが、ナアーザがダンジョンに潜るなんてトラウマを刺激するだけの命令など、流石に受け容れる事は不可能だった。

ナアーザ的にはそれなら寧ろ、『夜の相手をしろ』と言われて初めてを散らす方がまだマシなのだ。

「む、無理……そんな事が出来るなら臨時パーティを組んでダンジョンで稼いでいた。出来ないからあんな莫迦な詐欺をしたのに」

トラウマとは簡単に払拭が出来ないから心的障害と呼ばれ、専門のカウンセラーだって存在している。

「トラウマね、問題無い。例えばその時の記憶を消せば良いんだし。まあ、若干パーになるけどな」

「嫌です！」

パーになるとか言われて記憶を消したくない。

「あれって記憶消去魔法とか云って、実は痴呆魔法だったりするからな」

新しい事柄を覚えるのが苦手になり、少し能天気な性格にもなるらしい。

【魔法先生ネギまー】系の記憶消去魔法。

「心配は要らない、アテナの黄金聖闘士・双子座^{ジエミニ}の優斗。空間とか頭脳に関してはプロフェツショナルだよ」

「ぬ？ 黄金聖闘士とな？ まさか……」

「？ どうかされましたかミアハ様？」

「まだ天界に居た頃だが、アテナに聞いた事がある。嘗てのアテナは地上の愛と平和を護るべく、聖闘士と呼ばれる少年や少女と共に邪悪と闘ったのだとな」

「地上の？ ですが聞いたのは天界では？」

おかしな話にナアーザが質問をする。

それではまるでアテナが一度は地上に降臨した後、天界へと還ったみたいではないか……と。

「酒の席故の夢物語と思っておったがな」

聖闘士を名乗る人物が、正にこの場へ立っていた。

「サーシャ」

「ふむ、それは常日頃からアテナが名乗る名であり、ヘスティアだけは彼女の事をそう呼ぶな」

「この名前は彼女の前世、別世界でアテナと呼ばれていた頃、人の腹より生まれて名付けられた名前だよ」

「な、に……？」

「聖闘士もその頃の地上を守護する聖なる闘士だね」

サーシャと名付けられたアテナは、冥王ハーデスの器となったアローンの妹として誕生をした為、本来とは異なるメンタリテイを持った女神だった。

しかも下層の貧民街に住まう少女として育ったからだろうか、毅然とした女神として立ってはいない。

雑兵から黄金聖闘士まで跪く聖域の最上位、戦女神たるアテナとして中々自覚を持てなかったものだ。

「僕がサーシャの居た世界に降り立ったのは、蟹座のマニゴールドと魚

座のアルバフィカ——二人の黄金聖闘士が暗黒聖闘士と呼ばれる聖闘士の面汚しの討伐任務の最中だった。まあ、その時は白銀聖闘士・クラテリス杯座を名乗ったが」

「何で？」

「ベル、双子座は別に存在していたからだよ。杯座はその宿星を持つ者が純粋な冥闘士——敵側だったから現れて無かったんだ」

「へえ？」

よく解っていない顔だったが、別に理解する意味も無いから放置する。

杯座の宿星はあの当時は一人だけ、然るに杯座を賜る水鏡はあの世界では純粋にアイアコスと成り果て、杯座の白銀聖闘士は聖戦に列してはおらず、それが故にユートが手持ちの杯座の聖衣を纏って、サーシャと教皇セージに謁見をした。

杯座の水鏡は二巡目——実際にユートの世界線へと続く歴史の中、ガルダではなく聖闘士として登場。

最終的にはとある理由から冥闘士となり、聖域へと現れたのだが

……

「話を戻すぞ」

「うん、私が冒険者に戻れるのは本当？」

眠たげな瞳は変わらず、然しながらキラキラと煌めいてユートを見つめる。

「ああ、トラウマってのはそうだね……この世界でも解り易く言うと、過剰なまでの危険に陥った記憶が、それに類する事に対しては脳が異常な程の拒絶反応を示す。だからダンジョンに入るだけで拒否感を覚え、動けなくなってしまう」

「……成程」

「それをブロックすれば、ナアーザはトラウマに悩まされる事も無くなる筈だ。まあ、危機意識をブロックするから少し危ないけど、そこら辺は微調整するさ」

「お願いします！」

本当は冒険者で在りたかったナアーザ、トラウマがそれを押し留め

ていた。

「それと夜の相手もして貰うから」

ビクッ！　やはりキタ、固くなるナアーザ。

噂の【剣姫】程ではないにしろ、ナアーザも自分の容姿には自信がある。

そのくらいの要求がくるのは想定内。

「そうすれば基本アビリティも上がるしね」

「は？」

行き成り想定外だった。

ソツとユートがナアーザの耳許にまで近寄ったら、息が吹き掛かるくらい処か耳にキスするレベルで唇を近付け、耳打ちをする様にフツと囁いてくる。

「僕のスキル——【ラブ・ライブ情交飛躍】というのが有ってね、その効果がやればやる程に強くなるってものだ。基本アビリティの数値的に一回の

セ○クスで約一〇〇〜一二くらい。絆や同時に絶頂に達したりでボーンが掛かるから、命の危険も無く百や二百は上げられる」

「う、嘘……」

「いや、マジに」

基本アビリティの上昇に必要なのは経験値、それを積む事で数値が上がるわけだけど、訓練で上がるのはそれこそ雀の涙であるし、アイズ辺りは第五一層での激戦を潜り抜けてきて尚、総計で二十かそこら。

それだけ数値上昇というのは簡単ではない。

それがユートの欲望を受け留めれば簡単に上がると云う、それが異常なスキルだとはすぐに理解した。

とはいえ、一人の女の子としては決断がし難い。

まあ、懸想の相手が鈍い上に使用済みでも気にしなさそうだし、寧ろそつち的には何とも思われていない辺り、女のプライド的には甚く傷付いている。

そういう意味で云えば、女の子扱いしてくれているユートには惹かれた。

「す、少し考えさせて」

「良い返事を待ってるよ」

「ひうつ!？」

首筋に息が吹き掛かり、ゾクゾクつと背筋に掛けて快感が奔る。

危なかった。

もう少し性的な接触をされていたら、股を濡らしてへたり込んだかも知れないと頬を朱に染め、ナアーザは戦慄を覚えてしまう。

ユートがその気ならば、いつでも女を絶頂に導けるのでは？ そう思った。

「取り敢えず話は纏まった感じかな？」

「むう、ユートよ」

「何かな？」

「先程の言葉だが、ナアーザを無理に押し倒すなどはせぬ様にな？」

「勿論だよ」

そんな気は更々無い。

今さっきのデモンストレーションとスキルの説明、これで忌避感を薄れさせて理由付けも完了している。

後は本人がその気になったら、ユートがベッドの上でナアーザを啼かせるだけなのだから。

事実、既にナアーザには性欲に濁った瞳でチラホラとユートを視ていた。

時間の問題だろう。

「ならナアーザの装備か。武器は何を使う？」

「……あ、弓を」

「弓か、ならば防具的には中衛用かな？」

ユートは弓術師の装備品を頭に思い浮かべ、それを纏うナアーザを想定してのシミュレーションを頭の中で行ってみる。

「オツケー、なら本拠地に戻ったら装備品を渡そう。ああ、それからナアーザとミアハもウチの本拠地へと引っ越しして貰う」

「何？ 良いのか？」

「ああ、また神用の部屋を一部屋用立てるだけだし」

ナアーザの部屋は有り余る部屋を与えれば良い。

「薬品工房も明日には始動が出来る。確りと働いて貰うから覚悟する様に」

「ふふ、心しよう」

「序でにナアーザの借金も肩代わりするよ」

「え？」

驚くナアーザ。

「ディアンから受けた借金は百万や二百万では足らぬ金額だが、ユートは用立てる事が出来るのか？」

「大丈夫。前の遠征で獲たヴァリスがまだ有るしね。若し足りないならアレを少しロキ辺りに売るさ」

きつとロキならば良い金を支払ってくれるだろう、何しろ待望の完成版な神酒ソーマなのだから。

その後日、ミアハにより耳を揃えて借金が返済されてしまい、ディアンケヒトの悔しそうな絶叫が響いたとか響かなかったとか……

第29話：装備品の新調は間違っているだろうか

モンスター・フィリア
怪物祭

——ガネーシャ・ファミリアが主催している祭典であり、オウリオでも可成りの盛り上がりを見せる祭だが、その目玉となるのがガネーシャ・ファミリアの団員による怪物調教。

それを見世物とするのがギルドからの指令として、ガネーシャ・ファミリアが直々に受けたもの。

まあ、ティムには興味も無いユートだったのだが、折角の盛り上がった祭だから女の子とデートと洒落込む気満々だし、その後には夜の逢瀬を楽しみたいという欲望も強かった。

自身を幾つにも分身させる事も可能な為、ユートはダブルブッキングやトリプルブッキングも怖くない。

木ノ葉隠れの里でどん尻少年が使う多重影分身の術を視て、それを扱える様になった上で権能の一つである「ジェミニ・アルターエゴ重なる双顔の双子」を使う事により、完全なる分身として出現させられる程になっている。

但し、これだと本体は未だしも分体は戦闘能力的には百分の一程度、影分身の方が戦闘力は高かった。

まあ、デートに戦闘能力は基本的に必要は無い。

某・おっぱいドラゴンみたいに、デートの相手から殺される可能性もそんなに高くは無いと思うし。

リユーやエイナやサーシャやラブレスなど、出逢った中でもデートの約束をした相手はそれなりに多く、ユートはこの分身で熟そうと考えている。

何処ぞのシドーみたく、トリプルブッキングで走り回る必要なんて無い。

しかも影分身と違って、強い衝撃でも消えない上にチャクラ切れも考慮しなくて良いから、使い勝手などは格段に上だから。

モンスター・フィリア早く怪物祭を楽しみたいものだ、ユートはダンジョンを動きながら思う。

中層の第一四階層。

来ているのはユート以外だと、ラブレスとナアーザとリリとヴェルフとベル。

敵対するのはヘルハウンドやベル——ではなくて、アルミラージだ。

六人パーティーに対して、モンスターは実に三〇匹を越えている。

モンスター・パーティー

怪物の宴と云われているダンジョン内で最悪な罠の一種、次から次へと生まれるモンスターの群群群、この第一四階層に現れるであろう凡そのモンスターがユートのパーティーを襲う。

ナアーザなど、トラウマこそユートの力で払拭する事も出来たが、記憶を消した訳ではないからあの時を思い出して真っ青に。

「チイツ、ヘルハウンドが火い吹きそうだぞー」

ヴェルフが叫ぶ。

「させるか、氷結呪文ツツ！」

同時にユートが手を翳して呪文を放つと……

「キヤアツ！」

「なにい!?!」

ラブレスが目の前に躍り出て喰らってしまう。

「冷たっ！ 寒い寒い寒い！ ブルブルブル！」

そして至極真つ当な感想を叫びながら暴れた。

「何してるんだ！」

「往きます！ 氷結呪文ツツ！」

ユートの問いに答えず、ラブレスがヒヤダルコを撃ち放った。

『ギヤアアツ！』

数匹のヘルハウンドが、凍気によって倒れる。

「ラーニングか！」

ラブレスのスキルには確かに、喰らって修得をするというものがある。

それが【ラーニング体感学習】だ。

攻撃呪文を喰らうからにはダメージを受ける。

その代わり呪文を修得、使う事が可能となるのだ。

便利なのか不便なのか、微妙な使い勝手ではあるのだが、ラブレス

は割と積極的に使っているらしい。

「アルビオン！」

ユートが手にした機器、それがベルト化して腰へと装着された。

「変身！」

ハンドルを引きながらも叫ぶユート。

《TURN UP》

オリハルコンエレメントがベルトから出現すると、ユートがそれを潜る。

《Vanishing Dragon Balance Breaker!!》

人型ながらも龍を模した白亜の鎧兜、背中には光を放つ翼が輝いていた。

【白龍皇の光翼】の禁手——即ち、それは【白龍皇の鎧】である。

嘗て、まだスプリングフィールドだった時代の事、ユートは闘神都市と呼ばれる場所に喚ばれて、色々とやらかしたりしたのだが、その際に【仮面ライダー】に関するあれこれに力を入れて手を出した。

その時に造った一つが、【仮面ライダー剣】系。

但し、ブレイドはブレイドという似て非なるものであり、他にも混ぜたりしていたけど基本はブレイドと変わらない。

このブレイドバックルはユーキが造った代物だが、仮面ライダー自体はユートが【ハイスクールD×D】世界でレオナルドという名の少年から奪った神滅具——【魔獣創造】の亜禁手の【至高と究極の聖魔獣】で創造した聖魔獣だ。

まあ、それは兎も角……それと同時にユーキが別口の転生者から奪った転生特典がこの【白龍皇の光翼】で、仮面ライダーブレイドのシステムに組み込んでみた。

一般的にキングフォームとされるフォームに組み込んでおり、更にブレイドのキングフォームには覇龍を応用したりしたが、現在は初期フォームが【白龍皇の鎧】の状態に調整してる。

《久し振りの出番だな》

アルビオンも何処か嬉しそうな声色。

「派手な鎧だけに使える様な機会は少ないからね」

三大勢力だのアースガルズだのと、神や天使や悪魔や堕天使が跳梁跋扈していた世界ではなく、あの地球は本当に地球その物は普通が普通に普遍する世界だ。

こんなド派手な真っ白い鎧兜を纏う機会など在于る筈もなく、柾木に転生してから使った最初の事例とは「天地無用！ 魍皇鬼」の原作が始まってから。

尤も、「地球では」との注釈は付くが……。

しかしよく調べてみると異星人は割とそこかしこ、地球に潜り込んでいるみたいで、異星人のアイドルがテレビに出ていたり。

他にも養護教諭だったりお姫様だったり暗殺者だったりと、とある地域に密集しているから恐ろしい。

他は「スーパードボット大戦Ⅱ」の世界に跳ばされた挙げ句、第三次から第二次の破界篇に跳ばされた時に使えるロボットが無く、己むを得ず使った時。

そして何故か原作前に、宇宙へと上がった際に見付けた『ちよつと過剰なまでに自らの美しさを強調する少女』と出逢った際、行き違いから黒髪の少年と戦闘になった時だろう。

割と使っている気もしないではないが、アルビオンからすれば不満なのか？

使う時は嬉しそうだ。

尚、黒髪の少年はユートが遙照の孫と知り、生まれたのが娘で且つ二人目とか三人目なら政略的に嫁に出してやると言われたけど、まさか本当に双子の娘達を送り込んでくるとは思いもしなかった。

「さて、取り敢えず数減らしだろうね」

ダンジョン内を縦横無尽に三次元軌道で駆け巡り、飛び回った挙げ句手にしたダークリパルサーで敵対するモンスターを斬り裂く。

死んだモンスターはソッコーで灰化し、魔石もドロップアイテムも落としてはいなかったが、全てユートのアイテムストレージへと格納されているだけ。

怪物の宴で大量に顕れたモンスター、それは百すら越えたが今や二十匹を切っているだろう。

「このくらいが適量かな？ それじゃ始めようか」

ユートに言われてベル達は驚愕を冷め遣らぬ内に、再び戦闘を開始した。

未だに全員がLV. 1、それなのに中層での戦闘を余儀無くされ、然しながら小型のモンスターなら何とか斃せている。

ラブレスの魔法が強力なものもあるが、短剣やリトル・バリスタを駆使しているリリが意外と強い。

リリ本人もこんなに戦えるとは思わなかった。

一度、アテナに確認して貰った際に見た基本アビリティに付いたプラスの数値が凄まじく、それがユートとのセ○クスが原因だとはすぐに理解する。

問題は新しいスキル。

【オーラバワー練氣発招】と書かれていた。

どうして発現したのか？ 疑問なりりだったけど、ユートが推測を含めて説明をしている。

やはりそれは、ユートとの目眩く退廃的なセ○クスが原因だったらしい。

ティオナとやった時には思い付かなかった事だが、昔は普通にやった方法での性交を試してみた。

自らの氣を相手に送り、混ぜて循環させる手法。

全身が触れ合っていて、尚且つユートの極一部分が相手の内に入り込み、粘膜接触をしている状態だからこそ可能なもの。

この状態で息吹きのように互いの氣を混ぜて循環し、まるで一つの生命体の様に交わると、突き抜けた快樂を得られると知った。

全身が性感帯にでもなったかの様な、肌と肌が触れ合い擦れ合う毎に絶頂にも似た快樂が脳を中心に刺激をお越し、実際に絶頂にまで到達すればそれこそ頭が真っ白に漂白されたみたいな鮮烈なる快感が雪崩れの如く襲ってくる。

リリは熱い欲望の塊を流し込まれる度、荒波の様な強い快樂悦楽に

流されて、意識を手放し気絶すらしていたにも拘わらず、強過ぎる快感にすぐ強制的に覚醒させられてしまう程に。

終わって一眠りした後、目を覚ましたリリはユートに言う——『お願いしますからもうあれはやめて下さい……』——と。

好きで受け容れてもあれは廃人になりかねない。

否、氣の循環の所為だろうか？ 廃人になる事すら出来ないのだから。

あの拷問にも似た性交、あれで行われた氣の循環は陰陽合一で完全なる存在と認識、誤認されたくなく、ユートが行っていたにも拘わらずリリの経験値として計上され、スキルの発現と相成ったという訳だ。

その効果を要約すると、DB染みた氣の扱い方とかが可能で、更にH×Hっぽくも扱えるらしい。

しかも魔力と合一までも可能とあっては夢が広がる一方で、LV.1の身ながらLV.3くらいの能力にまで引き上がっていた。

氣の大きさが大した事もなかったが、魔力と合一をすればそれでも可成り増強が成されたのだ。

但し、成長を阻害するから強敵以外には使わない。

久し振りにやったアレ、自分も凄いとかどうかを超越した快樂を得られて、しかも棚ぼたでリリが大幅にパワーアップした。

因みにエセルドレーダにも試した処、流石に初めての感覚だったらしくて——『もう教える事は無いわ』——なんて意識も朦朧としながら呟いていたり。

今もリトル・バリスタでダメージを与えながらも、一気に突撃をして短剣を用いてトドメを刺している。

ヘルハウンドも炎を吐く前に脳天に矢に射抜かれ、動きを止めた瞬間に首への斬撃を喰らって死ぬ。

まあ、闘氣が在ってこそその戦術となるが……

勿論、ベルもヴェルフもリリやラブレスに負けず劣らずの活躍をしていたし、ナアーザもトラウマさえ無ければ、百発百中の射撃の腕を確りと魅せている。

ナアーザは存外と拾い物だったかも知れないと、ユートは彼女の働きに満足をしていた。

「ふむ、リリの装備はそろそろ新調しても良いかな」

短剣は「聖なるナイフ」を持たせていたが、使い勝手が良いのか使いまくっていたから刃も劣化著しい。

間に合わせて渡した武器だけに仕方が無かった。

「アサシンダガーか、或いはもう少し上の銀の短剣でも使わせるか？」
自分で造った物でなく、別世界で大量に購入したり造って貰ったり、鍛造ではなく錬金釜と呼ばれる物で合成したりと、幾つも持っているその別世界の武具。

まあその別世界は所謂、ナンバリングを持たせればゲームが幾つも作れそうな世界が沢山存在しており、そんな世界群でもユートはブレずに女の子と仲好くしたり、好感度がMAXになれば勿論の事ながら閨事に進んだものだ。

偶に仲好くなる前に閨事に持ち込む事もあったが、それはユート自身に気がしていない。

ナンバリングの四番目、第二の物語のメインキャラである彼女、勝負に勝って王女様を守ると意気込んでユートに敗北、少女は自らを捧げて王女様を戴きますするのを止めて貰った。

その後は急速に仲好くなった——存外と思い込みが激しくやった後で堕ちたらしい——事もあり、武具を造ってやったりもする。

特に鉄の爪がメイン武器の時点で、炎の爪より威力が高くてヒヤダルコの効果を生む「凍華の爪」を渡したら喜んだ。

それは兎も角としても、そろそろ全員の武具類更新を考えたい時期。

ラブレスは魔法がメインとはいえ、ラブレスを使えるからそれに近い物を。

ナアーザは昔に使っていた弓を引っ張り出し直してから使っており、LV. 2として中層に足を踏み入れていたとはいえ、やっぱり心許ない武器であろう。

リリの短剣は候補も出たけど、リトル・バリスタも何とかしてやり

たい。

ベルとヴェルフ？ 野郎は知らん……ではなくて、そもそもベルはヴェルフと鍛冶師契約を結んでおり、ベルの武具はヴェルフへと一任しているし、ヴェルフ本人はそもそも自分自身で武具を造れば良い。女の子達にそういったのが無いから、ユートが普通に世話を焼いているのだ。

ユートは一時期、鍛冶師に傾倒した事もあったし、件の別世界では魔界一とされる名工と腕を競った程。

そんな経験を生かして、SAO主体世界ではゲーム内にてリアル鍛冶を行い、強力な武器を高値で取り引きしたりしたものである。

普通の武具から魔法武具まで様々に、幅広く造つては他者に与えていた。

お陰様で聖衣などを造るのにも腕前的に一役買い、今や最上位の聖衣さえ造る事が出来ているのは、本拠地のアテナ——サーシャの部屋に飾られた小さな神像が物語っている。

嘗て、まつろわぬアテナにも与えた事があるから、もう手慣れたものだ。

あの「アテナの聖衣」を造るのも。

二十にも満たぬモンスターなど、ベルやヴェルフの様な今はLV・相当でしかない二人を除き、LV・を超越したりリリやラブレスにLV・2のナアーザが居るから割と楽に終わった。

「みんな御苦労さん。魔石やドロップアイテムを抜き取ろうか。メインは長年のサポーター生活で慣れているリリ、ヴェルフは素材類の勉強も兼ねて。ナアーザとラブレスは周辺警戒を、ベルはリリを見て覚えたら自分でもやってみろ」

指示を飛ばしたユートはその場から離れる。

気配からモンスターらしいが、少しおかしいと思える存在に気付いたのだ。

ダークリパルサーを正眼に構えると、覇気を籠め隠れている者へ声を掛ける。

「其処に居る奴、モンスターらしいが何か用か？」

「バ、バレていたのか」

「リザードマンか」

ユートも何度か殺して、魔石やドロップアイテムを手にした事がある。

「珍しいな喋るってのは。僕が今まで遭遇した連中は喋ったりしなかったが」

「俺はちよつと別物さ」

「ふーん。用は？」

「アンタを見に来たのさ」

「僕……を？」

「フェルズが言っていた。今は警戒も必要だが或いは希望足り得るかもとな」

「フェルズ？ あの黒衣の骸骨っぽい奴か？」

「ああ、そうだ」

フェルズとは最初の遠征から帰還、魔石をヴアリスに交換する際に芋虫モンスターから出た極彩色の魔石を大金で引き取った黒衣。

魂は人間だったが肉体的にはリッチに近い。

実は素顔を見ていたから元人間だと知っている。

「アンタ、俺を見て攻撃的にならないんだな？」

「殺気も無いし、襲つても来ないなら闘う意味だつて無いだろう？」

「フツ、フェルズが言った通りだな。希望になるかも知れない」

「希望？」

「俺——俺達【異端者^{ゼノス}】の事を知りたければフェルズに訊け。聞いても俺と会いたいならアイツが段取りをするさ」

「……解った。詳しくは、フェルズに訊こう」

ユートがそう言うとりザードマンは首肯。

「俺の名前はリドだ」

「ユート。柁木ユート」

「そうか、またな」

リドはダンジョンの奥へと消えて行つた。

「ダンジョン。一筋縄ではいかない場所みたいだね。にしても、僕の

場所を正確に把握してる辺り覗き見か？」

ユートは一度だけリドの去った奥を見遣り、頭を振ってパーティメンバーの居るフロアへと戻る。

帰り際、ベルがキラキラとした瞳でユートに【白龍皇の光翼】について訊いてきて、少し鬱陶しかった。



フェルズに会えとリドは言っていたが、そもそもにしてフェルズが何処に居るのか知らない。

あんな形だから、何処か暗い場所にでも引き籠^{なり}っていそうだ。

まあ、別に会いに行かずともいずれ向こうから接触をしてくるだろう。

「完成。何とか怪物祭までに出来上がったな」

腕へと装着するタイプのボーガンで、魔力をその俣で矢へと変換する【ビームボーガン】というやつだ。

リリの為に製作した。

本人の魔力でも良いが、バッテリー式で魔石の魔力をチャージ、矢へ変換する機能も備え付けてある。

連射も可能で威力もリリのリトル・バリスタに比べて高く、しかも一撃必殺のパワーチャージも出来る。

小振りながら極めて高い性能に纏まった武器だ。

「んゆ？ ユートさまあ、何してらしたのでしゅ？」

寝惚け眼で呂律が若干回らない口調、素っ裸なりりがムクリと上半身を起こして訊ねてきた。

「リリの新しい武器を完成させていたんだよ」

「ぶき〜？」

「まだ寝惚けているな」

「ふにゃ〜」

服装も新調したい。

白いローブもボロボロだったし、下に着ている服は裾が破れて臍出

しルック。

「今度、服屋にでも連れて行こうかな？」

ユートに凭れ掛かって、明らかに甘えん坊になっているリリ、そんな可愛いらしい寝顔を見ながら新しい服に身を包む彼女に思いを馳せつつ、「リリルカ・ボーガン」の最終調整をして次に備えるのだった。

・

第30話：リユー・リオンとのデートは間違っているだろうか

怪物祭の当日。

元から賑やかなオラリオだったが、いつにも増して騒々しい程に賑やかに人々が行き交うメインストリートに美女と称して良い薄い翠の髪の毛の女性——リユー・リオンが、いつも着ているウェイトレスとしての服装とは異なり、お洒落な余所行きの服に身を包み、ストリートでもよく目立つ噴水の前に立っていた。

しかもミニスカートの、普段のロングスカートなら隠せる武器も流石に身に付けられず、本当に何年か振りに無防備に近い姿だ。

というか、ヒラヒラした服装はいつもの事だけど、これは流石に恥ずかしい。

エルフらしいスレンダーな体型であるリユーだが、容姿そのものは非常に美しくある意味で完成されて、道行く男共の好奇の視線に晒されていた。

待ち合わせ時間の三十分も前に来てしまった辺り、リユーも実は昨日からソワソワしており、楽しみにしていたのかも知れない。

無表情がデフォながら、何処か愉しそうだし。

本来、リユーはある理由から自らを厳しく律して、余り人生を満喫エルフしていないから、友人であるシル・フローヴァはそこを気にしていた。そんなリユーがまさかのデートである。

本来ならシルが休みを貰って怪物祭に行く予定を、態々変更してまでリユーに休みを譲り、シルのセンス全開でおめかしさせると、デートへと送り出した。

『お土産、期待してるね』

これが男であれば瞬く間にも堕ちてしまいそうな、けどあざといウインクをしながらリユーの背中を押してやる。

いつになく頬を朱に染めながら、リユーはシルに対して『行つてき

ます』——そう言つて出掛けたのだ。

普段はしないおめかし、しかも店のウェイトレス服とは異なる超ミニスカートは全力全開で白い太股を晒しており、下手に動いたら間違はなくショーツが丸見えになってしまう。

これは如何にも頼り無い着心地で、チラホラと周囲を観察しながらスカートを然り気無く下に引つ張り、ショーツが見えない様にと気を付けている。

「シル、やはり幾ら何でもこれは有り得ない……」

武器を取り出す際であれば惜し気も無く太股や下衣を晒すリユー・リオンも、こんな無防備全開な格好で晒すのはやはり意味合いが違い、先程から感じる視線に居心地の悪さを感じた。

約束の時間には相当に早いから、ユートがこの場に現れるのは未だ先。

シルが曰く——『待たせ待つのがデートのいろは、今回はリユーが早目に現場に居て、彼が『待たせたか?』って訊いてきたら——『今来たばかりよ』って返すのよ?』

なんて、いったい何処から仕入れた知識なのか? 愉しそうに教えてくれた。

「よー、ねーちゃん」

二人組の冒険者らしき男がヘラヘラしながらリユーに近付き、馴れしくも声を掛けてくるが無視。

基本的にリユーは余り口数が多くない。

無言ではないが言葉少なに語るタイプだからだ。

昔はそうでもなかったのだが、今は戒めと共に少し口数が減ったという事。

「おいおい、無視は悲しいじゃねーの」

「そうだぜ、ねーちゃん。暇してんならよー、俺らと祭を楽しまねーか?」

正にオラリオのチャラ男というべきか、リユーから見た感じだとLV. 2だろうか? 丁度、調子に乗っている時期っぽい。

「私は人を待っています。貴殿方と出掛ける心算などありません」

丁寧な物言いです。

若し、こいつらが調子に乗ってリユーにセクハラでもしてきたとして、彼女はそれをあつさり鎮圧可能。

何故ならリユーは元冒険者だったのだから。

しかも主神はオラリオに居ないだけで、未だ地上に存在しているからリユーの背中の【神の恩恵^{ファルナ}】は生きている。

主神が天界に還ってしまおうと恩恵は自動的に封じられてしまい、他の神からの恩恵を再び授からない限りは冒険者としての力は喪われてしまう。

リユー・リオンの主神は正義の女神アストレア。

とある理由からオラリオを出たが、リユーの恩恵は残された俥となっている。

そして、リユー・リオン——【疾風のリオン】だった彼女のLV・は4。

元第二級冒険者だった。

元——とはいってみても冒険者を辞めただけでしかなくて、力が……【神の恩恵】が健在なのだから目の前の上級冒険者風情を打ちのめすのは、このリユーにとって如何にも容易い作業でしかない。

問題はシルの言葉。

『リユーは美人なんだからきつと待つてる間、誰かしら声を掛けてくと思う。だけど自分で対処なんてしちや駄目！』

『シル、貴女はいったい何を言っているのです？』

『リユーは強いよ。でも、明日のリユーはデートを心待ちにするか弱い乙女！ 決して相手を返り討ちにする冒険者じゃないの！』

返り討ちにする処か——『イヤ、放して！』とか、弱々しく言うのがポイントだとか何とかレクチャーを受けている。

今更ながら頭を抱えたいシルの授業内容、はつきり言ってしまうは無理だ。

普段が普段、無表情を貫き口数も少ないキャラクターでウエイトレスをしていたリユー、それが恥ずかしがりながらユートを見て、『今日のデートは何処へ連れてってくれるの？』とか『イヤ、怖い……』と

か、頬を朱に染めたり恐怖から涙目になったり、ホンツとうに今更過ぎて出来ない。

「シル、貴女は私を何処に導く心算ですか？」

チンピラ冒険者を胡乱な瞳で見遣りつつ、この場には居ないアツシユブロンドで小悪魔チックな美少女の同僚に対して呟いた。

因みに、チンピラ冒険者の二人は自分自慢に余念が無く、リユーが聴いてすらいらない事に気付いてない。

「で、どーよ？ 俺らが、祭を案内してやるぜ」

「そーそー、んで夜は宿でしけ込もうぜえ？」

コイツら本気でナンパを成功させる気があるのか、リユーは先程の科白だけで疑問となる。

エルフの潔癖症を知らないのか？ 初対面な男なぞと宿にしけ込む筈エルフなら有り得ないと、どうして理解していないのだろう？

リユーもユートなら或いは暫く人となりを見極め、リユー本人がユートから触れられる事を前提にであれば吝かでもないが、こんな連中と宿で性交なんてやりたい筈も無かった。

溜息を吐く。

「今一度言います。貴殿方と遊ぶ気はありません！ 私はツレを待っている」

「そう言うなよ……」

ニヤニヤしたチンピラAがリユーの左手首を掴み、その尻腰にまで触れようとするが……

「私に触れるなっっ！」

一瞬で地面に叩き伏せ、頭を踏み抜いてやる。

「ガブッ!？」

後頭部を靴底の踵で踏まれた為か、あつという間に気絶させられてしまう。

やっちまったぜ……

何処かのRPGのエンディングが流れてきそうで、リユーは内心では再び頭を抱えてしまった。

「そうだ！ ユートさんに見られていなければセーフの筈です！」

ちよつと混乱気味だ。

「て、てめえ!?! よくもケンちゃんを!」

腰のベルトに着けていた短剣を抜くチンピラB。

「はい、ソコまでだ」

然し短剣は背後から奪われてしまう。

「なっ! 何だてめえ?」

「その娘のツレだよ」

相手はユートだった。

茫然となるリユー。

——視られた?

自分を掴んだチンピラAを叩き伏せた場面を?

やはり自分にシルみたいなのは似合わないのだと、チンピラBに奪ったのとは別の短剣を突き刺すのを見ながら思うリユーだった。



何故か気絶したチンピラにも短剣を刺すユートではあるが、プスツ!
! という間の抜けた音が出るだけで出血は無い。

「フツ、不能の短剣だ……お前らの股間の粗末なモノが勃ち上がる事は最早二度とは無いだろう」

何だか空恐ろしい事実を平然と宣うユートに対し、周りの男共が股間を押さえるという珍妙な場面。

短剣を仕舞うとユートがリユーの方を振り向き……

「待たせたね。今日はとても可愛い格好だなリユー」

ニコリと笑顔でナチュラルに褒めてきた。

「そ、そうでしょうか? 私に似合うとは思えないのですが、シルがどうしても言いますので」

「気合いを入れてデートに臨んでくれて嬉しいよ」

手を差し出されて逡巡をするが、ソーツと右手にて差し出された手を取る。

やはり拒絶反応は無い。

若干、リユートの頬が朱に染まっているのはテレか、或いは触れる相
手を見付けた事への昂りか？

いずれにせよ、リユートはユートと触れ合えた。

嘗てリユートは、仲間であつた女性に言われていた事がある。

若し、自分が触れ合える相手に巡り逢えたのなら、必ずその絆を大
切にしろといった感じに。

そんな相手など居ないと思つていたのに、ヘステイアと食事に来て
いたユートと偶々だが触れ合う機会を得て、すぐに引つ込めようとし
たのにユートから薫る懐かしい気配に遅れてしまった結果、ユートに
触れても拒絶反応が出ない事実に気付いてしまった。

懐かしい気配——故郷の森を思わせる“匂い”だというべきか、土
と風と水と樹の渾然一体となつたものがリユートの五感を直撃し、思わ
ず真つ赤になつてしまつたのがイケない。

シルにはからかわれる、アーニヤ達からは変なものを見る目で視ら
れる、碌な事がないと思えば今度は何と本人からデートに誘われてし
まつたり。

この感覚は自分のみならずエルフに共通する筈と、リユートは自身の
感じたモノに確信を持つている。

事実、自分達の王族^{ハイエルフ}たるロキ・ファミリアの副首領とも云えるリ
ヴェリア・ヨルス・アールヴが、随分と気安い感じで接していた上に
肌に触れられても拒絶しなかつた。

同じく、『千の妖精』と名高い第三級冒険者であるレフィーヤ・ウイ
リデイスなど、今の自分と同じ様な顔をしていくくらい。

そう、リユートはユートにどうしようもなく惹かれ、だからこそ内心
ではとても苦しんでいる。

——『私は汚れている』と自嘲しているから。

勿論、それは性的な意味には非ずだ。

意図せず性行為に及ばされた場合は『汚された』と揶揄されるが、こ
のリユートの場合は手が血で汚れているというもの。

リユートはデートの最中であるが故に、固いながらも笑みを浮かべな
がら所謂、『恋人繋ぎ』で手を繋いでユートに付いていくけど、同時に

自分は幸せなど感じてはいけないのだと頑なに思ってもいた。

寧ろ、あの頃であつたら性的に汚されても何も感じなかつたろう。

というより、血塗れでなければシルが見付けた際のリユーは、性的暴行を受けて絶望した少女の如く倒れ伏していた訳で……

思い出すは自らの業。

ユートも見目の良い自分——基本的にエルフは美麗な容姿を誇り、リユー自身も客観的に美人だと自負があつたりする——にアプローチをしてくるが、若しもあの頃の自分を知れば離れるだろうと思つて

いる。
因みにだがエルフの中にはブタ君も存在していて、しかもそれが実はギルドのお偉いさんだと云う事実。

金に執着する事もあり、エルフの矜持を忘れた者として蔑視されている。

まあ、リユーは間違いなく美人なので問題は無い。

「どうした？」

「——え？」

「心ここに在らずだな？」

「そ、そんな事は……」

考え事をしていたのだから——『ありません』とは続けられず、ふと気が付く手の温もりを感じてしまい恥ずかしくなる。

手が血で汚れていると思つてゐるのに、彼の手に温もりを感じ安らいでいた。

意外とがっしりした掌、それに細身に見えて筋肉は確り付いており、普通つぽくも中性的でどちらかと云えば女性よりな顔立ちで、見た目に細いからこんなに細身の筋肉質とは思ひも寄らなかつたリユー。

ユートは高負荷トレーニングの後、低負荷トレーニングを行うのを常として、結果的に瞬発力の高い白筋でも持久力の高い赤筋でもない、どちらも兼ね備えたピンク筋というやつだ。

聖闘士なれば余りに連続で高強度の動きを強要されるが故、ピンク筋肉の割合が赤筋や白筋より多い。

ユートは意図してこれを作る修業を取り入れた為、某・哲学する柔術家の如く全身がそれだったり。

だから一見すると細身な優男——あの木場祐斗程にイケメンではないにせよ——に見えるユートだけど、実は筋骨隆々だという罫。

「楽しくないか？」

「いえ、恐らくは私が嘗て冒険者であった頃、仲間達や主神と共に在った時の様な気分の高揚を感じます」

「それは光栄だね」

それは仲間と比べていると言われたのに等しいが、逆に考えればそんな仲間に互するとも言われたのだ。

悪くはない。

「……貴方なら女性など、選び放題でしょうに何故……私にアプローチを？」

「君がアプローチを一時的にしろ受けてくれた理由、それを聞かせてくれるなら答えるよ？ 序でにそんな憂いの顔をしている理由、それも教えて欲しいな」

「……まったく貴方は」

驚きながら軽く瞑目し、だけど確りと頷いた。

軽食店に入ると認識阻害の魔法をユートが仕掛け、その確認をしたりユーはポツポツと語り始める。

正義と秩序を標榜して、壊滅した【ファミリア・ミイス眷属の物語】を。

そして、唯一の生き残りがそれを善しとはせずに、愚かにも走った復讐劇を。

数年前、このオラリオに正義と秩序を司る女神——アストレアがファミリアを結成していた。

女神アストレアに賛同した団長や仲間達、其処には若いと云うかまだ幼さの残るリユー・リオンも居た。

LV・4の第二級冒険者——【疾風】のリオン。

その疾風の如く動きは、何者も捉える事が叶わない高速の戦闘を可能とする。

誇りだった。

不正を暴き悪を懲らしめ常に正しき義を以て動く。

女神アストレアの名前の下に、アストレア・ファミリアは獅子奮迅の目覚ましい働きをしていたのだ。

だが、栄枯盛衰は世の中の必定というもの。

一五年前に最大派閥だった筈の【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】がオラリオから消えてしまった様に、敵対派閥からすればアストレア・ファミリアなぞ目の上の瘤でしかないのだから、悪と断じられた連中がやらかす事など決まりきっていた。

連中はアストレア・ファミリアを誘き出し、彼らへ怪物進呈を敢行バス・バレードをしたのである。

次々と倒れる仲間達に、遂には団長までもが。

仲間は団長はリユーだけでもと逃がしてくれた。

仲間を喪ったリユーは、アストレアに必死に頼み込んでオラリオから退避して貰い、奪われた者としての権利——復讐を開始する。

怪物進呈を行った連中は言うに及ばず、それに乗った連中や支援者だけでは厭き足りないのだとばかりにちよつとした関係者やら、最早一般人でさえ連中との関わりが僅かにでも疑われれば斬り捨てた。

復讐などとつくに超過をして、既に暴走でしかないリユー・リオンの所業に対しギルドは【疾風のリオン】をブラックリスト入り。

賞金すら掛けられた。

逐われる立場となつて、流血に塗れたリユーは街の裏角で倒れ、雨が降り頻る中でその生命を終えるのだらうと、既にナニモノも映さない視線で曇天をボーッと見つめるのみ。

そんな時、アッシュブロンドの少女が手を差し伸べてくれたのだ。

爾来、リユーはその少女——シル・フローヴァには感謝の念が絶えず、しかもこんな自分を【豊穡の女主人】で雇って貰える様に、ミア・グランドに話を付けてすらくれた。

正しく恩人である。

「……これが私の過去となります」

「……」

「どうですか？ 軽蔑しましたか？ 私のこの両手は大量の血で汚れ

ている」

憂いに充ちた表情に歪められつつ、何処か窺う様な瞳を向けてくるリユー。

「リユー」

ビクッ！ いつもならばこんな弱々しい部分を見せたりはしないが、今回ばかりは気に入った——気に入ってしまった相手に嫌われたかも知れないと思うと、思わず肩を震わせずに居られないリユー。

「第一に、僕も大概で血に塗れているんだがな」

「——え？」

「地上の愛と平和を護りしアテナの聖闘士、だが実質的にやっているのは敵対者たる人間の排除が基本だ。アテナと意見を違えた存在に仕える闘士を邪と断じ、実力行使で排除するからにはまず生き残らないしな」

ハルケギニア時代の事、その他の事は解り難いだろうけど、この話はリユーにも理解はし易い筈だ。

アストレア・ファミリアがやってきた事にだいたいが通じるし、実際にリユーは理解の色を示している。

「復讐だつて虐げられた者の権利だ。まあ、殺つて殺られて殺り返されてつて、何処かで連鎖を断たなければキリが無いけど」

「ユート……さん……」

「第二に、僕は自分の視る目に自信があるし、リユーが勝手に僕の目を見縊らないで欲しいね。確かに僕はリユーの見た目で最初とかはアプローチしてきたよ。美しいエルフだ、男ならば惹かれても当然だろう？ だけどね、美人がイコール人間性^{エルフ}じゃない。よく云うだろう？

美しい薔薇には刺があるって」

ユートは短い間でしかないが、リユーの人となりはアプローチしながら観察をしていたし、周りの評判も確りと把握している。

その上でアプローチを止めなかったのだ。

「第三に、女好きエロ野郎な僕だけど気に入らない女をデートに誘う程、酔狂な心算なんか無いんだよ」

スツと手を握る。

「……あ、その……やはり行き成りは困る」

「だけど拒絶はしない……というより出来ない。」

「貴方で三人目です」

「三人目？」

「私が他人との触れ合いに拒絶しなかったのは」

「光栄だけど、三人目か。初めてじゃないのは残念」

「あ、違う……男性は初めて……です……」

「というと？」

「最初の方も、二番目だったシルも同性ですよ」

「そっか、全体として見れば三番目だけど男としては初めてか」

「本当に嬉しそうにしているユートに、頬が熱く燃える様な感覚に囚われる。」

「ちよつと嬉しいな」

「――あ」

リユートの腕を取って身体を軽く自分へ引き寄せて、背中に腕を回して固定をすると更に彼女の顔を自らへと近付け……

「うつ」

もう少して唇が重なるといった直前。

「チツ、あと少してリユートの唇を奪えたのに！」

ユートはリユートを手放して悪態を吐く。

「な、何が？」

リユートはユートの異変に訊ねるが、理由はすぐにも理解が出来た。

「キヤアアアッ！」

「うわああああああっ！」

人々の悲鳴が響く。

「どうやら何者かが街を騒がせているらしいね」

特殊な影分身が還ってきた事で、周囲の状況を把握したユート。

「デートが台無しだっ！ 誰か知らんが許さんぞ！ リユートは一般人の避難誘導に努めてくれ」

「ユートさんは？」

「原因を叩く！」

「わ、判りました」

今のリユーは冒険者としての全てをギルドから剥奪されており、力
は在っても何もしなくても咎められる理由は無いです。

「デートは楽しかったよ」

踵を返すユート。

「ユートさん！」

そんなユートを停めて、リユーは爪先立ちになるとユートの頬へ唇
を当てた。

「く、唇同士は恥ずかしいので……」

そう言い捨てて自分自身が踵を返して駆ける。

茫然となったユートではあるが、口角を吊り上げてやる気充填は一
二〇パーセントだと謂わんばかりに、闘気と魔力を漲ぎらせるので
あった。